

---

# ゼロの使い魔【魔を滅する転生者】

月乃杜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゼロの使い魔【魔を滅する転生者】

### 【Nコード】

N0487V

### 【作者名】

月乃杜

### 【あらすじ】

星神ガイナスティアが見守る世界に、緒方優斗という青年が居た。優斗は交通事故に遭いそうになっていた少女を救けようとして、死んでしまう。そんな優斗の前に居たのは某白い魔王。『何故?』という疑問はあったが、テンプレ通りに力を貰って転生をする事に。自サイトで連載中のテンプレの転生モノ。主人公のユートは普通の生活を手にする為に、普通をぶっちぎった世界に飛び込みます。

## 第0話・ゼロへの転生（前書き）

横の繋がりが作品ごとに在りますが、気にする必要はありません。  
そういうモノだと呑み込んだ上で読んで下さい。

## 第0話：ゼロへの転生

1人の青年が交通事故によって死んだ。

自殺をしようとした少女を止める為、車輛が奔る中を掻い潜って走った。

その結果、2人共がトラックに撥ねられたのだ。

青年は薄れ逝く意識の中、生命なんてこんなものかと思った。

徒然なる俛に生きて来て、適当な三流大学に通う詰まらない人生。

趣味だけは沢山有った。

物理や医療、農業など生産的な雑字を知識として身に付けていたくらいだが。

後はライトノベルやアニメが好きな、何処にでも居そうな没個性な青年。

大学卒業後は、適当に会社に入って家と会社の往復というルーチンワークをするのだろうか。

将来の展望は無く、夢も無い絶望的な未来。

それが途中で終わっただけの事。

せめて最後くらいは格好良く決めたかったが、本当に俛ならないものだ。

来世があるなら、もう少し益しな人生が欲しいな……

切にそう思う。

走馬灯も順当に観て、後は消え去るのみ。

青年は真つ暗闇の中でふと呟いた。

「あゝ、終わったんだな。父さんも母さんもゴメン。先に死ぬなんて親不孝だとは思うよ。白亜もゴメン、お兄ちゃん入学祝いを上げられなくなつたよ」

この期に及んで出たのは、遺された家族への謝罪。

青年……緒方優斗は家族思いの優しい男だった。

緒方優斗の家族構成は、両親と高校生に上がったばかりの妹の4人。

緒方優也（47）

緒方（旧姓曾我）蓉子（45）

緒方白亜（15）

そして、緒方優斗（20）

五年下の妹の白亜は所謂、お兄ちゃんっ子で兄の優斗にとっても懐い

ていた。

「父さん、母さん、白亜、俺が死んだって判ったら悲しむのかな？」  
家族仲は決して冷えていなかった為、やはり泣かれるだろうなと思  
うと少し涙が零れてしまう。

だけでもう、優斗に出来る事は何も無い。

優斗にとって、それだけが生の世界への心残りだ。

『君は本当に家族思いなんだね』

「え？」

突然、暗闇の向こうから声が響いてきた。

真っ白な光が辺りを包み、優斗は自らの霊体の輪郭を得る。

純白の煌めきの中に、桜色の輝きを放つ女性が優斗の傍に立っ  
た……というか、浮いていた。

「……………は？」

女性を見た優斗は、あまりにも有り得ない存在に間拔けた声を出す。  
栗色の長い髪の毛を左側へサイドポニーに結び、瞳は紫色をしてい  
る。

白を基調とした服にロングスカート、袖が蒼い金属で出来ていた。

胸元の黒から、アンダースーツは黒なのだろう。

純白の服は、蒼いラインのアクセントが映えていた。

優斗はゴシゴシと指で目を擦り、再び女性を凝視してみたがやはり変わらない。

『？ どうしたのかな？』

声は明らかにゆかりん。

しかも左手に、レイジングハートらしき杖槍を持っている。

何処からどう見ても、その女性は魔王様だった。

『今、何か不穏当な事を考えなかった？』

ブンブンブン！

優斗は首を、これでもかと言わんばかりに横に振る。

好き好んで魔王様のお怒りに触れて、頭を冷やされたくないし……

「え……と、貴女は本物の高町なのはさんなんでしょうか？」

『何を以て“本物”とするのか、判断に困るんだけど……少なくとも、生まれて両親から付けて貰った名前はなのはだよ？』

どうやら本物らしい。

「俺は死んだ筈なのに、どうしてアニメのキャラと対面を？ もしかして、今際の際に視ている幻影か？ なら、せめてヴィヴィオだつたら良かったのに」

『ヴィヴィオじゃなくて悪かったね？ 優斗君、少し頭、冷やそうか？』

そう言つて、指先に桜色の魔力を集中するなのは。

「あ、頭は十分に冷えました！ 生意気言つてゴメンなさい！」

優斗はソツコーで謝つた。

「まったく、次は無いよ」

「た、助かったあ……」

なのはの言葉に、優斗はヘタリ込みながら安堵の溜息を漏らす。

「それで、魔おu……ゲフン、ゲフン！ なのはさんがどうして俺の夢だか、今際の際の幻影だけに？」

「魔お……ナニかな？」

「何でも無いです！」

なのはは溜息を吐くと、漸く本題に入る。

『私が優斗君の所に来たのには、勿論理由があるの。その理由とは、



君の因果に関わっているんだよ』

「因果？」

『そう、因果。君はとある理由から重たい因果を持っているの。それは優斗君自身ではなく、別の世界に於ける同位体……【緒方優斗】が関係してるんだ』

【異時空同位体】と呼ばれるモノがある。

それは所謂、平行世界に存在する別の自分。

この場合、平行世界の優斗の因果がこの世界の優斗に集約し、因果情報が重たくなったと云う事だ。

『蒼き騎士の世界のとある地球に住む【緒方優斗】君が、優斗君と同じ行動を採って死んだんだよ。そしてあの世界の星神【アーシア】様が彼を違う世界に転生させた。その因果が優斗君と重なって、それで重たくなったの』

例えば、この世界の優斗が事故に遭った少女を救おうとしなければ、優斗は寿命まで生きてただろうし、今回の様な事も起きなかった。

同位体とはいえ、緒方優斗はやっぱり緒方優斗なのだろう。

「もしかして、この展開って二次創作によくある転生モノと同じ？」

『正解っ！ アーシア様の世界の優斗君もヴィオーレという世界に転生したの。だから、優斗君も別の世界に転生して欲しいんだ』

「断つたら？」

試しに聞いてみる。

『昔のRPGってね、選択肢で【いいえ】を選んだら延々と、エンドレスに同じ選択肢が出て来るんだよ』

「そ、そうですか……」

優斗は若干、引いて口元をヒクつかせた。

実質、断る事は不可能。

そういえば、優斗としてはもう一つだけ聞きたい事がある。

「それで、何で神様じゃなくなってなのはさんが顕れるんですか？」

同位体の緒方優斗時には星神が顕れたというのに、何故に高町なのは？

そこら辺、意味が判らない優斗。

『神様も忙しいんだよね。だから下級とはいえ仮にも神の私が来たの』

「へ？　なのはさんが神って？」

『私もこれでも人間から神の域に神化した神域者で、純白の天魔王と呼ばれているの』

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!?」

よもやそんな事になっついるとは露とも知らず、優斗は大きな絶叫を自分達以外は何も存在しない空間に、これでもかと言わんばかりに響かせた。

【神域者】……それは人間が神々の域へと神化した者の総称。

神にも種類が在り、神域者もその一種だ。

その種類とは……

【天威】 【神域】 【顕象】 の3種。

天威とは天の威を顕す存在の事であり、生れ付き神々の一柱として誕生した者を云う。

ワイルドオーダー  
星神や真魔王がそれに当たる。

神域とは神の域に到達した者の総称で、人間が何らかの理由で【根源】に触れ、神化した存在だ。

場合によっては人間に限らないのだが。

これは、五源将や七柱神や純白の天魔王を旗頭とする【朱の姫騎士団】のメンバーなどがソレだ。

顕象とは意思を顕す現象が顕現した存在。

世界には、意思を持つ者が多大に存在しており、その意思が神々と

なる。

尤も、荒ぶる神、祟り神が多い為、神話などで神域や天威に狩られる事もよく聞くが。

これは、九十九神や貧乏神や精霊王や龍神等、自然現象や人々の思念が実体化した存在の事だ。

座敷童もその一種だと云われているし、妖怪等の類も始まりは顕象の一種。

神域者にも頒ければ二種類存在しており、一つは生きて俛で神化した者。

もう一つは、死んだ後に祭られて神として括られた者で、顕象に窮めて近い。

死後に祟り、祭る事により鎮めるか或いは、祟る事は無いが偉大な功績を遺して死んだ者を祭るかの違いはあったが……

第六天魔王、豊国大明神、日本將軍平親王、東照大権現がそれに当たる。

神の定義を聞かされ、優斗は少し頭の中を整理しなくなったが、別に知らなければならぬ事もある。

「俺が救けようとした子はどうなりましたか？」

「因果は連鎖する。彼方の優斗君は救けられなかったの。だから優斗君も救ける事は出来なかったの」

「そう……ですか」

落ち込む優斗。

それはそうだろう、これでは無駄死にでしかない。

「その子には事情を説明して、先に輪廻の輪に載せたから」

「もう転生した訳ですか」

「そうだよ。さて、優斗君にも転生して貰うけどね」

「それじゃあ、俺が別の地に転生するとして、何処に転生を？ 別の俺みたいにヴィオーレの様な聞いた事の無い世界ですか？ それとも、所謂アニメや小説の世界ですか？」

「ん、原典名は【ゼロの使い魔】って言って、ハルケギニアに転生してね？」

「ゼロ魔か……」

嫌いではないし、寧ろ好きな作品だった。

ただ、もしも選べるのならスィーフード世界に行きたかったのだが。

スレイヤーズが好きだし。

まあ、贅沢は言うまい。

「それは記憶を保持した仮ですか？」

「勿論。それに私だと大した能力は上げられないけどね、それでも出来る範囲で何か上げるよ？」

「能力……ね」

「優斗君を転生させる背景には、倒す……若しくは、排除すべき敵の存在にあるんだよ」

「敵？」

「そう、優斗君の敵になるであろう存在は、無貌なるが故に千の化身を持つ者」

「そ、それって……這い寄る混沌？」

は「そう、私の旦那様の三種の敵の一つ。即ち、ナイアルラトホテップ！」

外なる神々（アウターゴッズ）と呼ばれる存在。

アザトウースを頂点とし、エルターゴツ下旧神を相手に侵略を繰り返す邪神。

時間神たるヨグソトホースを父とする混沌。

様々な異名を持ち、正体は全く知れない。

最も新しき旧神と戦い続けているが、それすら化身の一欠片に過ぎ

ないのだ。

「もしかしたら原典の主要人物として存在するかも知れないし、それだけは注意しておいて」

「判りました。ところで、旦那様って？」

「え？ 私の好きな人……だよ」

魔王様がベタ惚れとか。

どうやら可成り凄い人物の様だが、その人物も神なのだろうか？

しかし、普通に生きられればそれで良かったのだが、どっち道これでは原作に介入しなければならなくなるだろう。

だったら“普通に生きる”為には、先ずそれを邪魔する存在を排除する。

這い寄る混沌を。

それには神の加護と同義の特殊能力は必須。

そう、彼方の世界に大切な者を獲ても、それを悪意によって壊されれば普通になんて生きられない。

どうやら下級神の彼女の力では、貰える能力に限界が在りそうだ。

それなら少しでも便利で、尚且つ現実的な能力を。

そう考えた優斗は、試しに欲しい能力を言ってみた。

「なら、術式や世界の構成を看破する能力と、魔法に関する才能を貰えますか」

「へ？」

「？ 何かおかしい事でも言いましたか？」

「ううん。何でも無いよ」

なのはは少し驚く。

この時点で、訳が解らない程に欲張った事を普通は言ってくるものだから、

無限の剣製が欲しいとか、直死の魔眼が欲しいとか、王の財宝が欲しいとか、無限の魔力だとか、不老不死だとか……

もっと上の神ならともかくとしても、自分では一つ叶えるのも難しい。

所詮は下級神なのだ。

「判ったよ。後、特別に何でも仕舞える亜空間ポケットと、優斗君の部屋に有ったライトノベルに、それとリンカーコアを上げる」

「俺のライトノベル？」

「そう、亜空間ポケットに入れておくから」





未だ嘗て無い暴露話となってしまう。

「ま、まあ犯罪に奔らなければ良いんだよ」

オマケに苦笑いで慰められてしまい、優斗のライフがガリゴリと削られる。

「そうそう、優斗君の立場だけどね？ 両親がトリスティン貴族で、先の戦功で王家直轄領のオルニエールを与えられてるから」

過去に介入して、なのはが調整をしたのだ。

「詰まり、俺はド・オルニエール家に生まれ変わるって事？」

「うん、ド・オルニエール子爵家だね」

どれだけの活躍をすれば、そんな出世に繋がるのやらと思ったが、ド・オルニエールだと云うなら内政なんかは結構やれそうだ。

「それじゃあ、名残惜しいけど。そろそろ逝ってらっしゃい」

ガタンと空間に穴が空き、優斗は闇へと墜ちる。

「何でこんなトコだけテンプレなんだあああああああああああああ  
ああっ!?!」

それを見送ったなのは、そつと呟く。

『またね、金色の巫女姫の加護を受けた新しい星騎士さん』

そして、笑顔で背を向けるとスキップしながら帰っていった。

「ふふふ。さうって、お仕事も終わった事だし、旦那様に褒めて貰  
おっと」

こうして、緒方優斗はトリスティン貴族、ド・オルニエール子爵家  
に転生をするのだった。

## 第0話・ゼロへの転生（後書き）

こうして主人公は、ファーストコンタクトから始まるヒストリーを  
始めます。

**第1話：意識の覚醒と金色の女王（前書き）**

軽くスレイヤーズもクロスしています。

## 第1話：意識の覚醒と金色の女王

「オギヤアアアアアアアアアアアアアアアアツ！」

室内に赤ん坊の大きな泣き声が響いた。

今、女性の胎内から赤ん坊が誕生し、元気な産声を上げたのだ。

煩いなどと言うなかれ。

赤ん坊は泣くのが仕事な訳だし、泣く以外に自己主張をする術が無いのだから。

寧ろ、産声を上げなかったらその方が問題だろう。

何故なら、赤ん坊の産声というのは元気に生まれた証だから。

この地、ド・オルニエール子爵領で今日という日は、最もめでたい日となる。

サリュート・シュヴァリエ・ド・オガタ・ド・オルニエール子爵と、  
ユリアナ・オガタ・ラ・アウローラ・ド・オルニエール子爵夫人と  
の間に子供が生まれた。

生まれ出でて、最初の産声の元気さは両親を安心させたものだ。

「よくやった、ユリアナ。元気な男の子だ！」

「ええ、アナタ。本当に無事に生まれてくれて良かったわ」

生まれて間もない赤ん坊は肌の色も赤く、永らく羊水に浸かっていたから全身が皺くちやだが、サリユートにとっては可愛い子供である事には違いない。

「本当によく頑張ってくれたなユリアナ。そして……生まれて来てくれてありがとう、我が息子よ！」

この日、ド・オルニエール家最初の子供の誕生を、オルニエール領内挙げて喜んだのだった。

赤ん坊の誕生から一週間が経ち、赤ん坊は未だに坐らない首に四苦八苦しながら様子を眺めている。

誕生して直ぐ、サリユートはまるで神の啓示フリミルでも受けたかの様に、キラリと名前を閃いた。

## 【ユート】

この子には、この名前以外は有り得ないとまで考え、妻に相談した結果優しげに微笑んで賛成してくれる。

赤ん坊の名前は、ユート・オガタ・ド・オルニエールと名付けられたのだ。

コートはベビーベッドの様な物に寝かされている。

「（困った……）」

そう困った。

本当に困ってしまう。

「（真逆、生まれて一週間程度で意識が覚醒するなんて、ぶっちゃけ有り得ないだろう？）」

赤ん坊は既に、優斗としての意識を覚醒して、記憶も徐々に回復しつつあった。

一気に回復すると、赤ん坊のキャパシティを越えてしまうから、安全措置なのだろう。

それで何が困ったのかというと、先ず第一に退屈だと云う事。

身体を碌に動かせないなんて、拷問以外の何ものでもない。

人間とは、退屈を友には出来ない生き物なのだ。

日がな一日、ただ寝て暮らす日々を少なくとも二年は過ごさなければならぬ。

第二に、食事だ。

取り敢えず、泣けば食事は摂れる。



しかし、生後一週間の赤ん坊の食事とは何か？

言わずもがな、母乳だ。

意識が覚醒してしまったからには、母親のオツパイにむしゃぶり付き、チューチューと吸う行為は羞恥プレイでしかない。

この際、乳母だろうが実母だろうが同じ事だ。

母親であるユリアナの容姿は窮めて銀に近い白髪で、瞳の色は翠、身長は中学生の女子程度の女性。

別にまんまでは無いにしても、見た目が【・hack】に登場するアウラと似ている気がする。

「（そう言えば、母上の名前はユリアナ・オガタ・アウローラ・ド・オルニエールだったっけ？）」

アウローラとアウラは同じ意味だ。

母乳は出るが、脹らみが申し訳程度。

優斗の好きだった合法ロリな容姿な訳だが、母親では嬉しくも何とも無い。

それに、母乳を飲めと言われても人肌に温まっている乳は少し気持ち悪かった。

同じ飲むなら、ホットミルクかアイスミルクのどちらかにして欲しいものだ。

「（飲まなきゃ飢えるから仕方がないけど……）」

そんな訳で、泣く泣く母乳を飲んでいる。

恥ずかしいやら気持ち悪いやら、踏んだり蹴ったりでしかない。

そして第三が、トイレだ。

碌に身体が動かないから、漏らしたくなければ何とか事前にトイレに行かなければならない。

問題はどうかやってトイレに行くか……だ。

身体が動かせない以上は、自力で行く事は諦めるしかない。

ならば、メイドに連れて行って貰うのが一番建設的な方法だろう。

母親のユリアナは出産して間もない。

軽い運動くらいはするが、そうそうと動き回ったりは出来ない筈。

一ヶ月も経てば、ある程度レベルに体力も戻るだろうが、少なくとも今は無理をさせられない。

食事は母親の母乳を飲み、それも終わると後は眠るくらいしかやれそうな事が無いユートは、トイレに行こうと思った。

食事が飲み物である以上、当然ながら眠っている内に尿意が促進される。

勿論、大の方も出るだろうが今は小だ。

「ああ、いえ……」

ユートは拙ない言葉で先ずメイドの気を引く。

「坊っちゃん、どうかなさいましたか？」

ユートの身の回りの世話を仰せ遣ったメイドは、何やら訴えてくる様子のユートに話し掛ける。

「(っしゃあ！ 有能な人で助かった！)」

出来るならガッツポーズを取りたいくらい、内心で喜んだ。

まだ碌に動かない腕を何とか上げて、扉の方へと指を差すとメイドさんは釣られて振り向いた。

「もしかして、お部屋の外へ行きたいのですか？」

ユートは坐らない首を押し、軽く縦に振る。

「奥様、坊っちゃんがお手洗いに逝きたそうにしていますが、お連れしても宜しいでしょうか？」

「ええ、お願いねアニー」

メイドさん……アニーは一礼すると、ユートを抱っこして近場のトイレへと連れて行った。

平民の住む場所はともかくとしても、貴族の屋敷にはトイレくらい  
備え付けられている様だ。

下半身を剥き出しにされ、ユートは安心してトイレを済ませた。

「（良かった。これでオネシヨなんて屈辱を、味わう確率が少なくな  
った）」

とはいえ、所詮は赤ん坊の肉体である以上、オネシヨはしてしまう  
だろうが……

それでも、起きてぐっしょりと濡れた蒲団に寝かされる事は減りそ  
うだ。

ユートは安堵の溜息を吐きながら、母親の胸に抱かれて眠る。

「あれ？ 俺……」

「お兄ちゃん、どうしたの？ それ、読まないんなら貸してよ」

後ろから声を掛けられて、驚きを隠せない“優斗”。

「は、白垂？」

「？ 妹の顔を見忘れた訳？」

黒でおかっぱに近い髪型、くりつとした黒瞳。

胸は中学三年生という枠組みから視ると、残念としか言えない大きさ。

成る程、間違いなく少女は妹の【緒方白亜】だ。

「（俺、死んで転生したんじゃないっけ？）」

そんな事を考えながらも、手にしていたライトノベル【スレイヤーズ15 デモンズスレイヤーズ！】を白亜に渡してやる。

「ありがとう、お兄ちゃん」

ニコニコして本を受け取ると、白亜は笑顔の仮に読み始める。

「（そうか、これは寝ている俺が視ている刹那の幻……夢か）」

直ぐには気が付かなかったのは、恐らく認めたくなかったからか。

これが過ぎ去りし泡沫の夢だという事を。

働き者でありながら、家族サービスを忘れない父。

専業主婦のクセに、息子の姉呼ばわりで喜ぶ不自然なくらい若々しい母。

シスコンと呼ばわ呼べ。

目に入れても痛くない妹の白亜。

きつと幸福だったあの頃。

未来に展望も何も見えない暗闇だったとしても、ソレは確かな生き  
た世界。

『寂しいか？』

白亜から“白亜ではない”声が響く。

本を閉じ、振り向いた白亜の瞳は黒ではなく金色。

髪の毛もいつの間にか金色に輝いている。

「な！？ 誰だ？ 白亜じゃ無いな！」

『寂しいか？ 我が加護を受けし者よ……』

恐怖を感じる。

あまりに圧倒的な重圧。

なのは（神）からもこれ程の重圧は受けなかった。

『ふふ。そう警戒するな我が神和祇よ』

【神和祇】……白亜に似た白亜でない存在は、優斗を確かにそう呼  
んだ。

「か、かななぎ……？ つて、確か巫女の男版？」

普通は頭かななぎと書くのだが、神和祇は当て字に近い。

『その通りだ』

「お前は一体、何者だ？」

恐怖が在った。

畏怖が在った。

同時に畏敬の念が在った。

重圧が押し掛かるが、それと同じくらい安堵も在る。

ユートにとって、それはあまりにも不可思議な気分だった。

『私は我が子によれば……創星神の一柱だそうだ』

「他人事みたいに言うんだな？」

『私には元より名など無いし、お前達が私を認知した際に呼び名が無ければ困るからと、お前達自身が付けているに過ぎぬ』

原初の神に名前など無意味だったのだろう、本来は名前は存在していない。

今の人型も、所詮はユートに併せてその姿を採っているだけだ。

謂わば、姿も性別も名すらも存在していない漠然とした概念。

概念体だった。

その概念に名を与え、括る事で力と成す。

それが魔法と呼ばれる力。

しかし、人間の器ではその一部に名を与えて括っても制御出来ず、発動すらないか或いは暴走させて世界を滅ぼすか。

故に、彼の概念をとある地では【魔王】と呼んだ。

滅びを齎らす魔王だと。

彼の概念が自発的に世界を滅ぼした事など、それこそ皆無だと云うのに。

『我は母、我は光、我は闇……全てを俯瞰し、全てに干渉する存在』

「俺がそんな貴女の神和祇だと？」

『因果とは斯くも面白いものだ。時々居るのだよ……何の修業も無しに汝らが神と呼ぶ存在と、親和性の高い人間が』

「それが……俺？」

信じられないと思ったが、あれ程の重圧を持った存在だ、わざわざゴートを騙す理由も無い。



『汝にこれをやるっ』

受け取ったのは剣。

漆黒にして金色たる虚無の剣だった。

「これ……は……っ!? ラグ……っ」

あまりの重圧に、意識を吹き飛ばされてしまう。

まるで掻き消えるかの如く消えてしまった。

『嘗て、私と高い親和性を持った娘や、我が愛し子の様な活躍……  
魅せて貰うぞユートよ』

口元を吊り上げ、笑う少女はまるで死神の持つ鎌を手に、その空間から消える。

「っ!？」

朝の日射しに目を焼かれ、ソツと開けてみると自分の姿はやっぱり  
赤ん坊。

ふと見れば、隣には今生の母親ユリアナが居る。

未だにまともに動かせない身体では、自由に動く事も俛ならない。

思考はクリアだから、考える事だけは出来る。

「（あの夢、途中までは間違はなく前世の夢。だけど途中から、誰かの干渉を受けたんだ）」

“誰かの”なんて言うまでも無い。

### 【創星神】

概念体を生み出し、世界に干渉出来る法則を創り出した法則そのもの。

そんな存在が何故？

自分に？

「（この問いには意味が無いか。何故を考えるより、どうするかだよな）」

尤も、首すら坐らない現在ではどうしようも無いのが実情。

「（今はただ、この温もりに包まれていれば良いって事かな？）」  
それがユートの出した結論であり、何も出来ない自分の妥協点だろう。

刻は瞬く間に流れ、赤ん坊だったユートも五歳児と成っていた。

そろそろ魔法を習う頃だと思われる。

実際、ハルケギニアの魔法を習う事になるのは確実だとユートは思い、三歳になった頃に父親に頼んで書庫を解放して貰っていた。

この世界の魔法を、ライトノベルとは違う側面から識っておきたかったのだ。

まあ書庫と言ってみても、オルニール家は興されたばかりの新興の家、父親のサリユートが買い集めた本が、城に放って置かれていた物を整理した本くらいしか無かったが。

数はとにかく、質が良ければと頑張ってみたら、案外と良質の内容だったらしく、判り易くて実の在る時間を過ごせたものだ。

その中には、原作では言及されていない様な事も多々載っていたのは驚いた。

第1話：意識の覚醒と金色の女王（後書き）

独自設定に関しては、基本的に説明を入れていきます。

**第2話：魔法の考察と石の聖霊（前書き）**

一気に歳月が過ぎました。

## 第2話：魔法の考察と石の聖霊

基本的に魔法とはイメージと集中力が肝要。

次に制御。

内なる魔力を集中し、それをイメージにより形作る。

魔法として“構成”された“術式”を、制御する事によって動かす。

イメージと集中で、魔力で術式を練って魔法という形に構成し、制御して世界に影響を及ぼすのがハルケギニア式の魔法。

ユートは本を読んだ際に、そんな感じで理解した。

「同じ様なタイプの魔法なら、スレイヤーズの魔法も構築出来そうだな」

例えば、簡単な処で火炎球ファイアボールなんか、同じ名前の魔法がハルケギニアにも在った筈だ。

ドットの火属性魔法として裂火陣フレア・ピットを構築出来るかも知れない。

「問題は僕の属性かな？」

この頃、三歳のユートでは属性など計りようが無く、属性の事を幾ら考えたとしても、正に獲らぬ狸の皮算用でしかない。

因みに、前世の優斗は一人称が【俺】だったが、自分を差して【俺】  
と言うと、母のユリアナが悲しそうにする為、今は一人称を【僕】  
に変えている。

トリステイン魔法学院に通う頃には、一人称が【私】に変化しそ  
うだ。

それはともかく、系統魔法に関しては後で考えるとして、コモン・  
マジックについての考察を始めた。

コモン・マジックとは謂わば、魔力でPK（プレイヤーキラーに非  
ず）を行うモノだと、ユートは想定している。

アニメでキュルケが使っていたのは、明らかに全てが念力の変形だ  
ったからだ。

「ライト、念力、ロック、アンロック、サモン・サーヴァント、コ  
ントラクト・サーヴァント、ディテクト・マジック、リードランゲ  
ージ……か」

幾つかのコモン・マジックを口に出し、その効果を思い浮かべてみ  
る。

ライト（灯り）……光を灯す魔法。

フォース（念力）……物体を動かす魔法。

ロック（施錠）……鍵を掛ける魔法。

アンロック（解錠）……鍵を開ける魔法。

サモン・サーヴァント（召喚）……使い魔の召喚を行う魔法。

コントラクト・サーヴァント（契約）……サモン・サーヴァントで呼び出した使い魔（ラインの繋がった生物）と、契約す（パスを繋げ）る魔法。

ディテクト・マジック（探知）……あらゆるモノを調べる魔法。

リードランゲージ（翻訳）……書物の意味を理解出来る魔法。

便利ではあるし、幾つかはスレイヤーズ系にも似た魔法が存在していた。

「後は魔法に関する理論の補強か」

この世界の魔法に対して、正しい知識と理論を構築しなければ、修得に時間が掛かってしまう。

そう考えた。

次は虚無に関して……

さて、我らが始祖（笑）たるブリミル・ヴァルトリ殿は始祖の  
にこう記していた筈……

四系統魔法とは、小さな粒に干渉する魔法。

虚無魔法とは、四系統魔法より更に小さな粒に干渉する魔法。



原作知識では確かにそう描かれていた。

原作者が何を意図していたかは、本人にでも聞かなければ不明だが、小さな粒を精霊の力とするなら恐らくは原子だろう。

一応は分子の可能性もある訳だが、より細かな原子の方が精霊力として相応しいし、何より分子より小さい粒を原子とすれば、虚無の魔法に矛盾が出る。

虚無魔法は空間を支配し、記憶にすら干渉出来た。

レポート  
転移

ワールドトア  
世界扉

エクスプロージョン  
爆発

オブレイション  
忘却

ディスペル  
解除

リコード  
記憶

イリュージョン  
幻影

アクセラ  
加速

パツと思い出せた虚無魔法の一覧だが、どれもこれもが確かに強力だ。

そして、エクスポージョン、ワールドドア、テレポード、ディスプレイ、リコードは空間に作用する魔法。

オブレイション  
忘却と、イリユージョンは記憶に作用する魔法だ。

アクセルは瞬動みたいなモノだとすれば、空間に作用するのか、記憶以外の身体にも作用する魔法が存在するのかのどちらかだ。

いずれにしても、原子では干渉出来ない。

空間や記憶に作用するのなら、最低でもダークマタークラスの素粒子か、或いは量子レベルだろう。

実際、核兵器を使って空間に異常が起きたなんて話、某濃くなどの核実験された国の中で、何処にも無い。

詰まり、原子では空間に直線的な作用は起きないと云う事だ。

一方のダークマター、即ち素粒子はスパロボを見れば判るが、空間や時空に作用している。

時間逆行を可能にした時流子、アキシオン、重力子、タキオンといった素粒子。

これらに魔力で干渉して、空間転移をしたり、世界と世界を繋がりしているのだろう。

また、記憶に干渉するなら量子が相応しい。

量子コンピュータは、人に最も近い働きが可能だ。

マブラヴでも、量子コンピュータによるブレインキャプチャシステムを構築し、人間を越えたの量子伝導脳を造っている。

それに人間の思念を量子だとすれば、それはそれで面白いと思う。

コモン・マジックの中に、サモンサーヴァントと云う空間と空間を繋げ、一方通行とはいえ幻獣や動物等を使い魔（候補）として呼び込む魔法が存在している。

更に、相手の脳にルーンによる楔を打ち込んで、親愛の情を持たせる一種の洗脳が行えるコントラクト・サーヴァント。

詰まり、コモン・マジックは超劣化虚無と言ってみても過言ではない。

だからこそ、ルイズも虚無を自覚するとコモン・マジックを使った。系統魔法は相変わらず使えないのに、コモン・マジックだけは使える様になったのも、コモン・マジックが虚無と特性が似ていたからだと考えられる。

「（だとすれば、虚無そのものとは云わないまでも、コモン・マジックで虚無に近い魔法を構築出来るんじゃないか？）」

あまりにも不穩で、誰かに聞かれたらヤバい内容だけに思考だけで声には出さなかった。

ロマリアの神官辺りに聞かれたら、大喜び？　で異端審問とかしてきそつだ。

魔法はイメージ。

ならば、量子や素粒子を操るイメージで魔法を使ったらどうか？

擬似虚無の出来上がりだ。

問題点として挙げられるのが、虚無のあの莫迦長い詠唱は術式構築の為のモノで制御なんかも入っている可能性。

途中で止めても一応発動するが、中途半端な詠唱では完全に術式を構築仕切れていないからか、大した効力も無かった筈。

テレポートの何たるかを、理解していなかったルイズは完全に詠唱をしても、精々が視認出来る距離くらいしか跳べなかった。

その事から、ハルケギニアの魔法は口語やルーンにより魔力を練って、頭に思い描くイメージにより術式を略、自動で構築しているのだろう。

本と格闘しながら、ユートは魔法の真理というモノを学んでいった。

そして現在……

父であるサリユートと、母であるユリアナが幾つかの杖らしき物を持って庭まで来ていた。

「ユート、お前ももう五歳になる。誕生日の前に杖と契約し、立派なメイジとなるようになりなさい」

「貴方の杖をこの中から選びなさい」

サリユートとユリアナが、箱に入った物を差し出して選ぶように促す。

尤も、選ぶも何も杖の形状は既に決めてある。

問題はソレが有るか否か。

ガサガサと箱を探って目的の物を捜す。

「あっ！」

見付けた。

小さいから奥の方に落ちていたらしい。

ユートが“ソレ”を拾い上げる。

“ソレ”は派手ではないながらも、小さなアダマスの付いた指輪。

「父上、母上、僕はこの指輪を杖に選びます」

軽く驚く両親に、ニコニコと笑顔で摘まれた指輪を見せる。

「何故、指輪なのかね？」

「はい。普通の杖では普段から手には持っておけませんし、いざと言う時にワントンポ遅れます。しかし、指輪は常に指に嵌めておけますから、魔法を使いたい時に使えます」

「効率重視……か」

サリユートは、ユートから説明を受けて納得したように目を閉じる。

「そこまで考えているなら最早何も言うまい。今日より指輪を填めて生活して、杖契約をするがよい」

「はい、ありがとうございます。父上、母上！」

ユートは指輪を右の中指に填めると、自分の部屋へと戻る。

填める指に併せて大きさを変える魔法が掛かっていたらしく、どの指にも填められる事が判った。

右の中指なのは、ユートが右利きで填めて一番座りの良い箇所だったからだ。

「さて、二次小説なんかでも大抵は四六時中杖を手に持って、パスを通じてからラインを繋ぐ事で契約していたよな」

ならば古き善き先例に倣うのが良いだろう。

幸いにも指輪は、それこそ四六時中填めていられる。

「名前を付けるか」

ユートはふと思いつく。

名付けには霊的、魔術的に意味が在る。

言霊を籠めて名付けてやるなら、それは一種の契約となるのだ。

契約は誕生、名付けは呪的拘束。

名前とはある意味で呪い。

それに固体名を“呼ぶ”という行為には、制御という面も在る。

名も無き最古の神の“力”に名を与え、制御する事によって魔法と成す。

詰まりは、そういう事だ。

例えば、エルフと共同作業をしたとする。

エルフが『おい蛮人、力を貸せ！』と言ってきたとして、素直に力を貸したいと思うだろうか？

命令口調はこの際、置いておくとして、せめて名前で呼べと言いたい。

これは何もエルフに限りはしない事。

貴族という枠組みからすれば、平民を平民と呼んでいるのに等しい。

結局のところ、ハルケギニアに在る者は誰かを蔑まなければ気が済まない生き物なのだろう。

原作をユートが読む限り、ルイズもゼロのルイズと蔑まれて悔しい思いをしていながら、才人を所詮は平民の使い魔と見下していた。

ユートをこのハルケギニアに転生させた、高町なのはも言っていただろう。

名前で呼んで……と。

そんな訳で、ユートは自分の指に填まった指輪に名前を付ける。

「付いている宝石が宝石な訳だし……決めた！ 今日からお前は【アダマス】だからな？」

《アダマス、どういう意味なの？》

「高潔、侵されざる存在。そういう意味さ！」

《良い名前……》

「だろう？ ………………って、誰だ！？」

今更ながら、謎の声に気が付いてキョロキョロする。

《こつち、こつちだよ？》

「っ！」



ハッと、声の方を見る。

自分の右中指に填まっている指輪を。

「真……逆、アダマス？」

《うん、お早うマスター》

「マスター？ って……」

突然のマスター呼ばわりに吃驚してしまう。

《わたしはこの石の聖霊。わたしを目醒めさせてくれたのは貴方、だから貴方がわたしのマスター》

永い年月を経た存在は聖霊と化すか、或いは聖霊を宿す。

九十九神がそれだ。

周囲の有象無象のエネルギーを、永い歳月を掛けて僅かずつ蓄積していき、そのエネルギーに人格が宿り、器物を生存媒体として完成するのが九十九神だ。

【アダマス】もその一種なのだろう。

今までは眠っていたのか、誰も気が付かなかったらしいが、ユートの名付けと共にパスが繋がり、魔力を受け取って目醒めた様だ。

意図も簡単にパスが繋がったのは、元々エネルギーを高圧で持っていたからだと言いつつは推察した。

新品の杖には碌なエネルギーが無く、それ故に四六時中手にして魔力を流し込み続けなければならない。

だから数日の時間が掛かるといふ事だ。

後は本人の魔力値と、魔力を杖に籠める才能。

幸い、ユートはそういう才能を貰っている。

はっきりと言えば、ユートにとっては僥幸だった。

「これで先に進める！」

《先に？》

「ああ、アダマス。これから宜しくな？」

《はい》

ユートとアダマスは今後について話し合う。

アダマスとの協議の結果、普段から話すのは対外的にも良くないし、アダマスはもつと力を蓄積して人型を採れる様に成りたいから、普段は眠る事にして言霊と魔力を籠めて呼んだ場合、それに応える。

《それじゃマスター、お休みなさい》

「お休み、アダマス」

起きたばかりで、もう眠ってしまったアダムスを見ながら、ユートは苦笑した。

## 第2話：魔法の考察と石の聖霊（後書き）

魔法の云々などは、独自の設定です。

似たような設定は何処かに在るかも知れませんが。

### 第3話・ロモン・マジック(前書き)

ある程度の独自設定アリ。

だいたい数日で一話の更新が出来ると良いけど……

### 第3話：コモン・マジック

食事時になり、メイドであるアニーが呼びに来る。

「失礼致します若様、お食事の時間です」

「ああ、ありがとう」

アニーはコートが未だ赤ん坊の頃から、ずっと面倒を見てくれた。  
た。

年齢は5年前が15歳。

有能で、簡単な言葉すらも碌に話せなかった当時に、色々と本当に世話を焼いてくれた女性だ。

茶髪をボブカットにしているちょっと垂れ目気味の、瞳の色が赤い少女。

来年には寿退職を予定しているというアニー。

10歳の時にオルニエール家で奉公を始めて、足掛け10年、既にベテランの域に達している。

しかし、コートのこれには慣れない。

いちいち『ありがとう』とお礼を言われるのは。

奉公のし甲斐はある。

他の貴族なら基本的に奉公人が働くのは当たり前で、礼など言う訳も無い。

アニーはだからこそ思う。

自分は幸運だったと。

否、オルニエール家に奉公しているメイドやバトラーの全て、全員がきつと幸運に恵まれていた。

他の貴族達なら、下手をすれば結婚どころか寧ろ貴族にお手付きにされ、最悪だと孕まされて棄てられる。

正直、サリユートも優しい旦那様で、奥様のユリアナも戦いに加わっていたとは思えない程に穏やかな人物で、みんなが笑顔の職場。

オルニエール家で奉公出来た事を誇りにして、アニーは働いている。

そんなアニーを、ユートは眩しそうに見ていた。

食堂へとやって来たユートは、父親のサリユートへと報告をする。

「父上、件の指輪との杖契約に成功致しました」

「な、何？ もうか？」

サリユートは驚愕に目を見開く。

聞いていたユリアナも吃驚している様だ。

「はい、御覧下さい」

ユートは右中指に填めついる指輪を見せた。

信じ難い為、ディテクトマジックを掛けてみる。

「こ、これは……！ 確かにユートの魔力が指輪との間で循環しているな」

契約を完了出来たかどうかは多分に感覚的なモノで、ディテクトマジックを使わないと他人には判らない。

「うむ、宜しい。本来であれば杖契約は早くても数日は掛かるものだが、これなら明日から魔法の訓練に入っても良いだろう」

「はい、父上」

漸く魔法の訓練に入れる。

それが嬉しかった。

「これなら随分、才能が在るのかも知れませんか」

ユリアナも嬉しそうに微笑んでいる。



周囲のメイド達も『流石は若様だ』と讚えた。

普通の貴族の邸なら、職場の無駄口は赦されない。

勿論、それはオルニエール家に於いても同様だ。

しかし、こういう時はみんなで喜びを分かち合うのがこの家の家訓。

食事の後、使用人達は杖契約成功のお祝いに、高価な菓子を振る舞われた。

普通の平民が食べようと思ったら、一ヶ月は飲まず食わずを覚悟しなければならぬ値段だ。

たった数時間で杖契約完了というのは、メイジにとってそれだけ凄い事だという事だった。

翌日、サリユートは朝早くにユートを庭に連れ出し、魔法の訓練を始める。

まずはコモン・マジックの中でも比較的簡単な魔法、念力を教えた。

「良いか、ユート。まずは念力を教える」

「はい、父上！」

念力は謂わば、全ての基本となる魔法。

何故なら、念力はただ物体を動かすだけの魔法だが、これで自分を

浮かせばレベテーションに、鍵の開け閉めが出来ればロックとアンロックに成るからだ。

勿論、ロックはそれだけではなく、術式を持續させて普通の方法では開けられない様にする魔法だし、アンロックは術式を読み取って外す魔法だから、ただ動かせば良い訳でも無いが。

サリユートは手本として、自らが実演して見せる。

簡単な短い口語の後、魔力を杖の先に集中。

思念で置いてある石が浮かび上がるイメージを描き、それを実現するべく魔力を石に向けた。

石はフワリと浮かび上がると、杖の動きに併せて右に行ったり左に行ったりしている。

「これが念力だ。ユート、魔法とは想像力と集中力が肝要だ。さあ、お前もやってみなさい」

「はい！」

ユートは指輪へと魔力を集中し、頭の中に石が浮かび上がる処を想像する。

「浮かべ！」

人差し指を杖に見立てて、念力を使うと石は遠くへと飛んでいく。

「浮かんだというよりは、飛んでいったな」

「は、はい……」

飛んでいった先を呆然と眺めて、サリユートとユートは呟いた。

「魔力の籠め過ぎと、後の制御がまるで成っていないのが原因だろう」

失敗の検証をして、原因を教える

これが、ユートの初魔法の顛末だった。

父、サリユートのアドバイスに従い、再び念力を使ってみる。

「動け！」

魔力を一定以上は籠めず、ただ意味も無く浮かせるのではなく、イメージは石を浮かせて的に当てる感覚。

念力という魔法を使うという意識は捨てて、手で持って投石する心算で……

イメージション、コンセプトレーション、コントロール  
想像力と集中力と制御力が魔法成功の鍵。

「（手に持つ、ソレを投げ付ける……っ！）」

そのイメージで浮かせて、予め用意してあった的へと発射した。

正鵠（中心）とはいかなかったが、上手く的に当たる。

それを見たサリユートは、僅か数回の練習でこれだけのコントロールを見せられて、少しだけ驚く。

「ほう、もうコツを掴んだと云うのか？」

一日とはいかないまでも、半日は念力の修得に費やすかと考えていたが、思った以上に優秀な我が子に満足そうな目を向ける。

「これは、系統魔法を教えるのが益々楽しみになってきたな」

破顔しながら念力を使っているユートを見つめ、数日後に思いを馳せた。

この分なら、数日でコモン・マジックに関しては覚えてしまうだろう。

ユートはどんな系統か？

自分とユリアナでは、系統がまるで違う。

それ故に、どっちの系統を受け継いでいるのか、割と期待していた。

自分と同じ資質であれば、手ずから教えるという楽しみがある。

そこら辺は、サリユートもやはりメイジだ。

ライト（灯り）の魔法。

単純に灯りを点すだけ。

「ライト！」

ユートは、光が指先に点るイメージで魔力を集約し、後は簡単に消えない様に制御した。

現代人の転生体である為、灯りが点くという現象を科学的に考えて、それをイメージに投影して魔法に変換する。

思惑の通り、ライトの魔法を発現させて維持に成功。

この辺はなのは（神）から力を貰ったお陰だと、ユートはそう考えている。

魔法に対する構成の解析力と、精霊力との親和性がすごく高い。

更に現代人の科学知識。

これはユートとしても嬉しい誤算だった。

ライトはスレイヤーズに併せて、ライティング（明り）として昇華しようと思う。

要は、杖の先を光らせるのではなく、明かりを光球にして辺りを照らす感じだろうか？

持続時間をゼロにした目潰しにも使えるコモン（汎用）の名に恥じない、それだけの魔法になれる筈だ。

「取り敢えず、灯りを指先に持続させる練習だな」

魔法は放つ際に精神力を消耗するが、それを維持するなら少しずつ精神力を消耗していく。

数値的に言えば、ライトの発現にMPを3消費するとして、維持するなら数秒毎にMPを1ずつ常に消費している様だ。

恐らく、ゴーレムはまた違うのだろうが……

ロック（施錠）、アンロック（解錠）も覚える事が出来、その日の訓練は終わった。

明日はディテクトマジック（探知）と、リードランゲージ（翻訳）を覚える予定だ。

それが済めばいよいよ系統魔法の練習に移れる。

### 【夕餉の時間】

「ユートよ、我が子ながら素晴らしい才能だ。真逆、今日の内にコモン・マジックを四つも修得するとは」

「しかも、貴方のライトはオリジナルスペルね？」

サリユートとユリアナが、手放しで誉めちぎる。

聞いた話では、どうやらコモン・マジックと言えども初日での修得は困難で、大抵は一つか良くて二つを修得するのがやっとなのだと云う。

当然と言えば当然か。

初日は言ってみれば、初めて魔法を行使するのだ。

まだ魔力制御が未熟な上、精神力だって普通は五歳かそこらでは大した量ではないのだから。

イメージだって貧弱で貧困な幼児に一体、何を期待出来ると云うのか。

別にユートが天才という訳ではない。

と言うより、インチキ込みでまともに魔法が使えないならそれこそ問題だ。

なのは（神）から貰った力が有るし、必要な魔力や精神力はリンク・コアを通じて獲られる。

努力無しでは何も出来ない“力”ではあるが、努力さえすれば正当な評価を受ける事が可能な能力。

それがユートが欲した能力で出来る事だった。

「今夜はしっかりと眠り、明日に備えて精神力を回復させなさい」

「はい、判りました父上」

サリユートの訓示に、笑顔で返事をするユート。

食後は風呂に入って、少しだけ明日の魔法の予習をしてからベッドに入った。

### 【翌朝】

ディテクトマジック（探知）とは、そもそも何ぞや？

ソレを科学的に考えるならどうする？

サリユートからディテクトマジックの講義を受けながら、ユートはずっと考え続けていた。

残念ながら、サリユートの講義は本に書いていた事と何ら変わり無い。

詰まり、昨夜の予習で十分な知識は獲ている。

だから今、必要なのは知識のお復習ではなく、ソレを自分の持った雑学の知識にどう擦り合わせるかだ。

探知、詰まりは調べる……

病院のMRIやレントゲンなど、それに針金や振り子を使ったダウジングもそうだろう。

それらを複合する心算で。



「ユート、ちゃんと聞いているのか？」

「はい、聞いてます！」

サリユートに注意を受け、ユートは慌てて返事する。

「（危ない、ついつい没頭してしまった。複数思考、所謂処の【マルチタスク】は必須だからな）」

なのは（神）と出会い、彼女の存在がマルチタスクを思い付かせてくれたのだ。

ユートは普段から、マルチタスクの練習に勤しんで、魔法を習う時に活用しようと考えていた。

何故なら、メイジは余程の熟達者でもなければ、魔法の同時展開が出来ない。

空を翔けながら、攻撃魔法を放つなんて器用な事が、ハルケギニアのメイジには略、不可能。

略……と言うのは、絶対に出来ない訳ではないから。

“熟達者”であれば、可能なのだ。

何処その某烈風なら、平然とやって見せるだろう。

彼女も最初はへっぴこだったし、烈風の強さはバグキャラな意味合  
いでは無く、魔法を扱う技術力の高さに在るのだろう。

事実上、風のスクウェアの魔法である偏在は、ユビキタス思考の分割を地で行っているし。

偏在の一つ一つに意志が有って、それぞれ魔法も使えるって云うのは詰まりは、そういう事だろう。

サリユートからの説明も終わって、いよいよディテクトマジックを試す。

「（魔力を練って、イメージを……）」

ユートは現代日本で当たり前に存在し、ハルケギニアには事実上存在していないMRIやレントゲンやダウジングなど、何かを調べる事に特化したモノを思い浮かべてみる。

知識の上では、一応の理論も理解している為、それも同時にイメージした。

放出された魔力、それに伴い減っていく精神力。

対象へと魔力が絡み付き、探知の魔法がユートに情報を教えてくれた。

それも、恐らくは通常より多い情報量で。

普通のメイジが得られている情報に関しては、先程の説明や本で読んだ限りの事は把握している。

そして、ユートの得られた情報はその“普通”を明らかに凌駕して

いた。

その情報を伝えると、吃驚した表情になるサリユートだったが、これも息子の持つ才能だと考える。

ユートとしても、その方が都合が良い。

次の魔法は、リードランゲージ（翻訳）だ。

どうやら、この世界に地球から転移した場合、魔法の効果なのか言葉は普通に話せるっぽい。

しかし、原作を見る限りでは文字は違う。

一応、才人はタバサから教わった際に、これもルーン的能力だったのか次々と読める様になっていた。

「（確か、ルイズが才人の日記を読むのに使っていた魔法だっけ？）  
」

そんな事を考えながら魔法のイメージを練る。

言語面でのアナライズ（解析）と検証、ランゲージリソースの選定と配置。

ランゲージ工程の管理と、翻訳者へのフィードバックを敢行。

リードランゲージは知りたい文字の意識を、術者へとフィードバックする魔法。

飽く迄も意味を知るだけの魔法だから、書ける様になる訳では無い。生憎と、既にユートは普通のハルケギニア言語は完璧に読めるし、日本語も覚えている。

だから、リードランゲージに使用したのは、古い言語で書かれていた古文書。

ユートでは決して読めない言語で書かれていながら、確実に意味が解った。

古文書の文字の意識が、頭の中にフィードバックされる事により、まるで日本語でも読む感覚で古文書の中身が理解出来る。

「どうやら成功したな」

「はい！」

「よくやったぞ、ユート。これなら明日から系統魔法の訓練に移っても良いだろうな」

サリユートは腕組みをし、コクリと首肯しながら嬉しそうに言ったものだった。

### 第3話・ロモン・マジック(後書き)

ロモン・マジックを修得。

次回は系統魔法の適正を調べて、訓練をします。

#### 第4話：系統魔法のススメ（前書き）

独自解釈をしまくった……

導入部分もそろそろ終わりになります。

さて、その内出て来るだろう原作キャラは、誰が最初に出るかな？

## 第4話：系統魔法のススメ

### 【系統魔法】

【火】 【土】 【水】 【風】

普通のハルケギニアの魔法使い（メイジ）が、系統魔法と言った場合はこの四属性を意味している。

この四つを基本とし、風の上位に【雷】が存在して、風と水を掛け合わせ【氷】の属性に出来た。

また、この魔法にはレベルが存在しており、レベル次第で出来る事も変わる。

だが、ユートはレベルが低くても強力な魔法が使える筈だと、そう考えた。

サモン・サーヴァントに於ける口語詠唱に、五つの力を司るペンタゴンと在る。

ペンタゴンとは五芒星。

五角形の面に三角形をそれぞれに配置した、一般的な星形の事だ。

この形に例えられるのは、系統魔法がとある形状によりレベルを表すから。

レベル1を点<sub>ト</sub>

レベル2を線<sub>ライン</sub>

レベル3を三角形<sub>トライアングル</sub>

レベル4を四角形<sub>スクウェア</sub>

しかし、魔法には喪われたペンタゴンの一角として、虚無の系統が存在する。

即ち【ゼロ】

ゼロの使い魔に於いては、キーパーソンとなる系統。

虚無は除き、四属性は掛け合わせられる数が「レベル」となっている。

虚無が除かれるのは、嫌味でも何でもなく、ゼロには何を掛けてもゼロ。

詰まり、虚無の担い手が系統魔法を使えないのは、掛け合わせられる魔法でないからだ。

尤も、彼らメイジは足すと言っているが……

ユートの的には掛け算だと思っている。



コモン・マジックを、サモン・サーヴァントとコントラクト・サーヴァントを除いて会得したユート。

翌日、サリユートから約束通りに系統魔法を教えて貰える運びとなった。

スレイヤーズの魔法を使いたいユートは、自分がどの系統か楽しみにしている。

自身の系統次第で、再現出来る魔法が決まるのだ。

「（風と水なら氷窟ヴァンレイルとか、火と土で暴爆ブラスト・ボムとかが使えるかな？）」

本当に使えたら、ハルケギニアではユートのオリジナルスペルと云う事になる。

今日という日の為、ずっと魔法の知識を頭に詰め込んできたのだ。

杖が無くて、魔法を使えなかった雌伏の時は終わり、いよいよこの知識を活かせる時が来た。

だからだろうか？ ユートは少し興奮している。

早く使いたい。

昨夜はそればかり考えていた所為で、お復習いに力を入れすぎてしまい、少しだけ寝不足気味だ。

「それでは、取り敢えず簡単な系統魔法を使い、お前の系統を計り

たいと思う」

サリユートがユートへ、厳かに宣言した。

本人がどの系統に属するのかは、一番簡単な系統魔法を使って判断する。

簡単なのに全く反応しなかったら、それはその系統に適正が無かったと云う事。

失敗すれば、精神力の消費は有っても何も起こらないから判り易い。

「では、私が手本を見せるからよく見ておきなさい」

サリユートが杖を構えて、ルーンを唱え始める。

因みに、ユートはスレイヤーズの黒魔法の詠唱がカオス・ワーズで行われる為、ハルケギニアの魔法詠唱をルーン・ワーズ（魔法言語）と呼んでいた。

「ウル・カーノ、発火！」

杖の先に火が灯る。

最も初歩の火系統魔法で、発火と言う。

読んで字の如く、火を発する為の魔法だ。

ユートは実は可成り血筋的に恵まれていた。

サリユートは土のスクウェア、火のトライアングル、風と水がドットのメイジ。

ユリアナは、水のスクウェア、風のトライアングル、土のライン、火のドット。

一応どの系統も使用出来る上に略、正反対の資質を最高位で持っている。

その血がコンフリクトしなければ、全ての系統を余す事無く扱える器……資質を既に獲ていた。

この場合、通常ならどうなるか？

血筋が衝突して、どの資質も弱体化してしまう。<sup>コンフリクト</sup>

どちらかの資質が優性遺伝として受け継がれ、特化型となる。

大体がこうなるだろう。

両親の資質を如何無く受け継ぐ心算なら、弛まぬ努力と自覚的な訓練が必須。

人間、才能やら資質だけで何とか成る程、世界というのは甘くも優しくも無いと云う事だ。

そういう意味では、ユートは恵まれている。

ハルケギニアには存在しない筈の【理論】を、現代人としての知識として既に持っているのだから。

だからこそ……

「ウル・カーノ、発火！」

火が点くという【理論】を識るユートは、一発で発火を成功させてしまった。

ユートは発火の魔法を使う際に、ジッポライターをイメージしてみた。

フロントロックを密着させたフロントホイールを勢い良く擦る行為を、ルーンの詠唱に見立てて火花を芯に向けて飛ばす事で着火。

魔力をナフサやパラフィンから精製された、揮発性の高いオイルだと考える。

芯から揮発してガス状になったオイルが、空気と混合されて燃え続けている所をイメージしたのだ。

これにより、ユートは発火を成功させる事が出来た。

これでユートは確信する。

現代科学は魔法のイメージに役立つと。

そう、火が燃える理論を識っているのと識らないのでは、魔法の成功率や練度が雲泥の差だ。

「驚いたぞ、ユート。行き成り成功させるとは」

「ありがとうございます、父上」

資質は有っても、上手く燃えるイメージを想像出来なければ失敗もする。

そういう意味では、ユートの様に成功させるのは結構難しい。

「では、次に土系統魔法の錬金だ」

取り敢えず、ユートの魔法適正を調べる為に、今日は初歩中の初歩となる魔法を順次使っていく予定だ。

「イル・アース・デル！」

手本として、サリユートが錬金を使って石ころを青銅へと変える。

青銅は銅（Cu）を主成分として、錫（Sn）を含む合金な訳だがサリユート（父上）は何故【純銅】ではなく、【青銅】を錬金したのか？

ユートは考えた。

その疑問の一つの解答として思い浮かんだのは、銅を錬金するより青銅を錬金する方が簡単だったのでは？ というものだ。

青銅とは、要するに錫という不純物を含有する合金。

ひよっとしたら不純物を含有しない……謂わば、より単一の元素から成る純物質は、錬金し難いのかも知れない。

銅95%、錫1〜2%、亜鉛4〜3%の金属が一般的に10円玉硬化に用いられている銅合金だ。

恐らく、この銅合金の方が純金属の銅より錬金し易いのだろうと、ユートは結論付けた。

実際、純金の錬金が可能なのは土のスクウェアメイジだと、ゼロの使い魔第1巻でシュヴルーズが言っていた筈だし、トライアングルの彼女が錬金したのは真鍮……詰まり、合金だった。

「どうした？ 難しく考えなくとも良いから、錬金を試してみなさい」

「っ！ は、はい」

考え事に没頭していた為、ついマルチタスクを怠っていたユートは、慌てて返事をすると言指輪を着けた右手を伸ばす。

銅の元素記号【Cu】と、銅そのものを頭に描いて、石ころに魔力を籠めて詠唱をする。

「イル・アース・デル……錬金っ！」

ピカッと光を放って、輝きが収まると其処には銅が転がっていた。

思った以上に上手くいったらしい。

「？ 青銅ではないな」

訝しんだサリユートがディテクトマジックを掛ける。

「これは、銅……か？」

驚いている処を見ると、やはり純金属の錬金は容易くはないらしい。

「驚いたな。真逆、不純物を含まない純銅を錬金するとはな」

不純物を殆んど含まない銅は、銀や金と同じく硬化として鑄造される。

この世界では、金属の価値が「硬化の価値」。

銅貨ドニエに銀貨スウに金貨エキューとして使用されるのもその為だ。

最近では不純物を含出した金貨を、新金貨として若干だがエキュー金貨より価値が低い金貨（四分の三の価値）も出回っているが、これは世界経済の事情というやつだろう。

因みに、新金貨で1000枚「エキュー金貨750枚の価値となる。

「それにしても、火と土でずいぶんと才能を發揮したな。これは私と同じ系統と考えると良いな」

そんなサリユートの言葉を聞き、ユリアナがガツクリと肩を落とす。

息子に魔法を教えるのを楽しみにしていたのは、何もサリユートだけではない。

ユリアナも自分の系統を教えたかったのだ。

しかし、先に教えられた火と土が予想以上の出来。

サリユートの言う通りで、土と火得意とするメイジだとすれば、自分の出番など殆んど有るまい。

寧ろ専門ではない系統は、家庭教師を付けてしまえば良いのだ。

これでどちらかが出来なかったなら、未だ希望も持てたのだろうか……

火と対極の水や、土と対極の風では適正が在ったとしても、最低限の適正しか無い筈だ。

それでも、ユリアナは水系統を教える為にユートの前に立つと、ゆつくりと口を開いた。

残るはコンデンセーション（凝縮）とウインド（風）だ。

「では、次にコンデンセーションを教える……ユリアナがな」

そう言うと、サリユートがユリアナに席を譲る様に退き、それに併せてユリアナが前に出た。

「漸く私の出番ね」

満面の笑顔……というには程遠いが、それでも笑顔を“貼り付けている”。

ユートが既に、火系統と土系統に才を顕した以上は、反属性である



水系統と風系統は期待出来ない。

意気消沈しても仕方がないというものだ。

どちらかが発動していなければ、未だ期待が持てたのだろうか……

ユリアナは首を振ると、暗い考えを拭う。

息子が才を見せたのだ。

それが、自分の得意系統で在って欲しいというのは、所詮は親のエゴでしかないのだから。

「それではお手本を見せるので、それを元にやってみなさい」

「判りました、母上」

優しい声で言われ、系統が父親似だった事に少しだけ罪悪感が募り、せめて真面目にやろうと思った。

「イル・ウォータル……」

杖を振り、集中すると杖の先に水が顕われる。

流石は水のスクウェアだけあって、バケツ大の大きな水塊だ。

「凄いです母上！ では、僕もやってみますね」

お手本は見たが、魔力の流れなどを主に視ていた。

コートは思っ。

「（思った通り、ハルケギニア式の魔法はイメージをルーン・ワーズによって、魔法式に変換しているんだな。イメージが曖昧だと、まともに魔法が発動しないのも術式がちゃんと構築されないからか）

勿論、それは系統魔法の話であって、コモン・マジックはまた別の要因があるのだろうが。

コモン・マジックは口語によるものだから、ルーンの言霊の術式構築は不可能。

というより、あり得ないのが言葉を変えても発動するのだ。

例えばサモン・サーヴァントの場合。

『我が名は 。五つの力を司るペンタゴン。我の運命さだめに従いし、使い魔を召還せよ』

これが普通に使われているサモン・サーヴァントを使う際の詠唱。

しかし、ルイズは文庫では描かれなかったが、アニメでは可成りぶっ飛んだ事を言っていた。

『宇宙の何処かに居る我が下僕よ！ 神聖で美しく、強力な使い魔よ！ 私は心より求め、訴えるわ。我が導きに応えなさいッ！』

“あれ”でも魔法は成立する訳だから、詞自体は関係無いのだろう。

だいたい、タバサの場合は“偽名”でも普通に発現しているくらいだ。

なら、コモン・マジックとは何なのだろうか？

魔力と思念と想像力が術式と成り、精神力を媒介にして成立する魔法と考えるのが妥当か。

ハルケギニア自体に何らかの術式が仕掛けられている可能性もある。

それがメイジの血に反応、魔法へと変換されるなど。

実際、召喚でルーンの刻印に言語翻訳まで成されるのはどう考えてもおかしい。

「（そういえば、バカテスって召喚獣を喚ぶ為に空間を特殊フィールドにしてたよな？）」

まあ、考えていたらキリがないし答えも出ない。

それに今は魔法の練習だ。

「イル・ウォーター、「コンセンセーション」凝縮」

水を集める魔法。

ユートは指輪に魔力を集中して、目を閉じる。

水、H<sub>2</sub>O……大気中に在る水分を集約するイメージで魔法を使う。

曖昧なイメージでは術式も安定しない。

しっかりとしたイメージを持つ。

「なっ！ これは？」

「なんて事なの？」

サリユートとユリアナの声を聞き、ソツと目を開けてみると空中に浮いた水塊が目の前に在った。

それも、ユリアナが見せた水塊と遜色ない。

驚いていたのは、火と水の才能が衝突する事なく、コソフリクトどちらも正常に使えた事にだろう。

ユートとしては単純に大気中のH<sub>2</sub>O（目に見えない水分）を、理科の実験を思い出しながら集めてみただけだったが。

「こ、これは風系統の方も期待出来るかしら？」

少し興奮気味のユリアナ。

自分の系統は期待出来ないと思ったら、十分な才能を見せてくれたのだ。

これは、ユリアナでなくとも興奮しない筈もない。

「次はウインド（風）です。ソル・ウインデ」

ルーンを紡ぎ、杖を振ると風がまるで突風のように吹いてきた。

「うわっ！」

ただ吹かせただけの風が、何て威力だよ？ とユートは思う。

「さ、やってみなさい？」

「は、はい」

何だか凄く良い笑顔だ。

先の凝縮で味を占めたのかも知れない。

ユートは風とは何なのかを考える。

風とは大気の流動。

基本原理はエネルギー保存の法則、上から下に向けて落ちる事が大気で起きているのだろう。

大気と大地の温度差なんかも関係している。

しかし、今回は魔法で吹かせるのだから、寧ろ扇風機みたいに風を魔力で動かすのをイメージしてみた。

己自身を扇風機に見立て、魔力の強弱を羽の速度、精神力の大小を出力の大きさと考える。

「ソル・ウインデ」

イメージをルーンで術式化し、精神力を媒介に魔力を使ってイメージを現実のモノとするのが魔法。

確かなイメージは、正しく魔法を発動させる。

流石にユリアナ程の威力は無かったが、普通にウインドは発動していた。

サリユートは唸り、顎に手を添えて眉を顰める。

ユリアナはニコニコと嬉しそうだ。

「ユート、取り敢えず今日は精神力が尽きる寸前まで魔法のお復習をし、上がりなさい」

「はい、父上！」

その日、ユートは精神力切れで倒れる寸前まで魔法を使って、フラフラになりながら夕餉を摂った。

#### 第4話：系統魔法のススメ（後書き）

凝縮とウインドの詠唱は、ソレっぽいのを捏ち上げたモノで、実際には原作に出て来ません。

第5話：我に秘策有り 内政を始めよう（前書き）

テンプレ通り、内政にも手を出します。

正直、余り詳しくなかったりするけど……



## 第5話：我に秘策有り 内政を始めよう

コンコン……

「入りなさい」

扉を叩く軽快な音を聞き、室内で書類を片付けていたサリユートが  
応える。

「失礼します、父上」

ガチャリとドアを開けて入って来たのは、息子であるユートだ。

「うん、待っていたぞ。」

椅子に掛けなさい」

促され、ユートは近くに有った椅子へと腰掛ける。

「それで父上、僕にいったい何のご用でしょうか？」

真面目な話したと感じていたユートは、居住まいを正してサリユートに訊ねた。

「用件は二つある。一つ目は、魔法に関してだ」

「それは、全ての系統を使えた事でしょうか？」

「解っているなら話は早いが、練習に関してはともかくとしてもだ、

あまり全ての系統を使える事を幼い内から喧伝するのも良くあるまい」

父としてのサリユートは、息子の才能が嬉しい。

しかし、その才能をあまり早い内から周囲に知られると、要らぬ軋轢を生みかねない毒と為る。

それはユートも考えていた事だ。

だから、ユートは言う。

「その事は僕も考えていました。ですから、僕が現在使える系統は土と水という事にして下さい」

「何故、土と水なんだ？」

「錬金と秘薬作りをやりたいのです。勿論、戦闘メイジとして風と火の訓練もしますが、火のメイジだと薬作りは不自然ですし、風で錬金が得意なのも変でしょうから」

当たり前の事を言っているユートだが、当たり前であるが故に真理だ。

「判った。取り敢えずは、お前の系統を対外的に土と水にしておこう」

「はい。それで、二つ目は何ですか？」

サリユートは頷くと、机の上の紙の束をユートに渡して見せる。

それは、机の上に所狭しと置いてある書類とは違い、羊皮紙ではなかった。

所謂、紙だ。

羊皮紙は読んで字の如く、羊や山羊の原皮を使って作る紙の事。

材料が材料だけに決して安価とは云えず、無駄遣いは出来ない。

しかし、サリユートが渡した書類は羊皮紙ではなく、紙で出来ている。

しかも内容が【製紙法と、その活用法】だ。

其処に書かれている内容は決して無視出来ない。

何故なら、製紙法を書き出した物がその紙だからだ。

詰まり、内容は出鱈目でも何でも無い真実だと考えて良い。

「父上、此れがどうかしましたか？」

「惚けるな。それは少し前に私がお前から預かっていた物だろう」

「預けたのではなく、父上が勝手に持っていったただけでは？」

「む……」

ユートが魔法を習うよりも前の事、ユートはユリアナと部屋で過い

していた。

その時ユートは、紙に件の内容を書いている最中。

丁度、書き終えた頃に部屋へと入って来たサリユートは、息子が何をしているのか気になって、覗いてみて吃驚する事になる。

内容があまりに高度。

しかも製紙法と、紙の活用法や売り方などに言及していたのだ。

オマケに書いていた物が、羊皮紙ではなく紙。

流石に無視するには大きくて、ユートから書類を預かった。

「ユート、この紙は何処で手に入れた？」

ユートには月の小遣いを、2000スウ程渡している。

だが、紙は存在こそしているが製法が解らず羊皮紙よりも高価だ。

子供の小遣いでは数枚も買えない。

それ以前に、行商が売り歩く品でもなかった。

そんな紙を惜し気もなく使って、紙の製法を書いている息子。

驚くなどという方が無理だ。

「何処で手に入れたも何も……僕は作り方を知っているのですから、

自分で作ったんですよ」

やっぱりかと、サリユートにとっては半ば判っていた答えだった。

「ふう、それで？ ユートがこの知識を何処で得たかは聞かんが、お前はこれをどうしたいんだ？」

「ウチで造り、シエアを握りたいと思います。その為にも、父上に力を貸して頂きたいのです！」

「……………そうか」

熱く語るユート。

サリユートは暫らく目を閉じて黙考すると、決意をした目で我が子を見据える。

ユートは、そろそろ内政をしたいと考えていた。

しかし、幾ら何でも子供の意見が簡単に通る筈がない事も理解している。

ユートには勝機が在った。

何故かは判らないが、とある方法を使えばサリユートも目を向けると、確信めいた思いが在ったのだ。

その方法が、今回の製紙法を書いた“紙”をサリユートに見せるといふもの。

そして、ユートは賭けに勝った。

これが後の、オガタ式製紙法の確立である。

紙の製作に関しては、もうサリユートに任せの方が良いと判断し、ユートは次の政策へと乗り出す方向性で動く。

先の紙の功績を鑑みれば、ユートの意見を無碍にしはしないだろう。これが作戦だった。

たった一つ、それも自分に可能な範囲で何か功績を作れば、以後の意見も言い易くなる。

その為の製紙法。

更に、紙を使った商売をすれば紙の需要が増え、売り易くなる筈だ。

その方法として、娯楽の少ないこの地に娯楽小説を。

これも“何故か”頭の中に方法が入っていた。

ハルケギニアの読み物で、有名処は【イーヴァルデイの勇者】という戦記モノ。

ただ、文章が堅い文学小説の域を出ていない。

故に、目指すはライトノベルだ。

ユートは亜空間ポケットに手をつ込み、一冊の本を取り出す。

タイトルは【ゼロの使い魔】だが、勿論これを書く訳ではない。  
というか、書いたら某・宗教団体が煩いだろうし。  
単に読む為に出したのだ。

「一応、原作のチェックはこれで可能だけど、魔O……なのはさん  
曰く、この世界は【ゼロの使い魔】と銘打たれた【原典】から枝分  
かれた分枝世界だから、現在介入すれば当然だけど原作知識も役  
に立たなくなる訳だよね」

どのように動くか……

ユートは【原作】を読みながら、色々と思案に耽っていった。

【??????】

ユッサユッサと揺すぶられる身体。

「ん？」

一瞬、身動きするが再び夢の中へとダイブする。

『起きて………』

また身体を揺すぶられた。

『起きなさい!』

「うん?」

プチ……

何やら、キレてはならないモノがキレた音が鳴る。

ユートを起こしていた人物は、大きく息を吸う。

そして……

『起つきろおおおおおおおおおつ!』

「うわあぁっ!?!」

耳の傍で大声を出した。

あまりにもあまりな暴挙。

ユートは吃驚しながら目を覚ます。

「いったい何事?」

『やっと起きた』

「へ? なのはさん?」



寝呆け眼をこすりながら、声が出た方を振り返ってみると、白い魔王様が何処か嘆息しながら立っていた。

「今度はなのはさんか」

『？ 今度はつて？』

「ああ、何でもありませんです、はい」

首を傾げるのはに、慌てて抑える。

「それで、人の夢に何の用ですか？」

『あ、判ったんだ』

「まあ、一応は……」

前回、5年前に金色の女王が夢を介して顕れた時と同じ感覚があり、これが夢というか【精神空間】の一種だと理解していた。

アニメなんかではよくある演出。

気絶している主人公が誰かと会って話すのが、云ってみれば今のユートの状態なのだろう。

『話は二つ。一つは原作への介入に関して。もう一つがユート君の今後の行動の指針……かな？』

「原作介入……ダングルテールの悲劇は僕の生まれる前の話だし、ジヨゼフ暴走はトリステインの子爵家の息子でしかない僕には、何

も出来ない。ワルドの事もそう。子供の言葉なんて、聞いてくれる訳がない」

ユートは現状、何の実績も無いただの子供だ。

この世界の人間は、基本的に亜人も含めて他人を卑下するのが生き甲斐の様な、【自分最高】の連中が蔓延っている。

勿論、少数ながらそうでは無い者も居るが、大多数の権力財力持ちがそうだ。

自分の系統自慢程度なら、まだ可愛らしいモノ。

しかし、エルフが嘗て人間がした事を指して、蛮族やらシャイターンやら呼ぶのは未だしも、同じ人間という種でありながら、ゲルマニアを野蛮人と蔑むトリステインの態度。

そのくせ、自分達が悪く言われれば誇りを汚されたと怒り狂う。

誇りじゃなく、驕りの間違いだろうと思うユート。

狂王もダングルテールの悲劇も、それらの積み重ねの必然でしかない。

レコン・キスタなど、貴族による議会政策、共和制とは名ばかりの王家の利権を強奪する為の謂わば、建前論でしかなかった。

共和制と銘打つなら、平民との格差を無くして彼らも政治に参加しなければ意味が無い。

レコン・キスタのやり方なんて、王家が複数の貴族に変わったただけだ。

それに、オリバー・クロムウェルも虚無や聖地に関して詳しくなかったとユートは考えている。

彼は何を以て、自分が虚無の継承者だと吹いたのだろうか？

もしも、虚無に詳しい人間に指摘を受けたら、彼は答えられるのか？

絶対に出来ない。

所詮はガリアの傀儡、マジックアイテムを虚無と偽った詐欺師に過ぎないから。

しかも、人間が忌み嫌っている上に、クロムウェルの様なロマリア司教などが異端と断じる先住魔法（精霊の力）を、在ろう事か虚無と偽ったのだ。

ユートはロマリアの神職者が基本的に嫌いだった。

だから……

「原作介入は出来る事を、出来る様にやります。例えば、ロマリアの権威失墜、ジョゼットの救出、ティファニアに関してもか……」

アルビオンに喧嘩を売る訳ではなく、モード大公が殺された後にウエストウッドに行き、彼女との渡りを付けておくという意味だ。

虚無の予備軍や虚無の担い手を、ロマリアの好きにはさせたくない

から。

ロマリアの権威失墜とは、虚無の担い手や亜人を匿うのにも役に立つ。

当然、ルイズに関しても考えなければならない。

というかだ、自分の両親が烈風のカリンやサンドリオン（ヴァリエール公爵）や、ナルシス（グラモン元帥）と知り合いなら、何れ関わる事になる筈……

「（烈風と関わる？ うわっ、嫌だな〜）」

出来る事を少しずつ、普通の生活をするには普通じゃない連中をぶつちぎる必要があるという、凄い矛盾を孕んでいた。

「ん、原作介入については判ったよ。じゃあ、内政はどんな感じなのかな？」

「取り敢えず、五歳の子供が何を言っても普通は聞いて貰えないから、少し変わった切り口で試しました」

それが、製紙法を自身が作った紙に書いて見せるといふ方法。

それを聞いて、なのはが少し驚いた表情になる。

「よくそんな方法に辿り着いたね？」

「僕も不思議なんだけど、何故かな？ この方法って既に何処かで実証されてる気がしたんだ」

「っ!？」

なのは更に驚いた。

「そっかあ、此方は彼方の【受容世界】……か」

「? じゅようせかい？」

「うん、そう。受容世界」

なのはは【受容世界】について説明をする。

それは即ち、世界を、人物を、一つの【物語】として俯瞰し受け容れる世界。

俯瞰して得た因果情報を、【物語】に再構築して小説や漫画やアニメというメディアで発表する。

「例えば、私はユート君を知らなかったけど、ユート君は私の幼い頃を識っているよね? 【高町なのは】を主人公にした【魔法少女リリカルなのは】っていう【物語】で」

ユートは何を言いたいのか理解し、コクリとなのはの確認に首肯した。

ジュエルシードの探索や、闇の書事件での戦い。

マテリアルとの戦い。

なのはの撃墜やリインフォース?の誕生。

ティアナとスバルの出会いや、キャロとエリオのフェイトとの出会い。

JS事件や、ヴィヴィオとアインハルトの出会い。

エクリプス事件(仮)。

なのははユートを識らなくても、ユートはなのはが関わった色々を識っている。

アニメで、小説で、ゲームで、コミックで。

ユートの世界は、なのはの物語を情報として俯瞰し、メディアに変えて受け容れた世界。

成る程、受容世界とはよく言ったものだ……と、そうユートは思った。

「そしてね、貴方が識った方法は……同位体の貴方の友人が採った方法なんだ」

「そういつ……事か」

ユートは理解する。

詰まり、別の世界の自分から得た因果情報を脳の無意識領域に受け容れて、紙の製作から関連付けをした事により、あの方法を【思い出した】と云う事だ。

よくアイデアが降ってくるとか、キャラクターが勝手に動くとか云うのも、そういう事なのだろう。

そんな話を聞くと、何を神懸かった事と思ったものだったが……

どちらにせよ、今のユートには助かる話だし、問題も無い。

「じゃあ、スレイヤーズも実際に何処かの世界で有った事なんだ」

余計に【ゼロの使い魔】より【スレイヤーズ】の世界に行きたかったと、不届きな事を思ったがそれは内緒にしておく。

「でも、製紙法を独占するだけじゃ足りなくない？」

「と、言われても……」

言いたい事は判るのだが、実に我が父上様は領主として優秀だった。

それがユートの感想。

領地経営を調べて判ったのだが、ド・オルニエール領の元々の税收は体した事がなく、12000エキュー程度のものだ。

しかし、子爵位とド・オルニエールを陛下から下肢されたサリユートは、領地を全体的に見手回ると問題点を洗い出し、それらを改善していった。

お陰で、本来はサンドリオンと同じ世代のサリユートが、子供はユートだけという状態だが。

サンドリオン……ラ・ヴァリエール公爵には3人の娘が居るのにだ。  
エレオノール、カトレア、ルイズ。

因みに、なのは（神）は原作に関わらせる気が満々だと理解出来る。  
何故なら、ユートはルイズと同年であり、ラ・ヴァリエール公爵  
とサリユートは明らかに知り合いを越えた間柄。

ユートも五歳になった事だし、そろそろラ・ヴァリエール家に行く  
事になりそうだと思っている。

何故って、サリユートが言っていたのだ。

『そろそろ、ラ・ヴァリエール公爵の次女、カトレア嬢の誕生日だ  
な』

余りにもあからさま過ぎる言葉で、思わず固まってしまった。

それは兎も角、よく二次でやっている衛生管理は既にサリユートが  
行っており、糞尿の肥料化も済ませてしまっている。

その為、サリユートが新たに設置したド・オルニエールの街や、そ  
れ迄にも存在していた村なんかも臭わないし、疫病も特に流行って  
はいない。

王都トリスタニアの通りであるブルドンネ街でも、ちょっと裏に  
回ればゴミや汚物で臭いと云うのに。



「(それだけ見ても、父上って実は転生者? って思ったんだよね)」

だが、今回ののはからの情報で理解した。

恐らくは、サリユートも別世界から情報を受け取っていたのだろう。

「ま、父上に負けたくないし、温泉でも作るかな」

「温泉? でも、ユート君の住むド・オルニエール領には、火山が無いよ?」

「火山なんて要らないさ。ド・オルニエールには切り立った山脈が有るからね」

「?」

ユートの言っている意味が理解出来ず、首を傾げているのは。

「あのね、地熱は1000m掘る毎に約3 高くなる。なら、1000mくらい掘れば30 になるよね?」

「確かに、その理屈なら」

「だったら、1500mの標高差のある山の奥底まで水を染み込ませる水脈を造れば、山の持つ地熱で温泉が沸くって事だよ。一応、土と水のメイジって事で通すから可能なんだ」

元より、ユートが四系統の内土と水を表に出すと決めたのは、温泉を造る為でもあった。

山の麓に温泉と宿を作り、温泉に何かしらの付随効果を持たせれば、十分な収入を獲られると考えている。

「うん、既に色々と考えてるみたいだね？ ご褒美に上げるね」

「へ？」

渡されたのは、死んでしまっただけで見る事が叶わなかった【ゼロの使い魔】の新刊。

「じゃ、そろそろ行くよ。後、私は竜破斬や重破斬なんて使えないから」

そう言って、ユートが生前に使っていた携帯電話を投げて寄越してきた。

青褪めるユート。

どうやら、アプリケーションでパソコンを見れるヤツで、お気に入りになっていたアレを見られたらしい。

「と言うか、勝手に人の携帯を見ないで欲しい」

なのはが居なくなっただけ、ボソリと呟いた。

**第5話：我に秘策有り 内政を始めよう（後書き）**

ユートの同位体には、余り突っ込まないで下さい。

気にしたら負けなので……

次は温泉か、ヴァリエールか、どっちかになるかな？

第6話・ランクアップとカトレアの誕生会（前書き）

嘶は内政に入っていきますが、魔法も忘れられてはいません。

遂に原作キャラとの邂逅。

## 第6話：ランクアップとカトレアの誕生日

あの白い魔王様との邂逅から暫らく経つ。

ユートは手頃な場所を見付けて、水脈を通す作業を始めていた。

勿論、温泉を造る為に。

とはいえ、未だに土も水もドットランクでは作業の方は遅々として進まない。

同時進行で、カトレア嬢の誕生日に贈るプレゼントを製作していた。

出入りの商人から偶々手に入れた水晶の原石。

石英クォーツと呼ばれ、二酸化ケイ素（ $\text{SiO}_2$ ）が結晶して出来た鉱物。六角柱状の綺麗な自形結晶をなす事が多い。中でも特に無色透明な物を水晶と呼び、古くは玻璃と呼ばれた。

主要な造岩鉱物であり、花崗岩などの火成岩に多く含まれる。

ユートはこの原石を、無色透明の二酸化ケイ素結晶に錬金して、水晶に変えた。

更に、腕に傷を付けて血を流すと、血を水晶に掛けて錬金する。

水晶に血中の鉄分を錬金して、鉄イオン（ $\text{Fe}^{2+}$ ）に生成した上で結合した。

微量の含有で無色透明だった水晶が、紫色に発色する為に必要な血は少しだけ。

そこら辺の砂鉄を集めても良かったが、ユートは敢えてそうしたのだ。

血とは魔術的な意味合いも在ったから。

銀のチェーンを使い、白金の土台を用いた大人しめのデザインのペンダント。

当たり前だが、未だ錬金で銀や白金を造れないユートは、少し安めな鉱石を手に入れて錬金で形にした。

元々、その金属を含有した鉱石から抽出するだけであれば、温泉を造るのに使っていた技術を応用出来る。

二週間の格闘の末、完成を見たペンダント。

「で、出来たあああ！」

漸く完成した紫水晶のペンダント。

紫水晶の石言葉は【誠実・心の平和・高貴・覚醒・愛情】だ。

「(きつと、カトレアに……似合う……な)」

そう思いつつも、ユートは疲労と貧血と精神力切れによって、意識を手放す。

其処には、遣り遂げた漢の安らいだ表情が在った。

結局、丸一日を寝て過ごしてしまったユート。

その後、机に置いてあったペンダントを入れる物が要るなど考える。

完成した紫水晶のペンダントは、現代に有る様な装丁の箱を作り、その中へと仕舞う事にした。

木箱に、市販の宝石入れを組み合わせ作り、ペンダントを仕舞った後で模様付けした紙で装丁。

リボンを掛けて完成だ。

「これでよしっ！」

ユートは完成品を見て満足そうに微笑んだ。

再び温泉街予定地へと向かうと、温泉を造る為に水脈を山に通し始める。

「あれ？ 何だか楽に水脈を通せてるな……」

今までは水脈を通す為に、土系統による鍊金を使った上で、水を操作してきた。

どちらも重労働で、作業の速度は決して早いとは言えない。

それがどちらも早く感じるのだ。

「あ、もしかして？」

家に籠もって紫水晶のペンダントを造った際、血から鉄イオンを錬金したりしたから、これまでの温泉作りと合わせて水と土がラインにランクアップした様だ。

「はは、これは正に棚から牡丹餅だったよ」

これまで、それこそ倒れる寸前まで水脈の操作をしてきたユートだったが、此処に来て遂にペンダント造りで倒れてしまった。

精神力も魔力も筋肉同様に使えば使う程、どんどん鍛えられていくもの。

其処へ来て実際に倒れてしまった事で、身体が危機感を持って一気に許容量を上げてしまった。

これにより、ユートは意図せずラインに成ったのだ。

初めての、謂わば社交界デビューに浮かれてしまい、その切っ掛けのカトレアに贈る物に力を入れた結果、ユートは新たな力を手にしたのだ。

それに気を良くしたユートは、喜び勇んで温泉造りを頑張ったものだ。

それから更に少し時が経って、カトレアの誕生日。

両親に連れられ、ユートは窮屈な服に身を包んで領地であるド・オルニエールを出て、ラ・ヴァリエール領へと向かう。



ユートが馬車に揺られながら思う事は、舗装されていない道をこんな馬車で走るのは、乗っているだけでも疲れるという事実。

何れはサスペンションやら何やらで、馬車を補強したいなと考える。

それに、馬車が走る道にはアスファルトを敷くのも良さそうだ。

ユートは、頭に在る雑学の中からアスファルトはどうやって造るのか、思い出してみる。

本気でやるならば、自領で必要な所のみアスファルトを敷く。

街も雨で地面が泥濘む事が無くなるだろう。

まあ、やるならサリユートと要相談だ。

真逆、勝手にする訳にはいかないだろうし、反対されたら諦めねばなるまい。

それに、家臣から土メイジを借りる必要もある。

温泉は、水脈を通す知識の都合上1人でやっていた。

しかし全てを1人で出来るとも、やろうとも思っていない。

「（ま、取り敢えずはパーティーを愉しませて貰うかな？）」

背もたれに背中を預けて、少し眠る事にした。

「やあ、お久しぶりだね。ジェローム殿」

「お久しぶりにございますな、オルニエール夫妻」

老紳士は一礼して、オルニエール家の面々を迎えた。

ラ・ヴァリエールの執事を束ねる執事長、ジェロームは長年この家に仕えているのだ。

「では、これを」

ジェロームに渡されたのは封緘をされた封筒で、それはカトレアの誕生日パーティーの招待状。

サリユートとユリアナは、慣れた感じで屋敷へと入っていく。

ユートもまた、それに従ってラ・ヴァリエール邸へと入った。

初めての社交は、ユートにとって大変なものだ。

まずはホストであるラ・ヴァリエール公爵と、その妻の公爵夫人への挨拶。

「久しぶりですな、ヴァリエール公爵。公爵夫人」

「お久しぶりです」

「うむ、久しいな。オルニエール子爵に子爵夫人」

「本当に久しぶりですね、子爵殿。子爵夫人」

家格の低いサリユートと妻のユリアナが挨拶をして、それに応えるラ・ヴァリエール夫妻。

「ユート、公爵御夫妻にご挨拶をしなさい」

「はい、父上」

促され、後ろに控えていたユートが前に出ると、夫妻に頭を下げた礼をする。

「初めてお目に掛かります……私はユート・オガタ・ド・オルニエールと申します」

「うむ、しかし実は君に会うのは初めてではないのだよ。君が生まれた日に私は居たのだよ」

「え？」

サリユートを見ると、首肯した事からどうやら本当の事らしい。

「そうでしたか」

まあ、挨拶に間違いはないから問題も無かった。

次に、パーティーの主役のカトレアへの挨拶だ。

ハッキリ言つて、周囲の連中……公爵令嬢とお近付きになりたい貴族子弟が邪魔となっていた。

どうやら、カトレアもいい加減で疲れているらしい。

「（この頃は未だ病気も表立ってなかった様だな）」

彼女の病気が表立っていれば、そもそもパーティーなど行われな  
いだろう。

ユートは意を決する。

面倒はもうこの際、無視してしまおうと。

周りを取り囲む貴族子弟を掻き分け、カトレアの前に出てユートは  
挨拶をする。

当然、行き成り割り込まれた貴族子弟は渋い表情となり、眉根を顰  
めた。

ユート自身は知った事かとさっさと名乗る。

「初めまして、ミス・カトレア。お誕生日、おめでとございます。  
僕はド・オルニエール子爵家の嫡子、ユート・オガタ・ド・オルニ  
エールと言います」

名乗りを聞き、伯爵家以上の家柄の者は新興の家だと嘲笑し、同じ  
子爵家や男爵家の連中は邪魔者を見る眼で口元を歪めた。

そんな中で、カトレアは少しユートに近付いて、自分も挨拶を交わ  
す。

「初めまして、ミスタ・ユート。私はカトレア・イヴェット・ラ・

ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールです。今日は私の為に  
来て頂き、ありがとうございます」

某・ツンデレ虚無っ娘とは似ても似つかぬ笑顔を向けて、礼を言っ  
てくれた。

「それと、これを」

綺麗に包装した匣を渡す。

リボンを掛けられた包装を見て、自分への誕生日プレゼントだと理  
解したのだろう、カトレアは子首を傾げる仕草に微笑みを乗せて、  
口を開く。

「ありがとうございます、ミスタ・ユート」

「拙<sup>つたな</sup>い自作の代物で恐縮ですが、一時を貴女の身の引き立てとなる  
なら幸いです。それでは、僕はこれで失礼致します」

一礼し、その場を辞する。

因みに、カトレアがこの場でユートを名前で呼んだのは、向こうが  
名前で呼んで来たからだ。

ミス・ヴァリエールと呼ばれてばかりで、家の事しか視ていない他  
の貴族子弟と違う空気を持つ年下の少年に、カトレアは少しだけで  
はあるが興味を持った。

「（そう言えば、さっき彼は私をミス・カトレアと呼んでいたわね  
？）」

そんな軽い疑問と共に。

必然的に、カトレアの興味は先程渡された匣に移る。

少年がくれた匣。

「（自作……手作りという事ね）」

ちょっとはしたないと思っただが、包みをこの場で開いてみた。

包装紙の中身は木箱。

木箱の蓋を開けると、その中にはシルバーチェーンに白金の土台、紫色の宝石が慎ましやかに取付けられたペンダントが入っていた。

「まあ……」

何故か、魅入られてしまうペンダント。

まるで魅了の呪いでも掛けてあったかの様な、そんな錯覚を覚えた。

そうではないのは、全くと言って良い程に好きな魔力を感じなかったから判る。

それはカトレアの“勘”が告げていた。

それでも魅了されずにいらなかったのは、仕上げに血液を用いたからだろう。

造った本人は識らなかつた事だが、今のこのペンダントには【アダマス】程ではないが、高い圧力でユートの魔力が圧縮されて籠められている。

鉄イオンだけでなく、血中の魔力は全てアメジストに錬成される過程で封入されていた。

造った時にユートが思っていた“想い”と共に。

石は意思を持つ。

意思是石に反映される。

それは【アダマス】もそうだし、今のカトレアが首に掛けたアメジストもだ。

魔力を持って、魔力の主の意思を反映して……

それは一種の、血液魔術と宝石魔術。

普通の宝石に比べ、圧倒的な“存在感”を持つに至ったアメジストに、カトレアが目を奪われたのは当然だと云えた。

「（？ 何かしら、身体が軽くなった気がする？）」

カトレアがペンダントを首に掛けた瞬間、重苦しかった身体の負担が少しだったが軽減された気がする。

それがユートの意思。

ユートの祈り。

ユートがカトレアの病気を識るが故の、純粋な祈祷の力が働いていた。

同じ頃、父親のサリユートはヴァリエール公爵と歓談に花咲かせている。

「ほう、サリユートはもう息子に領地経営を任せているのか？」

「まあ、本人にやる気が有りましたし、能力も有る。真逆、未だ5歳の身空で紙の製法に辿り着くとは思いませんでしたよ」

「羨ましい限りだな。私の子供は娘ばかりが3人だ。愛らしいから嫌ではないのだが、やはり跡継ぎと言う事を考えると、息子も欲しかったな」

ヴァリエール公爵と話をするサリユートの話題は、専ら息子のユートの事だ。

「今は温泉とやらに填まっておりますな」

「温泉？ 何なのだその、温泉というのは」

このハルケギニアに、温泉の概念は無い。

貴族は風呂くらい入るが、よもや外で肌を曝した上で湯に浸かるなど、思考の埒外なのだろう。

サリユートは、ユートから受けた説明をその俛、公爵へと伝えた。



その説明に、少し眉根を寄せて顰めっ面になる公爵。

「わざわざ、外に出掛けてまで湯に浸かるのか？」

風呂なら邸に在るのだし、何も外まで出掛ける意味も肌を曝す意味も解らない。

「ユートが言うには、温泉というものは普通の水を沸かした湯と違い、みねらるとかを多分に含んでおり、色々と効能が有るとか」

「効能……とは？」

「確か、湯の成分次第ですが……美肌に良く、疲労の回復にも良い、神経痛、筋肉痛、関節痛、打ち身、慢性消化器病、痔疾、冷え性などにも効くとか」

「そ、そうなのか？」

流石に驚くヴァリエール公爵は、タラリと汗を流していた。

「やはり跡継ぎが居るといっのは良いな」

溜息を吐いてしまふ。

その頃、ド・オルニエールの跡継ぎ君は、ラ・ヴァリエール家の長

女と末娘に捕まっていた。

カトレアへの挨拶後、食事を摂っていたユートだったが、ユートの顔を知らなかった2人が現れ、長女の方が自分に挨拶をしないとは何事かと、因縁を付けて来たのだ。

「申し遅れました。私の名は、ユート・オガタ・ド・オルニエールと云います。ミズ・ヴァリエール」

一礼して名乗る。

「みず?」

ピンクブロンドの髪の毛に鳶色の瞳の小さな少女が、首を傾げて聞いた。

「ミズって何よ?」

金髪の、年齢的に胸が残念な瞳の鋭い少女が訊ねる。

「ああ、えと……男の場合は一律ミスタだけど、女性は未婚者がミス、既婚者がミセスと呼び方が変わりますよね? だから、僕はどちらも等しく呼ぶ事になっているんですよ」

ユートの説明に納得したのか、長女は眼鏡の位置を正して言う。

「成る程……」

男尊女卑のハルケギニアに於いて、女性蔑視は目に余るものがある。

まあ、一部に強い女性も存在しているが、所詮例外は例外に過ぎない。

だから、ユートは地球で行われる様になった統一された呼び方をしていた。

「まあ、良いわ。私の名前は、エレオノール・アルベルティーン・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエール。カトレアの姉よ。おちび、貴女も挨拶なさい！」

「は、はい！ エレオノールお姉様。ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールです。宜しくお願ひします」

エレオノールに促されて、ルイズもペコリと頭を下げた挨拶をした。

どうやら、エレオノールは手遅れ……基い、既にツンが入っている様だが、未だルイズは性格が柔らかい。

恐らくは、ルイズがエレオノールやカリィヌみたいなツンが入るのは、魔法が上手くいかずに親姉妹は云うに及ばず、メイド達使用人にまで蔑まれていると感じる様になった事で、性格が歪んで捻じ曲がった結果なのだろう。

素質自体は、カリィヌから受け継いでるのだろうが、カトレアの例が有るからには、一概にツンが入るとは限らない。

あんな、爆裂ツンデレ娘になってしまったのは、それなりの歴史があったと云う事だ。

そして、それはエレオノールも同じだろう。

カーリー又だつてそうだ。

【烈風の騎士姫】を紐解けば、それがよく解る。

十歳の、未だ少女だった頃のカーリー又は【臆病で負けず嫌い】な性格だった。

才覚は有り、姉さえ覚えていない風系統の浮遊を既に覚えていたくらいだ。

しかし、仮初めの“勇氣”を得てからは【負けず嫌い】の方が際立った。

貧乏貴族だとは云えども、ド・マイヤール家の名前を背負って、40エキユーという端金を旅費に王都へと向かう。

魔法衛士隊に入隊する……その目的の為に。

男尊女卑の世界だ。

女騎士は当時も珍しくなくなっていたが、魔法衛士隊にだけは女では入れない。

故に、男装をして……

14〜15にしては残念な大きさだった事もあって、上手く少年を演じていた。

だが、行き成り決闘騒ぎを起こした【負けず嫌い】な性格。

既にこの頃には、ツンが入っていたのだ。

サンドリオン、ナルシス、バツカスという三馬鹿と出逢い、エスタ  
ーシユ大公との確執。

様々な事が在った。

人に歴史有り。

カリーヌのキツイ性格も、時代からくる歪みだったのかも知れない。

それはエレオノールも同じなのだろう。

残念ながら、ずっと年上で原作でも余りその辺を描写されなかった  
エレオノールについては、ユートにも窺い知れないが……

そのツンが酷かったのか、バーガンディ伯爵とやらも逃げ出した。

「（アニメで観た限りで、固執する程じゃ無いと思っただけど……）」

失礼窮まりない事を思ってしまう。

エレオノールの事はユートにも知り様がないのだが、ルイズについ  
ては原作知識から理解も出来る。

頭脳は聡明であり、背や胸は残念だがカリーヌの若い頃そのものの  
美貌を持っていて、上級貴族のラ・ヴァリエール公爵家に生まれた  
アドバンテージ。

しかし、それら全てを貶めて余りあるマイナス要因。

正に、ハルケギニアという世界の在り方による弊害。

ただ一点……【魔法が使えないという】、それだけで貴族失格の烙印を捺された様なモノだった。

魔法を使えば爆発。

コモン・マジックで爆発。

系統魔法で爆発。

爆発、爆発、爆発、爆発！

家族も色々と調べただろうが、決して解明には至らなかった。

今は未だ、エレオノールも魔法学院にすら通ってはいないが、何れはアカデミーに入って研究者となる。

その主な理由が、カトレアの病の解明にその治療法の確立と、ルイズの魔法が爆発する理由と解決法の立案に在った。

貴族という枠組みでは厳しい父の公爵と、兎に角厳しい母のキャリア。又。

母の【負けず嫌い】によるツンを受け継ぐ、上の姉であるエレオノール。

家族の中でルイズに優しくかったのは、【ちい姉様】のカトレアだけ。

カトレアからは見放されたと思い込み、それが故に使用人にも莫迦にされて蔑まれていると感じたルイズ。

下手に聡明だっただけに、変な疎外感を蔑みに感じたのだろうか？

彼女に残ったのは、間違った貴族のプライド（驕り）だけだった。

ユートは思う。

「（世界の都合で歪んでしまうのは、ルイズだけじゃないしな。だったら、取り敢えずはルイズだけでも何とか出来ないか？）」

#### 【原作介入】

なのは（神）が言っていた訳だが、存外やってみる価値は有るのかも知れない。

世界の価値観に踊らされている者は、原作キャラの中に沢山居るだろうし、名前も出ないキャラだって世界の歪みの犠牲者が幾らでも居る。

平民蔑視もその一つだ。

歪んだ者が、更に歪みを生んでいく悪循環。

「（何処かで断ち切らないとな。純粹にこの世界の者じゃない僕は、歪みが見えているし原作知識も在る。幸い、立場も貴族だし）」

平民では難しいどころか、不可能に近い。

全てを上手く利用すれば、或いはやれるかも知れないと考えて、エ  
レオノールとルイズの2人と話しながらも、マルチタスクで算段を  
練り始めるユートだった。



## 第6話・ランクアップとカトレアの誕生会（後書き）

本作品は、主人公のユートの成長などを主眼に、ゼロの使い魔の世界で動いていく噺です。

アンチや肯定は程々です。

第7話：カトレアの想いとスレイヤーズ魔法（前書き）

完成しました。

## 第7話：カトレアの想いとスレイヤーズ魔法

未だに親達は歓談を続けていた。

聞けば聞く程に、跡継ぎの存在が欲しいと感じる公爵だったが、流石に無い物ねだりは出来ないし、妻であるカーリーヌが悪い訳でもない為、溜息を吐く。

製紙法の確立に、娯楽小説の執筆、印刷技術の獲得、温泉事業。

一つ一つは小さいが、此等を全て結集すれば可成りの上がりも期待出来る。

ヴァリエール公爵は、上がりがどうのこののよりも、ソレを考えて実行したのがド・オルニエール家の跡取り息子であるという事実、それが羨ましい。

「ふむ。いつその事、上か下の何れかを彼に嫁がせるのもアリか？」

有力候補は一番下で、どっち道何処かに嫁に行く筈のルイズだろう。

嫡子であるユートの婿入りはあり得ないし、順当にいけばエレオノールは婿を迎える立場だから、嫁に出すのもどうか……

まあ、エレオノールが嫁に行く場合はルイズが婿を取って、ラ・ヴァリエールを継がせれば良い。

「駄目ですっ！」

「うむ、駄目……って？」

声が出た方を振り返って見れば、其処にはカトレアの姿が在った。

その表情は、何処か焦った様子が見て取れる。

「カトレア？」

訝しむ公爵の言葉を聞き、思わず両手で口元を押さえてしまう。

自分は何を言っているのかというような、そんな顔をしていた。

「カトレア、何故駄目なのかね？」

公爵が訊ねると、カトレアは戸惑いと共に視線を泳がせて顔を俯かせる。

挙動不審なカトレアを見て公爵も戸惑うが、首に掛けられたペンダントに惹かれて目を向けた。

「カトレア、今日のお前の胸元を飾る装飾はそれではなかったと思うが、どうしたんだね？」

「これは、ユート君……ミスタ・オルニエールから戴いた物です」

「ほう、我が息子から」

「え？」

カトレアは話の流れから、考えてはいたがやっぱりかと思った。

「申し遅れましたな、ミス・カトレア。私は、サリユート・シュヴァリエ・ド・オガタ・ド・オルニエール……ユートの父ですよ」

「まあ、シュヴァリエ……子爵様なのに勲爵士の名も戴いておられるんですね」

「疎も、代々のオガタ家は勲爵士を戴く事で、細々と貴族の名前を維持して来た家系ですからな」

勲爵士、騎士侯、シュヴァリエなど呼び方は様々にあるのだが、貴族の爵位としては最下級。

しかし、この爵位は実力が認められなければ、国から下肢される事はない。

オガタ家は少し特殊な事情を持っており、公職に就くでなく、領地を持つでもない名ばかりの貴族だった。

貴族の名前も、初代から連綿と実力を示して、国から勲爵士の位を戴く事により受け継いで来たのだ。

勲爵士は、飽く迄もそれに相応しい実力を示した者に与えられる称号故に、一代限りの名前。

だが、オガタ家は二代目も実力を示して勲爵士を戴いて名を残し、三代目以降もそうやって勲爵士として、貴族を続けていた。

それに変化があったのが、サリユートの代。

サリユートも先祖に倣い、若い頃から実力を付けていき、そんな時にサンドリオン達と出逢う。

勿論、これは神の意図した事であり、偶然などではあり得ないのだが……

神ならぬサリユート達では気付く筈もない。

結果、本来の歴史であれば原典の開始から9年前……才人がド・オルニエル領をアンリエッタから下肢される10年前には、領主が死亡して跡継ぎも無かった領地は、王領として召し上げられてしまい、老人ばかりの駄目領地となる道を歩む筈だったが、サリユートが30年程前にド・オルニエル領を下肢される事になって、そこから辺の歴史が変化していた。

サリユートの領地改革が、無事に成功を納めた事もあって、活気に溢れている。

当然、年間の税収も大幅に上向いているのだ。

ラ・アウローラ領の長女、ユリアナを娶り小さな土地を併合した結果、当初だと30（約10km）アルパン程度の領地が倍の60アルパン（約20km）にまで膨れ上がっている。

それでも僅か20km四方の土地など、領地として大した広さとは言えないが。

サリユートのした事は王城の方にも話が行っているのだが、法衣貴族達は嫉妬するばかりで具体的な政策を出す訳でもない。

領地持ちの貴族も、心無い貴族はサリユートを新興の貴族だと蔑み、ラ・ヴァリエール家など一部の貴族は、新興のこの家を各方面から支えている。

そして、カトレアは父親が関係している事で、昔からド・オルニエール家については識っていた。

だからこそ、七歳程年が下の少年がどんな子なのか、逢うのを楽しみにしていたのだ。

最初に見た時は、誰なのか判らなかった。

名乗られて、漸く逢えたと喜んだ。

「（なのに彼は直ぐに行ってしまった、エレオノール姉様とルイズの2人とお話ししている）」

きっと周囲に遠慮したか、或いは面倒事はゴメンだと離れたのか。

周囲が漸く静かになって、自分も会話に加わろうと思って近付いてみると、父親とサリユートが会話をしていた。

内容は跡継ぎに関して。

父のヴァリエール公爵が、跡継ぎとなれる子供が居ない事を寂しいと思っていたのは知っている。

だからそんな会話が自然と出たのだろうが、聞き逃せない話になった。

「ふむ。いつその事、上か下の何れかを彼に嫁がせるのもアリか？」  
確かにそれなら、公爵にとってはユートが義理の息子だが、病気の事もあるのだから自分の事は考慮には入っていない。

自分の自慢話くらいしか能の無い、カトレアを取り巻く貴族の子弟達。

それに比べ、ユートは何処か違う。

まるで別の世界にその身を置いている様な、とても気になる存在。

カトレアは思わず叫ぶ。

「駄目ですっ！」

自分でも訳が解らない。

噂程度にしか識らなかつた年下の少年。

まだ碌に話をした事も無い出会ったばかりで、自分の心に楔を打った彼。

自分自身にも理解が及ばない感情は、何故か焦燥感で充たされている。

今、此処で何かを言わなければ、なし崩し的にルイズ辺りが婚約者に成りかねない勢いが在った。



「（解らない。初めて会った年下の彼に、私は何を求めているの？）」

それは少なからず、彼の血を与えられたアメジストの影響も在ったのだろう。

そして、欠落者として得た力が感じたのだ。

カトレアの生来の勘の良さは、生まれ付いての生命の欠落者として、代わりに得た能力。

それが、アメジストにより増幅されて、カトレアの心に影響を与えていた。

公爵達はカトレアから何かを感じ取ったのか、話しは此処までだと打ち切る。

其処へ、折りが良いのか悪いのか？ ユートがルイズとエレオノールを伴い戻って来た。

「あれえ？ 父上、母上、ヴァリエール公爵様、公爵夫人にミズ・カトレア？」

「む、ユート……と、それにエレオノール嬢、ルイズ嬢……」

ユートの声に振り返ると、サリユートは隣を歩いているエレオノールとルイズに気付く。

「エレオノール、ルイズも……ユート君と一緒にだったのか」

「ええ、お父様。彼は中々の博識で、有意義な時間を過ごせましたわ」

エレオノールがヴァリエール公爵に、笑顔を向けて応えた。

「そういえばユート君」

「何でしょう、ヴァリエール公爵様」

「堅苦しいな、名で呼ぶ事を赦そう」

「え？ でも……」

流石に戸惑う。

心の内で、ヴァリエール公爵は『何れは身内になるやも知れぬしな』と、考えていたりする。

カトレアは、それを正しく感じ取った。

普段の父は、親バカのきらいがあるのだが、友人の息子という事を差し引いて、名前を赦すなんてあり得ない話だ。

「（先程の婚約とかは、本気なのかも……）」

ユート自身未だ五歳という幼さだし、最年少でルイズは四歳だ。

婚約話しが出るのは、まださきだろう。

だが、公爵が本気で考えているのは確か。

カトレアは、胸の埋に何か黒いモノが蟠るのを感じていた。

「それでは……失礼ながらピエール様と呼ばせて頂きます」

「うむ」

ヴァリエール公爵は、満足そうに頷く。

「それでは、ピエール様。先程の続きですが、僕に何のお話でしょうか？」

「ああ、サリユートから聞いたのだがな。ユート君は魔法を上手く使えるとか。今はどんな具合かな？」

「はい。一応、父上と母上の系統を継いでおります。先日、土と水がラインとなりました」

「何と、その年でラインになったと云うのかね？」

「はい」

公爵の驚愕も当然だ。

普通のハルケギニアの人間だと、習い始めて直ぐランクが上がる事はまず無い。

ユートがこんなに早い時期でラインと成ったのは、神より与えられた能力と前世の経験値。

それに、毎日の様に魔法を倒れるギリギリまで精神力を使い、アニメジスト製作で遂には倒れた事で、許容量キャパシティが引き上げられたのと、祈りで精神が昂揚してトランス状態になったのが原因だ。

風と火も、直ぐにラインに上がるだろう。

「ふむ、是非とも見てみたいものだな」

「公爵、本日は我らは屋敷に逗留をする予定ですし、パーティーが終了後に何かやらせてみますか？」

「おお、サリユート。それは良いな」

「（いや、父上。せめて確認くらいしましょうよ）」

心の中で悲鳴を上げる。

「それで良いかね？」

「判りました。精一杯やらせて頂きますピエール様」

アニメでは親バカが目立ったものの、中々に常識的でユートもホッとなる。

カトレアの誕生会も終わって、夜の帳が降りる中庭にヴァリエール家とオルニエール家の面々が集合。

ヴァリエール家の執事とメイドを総括するジエロームに頼み、大きな石を持ってきて貰った。

ユートがこれから見せるのは、オリジナルスペル。

本来なら、スクウェアとなる必要があるのだが、これから見せる魔法は其処までの必要は無い。

「それでは、少し暗いので明かりを点けますね？」

そう言っつて呪文を唱えた。

「火より生まれし輝く光、我が手に集いて力となれ。ライティング！」

光球が生まれ、辺りを昼間の如く照らす。

スレイヤーズの魔法の中でも簡単な、光を生む魔法であるライティング。

コモン・マジックにライトがある為、ちょっと光量の強いライトで通る。

事実、公爵達もライトなのだど誤解したのか、普通にしていた。

「貴方、指輪を杖に使っているのね？」

「はい、カリーヌ様」

目敏く指摘してきた公爵夫人に、ユートは首肯する。

因みに、ユートは彼女からも公爵と同様に名前で呼ぶ事を赦されていた。

「では、始めます」

パンツ！ と手を合わせると、詠唱を開始する。

詠唱はスレイヤーズの魔法の呪文を、此方側のルーンワーズに併せる形。

頭の中ではスレイヤーズの詠唱で想像、構築する。

「全ての命を育みし母なりし存在無限の大地。身体と理を循環し、我が手に集いて力と成せ！」

オリジナルの詠唱。

モデルは鋼の錬金術師。

手と手を合わせ、魔力を内で循環させる。

使うのは即ち……

「錬成！」

精神力を媒介に、魔力を頭の中の術式に従って構成して、大石に叩き込む。

やった事は【錬金】と変わらないが、ユートの【錬成】は精神力の

消費が少なくて済むし、可成りダイレクトに想像力を顕せる。

結果、大石は鉄へと姿を変えていた。

素粒子のレベルまで石を分解し、再構成する。

その際、術式に従い石の元素をFeに変換するのだ。

原作でも、シュヴルーズが石ころを真鍮に換えたし、ギーシュが土から青銅を創れる様に、ユートも石を鉄へと創り換える。

魔法による、石から鉄への変化に驚かれた。

石の質量をその俛、鉄の質量に変換は出来ない上に、錬成の際は不純物を極力排除した為、基より鉄は小さくなる。

それでも、これだけ純度の高い鉄なら申し分ない。

エレオノールはそれ以外で驚愕していた。

ユートは、ライティングを保持した俛で別の魔法を発動させている。

詰まりユートは、魔法を二つ同時に発動可能。

これに関しては、カリィヌ夫人とカトレアも気が付いていた。

ヴァリエール公爵とサリユートは、鉄を作ったという結果のみに目が往っている様だが……

ある意味で底知れない実力を示してしまったが、その事にユートは

全く気が付いてはいない。

「ユート殿、貴方は二つの魔法を同時に扱えるのですか？」

「は？ はあ、使えます」

だからこそ、カリィヌ夫人に指摘を受けても理解が及ばなかった。

「あ、ああ貴方、その年齢でこれだけ高度な術を使えて、更に二つ同時に魔法を起動出来るなんて!？」

信じ難いのか、エレオノールは吃りながら叫ぶ。

今年で15歳の彼女でも、あんな事は不可能。

10歳も年下の少年の腕に吃驚させられたのだ。

「ふむ。どうやらユート君は努力家の上に才能もあるのだね。やはり……」

公爵は『欲しいな』と思うのだった。

ヴァリエール家の別邸に用意された部屋で、ユートは精神力集中している。

精神力そのものを、体内から体外に抽出するイメージで、気功の様



に……

詠唱をする。

「光よ、我が手に集いて閃光となり、深遠なる闇を打ち払え……」

両手の内に輝き、発生した白いエネルギー。

呪文詠唱により、精神力は魔力エネルギーに転換されている。

エルメキアランス  
「烈閃槍ツ！」

力ある言葉により、解放されたエネルギーが光の矢となって放たれる。

勿論、それは只の精神エネルギーに過ぎない為、物理的な破壊は行われない。

また、精神系の精霊魔法はコモン・マジック扱いで、マジックミサイルやブレイドの変形という事にして使う予定だ。

「成功……かな？」

### 【烈閃槍】

初歩的な精神系精霊魔法。光の様な矢が、アストラルサイドに直接作用する。

「うっっ、思った通りやれたな！」

魔法がイメージだというなら、精神力を直接抽出して放つ魔法だつて使えるとは思っていた。

その思惑は見事に当たり。

「これに土を掛け合わせれば……」

ユートはダガーを鞘から抜き放ち、再び呪文の詠唱を始める。

「久遠と無限を揺蕩いし、全ての心の源よ、我に従い力となれ。魔<sup>アス</sup>皇<sup>トラル・ヴァイン</sup>靈<sup>トラル・ヴァイン</sup>斬！」

力ある言葉と共に、魔法の効果が顕れる。

汎用魔法<sup>コモン・マジック</sup>に土の系統を合わせる事で、イメージ的には硬化と精神力を混ぜる心算で魔法を使った。

#### 【魔皇靈斬】

精神系精霊魔法。

ゼルガデイス・グレイワーズがよく使用していた魔法であり、剣の切れ味を上げると同時にアストラルサイドにも干渉する魔法。

ユートは魔法を掛け、色が変化したダガーを振るってみる。

試し切りは流石に出来ないが、まあ成功だろう。

「ま、こんな感じかな？」

満足そうに笑う。

さて、スレイヤーズの魔法を修得したいというのは、理解出来るとして。

魔族が存在しないこの世界に於いて、精神系精霊魔法を覚える意味があるのか？

実はこれが例外とある。

自身が一度死んだから解る事だが、世界にはゴーストだって存在するし、ゴーレムは精神力を媒介に動かしている為、烈閃槍なんかを放って中枢を破壊してしまえば割と簡単に潰してしまう事が出来る…… 筈だ。

理論上は。

「ま、やった事はないから判らないけどね」

ゴーレムを誰かに造って貰って、実際に試し切りとか試し撃ちをしたい処だ。

「うーん。カリィ又様に偏在を出して貰って試し切り……」

言ってみて青褪める。

「駄目だな、とっても悪い予感しかしない」

そんな事をカリィ又夫人に頼もうものなら、思い切りカッタートルネードの連発で半殺しにされかねない。

というより、きつと訓練と云う名の“いぢめ”フラグが間違いなく

立つ。

ブルリと、背筋を冷たい何かが奔って震える。

「うん、ヤメとこ……」

へタレた。

「さて、じゃあ次は拳用の魔法を」

三度、力を集中していく。

「全ての心の源よ、尽きる事無き蒼き炎よ、我が魂の内に眠りしその力、我が身に宿りて深淵なる闇を撃ち払え……」

拳を握り締め、力ある言葉を紡ぐ。

ヴァイス・ファフンク  
「**霊王結魔弾**！」

【**霊王結魔弾**】

アメリカ・ウィル・テスラ・セイルーンがよく使っていた魔法で、拳に魔皇靈斬と同じタイプの強化魔法。

「取り敢えず、こんなものかな」

クラリ……

「う、精神力が尽きた」

何しろ、直接的に精神力を抽出して使っているのだ。

魔力の系統変換より遥かに精神力を消費する。

たったの三つ、魔法を使っただけでこれだけ消耗するのも無理からぬ事。

ユートはフラフラとベッドへと向かい、バツタリと倒れ伏してしま  
う。

そして翌朝、メイドさんに起こされたユートはグラつく頭をハツキ  
りさせる為、魔法を使う。

アクア・クリエイト  
「浄結水」

の、名を冠したコンデンセイション（凝縮）と全く変わらない訳だ  
が。

取り敢えず、一般人でも使える魔法なだけに、大した精神力も消費  
せずに使う事が出来た。

浄結水で出した水で顔を洗うと、食堂へと向かう。

ユートは、着々とスレイヤーズ系の魔法を修得しつつあった。

食堂ではヴァリエール家とオルニエル家、両家による朝餉を楽し  
む。

「ユート君、来年はルイズにも魔法を教えようと思うのだが、良ければ君の魔法の使い方など教えてやってはくれないか？」

食後に、紅茶を飲みながらそんな無謀な事を公爵が言ってきた。

ルイズは虚無系統。

教えた処で、爆発するだけだと判っているユートは、どうしたものか思案する。

ルイズの性格自体の矯正は難しいが、上手くやったら柔らかくなるかも知れないと考えると、やる価値もあるだろう。

ユートはそう判断した。

「へ？ ああ、構いませんが……」

少し間抜けな返事になったものの、ヴァリエール公爵は満足気に頷いている。

「そうですね、では代わりにユート殿が10歳になったら、このわたくしが直々に訓練を付けて上げましょう」

「（要りませんよ、巨大なお世話ですっ！）」

とは、流石に本人を前にして言えないユートだった。

「ユート君、またお会いしましょうね？」

カトリアは微笑みながら、ユートを送り出す。

エレオノールとルイズも笑顔で送り出してくれた。

こうして、ラ・ヴァリエール家での出来事は終わる。

「（ユート君……）」

1人の少女に、一つの楔を打ち込んで。

第7話：カトレアの想いとスレイヤーズ魔法（後書き）

まあ、スレイヤーズ魔法をどんな呪文で使っているとか、細かい突っ込みは無しの方向性で。



第8話・あーぱー（アンリエッタ）姫との出逢い（前書き）

アンリエッタ姫登場。

ユートも彼女にはあまり関わりたくはなかった。

## 第8話：あーばー（アンリエッタ）姫との出逢い

ユートは現在、王城の廊下を歩いている。

勿論、王城というのは自国トリステインは王都トリスタニアにある宮殿の事だ。

決してリュティスやウインドボナやロンディニウムではない。

だからこそ、現在ユートの隣を歩いているのはユートと同じ年頃の少女。

肩の上で切り揃えられた栗色の髪の毛、南の海のように鮮やかな青い瞳で、白く透明感漂う肌。

薄い桃色のドレスを着て、小さなティアラを頭に載せた【アンリエッタ・ド・トリステイン】

ユートが属するトリステイン王国のお姫様だ。

容姿“だけ”を観たならば成る程、トリステインの一輪の花と呼ぶに相応しい。

天は二物を与えず。

幾らトリステインの一輪の花だとして、頭の中までお花畑でなくないものを。

ユート曰く、あーぱー姫。

「（くっ！ 必要があったとはいえ、何でこんな事になったんだ？）

」

ユートは眉根を顰めながらアンリエッタを見た。

彼女と“お友達”にはなりたくはない。

それなのに何故？

何故、自分<sup>ユート</sup>は彼女<sup>アンリエッタ</sup>の隣を歩いているのか？

ユートは一つ、コツソリと溜息を吐いた。

愉しそうに歩くアンリエッタだが、ユートとしては困った事態。

正直に言えば、演技であれ素であれ【お友達】を平然と戦地に送り込む様な人間とは前述した通り、絶対に仲良くはなりたくない。

下手をすれば【お友達】という名を盾に、何をやらされるか知れたものじゃないのだから。

何しろ【お友達】のルイズを危険な戦地へと、しかもヴァリエール公爵には何の報せもしない俣に、密命として赴かせるのだ。

自分はきつとあの辺には関われないだろうし、どうやってもあのイベントは変えられない。

あーぱーの理由が解らなければ、性格の改変も不可能だろう。

「（まあ、恐らくは王家の者としての重圧から逃げてるだけかな）」  
王家に生まれなければ良かったかと思っっているのだろうが、それは  
とんでもない甘えでしかない。

当然だ。

所詮は、隣の芝生とは青いもの。

平民は自由だとか、王族は縛られているだとか巫山戯るなとユート  
は言いたい。

権利の行使者は、その対価として義務を負う。

あーばー姫の言っている事は、権利は欲しいが義務は負いたくない  
という事だ。

王女は平民になれないし、平民は王女になれない。

己の立場で出来る事をやって、成せる事を成す。

人間はそうして生きていくしかないと言うのに、ソレを彼女は頑無  
視している。

「（王族なんてみんなそんな感じだし、ハルケギニアの歪みとは関  
係ないな）」

本当に、どうしてこうなったのやら？

ユートは再び嘆息した。

それは一昨日の事……

「ユート、王城に行くぞ」

「え？ あ、うん。行ってらっしゃい父上」

「何を惚けた事を言ってるんだ？ お前も行くんだから支度をしなさい」

サリユートの言葉を聞き、タップリ10秒は固まってしまつた。

「え……と、何で？」

「ユートが考案した製紙法で、可成り紙のストックが出来たからな。王家に少し献上して、紙の利権の約束を戴きに……な」

成る程、サリユートの言っている事は正しい。

せつかくの事業。

紙を市場に流すのならば、他の貴族連中に掻つ攫われる前に、王家から利権関係をハッキリ約束して貰った方が良い。

連中ときたら、そういう嗅覚だけは無駄に鋭い。

「ただ……だ。」

「僕も行かなきゃ駄目なのかな？」

紙に関しては、既に任せた心算だったのだが。

だが、サリユートは言う。

「何を言っている。製紙法を考案したのはユートだ。献上の品について、陛下にご説明申し上げるのは考案者であるお前に決まっているだろう。」

そこら辺も引つ括めて任せた心算のユートとしては、正に青天の霹靂。

「さあ、支度せよ！」

サリユートは、ユートに有無も言わず反論も赦さずに行ってしまった。

暫らくユートは茫然自失となって、廊下に立ち尽くしていたという。

正気に返ると馬車に乗り、王宮に向かった。

道中、ユートがサリユートに道路舗装の話をしてみると、割りとき良い感触で聞いて貰えた事に驚く。

「父上、本当に宜しいのですか？」

「うむ、アスファルトとか言ったか？ 荒れた道を往くよりは良からう」

「判りました。温泉の開発が終わりましたら、温泉への道から街までの道を実験的に舗装してみます」

こうして、新しく道路工事も行っ事になった。

「（やっぱり1人じゃ限界だな。人員が欲しいか）」

【例の計画】を少し前倒しにしようと思える。

丁度良く、国王陛下に謁見出来る事だし。

ユートはアーパ姫と出逢うデメリットと、計画の為に国王陛下に会うメリットを天秤に掛ける。

1日掛けて、トリスタニアまでやって来た。

謁見の間と呼ばれ、ユートはサリュートの後ろを付いていく形で扉を潜る。

謁見の間には、玉座に国王陛下が座っており、その隣にはマリアンヌ王妃。

摂政のマザリーニ枢機卿が陛下の右斜め前に立つ。

ファンタジー小説ならば、宮廷魔術師の立ち位置。

とても名譽な位置だ。

なのに、12年後の原作時にはガリガリに痩せこけ、鳥の骨とヴァリエール公爵からも揶揄される。

恐らくは、ユートが知る限りトリスティーン一の忠臣。

ゲルマニア皇帝アルブレヒト三世との婚姻を進めて、何とか同盟を結ぼうとしたのもトリスティーンを護る為に必要な一手。

実際、タルブ戦の後で必要が無くなれば、ゲルマニアとの政略結婚は白紙に戻している。

他には特に誰も居ない。

珍しい事だが、案外陛下が他の者を下げたのだろう。

「この度は、陛下と王妃様にご尊顔の拝謁の栄誉を賜りまして、真に恐悦至極に存じます」

サリユートが膝を突いて、頭を下げる。

ユートもそれに倣って膝を突いた。

「良い、わざわざ他の者を下げたのだ。堅苦しいのはよせ、サリユートよ」

「はっ、陛下」

サリユートが除おもむきに顔を上げると、人の悪そうな笑みをうかべる国王の姿が在った。



身分の差は有れど、知らない仲ではない。

これは、サリユートに対する信頼の現れだ。

「それで？ 此度の謁見はどのような理由だ？」

「はい、最近になり我が領内では製紙法を確立致しまして、大量生産に漕ぎ付けました」

「ほう？」

「本日は出来ました紙を、王宮へ献上をしに参った次第でございます」

千枚一組の紙の束を、全部で五つ積み上げた綺麗な棚に載せて、国王陛下の前に差し出した。

マザリー二枢機卿は差し出された紙を、国王の許まで持っていく。

試しに中身を確認したが、東方から流れてきたとされる紙と遜色なく上質な紙。

しかも五千枚をポンと献上してきたからには、既に量産体制が整っている上に、在庫も可成り溜め込んでいると考えられる。

実際、領民達を雇って量産を行っていた。

流石は領地経営30年以上のベテラン。

サリュートの政策は、息子のユートにも見習うべき処が多々有った。領内では紙も普及しつつあって、其処から派生した新しい娯楽としてライトノベルを売り出している。

印刷は現状で魔法を主に使っているが、その内に完全な技術として確立する予定だった。

小説はユートの持っているライトノベルから、ある程度の嘶を引っ張りだしているが、全部をパクリで済ます心算は無い。

領内の中で、嘶を創れそうな人間を平民、メイジには拘らず募集を掛けている。

紙が普及しているから可能な事で、ハルケギニア初の出版社……【オルニエール出版社】を設立。

社長には、総責任者としてユリアナを据えた。

優秀作には賞金1000エキューが出る為、数多くの嘶が寄せられている。

当然だが、本になった暁には売り上げの一部が支払われる事になり、何れはこれで稼ぐプロの小説家が出て来るだろう。

パクリは飽く迄も、その日までの繋ぎとどんな嘶が在るのかを見せるお手本だ。

取り敢えず、ゼロの使い魔はヤバいのでスレイヤーズなどを、ロマリアから見て当たり障り無い様に手直した上で書いていた。

独自に領内に限り、事業展開をしているのだが、他領には伝えていない。

10年もすれば、芽の出る事業を独占する為だ。

王宮へはその辺も踏まえて報告しており、サリユートはユートの手柄として包み隠さず話してしまった。

国王はユートに興味を持ったのか、ユートに話し掛けてくる。

「そなたが、サリユートとユリアナの息子。ド・オルニエール子爵領の嫡子か」

「初めてお目に掛かります……先程、父上より紹介に上がりました。ユート・オガタ・オルニエールと申します。陛下と王妃様に於いてれましては、ご尊顔を拝謁奉り、恐悦至極に存じます」

サリユートを真似て、挨拶を試してみた。

「良い、面を上げよ」

ユートは顔を上げ、真っ直ぐに玉座の2人を見る。

そして、自分が始めた（事にされた）事業と、将来的な予定などを話した。

その際、一つのお願い事をする。

それは断られても構わない事だ。

今回は断られても、原作の開始数年前までに行えれば良いと思っ  
ていたから。

杞憂だったが。

話してみた処、やってみるが良いと言って目的の物をアツサリとく  
れた。

この辺は意外と云えば意外で、事は他国の貴族の不祥事にすら発展  
し、国際問題にすらなると思うからだ。

「（もし駄目なら切り捨て御免って事だな）」

“目的の物”をマザリーニ枢機卿から受け取り、そう考えた。

「時に、ユートよ」

「はっ！」

「此処からは、サリユートとマザリーニを交えた大人の話し合いが  
あるのだ」

「……？」

席を外せと、言外に言っているのだろうか？

「その間、我が娘アンリエッタの話し相手をしてはくれぬか？」

「ハア？」

「（完全にしてやられた）」

アレを貰った立場上、断る選択肢などある筈も無い。

只でさえ、臣下の立場では断れないのだから。

『初めまして』から『お城を案内して差し上げます』と言われ、現在に至る。

正直、頭を抱えたい。

あーぱー姫とは、出来得る限り知り合いたく無かったというのに。

現実には……

「まあ、ド・オルニエールではこのような読み物が流行っているのですね」

万が一の説明資料として、ユートが用意していた小説を、アンリエッタに見せていた。

広い王宮とはいえ、いい加減に観るモノも無くなり、お茶会にしようとおーぱー姫が提案してきたのだ。

何と、お茶会にはマリアンヌ王妃も巻き込んで行われている。

「（い、居心地が悪い）」

将来のあーばー姫とニート太后とのお茶会、気分良くとはいかない。しかし、マリアンヌ王妃は【烈風の騎士姫】に於いては、女のカリナーでさえ、ドキリとする容貌だったと云うだけあって、年齢を感じさせない美しさだ。

その容姿を受け継いで生まれたアンリエッタも、当然ながらレベルが高い。

ユートは、母子揃って何故に将来はアレなのか、理解に苦しんだ。

ユートがアンリエッタ母子とのお茶会をしていた頃、サリユートと国王は執務室で話を詰めている。

本来なら、この手の話には高等法院が横槍を入れてくるのだが、今回は国王による鶴の一言で決まった。

高等法院は売官制により官職を購入した法衣貴族により構成されている。

通常の司法権限だけでなく、勅令や法令の登記や国王に建言する立法的行政的権限も有しており、劇場で行われる歌劇や文学作品などの検閲、街の市場や各商店などの取り締まりをも行う機関である。王国に於いては可成りの重要機関である為、大きな権限を有して政策を巡り貴族階級の特権を擁護する事で、王政府と意見対立する事さえある。

また、法衣貴族とは領地を持っている貴族とは違い、王国の官僚となつて仕事に従事する貴族の事。

彼のダングルテールの悲劇を引き起こした張本人の、現・高等法院長リツシュモンもその1人だ。

だからこそ、領地貴族の既得権についてはとやかく口を挿んで来る。

利権、既得権、とかく金に薄汚いが故に。

「サリユート、お主の跡取りは中々に優秀じゃな」

「いえ、それ程では」

「わしがアルビオンより、このトリスティンに婿入りして随分立つ。そなたに彼の地を割譲したは、わしの信賴の証よ」

「……は」

ド・オルニエール領は元来は王国の直轄地となる予定であつたが、前の領主に子がなかつた事から、早々にサリユートをねじ込んだ。

前の領主には十分な年金、王都での住む場所の提供をして、退いて貰つた。

その俣、サリユートは子爵としてド・オルニエール領を割譲される。

そして、それを以てアウローラ侯爵の長女のユリアナと結婚したの

だ。

因みに、前領主は歳で病に臥しており、あと1〜2年で没するらしい。

「サリユートよ、良ければアンリエッタとユートを妻合わせてみるか？」

「御戯れを。ウチのユートは“オガタ”の跡継ぎで、アンリエッタ様はトリステインの跡継ぎ」

跡継ぎ同士で妻合わせる事は、普通しない。

況してや……

「新興の我が家の血筋を、トリステインに入れるのは不可能ですよ。高等法院も黙っておりますまい」

「ふっ、そうだな。許せ」

ハルケギニアは、平民は疎か王侯貴族さえ理想も夢も語れない世界だ。

在るのは只、驕りと嘲りと汚職。

それがハルケギニアの貴族社会だった。

戯れはこの程度にし、現実的な話しに移行する。

製紙法の既得権を許可し、印刷や製本を行う出版社をド・オルニエ



ールに建てる事の許可証を出す。

完全に後付けの許可だ。

勿論、其処には温泉の既得権や街から温泉までの道路を整備する許可、更に小説の王都での流通と既得権の許可。

ド・オルニエル領に帰ったなら、様々な書類仕事が行っている事にさめざめと涙した。

「処で陛下、ユートに与えた許可ですが……良ろしかったですか？」

「構うまいよ。あのような大胆不敵な事は、アンリエッタには出来まいしな」

自分の代で出来る最後の事だと考え、ゴーサインをだしたのだ。

下手を打てば国際問題となるが、果たしてユートに交渉を成功させる事が出来るかどうか？

実は結構、楽しみにしている国王。

可成り分の悪い賭け。

そして、大きな期待。

ユートはブルリと、背筋に冷たいモノが奔るのを感じた。

「な、何だ？」

「どうかしましたか？」

アンリエッタが小首を傾げて訊ねる。

「あ、いや。何でも……」

ユートは不可思議な感覚に戸惑った。

「あら、アナタ」

マリアンヌがユートの後ろを見て言う。

ユートが振り返ると、確かに国王が居る。

父のサリユートと共に。

「父上、話し合いは終わりましたか？」

「ああ。用事も済んだし、帰るぞユート」

「まあ、待てサリユート。せっかくだし、わしらも茶を呼ばれようではないか」

国王の御言葉で、ある意味で豪華絢爛なお茶会となってしまうた。

それから結局は一晩泊まる事になり、ユートはラ・ヴァリエール家でやった様に魔法の披露をやらされた。

対外的に土と水のメイジである為、見せたのはやはり錬成。

真逆、攻撃魔法をこんな所で放つ訳にはいかない。

錬成をしながら、ユートはこれを使った事業も考え始めていた。

この新魔法、某・鋼さんっぽくやって色々作れそうな気がするのだ。

そう例えば、海に行つて海の水を錬成して水と塩化ナトリウムを分離。

海水は水96・6%、塩分が3・4%となっており、海水を干上がらせれば作れる代物。

更に塩分は幾つかのミネラルから成る。

上手く錬成で水と塩分を頒けて、塩を取り出す事が出来ればこの上なく便利だ。

まあ、それも温泉造り何かを終わらせてからの話し。

ユートは色々、未来に思いを馳せていた。

第8話・あーばー（アンリエッタ）姫との出逢い（後書き）

力を付けるなら、やっぱり内政は必須です。

次回はとある場所へ逝ってきます。

## 第9話：ガリア王国の姫（前書き）

少し無理が在るかも知れませんが、こういうモノだと思って下さい。

尚、精神系のスレイヤーズ魔法はコモン・マジックと同じ扱い、他はルーンで唱える系統魔法でスレイヤーズの詠唱は頭の中で唱えているものと思って下さい。

その為、表記は『』によるスレイヤーズの詠唱でも、口では普通にルーンを唱えています。

“本物”の黒魔法は混沌言語カオスワーズです。

## 第9話：ガリア王国の姫

ユートは現在、ガリア王国の王都リュティスはヴェルサルテイル宮殿の【グラン・トロワ】に在る謁見の間に居る。

王家の紋章は組み合わせられた二本の杖を象っており、人口約1500万人というハルケギニアの大国で、魔法先進国でもある。

その為、貴族の数が多く軍事力は非常に高い。

また、様々な魔法人形が使われている。

原作に於ける【無能王ジョゼフ】の居る国で、彼の娘のイザベラと弟のシャルルと、シャルルの娘のシャルロット（タバサ）も居る事だろう。

ユートがそんな大国の謁見の間に居るのには、勿論理由があった。

疎も、ユートがトリステイン国王より貰ったモノが、ガリア王国の国王への謂わば紹介状。

初めから、ユートはガリアに来る為に国王の許可を得ようと考えていた。

力を欲しているユートは、ソレを獲る為に危ない橋をも渡る心算でいる。

ただ、目的は未来の無能王ではないし、シャルロットやイザベラ、

況してやシャルルなどでは決してない。

意図せずして逢う事くらいあっても、それは目的ではないのだ。

その為にこそ、目の前に座るガリア国王に頭を垂れ、その許可を獲る交渉を始めている。

「正気か？ あそこは疎も不可侵ぞ！」

「存じております、陛下。されど、其処を押しをお願い申し上げます」

「ぬっ……」

苦々しい表情になり、国王はユートを睨み付けた。

確かに厄介な所だ。

悪習の蔓延る地だ。

だからといって、他国の者に好きに踏み入らせて良い場所でも無い。

「あそこの存在は、他国に漏れていないと思っていたのだがな。真逆、お前の様な子供に知られているか」

献上品は悪くなかった。

紙と今後の交易に於ける紙の値引き。

可成り純度の高い鉄と銀。

特に、治療の魔法と併用する為の触媒となる水の秘薬とは違い、それ単体で回復可能なポーション（回復薬）は中々の出来だ。

しかし、その対価があそこで起きる事への黙認。

とはいえ、あそこをあの俣にしておけば、これからもあそこが使われる。

国王として、そんな悪習は何とかしたかった。

計画はそれなり。

穴はあるが、自分がフォローに回れば或いはどうにでもなるだろう。

「（此处で断ち切るべきなのかも知れぬな。彼が来たのは始祖の思し召しか）」

永い、とても永い黙考。

軽々しくは答えられない。

問題が問題故に。

高がトリスティン小国の子爵家の子供程度、そんなユートという言葉ではあったがガリア王は悩んだ。

ガリア大國の王がだ。

彼も“あそこ”について、以前より考えていた。



それは三年前に、あの子があそこへと送られたと知ってから、更に悩んだ。

今も悩んでいる。

それでも、決断をしたのか顔を上げてユートの顔を見据えた。

「判った。善きに計らうが良い」

「っ！ は、ご英断に感謝を致します！」

ユートは嬉しそうに頭を下げた。

ガリア国王の許可を取り付けたユートが、意気揚々とヴェルサルテイル宮殿を歩いていると突然、広場から声が掛かる。

「おい、おまえ！」

広場を振り向くと、肩まで掛かる青髪の少女が居た。

青い髪の毛は、ガリア王族の血を引く証。

それに、年齢がユートと変わらない様に見える。

シャルロットは三歳。

一人で出歩いているとは思えない。

ならば、消去法から言って答えは一つ。

「（イザベラか！？）」

予期せぬ原作キャラの登場に、ユートは驚いていた。

「おまえがお祖父様の客人か？」

「お祖父様？」

「アタシはガリア王の孫娘で、おっじジョゼフの娘のイザベラ・ド・ガリア」

「成る程、姫様でしたか。そうですね、僕はトリスティン王国、ド・オルニエール子爵の嫡男でユート・オガタ・ド・オルニエールと云います。イザベラ様」

ユートはイザベラに名乗り返す。

その手には杖が握られている事から、魔法の練習をしていたのかも知れない。

そう思ったが、ユートは敢えて聞いてみた。

「イザベラ姫様は、こんな広場で何をなされておられたのですか？」

「……魔法の練習」

少し間を置いて、イザベラはそう答える。

どうやら、原作の通り魔法が苦手らしい。

確か、原作では水のドットでコモン・マジックも上手く使えなかった筈。

「イザベラ姫様、僕も姫様と同じ年頃で修行中の身ですが、宜しければ少し僕と魔法について語り合いませんか？」

ユートは何故か、下手くそなナンパみたいな口上で、イザベラを誘っていた。

イザベラを伴って、ユートは広場に座り込んで魔法の講義を始めた。内容自体はトリステインもガリアも変わらない内容であり、イザベラ的にも教師達から教わった内容と大差ないらしい。

「あのさ、それならウチで教えてくれる家庭教師と変わらないよ？」  
それで出来る様にならないのだからこそ、彼女も困っていたのだから。

「実際、僕が父上から教わった内容と、イザベラ様が教わった内容は確かにこの世界的ハルケギニアに見れば一般的ですね」

「おかしな言い方だね？　まるでハルケギニア以外にも世界が在るみたいだ」

「そうですね」

ハルケギニアの理を当たり前とする人々には、やはり解らない概念の様だ。

「それは兎も角、僕のやり方は父上とは少し考え方が違います」

「違う？ ユートのやり方が？」

「はい」

そして、凝縮を使って見せるユート。

ユートの両手の内に凝縮で作り出した水が浮く。

「す、凄い……」

全く淀み無く、スムーズに魔法が発動した事に驚愕していた。

「伯父上と同レベルの早さで発動したよ」

「伯父……シャルル様の事ですか？ 風のスクウェアであるあの方と並べられるのは、少し恥ずかしいですね。僕は未だラインな訳ですから」

「いや、アタシと同年代でラインなら、十分に大したもんだよ？」

胡乱な表情でユートを見つめながら、イザベラは至極真つ当な事を言った。

「それで？ ウチの家庭教師連中や、貴方のお父様のやり方とは違うやり方ってのは、極めればあんな事が出来る様になるのかい？」

「勿論それも努力次第だけど、多分……ね」

「ちゃんと魔法が使えるんなら、幾らでも努力はしてやるさ！ けど、アタシの父上も魔法が出来ないからさ。その娘のアタシが魔法を使えない可能性は、十分にあるんじゃないかな？」

確かにメイジの魔法は血に依存している。

故に、二親等くらいであれば資質が同じでもおかしくはなかった。

だが……

「（ジョゼフは虚無の担い手だ。魔法が使えないというよりは、ルイズが爆発している様に微かに加速してるんだろっな）」

どういう原理かまでは判らないが、虚無魔法はまともに使える様にならない事には、木漏れ日程度の初級魔法が発動するらしい。

ルイズは爆発。エクスブロージョン

ジョゼフは加速。アクセラレーション

加速なんて、自発的に動かなければ判らないだろう。

「確かに、メイジの魔法は血筋に遺伝しますが、必ずしもそうとは限りません。ですから、諦める必要はありませんよ？」

そう言うと、ユートは魔法の講義を続けた。

「魔法がイメージだとは、勿論識っていますね？」

「それは……ね」

魔法の初歩だ。

当然ながら初めに教わる事だし、教わらなくても理解している項目。

「頭で思い浮かべた想像力を、<sup>イメージネーション</sup>身体の内<sup>コンセントレーション</sup>の集中力で形に変え、<sup>コントロール</sup>御力を以て放つのが基本です」  
制<sup>コン</sup>

再び凝縮を唱えて、水を作り出す。

「ふむ、成る程ね……」

イメージを魔法の術式に換えて、詠唱で術式に精霊力の付加効果を与える事で、魔法は成立する。

最後に力<sup>チカラ</sup>在る言葉で放出。

詠唱に変化を加えたなら、魔法のアレンジも可能なのは、スレイヤーズと変わらないと思われる。

ただ、コモン・マジックは少し違う。

コモン・マジックは外側の精霊力ではなく、人の内側の精霊力に干渉して使用されている。

だからこそ、ルーンではなく口語で発動出来るのだと考えればどうだろうか？

それだけに、本人の魔力とイメージがより顕著に必要とされるのだ

ろう。

「なので、例えば念力なら魔力で動かすのではなく、手で動かすイメージでやってみると良いでしょう」

「は？ 手で？ 魔法を使って動かそうっていつのになわざわざ手で？」

「飽く迄もイメージです。手はとても万能な器具と言われます。これは魔法だからと云う、固定観念は一端捨てて下さい」

「固定観念……か」

イザベラは、成る程そうかも知れないと思った。

「……手で動かす」

イザベラは頭の中に明確な自分の手をイメージして、そこら辺に有る小石を摘んで持ち上げるイメージを足してみた。

「念力……っ！」

ピクピクと石が震える。

「くっ、動け〜！」

しかし、少しだけしか動いてはくれない。

残念そうな表情になる。

「だ、駄目か」

「なら、よりイメージを明確にする為に、最初は長い詠唱でやってみましょう」

「長い詠唱？」

ユートは【アダマス】の指輪を着けた手を、先程の石に向けて口語で唱えた。

「久遠と無限を揺蕩いし、全ての心の源よ。尽きる事無き熱き意志よ、我が手に集いて力と成れ……念力」

フイツと石が浮かぶ。

「我が手より放たれよ！」

浮かんだ石が、人差し指を向けた方へと飛んでいく。

イザベラはそんな様子を、ユートの一挙一動を逃さずに見つめ続けた。

「さ、やってみて？」

「うん」

素直に頷くと、杖を別の石へと向けて詠唱する。

先程と同じイメージで、今度はユートから教えて貰った詠唱をしながら……



「久遠と無限を揺蕩いし、全ての心の源よ。尽きる事無き熱き意志よ、我が手に集いて力と成れ……念力」

詠唱の意味は、何となくではあったが理解出来る。

イザベラは決して愚昧などではなく、寧ろ聡明な方だと云えた。

だからこそ、ユートが会話の端々に撒いていたキーワードを無意識だろうが、拾い上げていたのだ。

血筋に遺伝しますが、必ずしもそうとは限りません。

固定観念は一端捨てて下さい。

ジョゼフが魔法を使えないから、自分も魔法が使えないという固定観念。

「（先ずはその幻想からぶち殺す！ なんてな）」

イザベラの中のマイナスのイメージが、魔法が成功するイメージの欠如に一躍買っていた。

だからそのイメージを払拭させる為、長々と説明をしてきたのだ。

念力は見事に成功し、石は少しだけ動く。

「で、出来た？」

ユートに比べれば、何という事もない力。

それでも今まで失敗ばかりしていた事を思えば、大きな前進だと云える。

イザベラは少し興奮気味にユートを見た。

「それじゃ、次は水の魔法を使ってみましょうか」

「え、でも……」

「適度な自信は、善きイメージに繋がります」

「うん……」

ユートはルーンを口にすると同時に、頭の中ではスレイヤーズ系の呪文の詠唱を始めた。

『優しき流れ揺蕩う水よ、我が手に集え。浄結水』  
アクア・クリエイト

「あくあくりえいと？」

「凝縮コンデンセーションですよ。浄結水はオリジナルスペルなので……」

スレイヤーズ魔法をそんな風に誤魔化す。

「水とは大気中に漂っている水分、H<sub>2</sub>Oが集まったものです」

「えいちつーおー？」

「（あ、其処からか）」

よく解らない単語を聞き、イザベラは目が点になってしまった。

ユートは先ず、水 の 概念から教えるべく頭の中で講義の内容を吟味する。

ユートは思案の末、四元素の在り方についてイザベラに教える事にした。

四大元素……系統魔法と同じく【火】【土】【水】【風】の四つが存在し、世界の理に沿ったこの世界でも比較的判り易い物理法則。

「それでは、水とは何か？ 其処から始めますか」

「は？ 何って、水は水じゃないか」

「先ずはその認識から改めましょう。水は簡単に言うと、水素原子2個と酸素原子1個が結合した水の分子が複数集まった物です」

「……え、と？」

ハルケギニアに原子だとか分子なんて概念は、全くと言っても良いくらい存在していない。

小学校の理科レベルでさえ理解出来ないし、中学校の数学も理解不能だろう。

だが、問題は無い。

自分だって、何も識らない状態から少しずつ教わって今の知識を持

つに至った。

イザベラも決して頭が悪い訳ではない。

なら、自分と同じ少しずつ教えれば良い。

「始祖ブリミルは仰いました。系統魔法とは魔力で小さな粒に干渉する事で、世界を動かすモノだと」

「そんな話、聞いた事が無いんだけど？」

「この世の全ての物質は、小さな粒により為る。四の系統はその小さな粒に干渉し、影響を与え、且つ変化せしめる呪文なり。その四の系統は【火】【水】【風】【土】と為す。ブリミルが遺したとされる、とある遺産の序文ですよ」

「そんな物が？」

「はい」

嘘ではない。

但し、ライトノベルによる原作知識だが。

何しろ、それが書かれているのは王家の秘宝。

自分が読める訳もない。

「その小さな粒を原子だと仮定して、この原子に干渉する事で魔法に換えるのだとすれば？」

「確かに……」

「ただ、水素原子と酸素原子に直接干渉しなくても、世界には水の分子がふんだんに存在してます」

そう言つて、今度は普通に凝縮を使つて見せた。

「なので、大気中の水分子を集める感じで凝縮を使います」

「ふうん、教師連中も同じ事を言うけど、ユートの方はもっと突っ込んだ内容なんだね」

「もう少し判り易い様に、少し実験をしてみますか」

ユートは錬成で硝子を造り上げ、ソレをビーカーへと再錬成すると、凝縮で作つた水をビーカーに入れる。

更に、穴を掘つて火事にならないようにすると、軽く火を点けてビーカーを火の上に置いた。

硝子が熱されて、水は徐々に沸点に近付く。

「水がどうなるか、見ていて下さい」

ユートに言われ、イザベラはジツと見つめる。

やがて湯が沸いて、水蒸気を上げていく。

「この湯気、水蒸気と呼びますが、これが先程までは水だった物で

す

白い水蒸気は、直ぐに空気に溶ける様に消えた。

本当に簡単な理科の実験に過ぎないが、そんな単純な知識がハルケギニアという世界ではアカデミー級の知識なのだから凄まじい。

暫くすると、ビーカーの中で沸騰していた湯は、全てが水蒸気となって消える。

「斯くして、硝子の中の水は水蒸気という大気の成分となってしまいましたね。その水蒸気と同様の物が、空気中には目に見えない形で沢山散らばっています。ソレを集めるのが【凝縮】という魔法ですよ」

ユートの説明を聞き、実験までして立証されては疑う余地も無い。

イザベラはそういうモノなのだ、そう理解した。

ただ、教師達のように空気の中には目に見えない水が沢山在りますと、口先だけで言われるよりは理解もし易い内容だ。

イザベラは先程の水蒸気を発生させた過程を、逆回しにする様なイメージで凝縮を唱えてみる。

「(さつきは火で温めたからああなった。水蒸気……だっけ？ ならその逆で、冷やしたら……)」

そのイメージが固まったのか、量は大した事もなかったが確かに水が顕れた。

ユートの凝縮がバケツ一杯なら、イザベラの凝縮などコップの一杯にすら満たない量だったが、確かに魔法は成功している。

「や、や、やった……？ ユート、やったよ。初めて系統魔法に成功したよ！」

それでも、今まで碌に魔法が使えなかったイザベラには、まるで天地が引つ繰り返った様な出来事だった。

「お見事ですな、イザベラ様。後はお復習いを、反復練習を繰り返して完璧に出来る様になりましょうか」

「うん、うん！」

「他の魔法……水の系統はこの延長です。それと魔力ですが、基本的には使い切って下さい。倒れない程度にですが」

「？ 何故？」

首を傾げるイザベラに対して、ユートはその理由を説明した。

「魔力は筋力と同じです。鍛えればより強くなりますし、量も増えます。特に、使い切るくらいで使ってやれば、回復の過程で一層増える筈ですよ」

「そついうものなんだ」

「それでは、魔法の講義も終わりましたし、僕はこれにて失礼を致します」

「え？ あ……」

イザベラは思い出す。

ユートは祖父を訪ねてきた客で、自分の講師ではないのだと云う事を。

とても同じ年頃とは思えない物腰だから、いつの間にか本物の講師の様に接してしまっていた。

「ちょ、ちょっと待って……っ！」

「？」

立ち止まるユート。

イザベラは思わず止めてしまったが、何を言えば良いのか判らず固まる。

「う……その、あ……りがと……」

真っ赤になって、搾り出す様な声で言った。

「教えた通り、精進して下さい。イザベラ様」

ユートは思う。

一日であれだけ出来るのなら、きっと直ぐに上達するんじゃないかと。



そして、イザベラと別れた後は行くべき場所を目指して馬車に乗り込んだ。

「さあ、行くか！」

その日のヴェルサルテイル宮殿で、イザベラは従姉妹の少女と一緒に居た。

「どうしたの、イザベラねえさま？　なんだかうれしそう」

「そうかな？　エレーヌ」

何だか今日は上機嫌な『ねえさま』に、シャルロット・エレーヌ・ド・ガリアは声を掛ける。

「ちょっと楽しい事があったんだよ」

「たのしいこと……どんなことがあったの？」

未だ三歳の、舌つ足らずな口調で必死に喋る。

「楽しい事……さ」

それはきつと、泡沫の夢。

こうして、ユートの小さな介入によって、イザベラは原点の様に魔法を苦手にはしなくなるのだった。

第9話・ガリア王国の姫（後書き）

イザベラへのフラグになるかどうかは、不明です。

イザベラの口調は、現代のものを参考に柔らかくした感じにしてみました。

“あそこ”への干渉って、本来なら国王でも出来なかった様な気が

……

第10話：心を満たす闇（欲望）とTSな少女？（前書き）

今回はユートの弱さが露呈します。

オリキャラ登場。

第10話：心を満たす闇（欲望）とTSな少女？

「此処が、あの……」

目的地へと辿り付き、その景観に絶句するユート。

一応は【ゼロの使い魔】を呼んで、ある程度は識っている心算だった。

だが、所詮は“識っている心算”に過ぎなかったと、そう思う。

陸の孤島。

突き出した岬の突端に位置する“其処”には、先ずを以て陸路が通じていない。

切り立った岸壁は、船も近付けない。

此処にやってくるには、成る程……空路しかあり得ない訳だ。

しかし、それだけにユートの目論見は上手くいく。

漆黒の闇……双月が浮かぶ夜、見付かれば変質者扱いは間違いない状況の中で、ニヤリと口角を吊り上げていた。

此処は、ガリアが管理する【セント・マルガリタ修道院】と呼ばれる監獄だ。

暮らす人間は全部で三種類が居る。

この修道院を運営している本物のシスター。

世を儚み、祈りばかりしている女性達。

比較的若い少女達。

ユートの狙いは、比較的若い少女達だ。

別に精神年齢25歳であるユートが、ロリコンに走ったとかではない。

必要なのは、彼女達が持っている血筋。

謂わば、貴族の……メイジとしての能力なのだ。

ユートが考えた“力”を得る方法の一つ、それこそが自分以外のメイジを増やすと云うもの。

そして、セント・マルガリタ修道院は基本的に定期船以外には訪れる存在は無いし、総勢で20人近く居り少なくとも10人位の貴族子女が住んでいた。

此処の貴族子女は、決して表には出せない出自の者が集められている。

ある意味、人間の愚かしさを象徴した施設。

ガリアで忌避された双子の片割れ、平民の侍女に手を出して出来た娘、酔った勢いで近親相姦をしてしまい出来た娘。

どんな理由であれ、醜聞となるが故に此処へ棄てに来るのだ。

男ならばまだ、跡継ぎにと考えられるのだろう。

が、女の子では棄てるという選択しな無かった。

男尊女卑のハルケギニアらしいやり口だ。

それに……

ガリア王国に在る施設とされるが、ガリア王国に限らずトリスティンやアルビオンからも棄てに来る貴族は居るのだろう。

説得について言えば、貴族子女達は良い。

外に出すと言えば、一もなく二もなく集まる筈だ。

実際に原作でも、外に興味津々でヴァネッサ（ルイズ）から外の事を聞きたがっていた。

「（それに未だ三歳だろうけど、此処にはジョゼットも居る筈だよな）」

今ならこの事をヴィットーリオも知らないだろうし、虚無の予備た

るジョゼットを確保して、将来的に見てヴィットーリオから隠す事も可能になる。

エルフとの戦争、聖地奪還の名の許に【聖戦】なんて起こさせる気など、ユートには全く無い。

一番の問題が、世捨て人となった【聖女】達だ。

【聖女】とは、貴族子女達が世捨て人の女性を差してよぶ隠語。

世捨て人だけあって、簡単には誘いを受けてはくれないだろう。

だけど、セント・マルガリタ修道院には、そもそも無くなって貰う心算だから、残す訳にもいかない。

修道院長を始め、シスター達も【聖女】も貴族子女達も全員、外に出す。

「さあ、交渉開始だな」

ユートは修道院に向かって歩き出した。

夜中だけに、貴族子女達も【聖女】達も寝静まっているようだ。

しかし、修道院長だけは起きて仕事をしているのか、建物の一角のみ灯りが点いている。

ユートは窓を軽くノックをした。

その音に気が付いたのか、修道院長が窓を覗き見るが透かさず隠れ



る。

何も見付からず、首を傾げて窓を開けた瞬間、ユートは窓を閉められない様に、手で押さえた。

「っ!？」

悲鳴を上げそうになる修道院長だったが、ユートが掛けたサイレントで声が洩れる事はなく、直ぐに部屋へと滑り込む。

よくよく見れば、子供だと判って修道院長も大人しくなる。

それを確認し、サイレントを解除するとユートは優雅に礼を執った。

「修道院長とお見受け致します、先触れも無く夜分遅くに訪問した無礼を先ずはお詫びします」

「あ、貴方は一体？」

見た目の幼さに似合わない態度に、修道院長はユートに疑問をぶつける。

「僕は、トリステイン王国の貴族で、ユート・オガタ・ド・オルニエールです」

そう言って、ド・オルニエール家……否、オガタ家の紋章が入っているブローチを修道院長に見せた。

紋章は太刀と懐剣が斜めに十字を組んだモノ。

オガタ家の初代から使用される紋章だった。

「まあ、トリスティンの」

オガタ家の紋章は、意匠の複雑さから偽物は簡単に造れない事もあるし、何より騙る意味も無い。

そのお陰かどうかは兎も角として、幸いにも修道院長は信じてくれたらしい。

「今夜の用向きは、貴女にご相談したい事がありましたね……」

ユートは伝える。

この、セント・マルガリタ修道院に居るシスター達、【聖女】達、貴族子女達を自分の領内で受け容れたいと言う事を。

「この書類をご覧下さい」

ユートは自身がガリア国王に与えられた書類を、修道院長へと渡す。

「これは、この書類は本物なのですか？」

「勿論ですよ。ガリア王に直接お会いして、受け取った書類です」  
ガリア王家の紋章を象った封蝋で、封緘された封筒を裏返し修道院長に見せる。

「これは！」

此処は飽く迄も教会の管轄ではあるが、何しろやっている事が事な

だけに、王国の後ろ楯がなければやっていけない。

ちよつと修道女が他よりも多いだけの修道院。

対外的には、そういう事になっていた。

「我が領内にも修道院を建てる事になりますし、貴族子女達は屋敷で引き取る形になります。貴女達も仕事を失う事はありませんよ。やる事が、このセント・マルガリタ修道院からウチのオルニエールに変わる……それだけですから」

「……理解はしました」

尤も、納得は仕切れていない表情だったが。

「その、あの子達はどうなりますか？」

「屋敷で働きつつ、自分の未来を考えて貰う事になるでしょうね。此処で無駄に生を食うよりはマシな生き方が出来るかも知れませんが、或いは苦難の道かも知れません」

「成る程、正しく生きていくのですね」

「鳥籠の鳥は安全と引き換えに、狭い世界で退屈なだけの生活をする事になる。野生の鳥は、危険や苦難と引き換えにして自由を謳歌する事が出来る。鳥にとってどちらが幸福なのか？」

「難しい命題ですね」

こうして、修道院長の許可を得たユートは、最も厄介だろう【聖女】

の説得を、翌日から始めるのだった。

当然の事ながら、彼女達の説得は難航する。

解ってはいてもゲンナリとしてしまう。

大抵はアツサリと断られてしまい、中々思ったようにはいかない。

「（くっ、判っちゃいたけどここまで難物だとは）」

悔しそうに思いながらも、井戸から水を汲んで、氷を作るとカップに氷水を淹れて飲んだ。

「ふう、魔法はある意味で便利だよね」

水を飲むならやっぱり冷たい方が良い。

真冬ならともかく……だ。

「あら、氷ですか？ 私にも頒けて戴けると嬉しいのですが」

「は？」

振り返ると、翠の髪の毛を後ろ髪で三つ編みお下げにした女性が立っていた。

瞳は昏い赤色で、年の頃は20代半ばだろうか？。

修道服を着たその女性は、軽く挨拶をすると氷を頒けて欲しいと云う。

「まあ、構いませんよ」

桶に幾らか氷を入れてやると、女性は嬉しそうに笑顔を向けてくれた。

「ありがとうございます」

「いえ。暑い日には冷たいモノが欲しいですよね」

「はい。あ、私はセシリアと申します」

「セシリアさんですかあ。申し遅れました。コート・オガタ・ド・オルニエールと云います」

「まあ、貴族様でしたか。マントを羽織られてなかったのだから……」

驚いた表情でコートを見るセシリア。

氷を出したとは云っても、平民メイジの可能性だってある訳だ。

況してやこんな絶海の孤島などで、貴族の子供だと判る名前を出す  
と云う事自体あり得ないのだから。

「何故、貴族様がこんな所まで？」

「欲しいものややりたい事が有るからです。その為の第一歩としてこのセント・マルガリタ修道院を選んだと、それだけの事です」  
そんな小さなやり取り。

その間、セシリアは見極める様な瞳を向けていた。

「例えば、此処に居る貴族の出の少女達なら、メイジとして役に立ちましょう。それ以外でも“色んな事”に役に立つかも知れませんか。シスター達にしても、教会や修道院を置くならば幾らでも働けます。でも、私達の様な中途半端な女はどうしたら良いのです？」

「っ!？」

思い知った。

勿論、切り捨てる心算などユートには無い。

無いが、彼女達【聖女】は深い深淵の絶望の淵に居るのだと云う事を、その事を本当の意味で思い知らされてしまった。

凡百な言葉が、聖女として世捨て人となった彼女らに届く筈もない。何故なら、外の世界で一度は絶望を味わい、それ故にこんな孤島にある修道院に引き籠もっているのだ。

セシリアの瞳も昏い。

本来なら、ルビーの様に鮮やかな紅い瞳だったのだろうが、今はくすんだ色。

どれ程の絶望を視たなら、感じたならあんな瞳になるのだろうか？

ユートに理解が出来る訳もない。

何故なら、彼の人生は決して悪いものではないから。

前世では優しい母、厳しいけど割と子煩悩な父、少しブラコン気味だがよく懐いてくれた妹が居た。

今生では神より依頼を受けたとはいえど、貴族という特権階級に生まれたのだ。

きつと、莫迦貴族の治める（まともに治めてないけど）領地の平民に生まれるよりずっと良い生活だろう。

「僕はまだ子供で、今のところは苦勞らしい苦勞もしていないから、貴女に満足な答えを返せない。領地を継いでる訳でもないから、保証ですら父上任せた」

「……………」

「貴女方を引き受けるのだったって此処の貴族の子女と、ある人物を懐に容れる為に必要だったから。それが無ければきつと、貴女達と会う事…………いや、此処を思い出す事すらなかった」

「正直ね」

誤魔化しても仕様がない。

彼女が【聖女】の1人であるなら、誤魔化しは不信感を買うだけだ

し……

「僕がもし、神から生まれながらにして使命を与えられた……なんて言ったら、貴女はどう思いますか？」

「……本当に言っても良いのかしら？」

「忌憚ない意見をどうぞ」

「正直痛い……誇大妄想家の自愛主義者ナルシストかしら？ 貴族より神官になつた方が良いわよ？」

本当に忌憚ない意見を貰ったユートは、膝と手を突いて嘆いた。

背中にでっかい影を背負いながら。

「え……と、何だか判らないけどごめんなさい？」

「いえ、貴女の所為じゃあ無いです。シクシク……」

泣きたくなつたが、話が進まないので続ける。

「その痛い使命を背負わされまして、将来的にせめて普通の人生を謳歌出来る様に今から頑張ってます」

「は、はあ……」

「この世界は、王侯貴族の自業自得と自然現象、それに“ソレ”を掻き乱して晒う存在により滅びます」



セシリアは流石に目を白黒させる。

何をしに来たのかは判らないが、貴族の名前を名乗るお坊ちゃんを突いてみたら変な話になった。

ただ、どうやら未だ貴族の大人に染まっていないのは判る。

利用出来るかも知れない。

純粋な子供みただから少し気は引けるが、セシリアにも目的が在るのだ。

だけど真逆、世界の滅亡なんて痛々しい話しをされるとは……

「（貴族じゃなく、ロマリアの思想にでもかぶれてるのかしら？）」

そんな話題は、貴族ではなく生臭坊主向けだ。

「それで？ 貴方は滅亡する世界に生まれて、ソレを回避したいの？ だけど……こんな世界は一度滅んだら良いんじゃないかしら」

「確かにそうかも知れないけど、それでも僕は未来が欲しい！」

「貴方（貴族）の我侖で？ 平民には生き難い、死んだ方がマシかも知れない世界で未来が欲しいの？」

辛辣な台詞。

「だから、少しでもマシな世界に変えたい。けれど、今の僕には力が無い。変えるには幾らでも力が必要なんだ……そう、欲しかった

んだ力がっ！　こんな下らない世界を変えてしまえる力がっ！　1  
人では何も変えられないから！」

ちから  
仲間が欲しい。

そんな嗚咽にも似た叫びを聞いて、それを自分に重ね合わせてしま  
った。

せめて“アイツら”に一矢報いる為に、自分も必死に牙を研いでい  
たから。

「（演技でも自己陶醉でも無い。この子は本当に何かを背負ってい  
る？　なら、私が協力すれば、この子は私達の立場を確約してくれ  
るかも知れないわね）」

セシリアは心を半ば決めて質問をする。

「貴族なら、幾らでも力は獲られるわよ？」

メイジとしての力。

貴族の領地。

財力。

権力。

その気になれば幾らでも、今からならあーばー姫さえ墮として、ト  
リステインを手にする事も出来る。

「それじゃ駄目なんだよ。独りで獲た力なんて、僕の役には立たない……」

だから欲しかった。

みんなで獲られる力が。

その為、聖女達も受け容れようとしたのだ。

何という欺瞞。

何という偽善。

理解はしていた。

己おのが身勝手を。

「人間は誰しも欲望に塗れて、身勝手なものですよ。貴方の瞳に見える昏い色、それが貴方が抱えた闇（欲望）なのですね」

セシリアは何処か遠い目をして、ユートに語る。

「確かに身勝手で……」

グサリ！

「欺瞞で」

グサリ！

「偽善に満ちている」

グッサーッ！

セシリアに言われる度に、何かが突き刺さった。

「でも、他の貴族に比べれば遥かに良いかもね？」

「エッ？」

セシリアの瞳に、僅かではあるが光が灯っている。

「不遜ながら確かめさせて頂きました。私達の事を、未来有る貴方に託しましょう……ユート様」

「でも、僕は……」

「その年齢で、抱え込み過ぎているわ」

「セシリア……さん？」

ギョッと抱き締められて、戸惑いを隠せないユート。

「私に任せなさいな」

そう言って、セシリアは奥に歩いて行ってしまっ。

「……と、止める暇も無かったな」

ユートは茫然自失となりながら、セシリアの歩いて行った先を見送った。

「あれ？ 貴方はどちら様ですか？ 基本的に修道院は男子禁制ですよ」

「あ、僕は……え？」

声が聞こえ、ユートが振り向くと長めの銀髪で、少し年下な少女が居る。

「（真逆？） ジョゼット……なのか？」

「はい、そうですか？」

三歳にしては、やけに確りとした受け答えをする少女だが、虚無の予備として生を受けたジョゼット。

桶を持った少女は、小首を傾げて微笑みを浮かべていた。

「君は……誰？」

銀髪の少女が訊ねてきた。

「えと、僕はユート」

「ユート君？ “ボク”に何か用なのかい？」

「は？ ボク？」

銀髪の少女は、ジョゼットである事を肯定している。

ジョゼットの一人称は“私” った筈だ。

それとも成長の過程で矯正されたのか？

ユートは考えた。

「いや、有り得ないな。女の子がボクツ娘になる背景には、周囲の影響が強いと思うし。女性や女の子に囲まれたセント・マルガリタ修道院で、男っぽい口調になるもんか？」

絶対ではないにしろ、まず無いような気がする。

仮にそうだったにしても、シスターが口調を矯正するだろうし。

「ま、偏見だけどね」

とは言つものの、原作知識でのジョゼットと云えば。

恋に恋するロマンチスト。

騙されていると知りつつ、竜のお兄様ジュリオに付いていき、タバサに成り代わって女王になった挙げ句の果てに、執念でジュリオを使い魔ミヨズニトニルンにしてしまった。

その所為で、才人がガンダールヴとリーヴスラシル、ジュリオがミヨズニトニルンとヴィンダールヴに成るといっておかしな状態に……

そんな夢見がちな少女だったのだが。

目の前の少女は、明らかに理性的な対応をしている。

「（それとも、時間の経過と共にあんなにぶっ飛んだ性格に？）」

割と失礼な事を考えながらジョゼットを見た。

「君は本当にジョゼット……なのかな？」

「そうだよ」

小首を傾げ、何だか可愛らしい仕草のジョゼット。

「どうしてそんな風に思ったのかな？ ひょっとして口調が“原作”と違うから戸惑ってるのか？」

「なっ!？」

余りに驚愕するユートを、愉しそうな瞳を向けてくるジョゼット。

「ど、どうして？ 真逆、君は……」

「二次小説風に云うなら、TS憑依転生ってヤツ？」

「っ!？」

明らかに現代日本人の使う用語。

しかも、TS憑依と云う事は前世は男で、ジョゼットとして生まれ

変わったと言う事になる。

「やっぱりね。こんな所に普通は誰も来ないもんな。あの酔狂な【竜のお兄様】みたいに、目的を持っていない限りは……」

「ジョゼット、君は俺と同じ【受容世界】の人間か」

「受容世界って？」

「とある世界を俯瞰して、情報を受け容れる世界って意味らしいよ」

「成る程、【ゼロの使い魔】の世界を因果情報として捉え、ソレをメディア化した世界って事だね」

驚くユート。

たったあれだけの情報で、真実に辿り着いたのだ。

「驚いてるね。ボクは科学が好きなんだよ。だから、そういうのは結構ね、理解が出来るんだ」

「な、成る程。それじゃ、ジョゼット？ も何か力を貰ったのか？」

「前世の名前は橋本祐希。だけどジョゼットで大丈夫だよ？ 因みに、貰った力は虚無の覚醒と科学技術」

祐希が貰った力、初めから虚無魔法を使える能力。

杖さえ有れば、呪文を唱えて発動出来ると云う力。



科学技術は、現代世界に於ける科学的な技術の知識や造り方の知識。系統魔法の使い手と組み、科学技術との擦り合わせも可能であり、図面の通りに正確な物を造れる能力だ。

虚無とも組み合わせれば、可成り凄い事が出来る。

「流石に、虚無と系統魔法を同時に得る事は出来ないって言われたんだよね」

「ひょっとして、下級神に転生をさせて貰った？」

無茶なチートを与える能力を持たない神。

「下級かどうか知らない。ただ、ボクの同位体を識ってるから転生させてくれたらしいけど？」

何処ぞで聞いた話だ。

「あとは、なの姉には負けないとか何とか……」

「は？」

「リリカルなのはの主人公の高町なのはの髪型をさ、ポニーテールにしたような人だった。名前は確か高町はるな」

「誰それ？」

ジヨゼットは苦笑をしながら『さあ？』と、リアクションをする。

取り敢えず、ユートは目的を祐希……ジヨゼットへと告げた。

この修道院の人間を纏め、ド・オルニエールに居を移して、ユートの専属の部下になって貰う計画を。

「良いよ、ボクが纏めておくよ」

「助かる」

ジヨゼットは計画に、二つ返事で了承した。

元より、原作が始まる頃には【竜のお兄様】を騙くらかして杖契約をしてから、レポートを使って逃げる予定だったのだ。

それが早くなっただけ。

そもそも、祐希が転生を決めたのには理由があった。

その目的に【竜のお兄様】は要らない。

修道院脱出計画が発動。

この修道院の子供は基本、貴族の子供。

10人はメイジが増える。

この修道院の人間は総勢で23人居り、内分けは貴族子女がジョゼットを含めて10人。

シスターが5人、聖女と呼ばれる女性が8人。

原作では30人は居たが、12年も前だから7人くらい少なかった。

「そう言えば、どうやって此処に来たの？」

「黒塗りの船。飛翔魔法のフライで梯子を掛けてあるんだよ」

切り立った崖の孤島の為、空路以外は不可能であったが、フライで登って上から梯子を掛ければ船でも十分いけた。

修道院にはヒトガタの肉を残し、火を掛けてしまう。

恐らく、碌に調査もされずに事故で処理される。

此処に居るのは、教会にも国にとっても厄介者が居たのだから、寧ろ隠滅されるだろう。

腐れた貴族社会も、時には役に立つものだ。

修道院長がシスターを。

セシリアが【聖女】を。

そして、ジョゼットが貴族子女を説得して、夜の内にも脱出する事になる。

端から見捨てられた修道院だっただけに、割りと上手くいってしまった訳だが、今の貴族社会のザル警備は後で見直した方が良くないとユートは思う。

脱出後、馬車でジョゼットから荷物について聞く。

何故か修道院にメンテナンスバイクを発見し、一緒に持って帰る事にした。

修道院に、場違いな工芸品として置かれたのだと聞いたユート。

どうやら、車輪から乗り物だとは解ったが乗れる人間が居なかったらしい。

唯一ジョゼットだけが乗れたのだが、何せ小さな孤島だけに意味が無かった。

馬車の中で、ジョゼットから聞いた話は余りにも間抜けな顛末。

話しの後、トリスティンとガリアの国境で検問を悠々と抜けるユート達。

幾ら何でも、袖の下次第で簡単に怪しい馬車を通すなんて、流石に拙いだろうと言わざるを得ない。

「（そっぴや、シルフィードが誘拐された時も、袖の下で通していたな）」

ユートは呆れながら、今だけは莫迦共に感謝しつつもド・オルニエール領に戻るのだった。

.

**第10話：心を満たす闇（欲望）とTSな少女？（後書き）**

オリキャラ、セシリア登場です。

ジヨゼットは半オリキャラとして登場しました。

くどいようですが、作品間の繋がりに関してはスルーして下さい。

第11話：ユートの郷愁（前書き）

物語が余り進まないけど、月日は経っている筈？

## 第11話：ユートの郷愁

「ハア……」

ド・オルニエールの屋敷の一室で、ユート・オガタ・ド・オルニエールはアンニユイな雰囲気醸し出し、溜息を吐いていた。

魔法の訓練、連れて帰った女性達の世話。

忙しさから解放された朝っぱらから、何故かこんな感じで空を眺めている。

そう……

セント・マルガリタ修道院でのミッションを終えて、暫らくの時間が経つ。

多少の混乱こそあったが、現在は確りとした統治機構のお陰もあり、既に落ち着きを取り戻していた。

ジョゼット（祐希）もオガタ家で預かり、年齢が一定に達したなら杖契約をして、魔法が使える様になる筈。

それもあって、ジョゼットはオガタ家の養女となる。

また、セシリア達【聖女】は一部がオガタ家のメイドとなり、ユリアナの世話をする事になった。



更に、葡萄酒畑から葡萄酒を採ってオルニエールワインを造る者、街で商売を始める者などが居る。

セシリア本人は、娘であるフィアと共に、オガタ家でメイドをしていた。

フィアは貴族子女と一緒に育てられ、本来であるなら母娘として名乗る事は出来なかつた筈だったが、修道院を出た事でお互いに名乗れる様になる。

ユートはフィアの存在を聞いた時、予感はしていた。

そして予感は正しかった。

フィアはメイジの力、魔力を持っていたのだ。

珍しくはないが、胸糞の悪くなる様な話し。

セシリアはガリアのとある伯爵家でメイドをしていたが、其処の莫迦息子が仲間と大挙して押し寄せ、輪姦してしまう。

汚らしい液体に塗れ、茫然と倒れていた処へ伯爵が帰って来たが、息子を叱るところか『自分が最初に手を付ける心算だったのに』と吐き捨て、更に犯した。

疲労と痛みでボロボロの身体を引き摺り、浴場で汚いモノを自分から掻き出し、身体を擦り切れるくらいに洗いながら泣き続ける。

それ以降も、味を占めたのか莫迦息子と伯爵に犯され続け、時には社交界パーティーの裏で賄賂の様な形で貴族の慰みモノにされた。

未だ幼さの残る頃から数年間、そんなただ辛いだけの日々が続く。数年間は何とか平気だったのだが、とうとう父親が誰とも知れぬ子供がデキる。

結果、奥方にバレてしまいセシリアは、生まれた娘と共にセント・マルガリタ修道院に入れられた。

セシリアがユートの話しに乗ったのは、ユートの性格を分析してフエアの庇護を頼めると判断したから。

フエアは確かに、誰が父親かも判らない子供だった。

それでも、セシリアにとっては最後の家族。

せめてフエアは幸せに……

その為、ユートを利用したとも云えるが、ユートにしてもセシリアに協力して貰うのだから、其処は対価だと考えている。

フエアはユートと同年、しかも貴族の血が入っているが故に、メイジの力を持っていた。

ユートは杖契約をさせて、フエアに魔法を教えていく事になる。

セシリアという母親が居なければ、ジヨゼットと同様に養女にするのも良かったかも知れない。

専ら、教えるのはユリアナとサリユートだったが。

コートが余りにも優秀で、基本を教えたら後は勝手に覚えてしまい、フラストレーションが溜まっていたらしく、甲斐甲斐しい教師っぷりだとか。

セシリアも苦笑しながら、新しい主人夫妻へと頭を下げた。

貴族子女達は、大体が三歳〜六歳程度の年齢だったが真逆、全員を養女にする訳にもいかない。

下手に調べられでもすれば気付かれるからだ、彼女らが焼け落ちた修道院に居た貴族子女だと。

其処で、サリコートは彼女らにはメイド見習いの立場を用意して、メイジとしての修練をさせる事にした。

修道院長を除く、シスター達に養子縁組をさせる事で屋敷に住まわせる。

形としては、住み込みで働くメイド親子という触れ込みで、彼女達を将来的にはコートの部下として活躍をして貰う心算だ。

本来、同じ立場である筈のジョゼットより立場が下になるが、何事も無かった場合でもそれは同様。

ジョゼットは王家の血筋、他の子は最大でも侯爵家。

だから特に問題は無い。

物心も付かない少女が多かった為、特に不満も出る事は無かった。

最初はぎこちないだろう。

それでも年月が経てばある程度、本物の親子にもなれると思われる。  
修道院長は新設した修道院の管理を任せた。

ロマリアが煩かった事への対策の一環だ。

多少の寄付と献金で成り立った修道院で、ロマリアの本国に金がない様に、理論武装で無理矢理納得をさせた。

『修道院への献金を本国が吸い上げると、修道院は立ち行かなくなる。かといって献金は飽く迄も善意によるモノであり、増やす事を強要するのは始祖の顔に泥を塗る行為である』

そう言われ、生臭坊主共は引き下がるしかなかった。

普段、始祖がどうのこうの言っており、その教えを広めている連中は、ド・オルニエールが教えに反している訳ではない分、何も言えない。

また、聖女の中でも外に出なかつた者はそのまま修道院で洗礼を受け、シスターとなった。

これがセント・マルガリタ修道院に於ける顛末。

全てを終え、気が抜けたのかユートはずっと溜息ばかりを吐いていた。

「お・に・い・さ・ま」

「おわっ!?!」

行き成り後ろから抱き付かれて、ユートは吃驚して声を上げる。

「ユーキ?」

ジョゼットは現在、オガタ家の長女……【ユーキ・ジョゼット・ドルニエール】と名乗っている。

オガタの名前は直系の跡継ぎであるユートと、妻しか名乗れない。

だから、オガタの名前は名乗っておらず、ジョゼットの名前をミドルネームに残して、前世の名前【祐希】をファーストネームとして名乗る事になった。

前世云々は、ジョゼットとユートの間のみの話しで、サリユート達にはユーキの名前は下手に本名を名乗る訳にはいかないと説明。

何処の血筋かも説明はしており、サリユートもユリアナも納得した。

フェイスチェンジは使っているが、顔の作りは以前と違ってユリアナをベースとしてある。

流石に、シャルロットという双子の姉が居る上、髪の毛の色が青で

は誤魔化しが利かないから、フェイスチェンジを使うしかない。

そんなユーキは、義兄となったユートにベツタリだ。

勿論、お互いに性的な意味合いは無い。

「何を黄昏てるのかな？」

「いや、別に……」

「ふん？」

「ただ、ちよつとき。この数年間は駆け抜けたって感じで、だけど大きなヤマを越えたからか、少し気を抜いたら郷愁の念に駆られちゃったんだよ。女々しいかもだけど、前世の両親とか妹を思い出してね」

「そっか」

ユーキはそう言って、自身の胸にユートの顔を埋めて抱き締める。

「って、ユーキ？」

「君は忙しいくらいが丁度良いのかも知れないね」

暫らくはそうして、離れるとにこやかに笑顔を浮かべて言う。

「早く降りて来なよ、お兄様！」

食堂に向かったのだらう、行ってしまったユーキ。

「まったく、ユーキの奴」

『兄さん！』

「っ！ 白亜……」

前世の妹、緒方白亜を思い出し、ユートはずっと仕舞ってあった匣を取り出して見つめる。

白亜の高校入学の祝いに買っておいたペンダント。

「父さん、母さん……」

今の生活に不満は無い。

それでも、突然の死による別れは辛かった。

「父さん、母さん、白亜、ごめん、ごめんなさい」

ポロポロと涙を流し、呟くユートを扉の向こうで窺っていたユーキは、意を決した様に食堂に向かう。

一頻り泣いて、少しは気分も落ち着いたユートが食堂に来ると、待っていたのかサリユート達は未だ食事に手を付けていない。

「遅いぞユート」

「すみません、父上」

頭を下げ、メイドが引いてくれた椅子に座って食事を始める。

オガタ家では基本、始祖ブリミルがどうのこうのと、祈る事はない。

「」「」「戴きます」「」「」

この挨拶は、オガタ家初代から続く伝統だ。

「コート」

「はい？」

朝餉も終わり、紅茶を飲みながらサリユートはユートを呼ぶ。

「今日は虚無の曜日だし、珠には2人で出掛けてみないか？」

「へ？」

サリユートの突然の提案を聞き、思わず目が点になってしまつユートだった。

食事から一時間くらいが経って、サリユートは用意した馬車でユートと共に本当に出掛ける。

珍しい事もあるものだ、ユートは思う。

この数年間、一緒に暮らしていたが、母であるユリアナを伴わず出掛ける事なんてついぞ無かった。

少なくとも、仕事絡み以外では。



今回は100%プライベートなお出掛けだ。

仕事ではないのだし、新しい家族を放つたらかしくしてまで出掛ける意味は何だろうと、考える。

「どうしたユート？ 今日母さんも家でジョゼットの着せ替えを楽しんでいる頃だし、私達は私達で男同士愉しもうではないか」

「着せ替え？」

「うむ、ユートよ。母さんも私もお前に不満がある訳では無いがな、領地の大事な跡継ぎである。だがな、母さんは娘が欲しかったらしくてなあ」

何処か遠い目をする。

何というか、遣り切った男の哀愁が漂っていた。

「お前が二歳になった頃から毎晩励んだが、どうにもデキなんだよ」

「（父上、未だ五歳の息子にナニを言ってる？）」

突然の猥談に、ジト目になってしまうユート。

「（つてか、毎晩かよ！？ 道理で母上の肌が艶々してて、父上がやつれてた訳だな……）」

「いっその事、女物の服をお前に着せようかと言っていたな」

「……………え？」

思わずコートは硬直する。

「ち、父上……。今、何と仰いましたか？」

「お前に”女物の服を着せると言っていたのだよ”

「（は、母上えええっ！）」

危うく女装させられる予定だったと知り、コートは思い切り心の埋で叫んだ。

「そう言えば、温泉作りはどうなっている？」

「あゝ、はい。取り敢えず来年には施工が完了するかと思われます」

毎日少しずつ工事をして、半分くらいの進捗状況だと自負していた。

其処までで約半年。

残りを半年とすれば、一年で完成と云う事だ。

今年中の完成は不可能だと考えている。

「来年、温泉が完成したら旅籠を造りたいので、父上の部下をお借りしたいのですが？」

「構わんぞ」

「それと、旅籠は貴族用と平民用で頒けるので、二つ用意します。温泉も数カ所に掘って、頒けますから」

ユート自身は平民に隔意を持たないが、貴族……取り分け驕り（プライド）だけは一丁前なトリスティン貴族は、平民と同じ湯には入らないだろう。

「そうした方が善かろう」

サリユートもそれが解っているから、ユートに何も言わない。

「ところでユート、先程から気になっていたんだが、足元の匣は何だ？」

「これですか？ クーラーボックスですよ」

「く〜ら〜ぼつくす？」

「はい。断熱材を内側に張り巡らせた木の匣の中に、氷を入れて溶け難くした物です。プロトタイプですが今回、ちょっと遠出すると云う事なので持って来ました。中身は水とワイン……それに、缶ジュースです」

ユートが取り出して見せた物は、プルタブの缶に入ったジュース。

果実を絞ったジュースに、錬成で炭酸を混入した物をアルミ缶に封入。

プルタブで簡単に開けられる仕様となっている。

まんま、現代の缶ジュースだったりするが、印刷が無い銀色の缶に【炭酸飲料】と書いて、オガタ家の紋章が刻んであった。

鉄だと重いし錆びるので、アルミニウムを錬成してみたのだが、この試みが殊の外上手くいったのだ。

勿論、缶の中は真空状態でジュースが直ぐに悪くなる事もない。

その内、1ドニエで販売を予定している。

空き缶は1スウで回収する心算だ。

「飲んでみますか？」

サリユートに渡す。

自分もジュースの缶を手にとると、プルタブを開けて炭酸砂糖水を飲んだ。

サリユートに渡したのは、アップルジュース。

「ぐくぐく、ふう……」

飲んでみて、サリユートは驚愕した。

「冷たいな。確りと冷えている様だ」

ずっとクーラーボックスに入れてあったし、保冷だけでなく中身を冷やす効果も抜群だった。

「大きめのクーラーボックスを造れば、魚の輸送にも使えると思うんですよ」

「成る程な。確かに売れそうだ」

勿論、冷えた缶ジュースの販売にはこのクーラーボックスが力を発揮する。

流石に冷蔵庫を造るのは、未だ無理だったがその代用にはなるだろう。

ユートはこうして、試作品を造ってはサリユートに試して貰い、コスト等を考えて売れるかどうかの意見を聞いていた。

大丈夫そうなら、造り方をサリユートに教え、部下のメイジを使って量産して貰う事になる。

売れば金になるし、今や小遣いは貰っておらずに、技術量としてパテントを取る形で大金を獲ていた。

それは秘薬の分野にも及んでいる。

「新しい秘薬の開発は進んでいるのか？」

ジュースを飲み続けながらも、新しい話題を振る。

「はい。先に造った、ポーションやハイポーションが好評でしたので、解毒薬を造ってみました」

「解毒薬？」

「はい。蛇、百足、蜂、蛙など毒を持つ生物は数多く存在します。人間が毒物を調合する事もありますし。そんな毒を消す為の薬が、解毒薬です」

現代人なら普通に暮らしていれば、案外と毒物と無縁でいられるが、この世界では開発が進んでいない分、毒と無縁ではられない。

実は可成り重宝する薬だ。

最近になって完成させた、スレイヤーズ魔法の一つの【麗ディクリアレイ和浄】の効果が付随させた秘薬で、大概の毒は消える。

尤も、あのエルフが調合した毒には効果が無いと思われるが。

「流石に魔法が関わってくると、残念ながら効果範囲外でしょうけど」

「それでも十分だな」

少なくとも、現在まで出回っている人間の造った毒物や、自然界の毒は粗方を消していた。

即死さえしなければ、治療は可能だと云える。

ユートが開発 サリユートに報告 実験 部下に量産させる 王家に献上と利権の確保 商人組合を使って販売……。

現状の販売までの流れだ。

「今回はクーラーボックスと缶ジュースと解毒薬か。忙しくなるな」  
帰ってからの仕事量を考えると、サリユートは嬉しい反面で頭を抱えた。

「無事に売れたらパテントを宜しく、父上」

「判っているよ」

笑っていると……

ガタンッ！

「うわっ！」

「な、何だ？」

突然の急停車で、物凄い振動があった。

ユートもサリユートも振動に揺られ、吃驚してしまって叫ぶ。

「痛タタ〜。何があっただんだ!？」

「それが、近くの村の娘でしょうか？ 飛び出して来ましたので。お怪我は有りませんか？」

「私達は平気だが、その娘は平気なのか？」

「挽いて訳ではありませんので、大した怪我は無いかと思われませ  
が」

どうやら、村娘が飛び出して来たのが急停止の原因だったらしい。

ユートが馬車から降りて、近付いて固まる。

少女は黒い瞳をしており、艶のある黒髪をボブカットにして、村娘っぽい素朴な服を着ていた。

帽子を両腕で胸元に抱えていて、見ればユートと同じ年くらいの年齢だ。

そんな少女を見て、硬直したユートが呟く。

「……………くあ……………？」

ポロリと、ユートの頬を伝う一筋の涙。

少女は真つ青な表情になっており、頭を擦り付けるくらい低心平頭で叫ぶ。

「き、貴族様！ 申し訳ございません、どうかお赦し下さい。生命ばかりはお赦しをっ！」

ガタガタと震えて、只々謝り続けていた。

そんな少女に対し、ユートはギュッと抱き締める。

「ヒイツ！？」

混乱したのか、少女はいつそ憐れな程に恐怖して悲鳴を上げた。



だが、ユートは気にも留めずに抱き締めながら名前を呼んだ。

「白垂っ！」

抱き付かれた少女も、見ていたサリユートと御者も、意味が判らずに呆然となっていた。

「ひいいいつ！？ 嫌ああああっ！」

抱き締められた少女は必死に逃げようと、ジタバタと藻掻く。

しかし、ユートの力が強くて抜ける事が出来ない。

少女の表情は、真っ青を通り越して最早蒼白になっていた。

貴族。

少女に……否、平民にとっては恐怖の対象。

魔法という脅威にして悪魔の如き力を行使し、力無き平民を虫けらの様に殺す。

故に、平民は貴族に隷属するより他に道は無く、貴族のする事に文句を言う事など出来はしない。

例えば、貴族が伽を命じれば嫌でも従わなければならない。

拒否すれば、逃げ出せば、その累は家族に向かう。

自らを高貴だと謡ながら、高貴とは程遠い行いを平然とする。

それが少女の識る貴族。

少女は思う。

自分はこの貴族様に目を付けられた。

自分の人生は終わったと。

必死な表情で藻掻き、逃げようとしながらも最早、諦めていた。

「くら！」

ガイン！

少女から見た大人の貴族が少年貴族を叩く。

「痛てえ！ 父上、何をするんですか？」

「まったく、何かは知らんがな。お嬢さんが恐怖に引き吊っているぞ！」

「っ！？ あ、ごめん！」

サリユートに言われ、慌てて手を放して離れる。

そんな様子に、少女は目をパチパチと瞬き、窺う様な顔でユートを見つめた。

未だ顔面蒼白だが、少しは落ち着いたらしい。

「済まないな、お嬢さん。息子も悪気は無かったんだろぅが、きつとお嬢さんの愛らしさに理性が飛んでしまったのだろぅ。赦してやってくれないか？」

「あ、いえ……。そんな」

大人の貴族の言葉に、恐縮してしまう。

「って、父上っ！ 何ですか、人を変質者みたいに」

「近付いて行き成り女の子に抱き付くのは、変質者ではないのか？」

「うぐっ！」

流石に先程の行為を鑑みると、反論が出来ない。

バツの悪い表情で、ユートは少女の顔を見た。

「（白亜な訳がない。大体にして、顔が似てる訳でもないし。黒髪と黒瞳で、懐かしさから白亜を思い出して血迷った事をしたな）」

冷静に分析するユート。

「（あれ？ ハルケギニアに黒髪黒瞳？ この娘って真逆……）」

ハッとなり、サリユートへ振り返ると訊いてみた。

「父上、この辺は何処ですか？」

「うん？ ラ・ロシエールを越えたアストン伯の領地だな」

「やっぱり！（タルプ。だとしたなら、シエスタかジェシカか？）

「兎に角、この俣というのも良くない。

ユートは少女に手を差し伸べる。

「突然、抱き付いたりして本当に済まない。さ、立てる？ 怪我は無いかな？」

「そ、そんな？ 恐れ多いです！ ……っ!？」

遠慮して立とうとしたが、顔を顰めてしまう。

「何処か怪我を？ 脚を診せて！」

「脚……」

顔を赤く染める少女。

「怪我を診るだけだから、変な想像はしないで!？」

叫びながら、長いスカートに隠れた脚を診る。

勿論、スカートは捲って。

転んだからか、膝から血が流れていた。

「父上、クーラーボックスから水の入った瓶と、綺麗な布を！」

「ん？ 父を使うか？」

「立つてる者は親でも使います！」

「やれやれ」

サリユートは、言われた通り水と布を出す。

土と火を得意とする故に、水系統の治療は苦手だ。

だから、サリユートは息子に任せるしかない。

「少し染みるよ」

ユートは瓶の蓋を開けて、少女の膝に掛ける。

「うっ！」

土埃が着いた傷口を、水で洗う流して布で拭く。

そして、治療の為の魔法を少女に掛けた。

口では……

「イル・ウォータル・アース・デル」

と、唱えている。

しかし、頭の中では……

『聖なる癒しの御手よ、母なる大地の息吹よ、願わくば我が前に横たわりしこの者を、その大いなる慈悲にて救い給え……』

スレイヤーズの呪文を詠唱していた。

「リカバリー  
治療」

水を主体とした治療魔法だが、イメージ的に大地の自浄力が在った為、水・土のラインスペルを使う。

【リカバリー  
治療】

スレイヤーズに於いては、割と一般的な回復魔法。

使い手も数多い。白魔術に分類されるが、実際は精霊魔術である。

被術者の体力を代価とする為、風邪の時に使うと抵抗力を失い、却って悪化する。

見た目の効果は【癒し（ヒーリング）】と変わらないが、触媒である水の秘薬を必要としない魔法だ。

勿論、癒し（ヒーリング）も秘薬無しで使えるが、効果や消耗がやはり違う。

傷はあっという間に消えてしまった。

「もう立てると思うよ」

少女はソツと立ち上がる。

確かに痛くない。

「あ、あの！　ありがとうございます、貴族様。只、お代なんです  
が……」

「お代？　要らないって。こっちにも非はあるしね」

「え？　でも……」

吃驚した表情になった。

「貴族が怖いと思うのは、まあ判るよ。普通なら一方的に君を罰するだろうし。でもね、僕も父上もそんな心算は無いから安心して」

怖ず怖ずと、少女はユートの表情を見定める。

直ぐには信じられないが、この仮というのも失礼だ。

「わ、判りました……」

少女の立場では、こう言うしかない。

「お嬢さん、タルブを知っているかね？」

「は、はい。私の住んでいる村ですが……」

「それは丁度良かったな。良ければ案内して貰えないかい？」

サリユートの言葉に、否を言える筈もなく……

「わ、判りました」

「あ、僕はユート。あっちは父上のサリユート。君の名前を教えてください。」

「は、はい。わ、私は……シエスタと申します」

少女は、そう答えた。

### 【タルブ村】

広大な草原、深い森。

その近くに在る村。

葡萄畑が所狭しと並ぶ。

それがタルブ村。

ワインの名産地で、これはオルニエールワインも適わない分野だ。

サリユートは、鬱ぎ込んだユートに草原を觀せてやろうと、初めからタルブ村を目指していた。

序でに。飽く迄も序でに、タルブ名産のタルブワインを購入しよう



とも思っているが……。

タルブ村に着くなり、村人が群がって来る。

貴族の家紋を刻む馬車が来れば、村人としては確かに気になるだろう。

最初に出て来たのは大人の貴族。

次に、子供の貴族。

更に、子供の貴族に手を引かれて出て来たのは、村の住民たる少女だった。

全員が驚愕する中で、村長が進み出る。

「これは貴族様。このような村に何用でしょうか？  
それと、我が村の娘が何故ご一緒には？」

サリユートは、事のあらましを村長に告げた。

「成る程、そうでしたか」

村長は納得する。

と言うか、貴族が言う事である以上は納得“するしかない”だろう。

シエスタは、家族と抱き合って無事を喜んでいる。

解ってはいしたが、これこそ貴族と平民の隔意と言つ事なのだろう。

祖父らしき老人よりも更に年老いた老人が、シエスタに近付く。

「曾祖父ちゃん！」

「おお、シエスタ」

シエスタの祖父より老いていながら、明らかに足腰が確りとしている。

「（曾祖父つて。じゃあ、あの人は佐々木武雄さんなのか？）」

原作時、今から12年後の噺で彼は「数年前に亡くなった」とある。詰まりあと数年の寿命ではあるが、現在は生きていても不思議ではない。

シエスタと佐々木武雄翁。

図らずも、ユートは原作組と邂逅を果たすのだった。

第11話：ユートの郷愁（後書き）

前世の郷愁に襲われ、家族に心配を掛けてしまった。

妹に気遣われるダメ兄貴？

今回の噺の為、プロットを二回も破棄しました。

上手く書けていれば良いのだけど……。

外伝斬：ボクがジョゼットになった理由（わけ）（前書き）

時間軸的には、次の斬より後になります。

R - 15な表現があるのでご注意ください。

外伝斬：ボクがジョゼットになった理由（わけ）

ユートが魔法を部屋に掛けると、銀髪の少女が科を作りながら言う。

「お兄様、深夜に部屋に呼び出した上に、扉にロックを掛けてサイレントまで念入りに。ボクはこれから、お兄様に押し倒されて襲われたやうのかな？」

スパカーンッ！

「あ痛ああああつ！」

その瞬間、愛刀？ ハリセン丸が少女のド頭にヒットした。

「お兄様……。乙女の頭になんて事を！」

少女はハリセンに叩かれ、赤くなった部分を擦りながら文句を言う。

「ド喧しい！ 五歳の僕と三歳のユーキで、んな艶っぽいイベントが起きる訳がないだろう！？」

「プーッ！ お兄様ってばシエスタを連れ帰って元気になったのは良いけどね、その切っ掛けを作って上げたんだから、もう少しボクを労って欲しいよ」

「ハア……。それは感謝してるけどな」

ユートは盛大な溜息を吐いて、床に座った。

少年の名前は、ユート・オガタ・ド・オルニエール。

現在は五歳で、ド・オルニエール領の次期領主。

実は【受容世界】と呼ばれる世界から、このハルケギニアに転生した【転生者】でもある。

#### 【受容世界】

それは、とある世界を俯瞰して因果情報を受け取り、容れる世界。この土地で起きるだろうある出来事を、ユートの世界の人物が受け取って、それをメディアで発表する事で、原典を識る一助となった。

ユートの世界に於いては、【ゼロの使い魔】と称される作品として。

そして、ユートの目の前の少女。

名前は、ユーキ・ジョゼット・ド・オルニエール。

ガリア王国の王子、シャルル・ド・ガリアと夫人の間に生まれた双子の片割れ。

シャルロット・エレヌ・ド・ガリアの妹だ。

故に、ユーキが身に付けているアクセサリーであり、マジックアイテムを外す事で、青い髪の毛となる。

ジョゼットがド・オルニエールを名乗っているのは、先のセント・マルガリタ修道院襲撃？ 事件で貴族の子女や、修道女、聖女達と共に連れ帰り、サリユート・ド・オガタ・ド・オルニエールと、ユ

リアナ・オガタ・アウローラ・ド・オルニエールの養女となったからだ。

ユーキは年齢的に、ユートの義妹と云う事になった。

それでは何故、ジョゼットが名乗るファーストネームがユーキなのか？

理由は二つ。

一つ目は、ジョゼットを名乗り続けてはヴィットーリオやガリアに目を付けられ易くなる。

二つ目は、ジョゼットが実はユートと同じ転生者で、嘗ての名前が【橋本祐希】だったから。

「それで、義妹の純潔を弄ぶのが目的じゃないなら、何の用？ 未だ三歳の身には、夜更かしは辛いんだけどな」

「今の内に訊いておきたい事があるんだ」

「訊いておきたい事？」

「この前は有耶無耶になったけど、ユーキが……否、橋本祐希がジョゼットとして転生した詳細をだよ」

ユーキは目を閉じ、ゆっくりと深呼吸をして再び目を開き、ユートを見据える。

「ま、何れは聞かれるんだろうとは思ってたよ。兄貴は抜けてる様

で、存外と確りしてるしさ」

茶化す気が無くなったのだろう、からかい半分で呼ぶ【お兄様】から【兄貴】に変わっていた。

「話すよ。橋本祐希の人生と、転生の理由を……さ」

【橋本祐希】は、【緒方優斗】の様に江戸時代は武家だったとか、そんな背景がある家柄に生まれた訳ではなかった。

両親は不仲で、高校に進学してからは、見たくもない夫婦喧嘩に巻き込まれなくなかったから、学校の近くのアパートを借りてバイトをしながら暮らす。

だからだろうか？ 基本的には内向的で、趣味に没頭する時間が多かった。

ライトノベルの世界に逃げ込んで、昔から好きだった発明品造りをする事によって、外界からの情報をシャットアウト。

とはいえ、友人が居なかった訳ではないし、彼女だって居た。

飽く迄も、趣味に没頭している時だけシャットアウトしていたのだ。

幾つかの発明品が当たり、特許を獲られたから金回りも中学三年生になった頃には、随分良くなっていた。



時折、突拍子もない発明品を造る以外は、特に問題もない素行の良  
い生徒。

それが橋本祐希が周囲から受ける評価だ。

そして発明品に関しては、早い内から彼の閃きや造り出す手腕に目  
を付けた財団が在った。

高倉財団のトップを務める高倉家当主、高倉 譲。

譲翁は既に60歳を越え、息子の高倉庄治に当主の座を譲ろうかと  
考えていた。

高倉庄治には妻、高倉秋奈との間に3人の娘が居る。

高倉結芽(23)

高倉恵那(20)

高倉翔子(16……付き合い出したのは13)

譲翁は、未だ中学生の頃に孫娘の1人の翔子に、祐希の恋人となる  
様に命じた。

翔子は所謂、大和撫子に育てられた少女であり、祖父の言葉に逆ら  
う事は無い。

しかも、余りに真っ正直にアプローチをしたのだ。

『私は祖父の命令で、橋本君の頭脳を手に入れる為、貴方とお付き合いをしたいと思います』

呆気に取られた祐希。

それはもう、いつそ清々しいくらいに裏表が無い言い回し。

ただ、讓翁は孫娘を大事にしているのは確からしく、そんな大事な孫娘を使ってまで望まれたと言うなら、それも良いかと考えた。

翔子との交際は、中学二年から高校二年まで続いて、唐突に終わる。

別れたのでは無い。

発明品の事故で、祐希が死んでしまったのだ。

しかも事が事だけに、表沙汰には出来なかった。

バイオリズムを応用して、性交中に相手の受ける感覚を、自分にフイードバックする実験。

切っ掛けは翔子との初体験以後、翔子が至った時の感覚を識りたいという欲求。

発明家だけあり、祐希には知的欲求を抑えられない処があった。

上手くいって、システム化出来れば殴られる痛みを、殴った相手に教えられる様になる。

そうなれば、無駄な争いや暴力主義も減るんじゃないかと考えたの

だ。

シャワーを浴びて、ホカホカと肢体から湯気を立ち上らせ、翔子が困った表情でペタリと座り込んでいる。

相互に感覚を共有する為、これから翔子が行おうとしている事は、祐希の感じた感覚を自分も感じるという事だからだ。

確かに、興味が無いと言えば嘘になる。

しかし、実際にするとよやはり躊躇う。

「本当にするの？」

「うん。頼むよ翔子。他に頼める相手も居ないし」

「居たらお祖父様に殺されると思う……」

「……かもね」

クスクスと笑い、少しは吹っ切れたのか翔子は祐希の股間へと、顔を近付けた。

第一の実験は成功。

誤算だったのは“味”までフィードバックしてしまった事だろうか。

「ウプ、変な味……」

祐希の絶頂を、していた側の翔子も感じて、同じ様に絶頂していた。

同時に、得も知れない味が祐希の舌に感じられる。

「み、味覚は切れる様にしておくべきだったよ」

「あの、それっていつも私が味わってるんだけど？」

胡乱な目付きで、祐希を睨む翔子。

「アハハ……」

笑って誤魔化すしかない。

「と、取り敢えず次の実験に進んでみようか？」

次……本番という訳だ。

祐希は翔子を抱き抱えて、ベッドに横たわらせる。

自分は翔子の上に覆い被さると所謂、前戯を始めた。

翔子の受ける快樂が、祐希にフィードバックされる。

触れてもいない祐希の部位に、触れられて感じた事の無い感覚があった。

2人はまるで溶け合う様な感覚を覚えながら、快樂に耽って抱き合う。

祐希が翔子の乳房に触れば、同じ部位に同じ刺激が奔る。

逆に、翔子が祐希の敏感な部位を擦れば、同じ刺激が奔った。

そんな繰り返しを続けて、遂に核心へ。

そして2人共が高まっていき、同時に果てた。

「ハア、ハア、ハア……。いつもと全然違うよ。一緒に男の子も感じちゃった」

肩で息を吐きながら祐希を見るが、祐希は反応を返してこない。

「……祐希？ 疲れて寝ちゃったの？」

祐希を揺するが、起きてくる気配は無かった。

「初めて味わう女の子の絶頂、気絶するくらい良かったのかしら？  
……え？」

ふとした弾みで触れた祐希の左胸。

「嘘、心臓……動いてないよ？ 祐希？」

何度も揺さ振るが、全くの無反応。

「嘘、嘘、嘘っ！ 起きて祐希！ ねえ、目を開けて……ゆづきいいいいっ！」

「あれ？ 此処は？」

「やるね、色男。腹上死なんて男の野望ゆめなんじゃないかな？」

何故か真つ暗な空間に独りで漂う祐希。

キョロキョロと辺りを見回すと、上の方から声が聞こえてきた。

祐希が見上げると、其処には栗色の長髪をポニーテールに結った、紫水晶を思わせる瞳の女性が、白い服を纏って浮いている。

「高町なのはのコスプレ……？」

余りに似ていた為、呟くと桜色の刃が頬を掠めた。

「……」

「私は高町はるな。なの姉と一緒になんてしないでくれるかな？」

「イエス・マム！（妹？ そんなの居たっけ？）」

先程のは、はるなの得意技ディバインセイバーだ。

祐希は、脂汗を流しながら答えた。

「さて、橋本祐希君」

「はい？」

「貴方は死にました」

「は？ 何故に？」

理解が及ばない。

死ぬ要因が在ったとは思えなかった。

「あのね？ 女の子の絶頂ってさ、初めからそれ前提に創られてる女の子の身体と違って、男の子には負担がキツいんだよ。詰まり、祐希君は翔子ちゃんの絶頂を受けて、心臓が麻痺して死んじゃったの」

「マジ？」

「大マジ！」

祐希は膝を突いてしまう。

「僕は、何てアホな理由で死んだんだ！？」

全く同情の余地も無い。

「翔子は？ 翔子はどうなったんだ？」

「あの子は生きてるけど、貴方の死で精神的に壊れちゃったかもね？」

「そんな……」

それは二重の絶望だ。

自分は死んで、その所為で恋人が壊れてしまった。

「発明の趣旨は良かったんだけどね、使い方が悪かったんだよ」

はるなの声は、既に死んだ身にすら死刑の宣告に聞こえる。

いつその事、自分も壊れてしまえばとすら思う。

「何とかして欲しい？」

「出来るのかっ!？」

「私はこれでも【異天の星神】という、神名を戴く神だからね。君が私の依頼を受けてくれるんなら、対価として救けて上げるよ」

【異天の星神】

高町はるなが神化した際、与えられた神名。白き騎士と共に、世界間を跳び回っている異界の天を瞬く星そらという意味。

「依頼？ 依頼って、何なんだ？」

「とある世界群に、なの姉が選んだ人物が邪神を追い出す為に転生したんだよ。貴方は彼を追って、それを手伝ってくれば良い」

「とある世界群？」



「確か、【ゼロの使い魔】の世界。なの姉には負けられないからね、私も君を送り込むんだよ」

「どうして僕だったんだ？ 僕である必然性が解らないんだけど」

「嘗て、君の同位体。詰まり、別の世界の橋本祐希君が同じくハルケギニアへと転生したんだ。それを見込んで祐希君を監視していたんだ」

観ていたなら、止められたんじゃないかと思っただが、それが八つ当たりだと気が付いて言わなかった。

それを呑み込んで訊ねる。

「二次創作よろしく転生って事は、何か特典が付いたりするのかわか？ 邪神を追い出せと言うなら力が必要。」

「私は下級神だから大した力は上げられないけどね、それなりの力は大丈夫」

「……。ゼロの使い魔か。なら、虚無を使いたいな」

「虚無？ 私の力だと既存の人物への憑依転生させるしかないよ？」「へ？ それって、ルイズかティファニアかジョゼフかヴィットーリアになるしか無いって事？」

はるなは頷く。

どの人物を選んでも、先に転生したらしい味方と無関係に原作ブレ

イクしてしまいそうで、それが怖い。

それに下手をしたら、味方の筈が敵視されてしまっつかも知れない。

「（そつだ、いつそ全部をリセットしよう。男だった事実も……。それに中盤までは関わらないキャラだったらイケるかな？）」

そう考え、ものは試しに言ってみた。

「ガリアの虚無の予備であるジヨゼットに転生して、初めから虚無に目醒めている状態。呪文も覚えている様にして。あと、僕の科学技術を彼方側で造れる様、何か欲しい！」

「ま、それならやれるよ」

「え？ 本当に？」

ダメ元で訊いたのだが。

「（性別が女の子なら、憧れのあの人の傍に居られるよね）」

祐希は【ゼロの使い魔】だけではなく、色々なライトノベルを読んでいる。

だから知識も豊富だ。

「それじゃ、送るよ？」

「は、はい。翔子の事を、お願いします」

「うん。解ってるよ」

「(さよなら、翔子……。そして、ゴメンな？ 勝手に死んじゃってさ)」

パカッ！

「へ？」

「お約束……だよ」

「ウワアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!？」

ニンマリと、魔王な笑みを浮かべるはるなの顔を最後に、橋本祐希はジョゼットへと転生するのだった。

「……と、言う訳だよ」

「訊いた僕が莫迦だった」

ユートは頭を抱える。

真逆、そんなマヌケな死因だったとは。

しかも、恋人が居たなんて思いもよらなかった。

何か、やりまくってるし。

「（俺、彼女すら居なかったのになあ……）」

嘆息するユート。

「もう寝るわ」

ユートはベッドに入った。

「うん。一応、真面目な話だったんだけどな。ふわあゝあ！ 眠い……」

三歳の身には本当に夜更かしが辛い。

ユーキも寝るべく、ベッドへと入る。

自分の部屋には帰らずに、ユートのベッドへ。

翌朝、起こしに来てくれたシエスタに見られ、ユートはアタフタする事になるのだった。

外伝斬：ボクがジョゼットになった理由（わけ）（後書き）

これが橋本祐希君が、ジョゼットに転生した理由。

可成りアホな理由にしてみました。

第12話：一石三鳥でGETだぜ！（前書き）

タイトルが少々、アレだけど完成です。

## 第12話：一石三鳥でGETだぜ！

「珍しいのう、貴族様が村に来るんは……」

成る程、佐々木武雄翁は元とはいえゼロ戦を駆って、飛び回った軍人。

シエスタの祖父よりずっと歳が上にも拘らず、ガツシリとしている。

実際、あと数年の生命だとは思えない。

だが、悲しいかな。

生物の寿命とは必ず訪れるものであり、先に生まれた者が先に逝くのは突発的な事故や、病気などでもない限り運命さだめだろう。

「初めまして。シエスタの曾お祖父さんですか？」

「ほう、随分と丁寧な貴族様よな。初めまして、私がシエスタの曾祖父の佐々木武雄です。あ、いや。此方風ならタケオ・ササキとなりますか」

「ご丁寧にも。ユート・オガタ・ド・オルニエールと云います」

「ん？ オガタ？」

まるで“日本人”の様な名前に、佐々木武雄翁は首を傾げた。

そんな武雄翁に、ユートは更に話し掛ける。

『是非とも2人で話をしたいのですが、宜しいでしょうか？ 武雄翁』

「っ！？」

日本語で言われ、驚愕に目を見開く。

この六十年近く（未だ六十年は経っていない）、永らく人から純粋な日本語を聞く事は無かった。

武雄の言葉は日本語だが、何故か勝手にハルケギニアの言語に変換され、誰かが話すハルケギニアの言語は日本語に変換されている。

それが、口の動きに合わせた日本語は初めてだ。

周囲も、ユートが何を話したのか理解出来ない事から、それが純粋に日本語だったのは間違いない。

ハルケギニアの人間が直接使った日本語故に、翻訳されずに伝わった。

鏡のような召喚ゲートを抜けると、召喚された人間の言語は自動的にハルケギニアの言語となり、聞く言葉は日本語になる。

詰まり、彼方は普通にハルケギニアの言語を喋っているに過ぎない。

ところが、貴族の少年が発したのは日本語。



ゲートを潜った訳ではない為、翻訳はされない。

「貴族様、アンタは日本語が解るのか？」

『ええ。判りますよ』

「判りました。では後で、羽衣の場所へ来て下さい。場所はシエスタが判りますから」

そう言つて、家に引つ込んでしまふ。

「曾お祖父ちゃん？」

シエスタは首を傾げた。

どうやら曾祖父は、貴族様を“あそこ”へと案内しろと言つていたが、どういう事なのか判らない。

それに突然、意味の判らない言葉で話し始めた貴族様の言語を理解していた。

シエスタには本当に判らない事ばかりだ。

「それで、貴族様。今日はタルブにどのようなご用でしょうか？シエスタの件だけでしたか？」

村長がサリユートに訊ねると、思い出したと言わんばかりに頼む。

「タルブのワインを購入したいのだが、売っては貰えないか？」

サリュートの注文に、村長は笑顔になった。

【佐々木家】

シエスタの家では、貴族を歓待する為の宴が催されていた。

サリュートとユートのたつての願いで、タルブの名物料理を食べたいと言われ、本家本元の佐々木家で食べる事になったのだ。

「あの、これがタルブ名物のヨシエナベです。しかし本当にこんなモノで宜しかったのでしょうか？」

シエスタの父親が、恐縮しながら訊いてくる。

「勿論ですよ。ふむ、良い匂いだ」

「あの、これが取り皿になります」

シエスタがサリュート達に取り皿を渡す。

ヨシエナベは鍋料理。

その為、大鍋に具材を炒れて煮込んだモノを、思い思いに箸で取る。

皆に行き渡ると、申し合わせたかの様に唱和した。

『『『』』』』全ての食材に感謝を籠めて、戴きます！』』』』』

って、それは某・美食屋の挨拶だ！？

ってか、何故識っている？

それは兎も角、野菜や肉を煮込んだヨシエナベは美味しく、サリュートもユートも舌鼓を打った。

サリュートに至っては、名産のタルブワインを飲んで上機嫌だ。

「うん、旨い！　ウチのも悪くはないが、タルブワインはまた格別だな！」

「父上、余り飲み過ぎないで下さいよ？」

「判っている！」

どう見ても自重していない飲みっぷりに、ユートは溜息を吐く。

「ユート様、どうぞお代わりです」

「ありがとう、シエスタ」

具を装って貰い、どんどん食べる。

シエスタの笑顔と、美味しい鍋料理。

ユートも愉しくて、いつの間にか郷愁や寂寥感は無くなりつつあった。

その所為か、心にも余裕が出てきて少し冷静に物事を考えられる様になる。

そんな頭で改めてシエスタを見ると、黒髪のボブカットに黒曜石みたいな瞳。

貴族の女性が大輪の薔薇や百合なら、シエスタは野に咲く一輪の雛菊。

しかし、それはそれで鄙びる可憐さで魅了されるものがある。

「（シエスタ、可愛いな）」

あーぱー姫。

ルイズ。

カトレア。

エレオノール。

ジョゼット。

フィア。

イザベラ。

これまでに出逢った誰とも違う魅力、きつと多少踏み付けられても逞しく咲いていられる強さ。

「（欲しいな……）」

コートがそんな風に思ったとしても、それは当然の流れだったのかも知れない。

【その頃のド・オルニエール領の邸】

「お義母様、そろそろ勘弁して下さい」

「まだよ、コートが男の子だったから出来なかった事を存分にやりますからね」

「まだドレスを着せるのですかあ？」

義母ユリアナの手には、臙脂（赤紫）色のドレスが握られている。

子供用のドレス。

「一体、どれだけ買っていたのか……」

「さ、ジヨゼット。脱ぎ脱ぎしましょうね？」

「だ〜れ〜か〜、た〜す〜け〜て〜！」

ユーキは延々と、ユリアナに着せ替え人形をやらされていたという。

夜も深まり、しかし未だに宴も酣であった。

そんな中、ユートは羽衣の場所へと案内される。

「こちらです、ユート様」

「ありがとう、シエスタ」

最初は貴族様だったのが、今は名前で呼んでくれているシエスタ。

目標は、原作での才人と同じ【さん】付けた。

暗がり掻き分けながら、先導するシエスタを見つめてそう思った。

「武雄翁、来ましたよ」

「来られましたか」

まるで神社の鳥居の様な造りの門構えを抜け、着いた其処には間違  
いなくアレが存在している。

原作ではカヌーに翼みたいな物を付けただけ、こんなインチキが飛  
ぶ訳がないといわれた【竜の羽衣】。

その実体は、日中戦争から太平洋戦争後期まで使われた戦闘機。

「貴族様には、これが何か判りますかな？」

「零式艦上戦闘機。通称はゼロ戦。1940年（昭和15年）、皇紀2600年に制式採用された機体。」

故に皇紀の下二桁から零式と言われている」

挑発的な態度で質問され、ユートは【竜の羽衣】について識る事を答える。

それを聞き、佐々木武雄翁は驚愕の表情となった。

「この世界ハルケギニアの人間が、どうして零戦の事を……？」

況してや、皇紀は基本的に日本でしか通用しないし、雷電などでは廃止されているが、当時は皇紀の下二桁を使って形式番号としていた事実も識っているなど、日本の歴史に詳しくなければ判る筈もない。

『翻訳されない日本語を話している時点で、僕は純粋なハルケギニア生まれの、トリストイン人貴族です。ただどね、日本の事も僕はよく識っているんだ』

「っ！ 日本語……」

武雄翁の日本語は、ハルケギニアの人間には現地後にしか聞こえないから、口の動きと聞こえる台詞が合っていない。

その逆もまた然り。

ハルケギニアの人間が話すハルケギニアの標準語は、武雄翁の耳に入る際に日本語に翻訳される。

だから、ユートの口の動きと武雄翁の聞こえる台詞は普通、合っていない。

だが、先程の台詞は明らかに口の動きと聞こえる台詞が同期していた。

詰まり、ユートが先程使った言語は日本語だったと云う事だ。

「何故、貴方が日本語を使えるのですか？」

警戒心を顕に、武雄翁が訊ねる。

「僕は確かにこの世界で生まれた人間ですが、その前……前世が日本人だったからですよ。日本帝国 海軍少尉、佐々木武雄さん」

「私の身分までっ！？」

「此方はまた、別のソースですけどね」

因みに、シエスタも同席していたが、よく理解が出来ない言葉でユートが喋り、曾祖父が吃驚しているというシュールな光景を目の当たりにし、呆然とその様子を眺めていた。

そんな彼女に気が付いて、武雄翁はシエスタに言う。

「シエスタ、僕はこの方と大事な話がある。戻って宴に参加して来なさい」



「あ、はい。曾お祖父ちゃん」

シエスタは武雄翁の言葉に素直に答えると、一礼して家に戻って行く。

「これで宜しいですか？」

「翁のご配慮、痛み入ります」

ユートは、今だけは貴族である事を忘れ、日本人として年長者たる佐々木武雄翁に礼を尽くす。

「して、前世とは？」

「僕が僕になる前……俺は緒方優斗と名乗っていました。だけど、二十歳の時に車に挽かれそうな少女を助けようとして、自分が挽かれて死んでしまったんですよ。しかも結局、助けられなかったし」

「むづ？ 何と……」

「その後、あの世に逝く筈だと思ったけど、平行世界からの因果が繋がり、前世の記憶を保持した仮で転生する事になったと、女神（魔王）様に言われました」

「む？ 因果？ 平行世界ですと？」

太平洋戦争時代の人間である佐々木武雄翁に、因果律や平行世界は少し難しかったらしい。

「まあ、結果だけ見たなら死んだ俺が、今の僕に生まれ変わったと云う事です」

「な、成る程……」

「ですから、本当の意味で日本人に逢うのは、主観時間で五年振りです。実際、シエスタの黒髪と瞳を見たら懐かしくて、つい涙腺が弛んでしまいましたよ」

シエスタは日本人としては四分の一くらいしか血を継いでないが、先祖帰りとか隔世遺伝とかで、日本人にしか見えない。

顔の作り、瞳や髪の色が。

「それは、前世の記憶が在るならさぞや寂しい思いをしたのでは？」

「この五年、そんな事を考える余裕が無かったから、寂しいとは感じませんでした。少し落ち着いたからでしょうね。今更郷愁に襲われて、落ち込んでしまっただけです。それでタルブの景観でも観せようと思ったのが、父上に此処へ連れられて来たんです」

「そうですか、善きお父上ですな」

「はい」

それに、ユーキもだ。

恐らく、サリユートに此処に連れて行く様に進言したのはユーキ。

原作知識が在る以上、郷愁に喘ぐユートを落ち着かせるのに、日本

人に触れるのが妙薬になると考えての事だろうと、ユートは考えていた。

「此処に来たのは偶然だったけど、折角来たのだから佐々木武雄翁  
にお願ひがあります」

「お願ひ……ですか？」

「はい。このゼロ戦を僕に譲って戴けませんか？」

「む、うう？」

余りに突拍子もない事を、平然と言うユートに武雄翁は言葉を詰ま  
らせた。

「貴方がハルケギニアに流れ着いて、もう60年近く経ちます。ゼ  
ロ戦をお返しするべき陛下は既に亡く、彼方は年号も変わってしま  
って約20年。最早空を往くは、ゼロ戦など及びも付かない技術の  
飛行機です。ならこのゼロ戦を、停滞した湖の如きハルケギニアに  
一石を投じる一助として、僕に譲って欲しい！」

頭を下げ、佐々木武雄翁に希<sup>こいねが</sup>うユート。

ユートが望むのは力。

この似非中世のハルケギニアでは成る程、確かに力と成り得るだろ  
う。

原作で才人が使った様に。

武雄翁は考える。

自分にはもう先が無い。

既に80歳に届く自分が、日本に帰って陛下に零戦をお返しする事は不可能だ。

それに、確かにユートの言う通りで、当時の陛下は亡くなっているもおかしくはない。

目を閉じ、黙考して暫らく考え続ける。

どれくらい経ったか、目を開くとユートを真つ正面から見据え、口を開く。

「条件があります」

「条件？」

「何時の日にか、万が一にも地球へ行ける時が来たなら、儂に変わり陛下に零戦をお返しして欲しい」

「僕は召喚で来た訳では無いですし、不可能かも知れませんか？」

それに、場合によっては壊れるかも」

別にユートはこのゼロ戦を使う心算は無い。

複製して、そちらを使えば良いのだから。

幸いにもその宛が、最近になって出来た。

ユーキの能力と知識だ。

元が発明家のユーキなら、ある程度の知識はある筈だろうし、ユーキが神から貰った能力は、ある意味破格のモノ。

系統魔法の使い手と組み、科学技術を此方でも製作、量産が利く。

故に、ゼロ戦をコピーする事が可能となった。

それに、これまたユーキに頼む事になるが、虚無魔法の世界扉で彼方へのゲートを開いて貰えば、武雄翁の要望は満たせる。

「構いません。儂もあと、10年は生きられんでしょうし……な」

ただ、万が一でも希望が欲しかった。

それだけの事。

「判りました。その条件を飲みます」

いい意味で誤算だったのはユートに、条件を満たせる環境が有ると云う事だ。

「（それにしても、10年は生きられないか。原作の数年前に亡くなったのなら、確かにそうだよな。いや、待てよ？ うん、イケるんじゃないかな？）」

自分の考えを纏め、ユートは武雄翁に話してみた。

「武雄さん、もしも宜しければウチの領地で働いて貰えませんか！」

「？　しかし、僕ももう歳が歳です。満足に働けませんぞ？　連れ合いも疾うに亡くして、暇と言えば暇なのですが……」

働き者だったとはいえど、彼は召喚されたのが二十歳だったとしても、八十歳に近い老体。

既に、仕事関係を引退して久しいのだろう。

「それ程、力を使う仕事ではありませんよ。少し葡萄畑を拡げる予定が出来たので、素人の人にノウハウを伝えて欲しいんですよ」

「成る程、それなら僕にも出来ませぬ」

「あと、ゼロ戦の操縦を僕に教えて貰いたいです」

「はあ、教えるのは構いませんが、今の零戦は飛べませぬぞ？」

「ガソリンなら僕が造りますから、再びゼロ戦を飛ばす事も可能です」

「ほう……」

武雄翁の目が輝く。

やはり、彼も老いたとはいえ空の人なのだ。

某・白い魔王（神）様が飛び続ける事に拘った様に、彼も飛びたかったのだろう。

これで、元聖女の女性数人に葡萄畑を耕す為の知識を伝授して貰い、手に入れたゼロ戦を飛ばす知識と技術を獲られる。

それに、此方は少しアレではあるが、温泉療法で多少の延命が出来るかも知れないのだ。

温泉に延命効果は無いが、健康保持は可能。

環境的に、平民の寿命が短い可能性もあるから、温泉で延命出来るかもだ。

それに、オルニエル領に来て貰えれば、食事療法が出来る。

平民は食べ物を選ぶ範囲が極端に狭い。

ギリギリまで税を搾られ、生活の余裕が余り無いのが理由なだけに、少々申し訳が無気がする。

別にユートの所為では無いし、徴税官に何かを言える立場でも無いから、責任は無いのだが……。

オルニエルは所得税制度を実施して、所得によつて税額が変わるし、それ程の税率でもない為、平民達の購買力も上がっている。

結果的に税収も上がるから今のオルニエルは、嘗ては一万二千エキュールだった税収が、サリユートが領主となつてから30年経ち、数倍に膨れ上がった。

流石は無意識の知識持ち。

お陰で、ユートは領地経営だけに意識を割かず、存分にやりたい事をやれる。

「あ、そうそう。オルニエールでは現在、温泉を作ってますから完成したら入れますよ」

「ほう？ 温泉ですか！」

完全に墮ちた。

「（さうって、次だな）」

話し合いも終わり、2人は家に戻る。

そして、シエスタの父親に話しを通した。

「祖父とあの竜の羽衣をですか？」

「はい。竜の羽衣は後日、搬送の手配をします。それと……竜の羽衣は一応武雄翁の私物ですが、購入という形で引き取ります。千エキユーを、これも後日にお支払いしましょう。」

武雄翁の給料ですが、月額六十エキユーとなります」

「六十!?!」

シエスタの父親が驚く。

平民の年収は平均、120エキユーだと云う。



詰まり、税金を抜いて月額10エキユーも入れれば良い方だ。

それを考えれば破格。

「それから年に二回の賞与が与えられます」

所謂、ボーナスの事だ。

他にも細かい条件を提示、武雄翁はこれ以上無い待遇で迎えられた。

「それからですね」

此処からが本番だ。

高鳴る心臓を抑えながら、シエスタの方を向く。

「彼女を、シエスタをウチに欲しいのですが……」

「は？ それは、あの……どういう？」

「現在、僕の世話をしてくれているアニーが退職する事になって、専属のメイドを捜しています。とはいえ年齢が離れていると、また直ぐに寿退職になってしまうので、歳の近い娘を雇いたかったのですよ」

これは本当だ。

サリュートも既に承知している話し。

尤も、未だ決まっていなかったりするが。

最近、大量に入ってきた娘の中から選ぶ心算だったのだが、シエスタを見て彼女がほしくなった。

その為の交渉で、その為に武雄翁を雇い入れたのだ。

「仕事は僕の専属メイド。それから、武雄翁のお世話も仕事の一つです」

正に、一石三鳥。

しかし、簡単にはいかないだろう。

子供とはいえ、貴族の専属メイド。

歳を経れば、お手付きとなり妾とされる可能性があるのだから。

当然だが渋る。

貴族の要請には逆らえないが、それでも心情的に賛成出来ない。

「それは、将来的にお手が付く事も視野に？」

「っ！ はい……」

わざわざ指名したのだ。

誤魔化すのは愚策。

誠意を以て当たるのみ。

シエスタが平民である以上は、身分的に正妻や側室には出来ない。それで無理を通して、敵対勢力に隙を見せれば却って不幸にする。だからこそその措置だ。

「シエスタを不幸にしたい訳では無いので、幾つかの条件を出します」

ユートは条件を言う。

もしも、シエスタに好きな相手が出来れば祝福する。

16歳を越えるまでは絶対に手を出さない。

他の貴族にも、手出しはさせない。

仮令、16歳になったとしてもシエスタの意思を尊重する。

後は、給料や休み等の条件を整えた。

「さて、シエスタ」

「は、はひっ！」

シエスタは真っ赤になり、返事で噛んだ。

「こういう仕儀になった訳だけど、僕の所に来て貰えるかい？」

「はづ……。は、はい」

最終的には、行く行かないをシエスタ本人の意思に委ねた。

シエスタの両親、祖父母、姉弟も此処までの譲歩をされては納得するしかない。

サリユートとユートの人柄から、信頼出来る数少ない貴族だと判断したという事もある。

それに、数年は一緒に行く武雄翁が居る訳だし。

こうして、ユートはゼロ戦を回収、武雄翁とシエスタの雇用に成功した。

第12話：一石三鳥でGETだぜ！（後書き）

タルブ篇が終了です。

先の番外編はこの嘶の後に当たります。

### 第13話：水の聖痕（前書き）

今回はテンプレ、水の精霊に名前を付けるイベントが勃発します。

### 第13話：水の聖痕

メイドの朝は早い。

取り分け、専属するご主人様が居るメイドは寝坊を赦されない。

「ご主人様、朝です。起きて下さい」

ユツサ、ユツサと揺さ振られているユート。

起こしに来たのは何時ものアニーではない。

アニーなら『若様』と呼ぶだろう。

ユートを『ご主人様』と呼ぶのは、現状でたった1人だけしか居ない。

最近になってオルニエル家で雇われたシエスタ。

彼女だけだった。

シエスタは、ユートと同じ五歳とは思えない程の確りとした娘で、朝の早い仕事をきっちりと熟す為、先任のアニーが早くもユートを起こす役を譲ったのだ。

もうすぐ辞めるので、後継者となるシエスタを育てておかなければならない。

シエスタは嬉々として役目を受け継いだ。

今日はその初日と云う事もあり、シエスタも張り切って起こしに来た。

シエスタの格好は、トリステイン魔法学院のメイド服を小さくしたものだ。

昨日、出来上がったばかりの新品で、ユート自身が自ら仕立て屋に注文した。

やっぱりシエスタはコレだろう……とは、ユートの弁だ。

中々にしぶといユートに、業を煮やしたシエスタ。

「ご主人様、いい加減に起きて下さいっ！」

ピキリ……ッ！

一気に布団を剥ぎ取る荒技を仕掛け、硬直する。

ユートの隣に、ユートより小柄な銀髪の少女が眠りながらしがみ付いていた。

「な、何をしてるんですかああっ！ ユーキ様っ！」

シエスタは顔を真っ赤に染めると、大きな声で怒鳴り付ける。

「うんあ？ ああ、朝か」



当の本人は、何食わぬ顔で目元を擦りながら欠伸をして起き上がった。

「お早う、シエスタ」

「お早うございます。で、何故ユーキ様が、ご主人様と同じベッドで寝てるんですか？」

「何だよ、妹がお兄様とのスキンシップで、一緒に寝てただけだろ？ カリカリするなよ。何なら、明日からシエスタが添い寝をしてみるか？」

からかう様な口調で言ってみるユーキ。

「なっ!？」

シエスタの頬が、これ以上は無いくらい紅くなった。

「~~~~っ! ば、莫迦な事を言っていないで早く出て下さい! 大  
体、妹は妹でも義妹、血は繋がってないじゃありませんか!」

「気にするな。尚、ボクは気にしない」

「気にして下さい!」

シエスタの抗議にも笑いながら応え、さっさと自分の部屋へと戻る。  
着替える為だ。

「ハア……」

シエスタは溜息を吐くと、再びユートを起こしに掛かった。  
今度はすんなり起きる。

「お早う、シエスタ」

「お早うございます、ご主人様」

シエスタは笑顔と共に一礼するが、若干顔が赤い。

何気に先程の話が尾を引いているらしい。

何故か、ユートも少し紅潮している。

「あ、あのさ……」

「はい？」

「添い寝、してくれるのかな？」

ボンツ！

ユートが言った途端、まるで瞬間湯沸器の如く湯気を上げて、真っ赤になった。

「う、う、う、ご主人様？ さっきのユーキ様とお話し、訊いて  
!?!」

「そりゃ、あれだけ大声で叫ばれたら起きるよ」

「はわ、あわわわ……」

余りの慌てっぷりが可愛かったが、いい加減にしないと朝餉に遅れる。

「シエスタ、そろそろ着替えるよ」

「え？ あ、はい！」

ユートの言葉で熱が覚めたらしく、専属メイドとして仕事を始めた。

その内容はズバリ、お着替えだ。

原作に於いて、ルイズが言っていたアレだ。

『平民のあんたは知らないだろうけど、貴族は下僕が居る時は自分で服なんて着ないのよ』

まあ、実際の処は多少違うのだが……。

本来は仕事の分譲で、自分で出来る事も他人に任せて時間を空け、その分を別の何かに充てる。

ハルケギニアみたいな封建社会では、これは至極普通の考え方だ。

尤も、ハルケギニアの様な貴族が驕りを以て体現した世界では、間違った方向性に逝くきらいも在るが。

コートは寝間着を脱ぐと、替えのパンツを履く。

その後、シエスタがズボンと上着を着せてくれる。

原作を読んだ時は、正直に言っただろうかと思っただが、中々に良かった。

何が良いつて、着替える際に身体のおちこちを触れられて、微妙にこそばゆい。

相手が男だとそうでも無いのだが、それが異性だと思つと擦ったくて心地好い。

「（けど、流石にもう少し大きくなったらやめておいた方がいいな）」

コートはそう思う。

何故なら、あと数年後には精通する。

そうなればシエスタに触れられて、勃たない自信が全く無かった。

今だから出来る事だと割り切っているからこそ、現在はやって貰っているのだ。

着替えが終わると、食堂へ移動する。

「それじゃあ、シエスタも武雄翁を連れて食事に行つて来なよ」

「はい、それでは一時失礼致します」

これが日常。

コートとしては、親密度を上げてもらう少しざっくばらんに遣りたい処だった。

### 【食後】

朝餉を済ませ、今日の予定を報告し合う。

一種の朝礼みたいなもの。

コートが幼いながら仕事を始めた為、息子の動向を把握すると同時に、自分や妻のしている事を教える意味もあった。

とはいえ、大抵は同じ事を繰り返している訳だが。

「お兄様、ラグドリアン湖に行ってみませんか？」

「は？ ジョゼット、何を行き成り突拍子も無い事を言ってるんだよ？」

因みに、両親の前では普通にジョゼットと呼ぶ。

「お兄様は温泉を造っているのでしょうか？」

「そうだけど……」

「なら、ラグドリアン湖の水の精霊のご加護を授かれば、普通よりも健康に良い温泉になりますよ。だって彼の精霊の一部、精霊の涙は水の秘薬の材料になるのでしょうか？」

ジヨゼット……ユーキの言う事は間違いではない。

確かに水の精霊の祝福を、少しでも獲られれば温泉の成分も一層の効果が獲られる筈だ。

協力をして貰えばの話ではあるが、ダメ元で交渉するのも悪くはない。

「しかし、それなら交渉役をしているモンモランシ伯爵家に頼まねば、出て来てはくれまい？」

サリユートが言う。

ユーキは何食わぬ顔だ。

「お父様。多分、大丈夫ですよ。駄目ならモンモランシ家を頼りますから、手紙を書いて欲しいですけど、取り敢えずは行って試してみましよう」

結局は、ユートとユーキの2人がシエスタを伴って、ラグドリアン湖へと向かう事になった。

ラグドリアン湖に向かったのは、サリユートを含んだ少数だけ。

ユリアナは今回も留守番でござ立腹だったが、何とか宥め透かして納得して貰う。

「此処がラグドリアン湖なんだあ」

ユーキがとても眩しそうな表情で、ラグドリアン湖の湖面を観ていた。

それは現代日本では、中々あり得ない美しい景観で、ユーキはその牢獄から早めに解放してくれたユートに感謝をする。

あの俚、自分の計画を貫けば出れたかも知れないが、あと12年は代わり映えしない修道院に軟禁され続けていたのだから。

あちらにはあちらで考えが有ったの事、結果的でしかないのは理解している。

それでも恩を感じていた。

ユーキがからかい半分とはいえ、ユートを“お兄様”と呼んで色々手伝っているのも、偏ひんにその感謝故なのだ。

「シエスタも早くおいで。綺麗な景色だよ〜！」

「は、はい。ユーキ様」

シエスタは、手早く荷物を降ろそうと急ぐ。

「良いよ、荷物は僕が降ろしておくから、ユーキの方の相手をしてくれる?」

「え？ その、宜しいのでしょうか？」

「ユーキの相手も仕事だからね」

「は、はい！」

深く一礼をして、シエスタは湖の方へと向かう。

ユートはそんな姿を、何か目映そうに見つめていた。

「ユート様、お手伝い致しましょう」

シエスタの曾祖父、武雄翁が言う。

「武雄さんの歳で、こんな荷物を？ 流石に危ないのでは……」

「甘いすな。老いたりとはいえ元軍人。そこら辺のモヤシより力  
はあります」

そう言っただけながら荷物を持ち上げ、簡単に降ろしてしまう。

「（本当に数年の寿命なんだろうか？ パワフル過ぎだろう、爺さ  
ん！）」

ユートはそんな様子を見て引き吊った。

それから夕飯の準備をし、日が落ちた頃にはみんなで夕餉と洒落こ  
んだ。



普段は流石に、食堂を貴族と使用人で頒けてあるが、わざわざ少数で来たのにそれは無粋の極み。

「はい、ヨシエナベが出来ましたよ」

「これこれ」

「父上、すっかりお気に入りですね？ ヨシエナベ」

美味しそうにヨシエナベを頬張るサリユートを見て、ユートは大粒の汗を流しながら苦笑する。

「お上品で量が過大な貴族の食事より、このしょうゆやみそを使ったヨシエナベは良いな」

「ありがとうございます。サリユート様」

故郷の郷土料理を誉められたシエスタが、嬉しそうに微笑んだ。

サリユートは、タルブ村でヨシエナベを食べて以来、味付けを甚く気に入っていたらしい。

実は、とある理由から舌の味蕾が日本人に窮めて近いサリユート。

故に、この味噌（に近い）味や醤油（に近い）味が、彼は好きだった。

大豆が無い中、大豆に近い植物を見つけた武雄翁は、うる覚えな醤油や味噌を作り上げ、寄せ鍋を完成させてしまったのだ。

尤も、呼び難かったのだろうか？ 何故か訛った呼び名が定着していたが。

一頻り、ラグドリアン湖で愉しんだ面々。

そして、日が完全に暮れて月と星が辺りを照らす夜となり、虫さえも眠りに就く深夜……

ユートは1人だけで湖畔を歩いていた。

この事は初めからの予定として、サリユートを始めとした全員が知っている事。

この時間に、ラグドリアン湖の水精霊と接触する心算でいた。

ユートは服を脱ぎ、裸になると足を湖に入れる。

チャプン……

静かな水の音が辺りに響いて、ユートの足を濡らす。

そんな様子を近くの茂みから覗く双眸が二つ。

ユーキとシエスタだ。

「どつ？ お兄様の裸は」

「ど、どキどキします」

ユーキに誘われ、シエスタはこんな所まで来てしまったが、よもや覗きの片棒を担がされるとは流石に思わなかった。

「（ユート様、綺麗……）」

貴族であるが故か、月明かりに照らされたユートは、何処か幻想的に見えた。

だが、今のシエスタは寧ろ煩惱と妄想というフィルターを通して視ている。

主に、ユートの股間を凝視していた。

それはもう、真っ赤に頬を染めて……。

そんな興味本位の視線には気付かず、ユートは意識を集中させる。

ラグドリアン湖を住処としている水の精霊は、不変と誓約を司る。

不変であるが為、変遷する人間に興味を持って交渉に応じているのだろう。

「（水の精霊よ、僕の呼び掛けに応えてくれ）」

目を閉じ、意識を深く深く集中をいや増し、心の内にて訴え掛けた。

それはきつと、魔法を使う時に似た精神状態。

ユートは刻と共に次第と、一種のトランス状態へと陥っていく。

「（世界の四天を統べる四つの精霊、その内の一つたる水の精霊よ！）」

世界の四天、即ち四大属性（系統）の事であり、それを統べる四つの精霊は【土】【水】【風】【火】の事。

ハルケギニアに於ける基本の精霊。

このラグドリアン湖には水の精霊が存在し、意思を持って悠久の刻を在り続けてきた。

ならば、こうして精神力を放射して、自分の意思を流していれば気が付く筈。

接触の意思に。

茂みの向こうでハラハラしているシエスタと裏腹に、ユーキは至極冷静に事の成り行きを見守っていた。

ユーキは数多在る二次小説を読み、主人公が精霊に接触する嚟を識っている。

自分もだが、前世の記憶を持っているのは本来は自然な状態ではない。

故に、前世の記憶を持っている者に彼らは、興味を惹かれてきたと推測する。

彼ら風に言えば、数えるのも愚かしい程、双月が交差するくらいの永きに渡って在り続けたのだ。

変わった魂の持ち手に興味を持つのも、別に不思議でも何でもあるまい。

精霊が他の生物とメンタルが違うとしても、意思が在るなら代わり映えしない日々に飽く事もあるだろう。

人間との契約にしてもその一環だと考えれば、ユートが精霊の興味を惹く可能性は大きい。

ユートは更に指先を歯で噛み切ると、湖面へと垂らしてみる。

流れる体液は、精霊にとって判り易い目印だ。

水に入って雄に一時間。

コポリと水が沸き立つと、不定形ではあるが人の形を採り始めた。

『大いなる加護を受けし単なる者、汝か？ 先程より我に語り掛けていたのは』

そうそれは、紛う事無き水の精霊の意思だった。

「貴方が水の精霊……？」

「如何にも、我がこの湖を住処とする精霊だ。して、何用なのか？」

不定形なスライムが無理に人型を探ろうとしているかの如く、姿形が安定していない。

実に落ち着かない事だ。

とはいえ、氷の彫像の様で美しい。

その姿はまるで……

「白亜？」

「ふむ、貴様の記憶にある姿を模したのだが」

そう、14〜16歳くらいの少女で、ユートもよく識る【緒方白亜】の姿を採っていた。

ユートは懐かしい前世の妹の姿に困惑したが、ブンブンと首を振り水の精霊へと語り掛ける。

「水の精霊、僕は貴方との契約を望む。願わくは了承して欲しい！」

「フム。何故に？」

「僕が望む<sup>あした</sup>未来の為に、どうしても力が欲しいのです！」

「……………大いなる金色に守護されし単なる者よ、我は貴様との契約は望まぬ」

「っ！？」（駄目か……………）」



ユートは水柱に巻き上げられてしまい、扉へと吸い込まれてしまった。

その様子を茂みで見ていたユーキとシエスタは、真っ青に青褪めてしまう。

「あの、ユート様が水柱にゴーって巻き込まれて消えちゃいました！？」

「消えちゃったな」

「此処は……」

真っ青な空間。

ユートはその空間を揺蕩いながら、薄れゆく意識を繋ぎ止めていた。

「誰……？」「

空間そのものから感じられる気配は、あまりにも強大で逆に判らない。

「消える……」

その大き過ぎる気配は、強大さ故に人間であるユートの小さな意識



を塗り潰していく。

それは、蟻が恐竜に踏まれている様なものだ。

矮小な人間の意識などは、大いなる意思の前に無力でしかない。

然れど、人間は意思の力で奇跡さえ起こす生物。

ユートは流されながらも、脳裏に浮かぶ記憶の奔流を観ていた。

『お兄ちゃん、中学に進学したし今日から兄さんって呼ぶね？』

「白亜……」

『優斗、明日から大学生になるんだし、働いて小遣いを稼いでみるよ』

「父さん……」

ゆうちゃん、見て見て！ ドレス〜！ ほら着てみてよ〜っ！』

「はは、母さん。俺、男なんだよ？」

『もう、しょうがないな。貴方の名前はユート・オガタで、わたしの名前はシーナ・ナユタ』

「……………誰？」

見た事の無い筈の長い黒髪の巫女さんが、ユートに対して『仕方ないな』といった表情で見つめている。

識らない……

そもそも、巫女さんに知り合いなんて居ない。

居ない……筈だ。

「しいな？」

しかし、何故だろうか？

識っている気がする。

何処かで逢っている様な、そんな気がしてならない。

「汝……我と契約し、我が代行者なりや？」

「水の精霊……王？」

「然り」

消えかけていた意識、それを【しいな】という名前が再構築してくれた。

それを“水の精霊王”が認めたのだ。

「僕は、俺は……、貴方の代行者になります！」

強い意思。

それがユートをこの空間で……強壮なる意思によって形作られた精霊王の内、意識を取り戻させた。

この空間こそが水の精霊王そのもの。

精霊王とは概念。

水の精霊王とは、水という概念そのもの。

声も意思を言葉として意識しているだけで、決して肉声で喋っては  
いない。

ラグドリアン湖に在る水の精霊は、正に水の精霊王の意思の一滴な  
のだ。

ユートに刻まれるモノは、即ち聖痕<sup>ステイグマ</sup>。

水の精霊王の地上代行者である証、水の聖痕。

ユートが目を開くと、その瞳が深い蒼に染まる。

気が付くと、ユートは再び現世へと還っていた。

「戻ったな、我が兄弟よ」

「兄弟？」

「母なる水に御印を与えられた人間、それは我と同じ存在である事  
を意味する」

何処か嬉しそうな雰囲気を感じられた。

「ユート」

「む？」

「僕の名前だよ」

得心がいったのか、理解の雰囲気が解る。

これも聖痕の力か。

「なれば、我も名で呼ぶが良い」

「え？ 名前、在るの？」

「無いな」

「キツパリと言い切った！？」

「ユートが付けるがいい」

「僕が？」

意外ではない。

お約束だと思えば。

「うん……水かぁ」

何だか凄い期待されている気がするが、それは決して気のせいではあるまい。

冷や汗を流しつつ、名前を考える。

「（ラグドリアン湖、湖……か）」

水の精霊が住まうラグドリアン湖を見つめ、何となく出てきた名前を口に出す「

「ラクス」

「ほう？ 意味は？」

「その俣、湖って意味なんだけど……」

【Lac us】

ラテン語で湖の意。

「うむ、悪くはないな」

どうやら気に入ってくれたらしく、ユートはホッと胸を撫で下ろした。

「ユート、今後は我をその名で呼んでくれ」

「あ、うん。そうさせて貰うよ、ラクス」

早速、ラクスと呼んでみると喜んでいる雰囲気と共に湖に消えた。

「ユート様ああっ！」

「お兄様ああっ！」

振り返ると、ユーキ達が走って近付いて来る。

「ユーキ、シエスタ？」

どうやら、行き成り消えたユートが行き成りまた現れて、思わず飛び出して来たらしい。

「来ないように言ったのにな、しょうがないな……。あれ？ 何だこれ？」

ユートはいつの間にか右手に持っていた石を見つめ、首を傾げるのだった。

第13話：水の聖痕（後書き）

次回はオガタ家に関して。

そして、石の正体も……

## 第14話：緒方とオガタ（前書き）

完成しました。何だか余りスレイヤーズの魔法が出てないな〜と思う今日この頃だったりします。



## 第14話：緒方とオガタ

「ふむ、水色の玉……か」

ユーキは野球ボールよりも二回り小さい、水色の玉を陽に透かしたりして眺めている。

向こうが透けて見えるくらいの透度、宝石よりも寧ろ玻璃の様な石だ。

「ユーキ、何か判るか？」

「うん、水石の類いだと思うよ」

「水石？」

「アルビオンを浮かしてる原因で、ヴィットーリオが聖地奪還の根拠にしている風石の親戚みたいな物で、精霊力を凝縮して圧縮したモンだよ」

その説明で思いだし、亜空間ポケットから【ゼロの使い魔】のライトノベルを取り出し、ページを捲る。

「って、待てい！」

「どうした？」

「それは何だ？」

「？ 読んだ事くらいあるだろう？ ゼロ魔の小説」

「んなん、解ってるよ！ ボクが言ってるのは、何故にこの世界にライトノベルが、それも【ゼロの使い魔】が有るのかって事だ！」

あっけらかんと言うユートに、ユーキはつついエキサイトしてしまふ。

「なのは（神）さんが亜空間ポケットと一緒に、実家に置いていたライトノベルを根刮ぎ入れてくれてたんだよねえ」

さぞや緒方家では、誰より妹の白亜が大混乱をした事だろう。

事故死した家族の持ち物だけが、忽然と消えているのだから。

「ズルい！ こんな暇潰しが在ったなんて？」

ライトノベルを取り上げ、中身を読みながら文句タラタラ叫んだ。

「うわ、懐かしいな〜！ マジ、ズルいよ兄貴！」

「……仕方ないだろう？ こんなん、そこら辺に置いとけないし」

何しろ原典情報を書き綴った本だ。

介入無しなら、預言書と言っても過言ではない。

「確かに、危険かもだな。シエスタに見られたらどう思われる事か？」

「うっ、そんな事よりも！　これが水石なのは間違いないのか？」  
誤魔化す様に水石？　を手に取り、ユーキに訊ねた。

「そうだね、間違いないと思うよ。ただの水石じゃなさそうだけだね」

「……？　と言うと？」

「凄い精霊力を感じるよ。普通の精霊石じゃないね」

キラんと瞳を輝かせ、玉石を見つめて言う。

「風の聖痕で云うところの神器……【炎雷覇】や【虚空閃】みたいなモノだね」

「詰まり、精霊王から下賜された神器だと思えば良い訳かな？　この石……」

「そうだね、コントラクター契約者として、精霊王の地上代行者としての証ってとこかな？」

炎雷覇や虚空閃の様な武器の形こそしてはいないが、それは間違いなく代行者の証であり、コントラクター契約者の御印。

「水石より尚、高い水の精霊力を持つ謂わば、【水灵石】ってトコだね」

「でもさ、これってどう使えば良いんだ？」

「大きさに、デモンブラッド魔血玉の代わりに使えないかな？」

「魔血玉!？」

【デモンブラッド魔血玉】

それは赤の竜神の世界、所謂処の【スレイヤーズ】の世界に於いて、リナ・インバースがゼロスから550万にて買い上げた呪符こそがタリスマン魔血玉を嵌め込んだモノだった。

魔血玉は全てが紅い宝石であり、それぞれの魔血玉が【赤眼の魔王】ルビートアイ【白霧】デスフォッグ【蒼穹の王】カオティックフルー【闇を撒く者】ダイクスターを表しているという。

『四界の間を統べる王、汝の欠片の縁に従い汝ら全ての力以て、我に更なる魔力を与えよ』

カオス・ウィズ混沌言語で唱えると、魔力許容量を拡大増幅してくれる魔導師には便利なアイテムだ。

元はパシリゼロス魔族が上司、獣王ゼラス・メタリオムから下賜されたモノだったのだが。

「精霊王石を呪符にして、この世界で増幅器ブースターとして使えるかも。風霊石、火霊石、土霊石も手に入ればね？」

「あと三つ？ 真逆、王全員に逢えと？」

「敵は曲がりなりに神を名乗る存在だよ？ 必要最低限で全てを揃えるくらいしないかね」

力は幾ら有っても足りないのだ。

個人の力、仲間の力、経済の力、権力など、力というモノは様々。

「ハアー」

溜息を吐くユート。

「取り敢えずさ、マントの留め金に加工しておくの良いんじゃないかな？」

「……だな、そうするよ」

これで水の系統が1ランク上がる。

今のユートはライン。

水霊石の呪符を使ったら、トライアングル級の魔法が使用可能になるだろう。

因みに普通に精霊術を使うなら、スクウェア級の力を使えるのだろうが、現状は使う心算はない。

下手に使っても系統魔法と反りが合わないだろうし、ユートは精霊術師ではなくメイジなのだから。

というよりも、水霊術だけ使っても余り意味は無い。

まあ温泉造りには役立ちそうだけど、何よりわざわざ敵に手札を見せてやる趣味などユートには無かった。

敵が何処に居るとも知れない以上は、切り札になる力をホイホイと使ってしまう訳にはいかないのだ。

「そつだ、そろそろ身体も鍛えないとな」

魔法だけではない、腕力も鍛えていかないと……。

ユートは、ひ弱でモヤシなメイジになる気はない。

某・元帥な伯爵家の四男、アレみたいなのヨロヒヨロ君はゴメンだ。

「まあ、早く鍛え過ぎても背が伸び悩む事になるし、程々にな？」

「お前も鍛えろよ……」

「ボク、女の子だし」

そつぽを向いて、明後日の方向を見やるユーキ。

### 【サリユートの部屋】

「何？ 剣を教えて欲しいだと？」

「はい、聞いた話によれば父上は剣を使うとか」

「うむ、シュヴァリエに叙されたのも、剣の腕を見込まれての事だな」

勲爵士、騎士候とは一代限りの貴族位。

オガタ家は代々、嫡子たる長男がシュヴァリエに叙勲される事によって、貴族位を維持してきた一族。

サリュートの代に入って、正式な子爵位を叙勲された為、もうシュヴァリエに拘る理由も無い訳だが……

実はユートも、サリュートの様にシュヴァリエに叙勲されたいと思っていた。

「まあ、良いだろう。外へ出なさい」

「はい！」

2人は邸の庭に出て、互いに木刀を手取る。

そしてユートが構えた。

「何だと？」

サリュートも構える。

「え、何で？」

サリュートとユート、2人の構えはそっくりだ。

「どうして父上が？」

「何故、ユートが？」

2人の台詞が重なる。

『緒方逸真流（オガタ・イツシン流）を！？』

それは正に、二つの緒方家オガタが重なる瞬間だった。

ユートとサリユートの2人が、互いに木刀を握り締めて駆け出す。

鈍く軽い、木刀同士がぶつかり合った音が、オガタ邸の庭に響き木霊した。

鏝迫り合いの音が耳に響いて、2人共が顔を顰めながら相手の顔を見る。

「ユートよ、何処でこの技を、オガタイツシン流の技を知り得た？」

「私はお前にイツシン流を見せた事など無い筈だがな？」

「なっ！？ 父上の剣技が緒方逸真流？」

サリユートも驚いていた様だが、ユートもまた吃驚していた。

自身が使う【緒方逸真流】とは、戦国時代の緒方家の先祖が編み出して、江戸時代を経て現代（平成）に伝えられた流派だ。

それが同じ名前、同じ技が本来は交わらぬ世界である筈のハルケギニアで、しかもオガタ家に伝わっているなど、想像の埒外。



「（試してみるか？）」

ユートは罅迫り合いから、一旦バックステップで後方へと飛び、再び駆けた。

「む？」

下段からの攻撃、サリユートの木刀を上方へと弾き、出来た隙を突いて袈裟懸けに木刀を降り下ろす。

だが、いち早く察知していたサリユートは、身体を僅かに後ろへ反らして紙一重で避けると、完全に降り下ろされたのを確認したら、回転しながら横薙ぎに木刀を振るう。

「ガハッ！」

勢いを殺せなかったユートは、それをマトモに喰らってしまった。

勢いよく吹き飛ばされて、ユートは気絶する。

未だ五歳の身である故に、身体が軽かった所為だ。

「む、いかん！ ついついやり過ぎてしまった！」

慌ててユートに近付いて、介抱するサリユート。

「ふう、どうやら骨などに異常は無さそうだ。然し、ユートが使ったあの技は、オガタイツシン流【コダマオトシ】に相違ない」

サリユートがユートに使った技が、オガタイツシン流【コマノマイ】と云う。

どちらも謂わば、基本技に過ぎない。

それでも、恣意的に使ったという事実は、その技を識っているという事だ。

「ユートよ、お前は……」

謎ばかりが残り、多少モヤモヤするサリユートだが、メイドを呼んで部屋に運ばせて自室に戻った。

### 【ユートの部屋】

一時間もすると、ユートは自ずから目を覚ます。

いの一番に目に入ったのは天井。

「知ってる天井だ……」

「何を当たり前な事を言ってるんですか？」

「シエスタ？」

声が出た方に、首だけ動かして見るとシエスタが椅子に座っていた。  
心なしか目が赤い。

まるで、涙でも流していたみたいな瞳だ。

「もしかして、看病をしてくれてたんだ？」

「はい」

「心配……した？」

「当たり前です。直ぐには目を覚ましてくれなくなってくつて、生きた心地がしませんでしたよ！」

「……そっか」

大丈夫だと頭で理解していても、やはり心配なものは心配なのだろう。

「ありがとな、シエスタ」

右腕だけ伸ばし、手で頬にソツと触れて軽く撫でる。

触れられた感触が気持ちいいのか、シエスタは目を閉じて頬を朱に染め、撫でられるに任せていた。

「ゴホンッ！」

「え？」

「キャッ！」

ユートの死角になる場所で聞こえた咳払い。

吃驚して手を放す。

シエスタも、小さな悲鳴を上げて肩を震わせた。

「ゆ、ユーキ。居たのか」

身体をシエスタに手伝って貰い、ベッドから起こして咳払いのした方を向くと、銀髪の少女が壁に背中を預けて立っている。

「ゴメンねえ、お兄様？ 気が利かなくてさあ」

言外に、イチャイチャしてんな莫迦兄貴と言われた気がした。

「（まったく、順調に好感度を上げているな。こんのギャルゲー体質め！）」

ユーキは心の中で愚痴る。

からかわれた2人は、頭のとっぺんまで血が上って、真っ赤になっていた。

「コホン、ユーキもお見舞いに来てくれたのか？」

そんな心情を誤魔化す様に咳払いをして、ユーキに話し掛ける。

「まあね。お父様に一撃で熨された可哀想なお兄様を慰めに……ね？」

「うぐっ！」

胸にグサリと、何かが突き刺さった。

然し、直ぐに真面目な表情になると、あの模擬戦での事を思い出す。

「父上が使ったのは、間違いなく緒方逸真流の技だ」

「オガタイツシン流？」

「僕が使った技は、敵の刀を下段から上方に弾いて、返す刃で袈裟懸けに斬る技……【木霊落とし】だったけど、まるで識っているかの様に避けて、更に返し技で【独楽乃舞い】を放って来たんだ」

ギョツと掛け布団の裾を掴み、睨み付ける。

「？ サリユート様が同じ技を使うのは、そんなに変な事なのか？」

ユートの驚きが、いまいち理解出来ないシエスタは、軽く小首を傾げていた。

ユートはシエスタに微笑むと、少し苦笑する。

「まあ、そうだね」

同じオガタ家の親子なのだから、同じ流派を使ってもおかしくは無

いとシエスタは思っているのだろう。

然し、それは違う。

緒方逸真流は、ハルケギニアを俯瞰する受容世界での剣技なのだ。

それが、何故この世界にも伝わっているのか？

古くは戦国時代から才を顕した緒方家の先祖が、時代の流れに乗って江戸時代、明治維新、世界大戦を生き延びて平成の世まで細々と伝えた【緒方逸真流】。

当然、最早意味こそ無くなっていたが、緒方家の次期当主として緒方優斗も習わされていた。

辛い嫌いではなかった為、高校を卒業後もずっと続けていたが、未だに未熟者として免許皆伝を獲る事が出来ずにいたのだ。

事実、奥義とかの類いは教わっていない。

自分ではもういけると自惚れていたのだが、実際に剣をサリユートと合わせてみてよく解った。

五歳の肉体、五年間離れていたブランクなど、言い訳は幾らでも出来るだろう。

だが、サリユートの流れる様な動きには無駄が無く、自分がどれくらい未熟者だったかを見せ付けられた。

「（本当なら、木霊落としから直ぐに【継ぎの舞い】に移行しなき

やらなかったのに、避けられて勢いを利用出来ずに振り切ってしまっただ……)」

緒方逸真流では、行動は舞いの如くと言われており、最初の動きから継いで直ぐに新しい動きに移る。

これが【継ぎの舞い】と呼ばれていた。

優斗だった頃は、取り敢えず出来ていた動きだったのだが、目の前でサリユートの動きを色眼鏡というフィルター無しで視て、見に染みて理解してしまう。

「（爺ちゃんの言っていた通りだったな。僕は確かに未熟者だ）」

嘗ての祖父、緒方優介の言葉が脳裏に甦る。

『優斗、主はまだまだ未熟者よ。免許皆伝など10年早いわ!』

そう笑いながら言われたものだった。

あれから一週間が経つ。

今は剣の練習も身体を基礎能力の強化に充て、温泉を造りつつも魔法の練習をするという、ハードスケジュールを熟している。

朝の朝っぱらから、ランニングをして準備体操。

木刀を使つての素振り。

今の身体にも慣れつつある今、勘を取り戻さなければならぬ。

技なんて未だ数年は早いと思つてゐる。

昔は……前世では早く技を習いたくてウズウズしていたものだが、技を使う反動がやけにキツかった。

今は覚えても、きつと振り回されるだけだ。

ユートは素振りをしながらあの時の、基本技に過ぎない【木霊落とし】を使つた際の反動を思い出す。

「木霊落としみたいな初歩でアレじゃあな」

それに、ユートは奥義こそ伝授されていなかったが、それ以外は大抵を教わつてゐる為、改めてサリユートから習つ必要も無い。

慌てずに、今は力を蓄える雌伏の時期だ。

木刀の風を斬る音を庭に響かせ、そう考えていた。

「（それに、カトレア様の誕生会の時にカリーヌ様が仰つていた事……）」

『そうですね、では代わりにユート殿が10歳になったらわたくしが直々に訓練を付けて上げましょう』



ルイズへの訓練が実際に行われるなら、あの時の言葉も実行される可能性が非常に高い。

「（１０歳か。猶予は僅か５年、その時までには烈風に対抗出来る手段を構築しておかないと、軽く逝けるんだらうな）」

この歳で臨死体験なぞしたくはない。

ブルリと背筋を奔る冷たいモノを感じ、ユートは肩を震わせた。

剣の練習が終わり、温泉造りに精を出す。

ド・オルニエール領には、幸いにも高い山が存在しており、傍には葡萄畑が並んでいる。

葡萄畑は兎も角、結構高い山の為、温泉造りの条件を十分に充たしていた。

山の地脈を通す様に、水脈を作っていくとそれを麓にまで持つてくる。

それにより必要十分な温度を備えた湯が、ユートの目論見通りに沸き出てきた。

これを予め数ヶ所に造り、掘り出した場所が湯溜まりとなって温泉となる。

折角だから、水の精霊力を使って効能も上げておき、枯れない様に水の精霊達を常駐させた。

温泉そのものは完成だ。

「後は旅籠を造って温泉街の切っ掛けにすれば、客も呼べる様になるな」

サリユートから土メイジの部下を借り、大きな旅籠を造る必要があるだろう。

貴族御用達の旅籠と、平民でも気軽に泊まれて入れる旅籠の両方を建てる。

貴族御用達の方は、多少の値段設定を高めにしても構わないだろう。

「食事やら何やらも要るよな。女将にはセシリアさんを置いて、中居や女中なんかも必要かな？ 料理長と料理人、雑用には誰を置くか？」

未だ仕事が決まっていない【聖女】も居るし、近くの村から雇うのもアリか。

取り敢えず、セシリア母娘を旅籠の方に移動して貰う必要がある。

「何れにせよ、旅籠が完成してからだよな」

精霊の涙と呼ばれる水を、大量に創れるユートは温泉の成分に、それを秘薬に近い形で混入してある。

「武雄翁やカトレア様には薬効成分として、それなりに効く筈」

邸に帰ると、早速サリユートに報告をしに行く。

「父上、温泉が完成しましたので土のメイジを貸して頂けませんか？」

「む？ 早いな、もう完成したのか。判った、手配をしておこう」

「ありがとうございます。旅籠の施工に当たり、設計書を作っておきました。」

この設計書の通りに建築して下さい」

「ふむ？」

設計書を受け取り、目を通すサリユート。

設計書の内容は、現代日本の中でも情緒溢れた老舗の旅館をモデルにしている。

行き成り高級ホテルを建てろなんて、ファンタジーな世界の人間には土台無理な注文だ。

それに比べ、100年以上の歴史を誇る老舗旅館であれば、ファンタジーな人間にも建造は可能と考えた。

「よく出来た計画の様だ。女将、中居、料理人などはユートが手配しろ」

「はい、父上」

温泉が一段落付いて、夜になるとユートは白金の鉱石を使い、マン

トの留め金を製作していた。

白金を石から錬金は、未だ出来ないユートだったが、大元の鉷石を錬成によって加工は出来る。

時間は掛かったが、何とか形にはなっていた。

魔血玉ならぬ、エレメンタル・ティア精霊涙と呼べる水霊石を、白金で造った土台に嵌め込んで自分のマントを留めるのに使用。試しに着けて、姿見で確認を試してみる。

「うん、悪くはないな」

石の色こそ違おうが、スレイヤーズに出てくる魔血玉の呪符と同じデザイン。

「何か、こうなってみると両腕の手首とベルトにも欲しくなるか」

土台は兎も角、精霊王石は各精霊王に会って契約するしかあるまい。

そして、そんな決意をした日の夕餉の時間。

「ユート、話があるから食後に私の執務室の方まで来なさい」

「判りました、父上」

来たかと思った。

寧ろよくぞ一週間も待ったものだと思える。

きつと剣の流派に關しての話だろう。

ユートは食後の紅茶を飲みながら、どう受け答えるかを考えていた。15分程して、ユートは言われた通りにサリユートの執務室まで足を運ぶ。

コンコン……

木の扉を軽く叩く。

「父上、参りました」

「入りなさい」

入室を促され、扉をユートは開けて入る。

「失礼致します」

父、サリユートが机の書類を片付け、ユートの方を向いて口を開く。

「何の話しかは察していよう?」

「僕の構えや技が、習ってもないのに父上と酷似していた件ですか?」

「うむ。まあ、それに関しては良いのだよ」

「は?」

「永い歴史の中、脈々と受け継がれてきたのだから、そういう事も有ろう」

達観した様な父に、首を傾げてしまう。

「でしたら今宵、僕を呼んだ理由は……?」

「本当はもっとお前が成長してからと、そう考えていたのだがな。温泉を八ヶ月で造り上げたお前は、親の予想より早く成長しているのかも知れん。故に話しておこうと思う……」

サリユートはそこで一拍を置いて、目を閉じる。

ユートは我知らず、ゴクリと溜まった唾液を飲み込んでいた。

「そつだ、我がオガタ家の歴史……、成り立ちをな」

第14話：緒方とオガタ（後書き）

そして次回は、オガタ家の歴史が明らかか？

ま、大した歴史でもありませんが……。

第15話：ガンダールヴの槍とユートの剣（前書き）

嘶が余り進んでいない気がします。



## 第15話：ガンダールヴの槍とユートの剣

それは神による干渉。

ユートも知らなかった。

よもや、自身の転生が過去にすら干渉していた事に。

力無き神……【純白の天魔王・高町なのは】が、如何にして過去にまで干渉出来たのは不明だ。

それでも彼女は、緒方家の過去に干渉してオガタ家を創る切っ掛けとなった。

過去への干渉、過去の捏造……余りにも荒唐無稽で、そして余りにも身勝手な。

平賀才人もきつと、こんな気持ちだったのだろう。

サリユートから話を聞いた後で、ユートはそんな感想を抱いたのだった。

「我がオガタ家の成り立ちは覚えているか？」

「へ？ それは勿論……」

サリユートの執務室に来たユートは、そんな質問がきた事が予想外で間抜けな声を上げて返事をする。

「では、この私にオガタ家の歴史を開帳してみてくれないか？」

「は、はい」

きつと意味が有るのだらうと思い、オガタ家の歴史を訥々と語り始めた。

それは100年以上も昔、緒方家の始祖たる存在……【ユーザー・オガタ】が、トリステイン王国に現れたのは本当に突端な事だ。

何故かは判らないが、始祖の名前はユートと同じく、まるで日本人の様な名前だったらしい。

本当に唐突で、しかも姓がオガタという。

お陰で、ユートの今生での姓も【オガタ】となる。

ユーザー・オガタは変わった形の剣を持ち、魔法すら使って戦っていたらしい。

片刃の剣で、持ち手の部分には紐による装飾が成されており、滑り止めの代わりにしている。

普通の剣だと、滑り止めには大概がスリットを彫っていた。

刃には紋様が浮かび、刃と持ち手の境目にはとても美しい彫りが成された、美術品の様な物が嵌め込まれていたという。

ユートはそんな剣に覚えがあった。

それは、【日本刀】と呼ばれている一種の美術品で、誰かを殺せる殺傷の為に造られた武器。

だから、オガタ家での訓練には日本刀を模した木剣、即ち【木刀】を使う。

そして、基本的には魔法よりも剣で戦う事を好む。

何処で手に入れた剣なのかも判らないし、ユート自身も興味を抱かなかった。

然し先日、サリユートが使った剣技を見ておかしいと感じる様になる。

【オガタイツシン流】は、

ユートが前世で習っていた【緒方逸真流】と全く同じ剣技だった。

【緒方逸真流・独楽の舞い】は、敵の攻撃を刀で防御して回転を入れながら、背後に廻って攻撃を当てる技で、【木霊落とし】と同じ初歩の技。

ユートは魔法を使う事から祖先を、ハルケギニア人と決め付けていた。

だが、緒方逸真流を使えたとなれば話が変わる。

ユートは歴史を思い出しながら、オガタ家が持つ異常性に気が付いていた。

緒方優三は、日本の江戸に住む旗本の三男坊として世に産まれる。

某・暴れ好きな放蕩將軍と違い、正真正銘の貧乏旗本の三男坊だ。

大した石高も無い。

嘗ての日本に於いて、このハルケギニアの貴族と同じ存在でもあるが、そんな中でも旗本寄り合い席に入れない2000石以下の石高だった。

そもそも広義の旗本とは、將軍に謁見の資格を持ち、参勤交代の時に關所で下馬する事を免除された大名、及び大名の扱いを受ける者以外で、將軍に謁見の資格を有る者を指す。

そんな旗本の家生まれた緒方優三は、突如として消えてしまったという。

三男坊など家を継げない、そこで身一つで立身しなければならなかった。

優三は頑張りに頑張り抜いた結果、將軍よりとある刀を拝領する。

消えた優三は、割りと多くの人間がその場面を見ていた為、神隠しとして扱われていた。

銀の鏡の様な、得体の知れないモノに吸い込まれたのだ……と。

優三は見た事もない景色に茫然自失となり、ヘタリ込んでしまう。

そして、運が良いのか悪いのか？ 行き成りトラブルに見舞われた。

トラブルに見舞われたという意味では悪いが、優三の今後の人生を考えると悪くはなかったのだろう。

少女とそのお付きの騎士、貴族の一向がオーク鬼の群れに襲われていたのだ。

中にはトロールも混じって、危機に陥っていた。

事情は判らないし、怪物なども見た事がなかったが、優三にとってやる事はたった一つだけ。

優三は少女の一向を、怪物から救い出す。

少女は、ラ・ヴァリエール公爵家の次女だった。

救われた少女は、恩人としてラ・ヴァリエール公爵領へと招く。

その後、紆余曲折有ったが2人は愛し合う。

勿論、東方の貴族の家に生まれたメイジで娘の恩人とはいえ、ヴァリエール公爵が簡単にそんな事を許す筈もなく、優三は少女と駆け

落ち同然で家を出た。

その影に、ヴァリエール家の嫡子と長女の助けがあった事を、優三は感謝する。

優三は自らを【ユーザー・オガタ】とし、手柄を挙げていく。

その実力を、王宮に認められてシュヴァリエに叙勲された優三。

本来なら有り得なかった筈だが、何故かそれは上手く可決されたのだ。

そこには神の見えざる手が在ったが、その事実は誰も知らない。

一代限りの貴族位であるが故に、優三は少女との間に出来た息子に、立身出世を家訓として義務付けた。

優三の息子、ユーヤ・オガタはその家訓に従い、手柄を挙げてやはりシュヴァリエとなる。

また、娘のおユウは義兄の息子……従兄と恋に落ち、結婚する事になった。

【ユーザー】の持っていた刀には、固定化が掛けられた後に家宝とされる。

尤も、ユーザー以外に鞘から抜ける後継者も居なかった為、ずっと死蔵されていたのだが。

サリユートはユートが歴史を語った後に、始祖であるユーザー・オ

ガタがこの地に来てからの人生を話す。

そして、ユートは緒方家で語り継がれた怪談噺の様な伝承を思い出  
し、その結果として真実に辿り着いた。

緒方優三は、拝領した刀がハルケギニアに召喚されたのに巻き込ま  
れ、異世界たるこの地を踏んだ。

そして、ラ・ヴァリエール公爵家の次女と結婚して、オガタ家の始  
祖となった。

ガンダールヴの槍。

恐らく、オスマンの恩人や佐々木武雄翁と同様に。

### 【ガンダールヴの槍】

ハルケギニアの召喚システムを応用し、神の左手たるガンダールヴ  
の為の武器を地球から喚び込んでおり、喚び込まれた武器や兵器を  
ガンダールヴの槍と呼ぶ。ロケットランチャーや零戦も、それで喚  
ばれた“槍”の一つだと思われる。

問題は自分の世界が受容世界と呼ばれている世界で、其処ではこの  
世界は物語の世界に過ぎないという事。

槍の召喚が成されている訳がない。

「（恐らくはなのはさんの仕業だよな）」

槍の召喚をねじ曲げ、自分の前世の地球に繋げる事で刀を緒方優三  
ごとく、召喚したのだろう。

召喚された緒方優三が幸福な人生を歩めたか、それは当時を生き抜いた緒方優三本人が決める事。

ただの子孫に過ぎない自分が決めていい事ではなく、況してや召喚の原因であるユートが考えても、詮無い事てしなあるまい。

そうになると、気になってくるのが“ガンダールヴの槍”として喚ばれた刀が一体どれ程のモノか。

その一点に尽きる。

「父上、家宝の剣を見る事は出来ますか？」

「ん？ 正式な継承自体はゲンプクしてからとなる。だがまあ、見るくらいは良からう」

「（ゲンプク、元服かな。成る程、大人として認められる年齢で継承か）」

【元服】

男子の成人を祝った儀式。11〜16歳の間に行われて、髪形と服装を改めて冠をかぶった。

「では、地下の宝物庫に行ってみようか」

「あ、はい！」

サリユートに連れられて、ユートは宝物庫に有るといふ【ガンダールヴの槍】として喚ばれた刀を観に行く事になる。



地下室物庫とは、どうやら原典に於ける愛人部屋？ の事だった様だ。

あの虚無のマジックアイテムとか呼ばれていた鏡が、確りと鎮座している。

起動すれば、あーぱー姫の部屋に有るだろう姿見の鏡と空間を繋げられる筈。

他にもガンダールヴの槍として喚ばれたのか、様々なアイテムが在った。

ロマリアなら兎も角、何故こんなモノが数点とはいえ置かれているのか？

「父上、見たところ随分と変わった物が有りますが、何処で手に入れたのでしょうか？」

「うむ、我がオガタ家ではこういったアイテムを積極的に集めていてな、使い方が解らない物も結構有ったし、纏めて宝物庫に容れてあるのだよ」

銀の六連装式リボルバー。

弾丸も12セット有る。

手に取って視ると、間違いなくアレだった。

本物かレプリカかは判らないが、どちらにせよ普通に使えるだろう。

「（少し改造すれば、割と使い勝手の良いマジックアイテムになるな。ユーキの護身用には丁度いい）」

ユートはそう考える。

実際、前世でも妹の白亜を大切にしていたユートは、兄バカと言っても過言ではなかった。

虚無を使えるとはいえど、普段から虚無をブツ放す訳にはいかない。なら、こういう護身武器は持っていた方が良からう。

「父上、このマジックアイテムを戴けませんか？」

「何？ それが何か解っていつているのか？」

「はい、拳銃ですよ」

「……お前に必要とも思えんがな」

息子の実力を把握している訳ではないが、ラグドリアン湖では某か<sup>なにがし</sup>得たと確信している。

ユートに拳銃が必要だとは思えなかった。

「勿論、僕には必要ありませんよ。僕は刀の方が使い勝手が良いですし、遠距離なら魔法が有りますから。これは、シヨゼットに持たせる心算です」

「何んと……、ジョゼットにか？」

「はい。あの子は僕や父上みたいな力は有りません。なら、距離を取る事を前提に護身武器として持たせたいと思います」

そう言われ、顎に右手を添えると暫く黙考する。

これはサリユートが熟考する際の癖みたいなモノで、某・頓知小坊主が人差し指に唾を着け、頭に擦り付けて座禅を組むポーズと同じ様な意味合いだ。

一分は経っただろうか？

サリユートが目を開くと、リボルバーと弾丸のセットをユートに渡す。

「使い方は解るか？」

「はい！」

「なら、お前も練習をしておきなさい。ユーキが五歳になって、魔法を習い始めたら折りを見て渡してやると良い」

「判りました！」

思いがけず手に入ったの物は、某・魔導探偵が使っていた銀色の六連装式リボルバー。

某・魔導探偵は、これを使って【イタクア】の術式を放っていた。

リボルバー部分を改造し、魔装銃として使えば良いだろう。

別名、 魔弾銃。

でも魔弾銃ではあからさま過ぎるから、魔装銃という名前にしよう  
と考えた。

「さあ、早く来なさい」

「あ、はい！」

サリユートに促されて、駆け足で追い付く。

最奥に飾ってあったのは、立派な装飾をされた一振りの刀だ。

魅入られる様な美しさ。

肝心の刃を見ずして、魅入られる自分に気が付いて、身震いした。

「父上、触ってみても？」

「まあ、構わんが。扱いには注意しろよ？」

「はい」

五歳の身に真剣は危険ではあるが、サリユートも既にユートをただ  
の五歳児とは思っていない。

取り敢えず、自分が見ていれば大丈夫だろうと思うくらいには信頼  
していた。

コートは先ず、柄を右手に鞘を左手に持つと、グツと力を入れて引っ張る。

思った通り、大した力も要らずスルリと抜けた。

「真逆！？ 始祖以来、誰にも抜けなかった剣が？」

これには、特定の間以外が抜こうとしても抜けない魔法、一種の識別魔法が掛かっていたのだ。

誰の仕業かは、考えるまでもあるまい。

「全長106センチ、刃渡り76センチ、柄長24.5センチか……ん？」

刃紋を見て、拵えを確認してから気が付く。

「ば、莫迦な？」

この刀が緒方優三の物であるならば、それは將軍から下賜された物の筈。

徳川將軍家は、“コレ”を忌避していた。

自分達の手持ちを全て破棄していたと記憶している。

旗本や大名も破棄するか、若しくは銘を削つての所持だったのだから。

それが、徳川将軍が手ずから下賜していたなど、有り得ない。

「どうした、ユート？」

「いったい、何故……」

故に、ユートは驚愕と共に見つめるしかなかった。

「妙法村正……、初代村正が何故此処に！？」

そう、有り得ない。

村正は、伊勢国桑名で活躍した刀工の名で、その作になる日本刀の銘。

千子村正の名前が有名で、四代目は徳川による忌避が原因で、大名や旗本が持つのを嫌がり、千子と改名。

初代が晩年に打った作品が【妙法村正】だ。

だからこそ有り得ない。

村正は別名、妖刀村正。

勿論、何の靈的や魔力的な根拠も盛り込まれていない“切れ味が良いだけ”の刀が妖刀の筈もない。

誰かを呪う事もある訳がないのだが、徳川家康をとことんまで苦しめた刀の銘が村正だった為、村正を徳川に仇成す妖刀として忌避するようになった。

まあ、解らなくもない。

徳川家康の祖父の清康と、父の広忠は共に家臣の謀反によって殺害されており、どちらの事件でも凶器に使われたのが村正の作刀。

また、家康の嫡男の信康が謀反の疑いで死罪となった際に、介錯に使われた刀も村正の作であったという。

更には関ヶ原の戦いの折、東軍の武将である織田長孝が、戸田勝成を討ち取るという功を挙げた。その槍を家康が見ている時に、家臣が槍を取り落とし最に指を切った。その槍も村正で、家康は怒って立ち去ると、長孝は槍を叩き折った。

これらの因縁から、徳川家は村正を嫌悪するようになり、徳川家の村正は全て廃棄され、公にも忌避されるようになった……筈だ。

民間に残った村正も隠されてしまい、時には銘を磨り潰してまで隠滅した。

「どついう事なんだ？」

そんな曰く付きの村正が、よりによって將軍から拝領したなどと、真逆知らずに持っていた物を下賜した訳でもないだろう。

「（これもなのは（神）さんの仕業か？ まあ良いか。折角の名刀だ有り難く貰っておくさ）」

妖刀と呼ばれた由縁は二つあり、一つ目が徳川に仇成したという事で、二つ目が切れ味の良さにある。

何故……なんて最早、どうでもいい。

神が認識阻害を掛けていたとでも思うだけ。

納得は出来ないが、此処に妙法村正が在る事実だけを受け止めれば良いのだ。

尤も、この村正が貰えるのは10年は後になるが。

つまり、当座の武器が必要になると云う事。

「（エルフの国、ネフテスに言っただけで調達するかな？ こっちは水の精霊王の地上代行者だし、向こうも無碍には出来ないだろうし）」  
生命の維持に絶対欠かせない水、それを盾にされては仮令エルフとはいえどうにもならない。

生物は、飢えに耐える事が出来たとしても、渴きには耐えられないものだ。

「方針は決まったかな？」

ユートはそう言って、柄と鐔を分離し、茎を外す。

柄から刃を分離して、銘を確認すると、【村正】と間違いなく彫られていた。

刃にも欠けたり伸びたり、歪んだりという事も無い。



刃紋を見ると、直刃に湾れを基調とする古刀期に於いては珍しく、表裏で焼きが揃うという特徴が確りと出ている。

正しく本物。

ユートは、嬉しそうに元の状態に戻して納刀した。

「随分と気に入った様なユート」

「はい、父上。元服の日が楽しみですよ」

在りし日の優斗は、無銘の刀しか扱えなかっただけに本当に楽しみだった。

取り敢えず、手に入れたのは銀色の六連装式のリボルバーだ。

これを改造して、テストにエルフの国の首都ネフテスへ行く時持っていく。

きつと戦闘になるだろうから、武器は必要だ。

そんな訳で早速、ユーキの部屋へと直行した。

## 【ユーキの部屋】

「フーン。しっかし、よくもまあ……」

部屋に来てユーキに粗方の事を話すと、物珍しそうにリボルバーを見ながら少し呆れた声を出す。

現物が在れば、ユーキが持つ能力とユートの錬成とを併せて、複製量産が可能となる。

ユートのアイデアは中々に面白い。

発明家魂も触発され、ヤル気満々だった。

「取り敢えずは一丁、複製してから改造しようか」

「応っ！」

実際に「イタクア」の術式を組んでみて、あの不規則な氷の弾丸の軌跡を再現してみて、それから魔弾作成を行う予定を立てる。

ユーキは、自分の武器の事を考えてくれていたユートに感謝しつつ、自分の趣味を久方ぶりに満喫しようと気合いを入れた。

製造過程をユートの持っている本から確かめ、一丁を複製して量産ラインを確立する事になる。

其処まで行くのに二ヶ月は欲しい。

歪み無く、精密な複製を造るなら最初が肝心だ。

まあ、最初の複製の段階でユートの錬成に、ユーキの能力による補

正を掛けるのが作業の一環な訳だが。

完成すれば、量産初ロットは家族で回す予定となっている。

サリユートは要らないが、護身に銃は使い勝手が良いし、持っていて貰う。

装填には、リボルバーを丸々カートリッジ化する事により、単純化する心算だ。

これにより、数秒で六連装を全て換えられる。

勿論、従来の弾込めも可能だから、状況に応じて柔軟に装填が可能。

こうして、ユートの差し当たったの“剣”はなんとか出来た。

「そろそろガソリンの錬成も始めないとな」

ゼロ戦で空を飛ぶ。

それは、佐々木武雄翁との約束でもある。

勿論、それに当たって自分も操縦を教えて貰う。

原典に於ける、ガンダールヴ（才人）最初の槍。

シエスタを渡す心算など無いが、複製したゼロ戦の方は渡してやる。

彼にはルイズを、虚無の担い手を護って貰いたい。

様々な予定を立てて、時は流れていく。

ユートとシエスタは六歳、ユーキは四歳になった。

多少の時間は掛かったが、銃の複製とゼロ戦の複製が完了する。

ゼロ戦の操縦も、武雄翁から確りと教わって習熟し、いよいよ初フライトの日。

この日ばかりは、家族総出で見学をしていた。

「本当に飛ぶ日が来るなんて、思いませんでした」

ユートの後ろには後部座席が設けられ、一緒に乗れる仕様になっており、その後部座席にはシエスタが乗っていた。

実際に飛ばしてみてもうと言ったのだが、シエスタは頑なに初フライトで飛ぶ事を希望したのだ。

元々、シエスタを乗せて飛ぶ予定だったが、行き成りは危険だと思つて試験飛行となる初フライトは、一人で乗る心算だった。

「良いんだな、シエスタ」

「はい、ご主人様！」

既にクランクは回し、エンジンも掛かっている。

「私はご主人様を信じています」

シエスタは、ユートの真摯な行動を見てきて可成り、信頼度や好感度が上がっているらしく、微笑みと共に言い切った。

「上等！」

ユートは武雄翁と合図を送り合って、滑走路に沿ってゼロ戦を走らせる。

武雄翁の零号機が飛ぶ。

そして……

「テイク・オフッ！」

操縦桿を引くと、ガンダールヴの槍でありながらも、ユートの剣の一つでもあるゼロ戦零号機が、家族達が見守る中で大空を翔けるのだった。

第15話：ガンダールヴの槍とユートの剣（後書き）

漸くユートが六歳に。

ユートは着々と力を蓄えていっています。

第16話：無垢なる刃の片鱗 と無垢なるメイドの仕事（前書き）

第16話です。

どつやらとんでもない誤字が在った様です。

取り敢えず、気が付いた箇所は修正しました。

## 第16話：無垢なる刃の片鱗 と無垢なるメイドの仕事

それは所謂、居合い抜きと呼ばれている技術。

「緒方逸真流・抜刀術……【玻璃の壱式】！」

抜刀術、若しくは居合い術とは、日本刀を鞘に収めた状態で帯刀し、鞘から抜き放つ動作（抜刀）で一撃を加えるか、相手の攻撃を受け流して二の太刀で相手へとトドメを刺す技術を中心に構成された武術だ。

【玻璃の壱式】とは、玻璃（硝子）を砕かずに斬り裂く技の一種。勿論、砕いては失敗。

ガシヤアアアアンツ！

高速の鞘滑りで加速して、抜き放たれた刃は硝子へとぶつかる。

だがユートの目の前にある硝子が砕けてしまい、技は失敗に終わった。

「チツ！ やっぱり駄目だったか」

「今のは居合い抜きだよね？ 砕いちゃ駄目な訳？」

「斬らないと駄目なんだ」



然し、こればかりは腕前の問題だけではない。

六歳のユートでは、どうしても未熟な腕になる。

一応、緒方逸真流は覚えているのだが、身体に覚え込ませていない為、動きも滑らかとは云えずこちないのだ。

手続き記憶が真つ新たな状態では仕方のない事。

記憶には大きく分けて三つの分野が有る。

思い出を司る【挿話記憶】

知識を司る【意味記憶】

運動神経を司る【手続き記憶】

この三種の内、ユートには挿話記憶と意味記憶しか残っていない。

何故なら、その二つは単純に新しい肉体の脳にぶち込めれば良いが、手続き記憶に関しては身体が出来てもいないのに、無理矢理容れてしまうと筋肉や関節などを壊してしまふ。

二十歳の動きを六歳で行うのは、医学的にも危険なだけなのだ。

「【玻璃の壺式】は、飽く迄も窮めて砕け易い硝子を“斬り裂く”技だ。それが出来て初めて成功、本来の威力だと言える」

「ふん。でも腕を上げれば良いんだよね？」

「いや、腕は当たり前だ。問題なのは武器なんだよ」

ユートは右手に持った刀を掲げ、不満気な表情になるとブン！と唐竹に振る。

腕前が良いのは当たり前。

そう、この技は腕だけでは決して成功しない。

「最上の刀と最高の腕が相俟って、相乗効果を齎らしてくれるんだ」

「そういうモンなの？」

これが成功すれば斬鉄は疎か、様々なモノを斬り裂く事さえ敵うだろう。

然し、今現在のユートが持っている刀と言えばユートが錬成した鋼を、鍛冶屋に鍛造させた代物。

元より剣の普及率が低く、況してや鍛造が窮めて難しい刀の製作だ。

切れ味も低いし、硬いだけのナマクラ刀が出来上がってしまう。

鋼にしても、刀の鍛造には特殊な焼きを铸れたモノ、【玉鋼】が必要だったが、ユートの錬成では未だ造れなかった。

イメージは在る。

術式は完璧で、呪文の構築も万全。

玉鋼を造れなかった理由、それは魔法のレベルが低かったということだ。

砂鉄を使い、石炭を媒介に錬成を行う。

使った魔法は、土土火のトライアングルスペル。

それで完成したのが銑鉄。

玉鋼の中でも決して高くはない等級。

玉鋼は、出来によって六種類の等級に分けられる。

即ち、1級A、1級B、2級A、2級B、銑鉄、卸鉄の六種類だ。

銑鉄は、下から数えた方が早いくらいに低い。

不純物を最大限除いた中、僅かに出る最上級品質でも2級Aが最大だろう。

家宝の妙法村正は、恐らく最上級の1級Aを使った刀だろうと思われる。

当時、そんな等級は無かったのだろうが。

更に鍛冶師の腕前が最上級とくれば、村正の品質が最高なのも当然だ。

これは最上級品質の鋼材、最高の鍛冶師の二つが相俟って、その相

乗効果で生まれた作品と云う事だから。

そう。村正の腕だけでも、良い玉鋼だけでも駄目だ。

「ユーキ、これは剣士だけには留まらない理論だよ。某・ピンクの髪の毛の歌姫も言っていた」

そう言っつてユートは、右腕を挙げて人差し指を立て、天を仰ぐ。

「力だけでも、思いだけでも駄目だと」

「あゝ、確かに言っていたよね」

「他にも、某・眼鏡を掛けた元勇者も言っていた！ 愛や優しさだけでは必ずしも他人を守れない時もあるのです。正義なき力が無力であるのと同時に、力なき正義もまた無力なのですよ……と」

「そ、それは何かが違う気がするけど。まあ、何を言いたいかは理解した」

村正の腕が幾ら良くても、玉鋼の品質が低ければ刀の品質も下がる。

逆に、どれ程の素晴らしい品質の玉鋼でも、扱う人間の腕が低ければ此方もまた品質が下がる訳だ。

「実際にさ、砂鉄と石炭は良いものを揃えたんだよ。でも玉鋼の品質は銑鉄だ」

ユートの魔法の力が低いから、材料ばかりが良くても玉鋼の品質は高くない。

「なる、真理だね」

「せめて僕の腕がスクウェアなら、もっとマシな品質だったろうに」

「いや、六歳でトライアングルなら腕としては十分。刀を打つのに足らなかつたつてだけでしょ？」

変な拘りから、自らを卑下するユートを胡乱な表情で見ながら、ユートは突っ込みを入れた。

「どの道、元服の年齢になったら村正なんて特上な刀を貰えるんだよね？ なら焦らなくても良いんじゃないかな？」

「それにしたつて、少なくとも九年後の話だ。それまでの繋ぎとして、品質の高い刀が欲しかったんだよ」

「ああ、それでか。エルフのカウンターをどうすれば破れるとか、水の精霊をどう使えば交渉出来るかとか物騒な事を言ってたのは」

「まあね」

東方からの流入品を手に入れるなら、直接エルフの国に行って交渉した方が確実だとユートは考えた。

商人を通じてでは、何時になるかも判らない。

だから、自分で捜しに行こうと云う訳だ。

「兄貴、もう少し自分の身を大切にしてくれない？ お父様もお母

様も、家臣団もシエスタやメイド達も、それにボクだって兄貴の事を心配してるんだよ？」

「……ユーキ」

「コホン！ ほら、銃の扱いを教えてくれるんだろ？ 早く見せてよ！」

真っ赤になったユーキ。

言ってて照れたらしい。

「照れ隠しか？」

「わざわざ言うなよな？ 莫迦兄貴！」

そんな悪態を吐くユーキは耳まで紅い。

ユートはくつくつと笑いながら、トランクに容れてあった銀色のリボルバーを取り出して、カートリッジをセットする。

改造リボルバー。

銘は【アンブロシウス】

彼の、セラエノ断章の鬼械神デウスマキナの名だ。

銃の形状が、魔導探偵が使う【イタクア】と同じであることから名付けた。

弾丸には予め魔法を付与しており、檄鉄を打たれるとバレルを通じて、銃口から魔法が放たれる仕組みだ。

六連装だから、連続で六発放つ事が可能。

マスケット銃よりも装填が早い、カートリッジシステムを採用している。

手に入れた去年からゼロ戦共々、少しずつ改造をしていたユート渾身の逸品。

「ほら、ユーキ」

「サンクス、兄貴」

そして、ユーキは新たなる“力”を手に入れた。

「【アンブロシウス】は、一撃の威力より速度を優先した造りだ」

「まあ、原作でもそんな感じだったよね」

ラバン・シユルスベリイにより執筆された写本が存在するだけの、セラエノ断章のオリジナルたる石板。

セラエノ断章のオリジナルは、プレアデス星団の恒星セラエノの大図書館に在った破損した石板。

石板には【外なる神々（アウターゴッズ）】や、その敵対者に関する秘密の知識が刻まれていると云う。

内容は【旧き印】<sup>エルターサイン</sup>やクトウグアの召喚術法、黄金の蜂蜜酒の製法が記載されている。

また、【名状し難き者】や【星間宇宙を歩く者】と異名を取る【ハスター】や、他の旧支配者に関する知識が刻まれている為、シユルズベリイの執筆したセラエノ断章から、風属性のアンブロシウスという鬼械神を招喚出来る。

その知識の一部に……

ハスターの姿を見てしまった人間は、そのおぞましさを余り発狂してしまう為、正確なハスターの姿は判らないが、鱗のある蛸の様な姿だと綴られている。

ハスター自身は、ヒアデス星団アルデバラン（牡牛座）の暗黒星の湖黒きハリ湖に封印されており、この湖から出る事は出来ない為に、ビヤーカーという眷族に奉仕されているのだ。

そのハスターの眷族の一つが【イタクア】で、【風に乗りて歩む者】という異名を持つ。

ユーキに渡された銀色の六連装式リボルバーのオリジナルは、機神咆哮（斬魔大聖）デモンベインで主人公の大十字九郎が使っていた銃でイタクアを術式として放つデバイスとして使用。

基本的には、一撃で全てを放って不規則な軌道で敵を翻弄する。

此方は魔法を詰め込んだだけの改造銃だ。

当然、そんな効力は無い。



「ね、ね、撃って良い？」

「的を用意するから、少し待ってくれ」

ユートはクリエイイトゴーレムを使う。

『全ての命を育みし、母なりし存在、無限の大地よ。我が意に従い形と成れ！』

口頭ではルーンを唱えて、頭の中ではスレイヤーズの魔法詠唱を行っている。

「靈呪法（ヴゥヴライマ）」

力在る言葉を口に出して、大地に手を突いた。

指環……【アダマス】へと精神力を注ぎ込み、頭の中のイメージを術式に変換。

それは魔法と成って、それは形と成る。

土が盛り上がり、土の像を象かたどった。

それは数体の土人形。

【靈呪法（ヴゥヴライマ）】

大地の精霊ベフェイスに干渉し、ゴーレムを造り出す魔法。割と簡単に使えるのか、リナやナーガだけでなくゼルガデイスなんかも使用可能。

「おおっ！」

パチパチと、ユーキは拍手をした。

実際に誰かが魔法を使うのは見た事はあるが、ユートがスレイヤーズ系の魔法を使用したのは初めて見る。

それに少し感動したのだ。

「それじゃ、アレを的にしてみようか？ 土人形だから強度も低いし、試しには丁度良いだろう」

「うん！」

然し、幾ら精神年齢が見た目より高いとはいえ、四歳の子供に銃を持たすのは、果たしてどうなのだろう？

尤も、ユーキは嬉しいのか【アンブロシウス】を手にして、楽しそうな笑顔を浮かべている。

「取り敢えず、ゴーレムは動かさないから10メートル程離れて撃つしてみるか」

「オツケー」

ゴーレムから10メートル離れると、アンブロシウスを構えるユーキ。

「腰が引けてる。もっと落として」

「100？」

「それからサイティングは確りと、そのスリットから見える部分が命中するポイントだから」

「ん！」

ユーキはゴーレムに確りと照準して、トリガーを指に掛けた。

「よし、撃てっ！」

指先に力を籠めて、トリガーを引く。

ターーンッ！

軽快な音と共に、弾丸に籠められていた魔法が銃口から放たれる。

ただの【エアハンマー】ではあるが、それは圧縮術式で固まってお  
り、それが解放されて空気の槌が土人形に向かう。

ズガンッ！

エアハンマーは、明らかに別の場所で炸裂していた。

「あれ？」

ユーキは目を点にして、的を凝視する。

「外れた？」

「外れたな」

「何でさ!？」

剥れた表情でユートを見るユーキは、頬を脹らませて唇を窄めた。

「上半身がブレていた」

放つ瞬間、銃の反動で身体の上半身がブレてしまい、結果的に狙いが逸れてしまったのだ。

僅かなズレは、狙った位置に来た頃に大きく外れてしまう。

「立ち止まって、動かない相手に当てるだけがこんなに難しいなんて……」

「貸してみ？」

「ん……」

ユーキはアンブロシウスをユートに手渡す。

それを構え、銃口をゴーレムに向けると殆んど狙いも付けずにトリガーを引く。

ターーンッ!

やはり軽快な発射音を響かせて、圧縮されていた術式が飛翔しながら解放され、ジャベリンに変換されるとゴーレムに突き刺さった。

「な、何で？」

「前世で少しだけ銃を撃った事があるし、これでも鍛えてますからシユツと、響鬼のポーズを取りながら言う。」

「ちよつ、撃つてた？」

「18歳の時、高校卒業の記念に米国の射撃場に連れてって貰ったね。」

「一応、ライセンスも持ってはいたから。」

「父さんが刑事で、教官の資格も取っていたからね。」

「だから、ユートはある程度の知識があった。」

「んじゃ、今度こそ当ててやる！」

「アンブロシウスを受け取って、再びゴーレムへと構えると放つ。」

「ファイアボールが放たれ、そして外れた。」

「ま、僕も初めから当てるのは出来なかったよ。」

「苦笑を浮かべ、ユーキに銃の扱いを教える。」

「それこそ手取り足取り。」

「カートリッジを六つ、空にした頃には何とか当たる様になった。」

「ハアー！」

溜息を吐き、座り込む。

「ほら、ユーキ！」

流石に疲れたのか、疲労感が漂うユーキに乾いたタオルを投げ渡し、ブドウ糖を含有した甘めの水が入った缶ジュースを渡してやる。

「サンクス」

汗だくで、薄布で出来ている服はベタ濡れとなって、身体にピタリと張り付いてしまっていた。

「うえ〜、気持ち悪う〜」

「体力が無さ過ぎだろう。少しは鍛えないとまともに撃てないぞ？」

「あう〜、少しランニングするかな？」

ユーキは涙目になり、笑う膝を押さえながら脹ら脛を揉む。

「シエスタにマッサージをして貰ったらどうだ？」

「上手いの？」

「武雄翁や祖父母のマッサージを、よくしていたって言ったよ」

「へえ？ お兄様あ〜？」

「何だよ？」

ユーキが“お兄様”と呼ぶのは誰かが他に居る時と、ユートをからかったりお強請りをする時。

「それを知っているってこ・と・はあ、もつして貰ってるんだ」

「うっ……」

ユートは真っ赤になってしまった。

「そういえば、良かったのか？ お父様は五歳になってから言っってたんじゃないかっつけ？」

「ああ。だけど、改造した銃の調整には、どうしても使う者が撃たない事には、どうにもならないからな。父上を説得したんだよ」

確かに、サリユートからは銃を渡すのは五歳になってからと言われたが、後になって気が付いた。

改造後の調整が、ユーキ無しでは出来ない。

そこで、アンブロシウスに改造した後、ユートは早速サリユートに頼む。

ジョゼットの銃の練習は、魔法に先駆けてやらせて欲しいと……。

サリユートは渋い表情になったが、ユートが責任持って視るならと、許可を何とか取り付けた。

「そうだったのか」

ユートから説明され、納得したユーキはアンブロシウスを大切そうに持ち、右腰のホルスターに入れる。

「どうやら、図らずも兄妹の絆が育ちつつあるらしい。」

本人達が、今の肉体に引つ張られていると云う事もあるのだろうが、ユートの兄としての気遣いが前世では兄弟の居なかった祐希に、凄く撥ったかったのだ。

加えて、前世でお年頃な妹を優斗は持っていた上に、割と兄バカだった事も手伝って、妹への気遣いがバツチリだと云うのが正直大きいだろう。

血の繋がりがこそ無いが、初めて兄をもったユーキと、嘗て妹を持っていたユートは存外上手くやっていた。

ユーキの初訓練も終えて、汗だくになった2人。

「兄貴、お風呂入る？」

「そうだな」

夕餉までまだ時間がある。



先に風呂に入るのも良いだろうと、ユートは何気無く返事をした。

「んじゃ、行こ！」

「は？」

いつの間にか、腕を組まれてズルズルと引っ張られている。

「いや、待て！ 別々に入るんじゃないのか？」

いつもそうしているのに、何故に今になって一緒に入ろうとしているのか？

多いに疑問なユート。

「兄妹だし、この年齢なら気にする事も無いよ」

「か、確信犯！？」

「大丈夫、ボクは前世で飽きるくらい見ているから」

「何をつ！？」

「ナ・ニ・を」

クスクスと笑いながらも、ガツチリと組んだ腕を放す事はない。

「あの、何をなさっているんでしょうか？」

廊下で兄妹とはいえ、腕を組んで歩いて……否、兄妹だからこそ何故に腕を組んで歩いているのかと、胡乱な瞳でユートを見つめるのはシエスタだった。

「あ、丁度良かった。これから忙しい？」

「は？ いえ……」

突然のユーキの質問に戸惑いながら答える。

シエスタは基本的にユートの専属。

詰まり、命令権の第一位はユートにあった。

勿論、サリユートやユリアナが命じれば応える義務もあるが、その時にユートの命令を遂行中なら、そちらが優先される。

実質、シエスタや武雄翁やガリアからの亡命者で邸に居る者達は、ユートが稼いだお金で俸禄が支払われていれからだ。

だから、ユートが何か命じなければ、シエスタは暇で仕事をする事も無い。

体裁が悪いから、他の人から仕事を貰うくらいはするが、シエスタの仕事は飽く迄もユートの命令が優先されるのだ。

それに、この時間はメイドの仕事も特に無い。

メイドの仕事は、それぞれに粗方は割り振られている為、忙しいのを手伝うならまだしも、そうでないなら徒に仕事を奪う結果になっ

てしまう。

シエスタがこの廊下を歩いてきたのも、そろそろ夕飯だから使用人の食堂へ向かおうと思ったからだ。

だから、主たるユートから命令を受ければ、食事より命令の遂行を優先する。

「これから食堂に行こうと思っていただけですから、御用なら伺います」

「んじゃね、ボクとお兄様はこれからお風呂に入るからさ、シエスタも一緒に入らない？」

「……」

シエスタの頭（OS）が一瞬フリーズした。

「（今、ユーキ様は何と？ ご主人様とお風呂って？ しかも、私も一緒に）」

フリーズしていても目紛るしく思考は働いているらしく、高速で思考の淵を考えが右往左往している。

Q：2人が一緒に入浴？

A：2人きりにさせるのはNGだ。

Q：自分も入浴……？

A：ご主人様と入るのは恥ずかしいけど、ご命令ならメイドの仕事です！

Q：ご主人様に肌を視られるのは？

A：少し恥ずかしい。

Q：ご主人様の裸を視るのは？

A：寧ろご褒美です！

ファイナルアンサー？

「是非」とも一緒にさせていただきます！」

そう言っつて、バスタオルや着替えを取りに向かう。

その間、ユートの方もOSがフリーズして、知らぬ間に浴場まで連れてこられていた。

「な、何故こんな事に？」

「何か仰いましたか？」

「何も……」

「そうですか」

今、ユートの後ろに声の主であるシエスタが居た。

バスタオルを肢体に巻き付けて、ユートの背中を粗布で擦っているのだ。

詰まり、背中を流している真っ最中。

呆けていたら、いつの間にか浴場に来ており、ノロノロと服を脱いで入ったら、シエスタが入って来た。

顔を真っ赤にしたシエスタが、吃りながら言った台詞はユートにも驚愕の一言。

『お、お背中、お流し致しますね？』

因みに、ユーキはそんな兄の姿を笑いながら見物していたりする。

「ご主人様、痒い所はございませんか？」

「な、無いよ！」

丁寧に背中を擦り、全くと言っていい程不備は無い。

言葉通り、痒い所に手が届く細やかな気配り。

腕も、脚も、耳の裏や首筋に、背中越しに胸元や腰に至るまで細部に渡って確りと擦ってくれた。

更には胯間迄も……

「（ん？ 胯間……？）」

ハタと気が付き、見てみるとシエスタの手が胯間へと向かっている。

「つて、わあああああああつ！？ シエスタ、其処は自分でやるから！」

「え？ そうですか？」

何処と無く残念そうに聞こえるのは、きっと気のせいだと思いたい。

布を借りてユートは自分でまたぐら股座を洗う。

その間に、シエスタは髪の毛を洗ってくれた。

最後にお湯を全身に掛け、泡を流して終わる。

「それじゃあ次はユーキ様ですね」

「へ？ ボクは自分でやるからいいよ……」

「駄目です。これはメイドたる私の仕事ですから」

結局、ユーキも洗われてしまった。

最終的にユーキはシエスタと、互いに洗いっこをしていたりするが、流石に恐縮している。

湯船に浸かり、溜息を吐くユート。

「私、貴族様の浴場なんて初めてです」

「別に使用人の浴場と大して変わらないだろ？」

「そうですね、ユーキ様。装飾は多少、華美ですけど余り違いはありませんね」

ド・オルニエール家では、邸を改築して食堂や浴場を二つに分けている。

貴族用と使用人用だ。

使用人用は男女にも分けているが、貴族用は特に分けてはいない。

貴族と使用人で分けるのも客が来た時の配慮と、流石に妻の肌を使用人とはいえ見せたくないし、浴場の中でのあれこれも視られたくはなかったのだ。

ホカホカと湯気を上げて、3人は風呂を出ると水分を拭き取って、新しい服に着替える。

「では、ご主人様。結構かお手前でした」

一礼するシエスタの顔は、未だに紅い。

「結構なお手前って、いったい何が？」

「クツクツ、ナニがだろ」

最後の最後まで、ユーキにからかわれてしまったユートだった。



第16話：無垢なる刃の片鱗 と無垢なるメイドの仕事（後書き）

少しずつタグを解放。

ユートはスレイヤーズで、ユーキはデモンベイン。

こんな感じです。

第17話：ヴァリエール家の来訪（前書き）

ヴァリエール家再び。

## 第17話：ヴァリエール家の来訪

「どうです、ご主人様？」

「ん、気持ち良いよ」

「でしたら此処などはこうして、こうです」

「うわ、シエスタは本当に上手だよ！」

「はい、ご主人様」

割かし艶っぽい会話だが、やっている事は単なるマッサージだ。

夕餉の後、ユートは激しく動いて筋肉が疲労している為、シエスタの按摩を受けているのだ。

流石は、祖父母や曾祖父に四歳の頃から“お手伝い”の一環として、マッサージをしていただけあり、巧みな手管で揉んでくれる。

明日への疲労を残さぬ為、適度な按摩はスポーツでも普通の事。

按摩を確実に身体へと伝える為には、厚手の服ではいけない。

薄い服……寧ろ、上半身を裸で受けた方が芯まで伝わるものだ。

お陰でシエスタの肢体を、全身で感じていた。

もうそろそろ、こついったイベントで下半身の一部が自己主張を始めるのでは？ と、ユートも少し困ってはいるが、男の子としては嬉しいもの。

なので、ついつい心地好さに浸ってしまふ。

一方のシエスタは、主たるユートが自分を求めて（性的な意味に非ず）くれるのが嬉しかった。

恐ろしい貴族様という括りで、フィルターを掛けて見ていたから初めて会った時は恐怖したものだが、他の貴族様とは明らかに違う、そんなご主人様に今は懸想すらしている。

お父さんが確認したから、ご主人様のお手が付くのも仕事の内。

約束が有るから、16歳に成るまではそうならないのだろうが、逆に言えば既に“売約済み”だとお墨付きを貰った様なものだろう。

平民である以上、大きな夢を視る心算は無い。

それでも、許されるならばご主人様の下に、メイドとして在り続けたかった。

2人は何の約束も無いし、あらゆる契約もしない俣で主従であり、男と女であるといえた。

ジョゼットとして転生して以来、ユーキは愉しい人生を送っている。15年はあの退屈な修道院で、鬱屈とした毎日を送る事になると覚悟していた。

実りも展望も期待出来ず、未来など夢見る事すら烏滸がましい人生。前世で莫迦をやって、彼女を置いてきぼりにして死んだ自分が、何の因果か転生の権利を得た。

「ま、別の世界の自分との因果なんだけどね」

【ゼロの使い魔】の世界へと、二次小説よろしく転生するに当たって、能力を貰える事になり虚無を選んだ訳だが、虚無は既存している誰かに憑依転生する以外に使う術が無いと言われ、ジョゼットを選んだ。

選んだ時点で、鬱屈とした人生が約束されている訳だが、それをぶち破った人が居た。

それが、ユート・オガタ・ド・オルニエールだ。

自分が味方と成るべき相手にして、同じ転生者。

殆んど成り行き任せだったが、ジョゼットの身分を鑑みてユートと兄妹となる。

転生前は兄弟なんて居なかったから、それが少しだけ嬉しくて愉しい。

成る程、ジヨゼットが何故【竜のお兄様】に執着したのか、正直に言えば判らなかつた。

だが、今なら解る。

あの地獄から救い出してくれた【お兄様】だからか、自分も同じ立場になつたから理解出来た。

ジヨゼットにとっては【竜のお兄様<sup>ジュリオ</sup>】が、自分にとってのユート。

その感情の向かつた先が、恋愛か兄妹愛かの相違は在れど、その過程が全く同じだったから。

「うん、だからお兄様……ボクは君の味方なんだよ」

隣室で兄の艶かしい声が聞こえる中、笑顔を浮かべてユーキ・ジヨゼット・ド・オルニエールは呟いた。

「ふむ、収支報告はこれで終わりかね？」

「はい、旦那様」

執事長のルーカスと話し合いをしているサリユート。

内容は今月の収支報告。

幾つかの事業を30年間、色々と考えて行ってきたものだが、去年から息子であるユートが考案した事業に手を付けてみた結果、経営は以前より上向いていた。

製紙法の確立、印刷技術の確立、出版業界の設立。

紙自体の売れ行きも美味しいが、印刷技術による本の増産体制の強化。

それによる本の値下げと、一般大衆への深い受け容れは平民が本を読むという、今までなら有り得ない状況への素地を作った。

平民に対する簡単な文字の習得授業を、出版している本を教科書代わりにする事で効率化を図り、文字を読める様になった平民を雇う事で雇用対策も出来る。

仕事をして給金を獲た平民達は、出版された本を買って広めていく。

金が回れば、領内の税収も必然的に上がる。

直ぐには結果が出なかったが、半年間も続けていくと明らかに税収は上がった、

領民の懐を潤し、商人の懐を潤し、最終的に領主たる自分達も潤う。

その螺旋構造は、無意味に領民を取り立てたりするよりも長続きする。

最近では缶ジュースやクーラーボックスなど、割りと売れていて税収も本当に上向いていた。

また、事業の拡大に伴って領民の中からも、どんどん雇用している魔法の要らない部分が多々あり、それを魔法の使えない領民に任せていった。

ユートがガリアから連れて来た女性や少女達、彼女らもまた貴重な戦力だ。

暫く後に、温泉郷の展開が始まる。

これも新しい事業となり、領内は更なる活気に充ち溢れてくれる事だろう。

「父上、お呼びと聞きましたが何かご用ですか？」

「ああ」

ユートは父、サリユートから呼び出しを受け、執務室へとやって来ていた。

サリユートは走らせていた羽ペンを置き、ユートへと向き合つと本題に入る。

「ラ・ヴァリエール公爵より書状が着てな、それがお前宛てだったのだよ」



「公爵……？ ピエール様からですか」

ユートは、サリユートから手紙を受け取ると封筒から手紙を出す。

其処には、ある意味で予想通りの内容があった。

要約するところだ。

『久し振りだなユート君。以前した約束を覚えているだろうか？

単なる口約束というよりは戯れ言に近いものだったが、少々ウチで問題が発生したのだよ。

五歳になったルイズが魔法を習い始めたが、その悉くを失敗してしまふ。故に、恥ずかしい話だが優秀な君に、一度ルイズを視て貰えないだろうか？』

……というモノだった。

ユートは手紙を読み終わると、丁寧に折り畳んで封筒に再び仕舞うとサリユートに言う。

「父上は手紙の内容をご存知でしたか？」

「一度、公爵から相談を受けてな。お前に話してみる事を提案した」

「そうですか……」

ユートは暫く黙考すると、結論を話す。

「父上、ヴァリエール公爵家族をウチの温泉郷に招待して下さい」

「な、何？」

「名目は、ミズ・カトレアの湯治という事で」

既に温泉郷は半ばまで完成を見ている。

現在は、総女将のセシリアが中居や料理人を鍛えている真っ最中で、料理や部屋は直ぐにでも準備が出来ていた。

「その小旅行の間に、僕が訓練を付けます」

「成る程、対外的にはただの旅行。ルイズ嬢の魔法の事は公にならんと云う訳だな」

下手にユートを呼び付ければ、要らぬ詮索をする者も出て来る。

それこそ、ルイズの魔法とは無関係で、しかも事実無根な話が広ま  
りかねない。

「判った。ラ・ヴァリエール家へ招待状を贈ろう」

ユートの考えを理解して、サリユートは確り頷いた。

「ほっ……」

「どうしました、アナタ」

金髪にモノクルを掛けた髭の紳士が、真剣に読み耽る一通の手紙。

その内容に感心したのか、感嘆の溜息を洩らす。

夫の動向が気になったのだろう、ピンクブロンドを掻き上げ、赤色に窮めて近いピンクの服を着た女性が、話し掛けた。

紳士の身分はヴァリエール公爵、名前はピエールという。

夫人の名前はカリーヌ・デジレといい、身分はヴァリエール公爵夫人だ。

ラ・ヴァリエール夫妻は、三女のルイズが魔法を習い始めて頭を抱えていた。

長女がトリステイン魔法学院に行き、次女は病の影響で引き隠りがちになって、魔法で構う相手が三女であるルイズだけとなった為、家庭教師を雇って魔法を習わせたのだ。

然し、ルイズは座学の成績こそ良かったが、いざ実践となるとその全てに於いて失敗する。

理屈こそ解らないものの、兎に角爆発するのだ。

念力……ドカーン！

施錠……ドカーン！

解錠……ドカーン！

灯り……ドカーン！

コモン・マジックの悉くを爆発させていた。

仕方がないので、系統魔法を先にやらせてみる。

発火……ドカーン！

凝縮……ドカーン！

錬金……ドカーン！

ウインド……ドカーン！

基本となるごく簡単な魔法を使わせて、やはり悉くが爆発に終わる。

もう意地になり、ルイズが魔法を精神力の限界まで放つ為、庭中がクレーターだらけになっていた。

その都度、部下の土メイジに言って庭を修繕させる。

三女とはいえ、公爵家令嬢たるルイズが魔法の失敗を繰り返す。

余りにも風聞として悪い。

其処で、ヴァリエール公爵は起死回生の一手として、去年のカトレアの誕生日に来ていた少年に相談した。

「去年のカトレアの誕生日に来ていたサリユートと、ユリアナ殿の息子を覚えているかい？ カリーヌ」

「ユート君ですわね。鍛え甲斐のある子でしたわ」

ヴアリエール公爵だけではなく、カリリーヌもまた自身の後継者が居ない事に嘆息していた。

昔は女だてらに騎士を目指して都に上がり、わざわざ男装をしてまで動く。

紆余曲折あつて、フィリップ三世陛下から騎士叙勲を受け、シユヴアリエとなる事が出来たカリリーヌ。

その事は、誇りにすら思っている。

尤も、思い出すのも憚る様な黒歴史もあつたが。

とはいえ、それを娘に期待出来る訳も無い。

明らかに学者肌の長女。

病弱な次女。

魔法の使えない三女。

まあ仮令、資質があつたとしても娘に昔の自分と同じ真似は、決してさせなかつただろうが。

そついう、後継者的な意味では息子が欲しかったと考へても無理はない。

息子なら、“多少の無理”では壊れないだろうし……

「それで、ユート君がどうしました？」

「うむ、ルイズの事で相談してみたのだよ」

「ルイズの事で？　ですが幾ら何でも、未だ六歳程度の子供ではア  
レを解明出来るとも思えません」

魔法の才能は確かに豊か。

始めて間もないユートが、既にラインに届いていると聞いた時は、  
カリーヌとて驚愕したものだ。

だが、実践と理論はまた別物だろう。

どれ程に優れた論理展開が出来ても、魔法の才能が無ければ実践は  
出来ないし、その逆もまた然りだ。

「ワシもそう思うよ。だがね、娘の為に打てるならばどんな手段も  
講じたいと、そう思ってもいるのだよ」

「アナタ……」

それはルイズの魔法の話しだけではなく、カトレアの病に関しても  
同じ事。

金が掛かるうが、異端に触れようが、カトレアの病を治せるならば  
あらゆる手を考えたい。

本当に治したなら、地位も財産もくれてやるくらいの意気があるの  
だ。

娘をやるのは業腹だが。

「読んでみなさい」

「では、失礼しますわ」

ヴァリエール公爵から手紙を受け取り、カリーヌ夫人はそれを読み始める。

「これは……？」

内容は、完成した温泉への招待状であり、その遊興の間にルイズの魔法を見るといったモノ。

「真逆、カトレアの事まで気遣ってくれるなんて」

そう、温泉自体はカトレアの為の湯治。

ルイズだけでなくカトレアの事も併せて考えた上で、招待状を贈ったのだ。

「温泉とやらで、カトレアの病が治る訳ではあるまいが、症状の緩和にはなるかも知れん」

「更に、ルイズの魔法の面倒まで……」

ヴァリエール公爵は、彼の気遣いに感謝した。

カリーヌ夫人も、此処までしてくれたのだから、年齢が達したら確りと特訓を上げてよ々と考える。

ヴァリエール公爵は兎も角としても、カリーヌ夫人の場合は明らかに恩を仇で返している気はするが、本人は恩返し心の心算で悪意など全く無いのだから、質が悪いとしか言えないだろう。

同じ頃、ユートの背筋に震えが奔ったのは言うまでもあるまい。

「ジェローム！」

「は、旦那様」

「カトレアを呼びなさい」

「畏まりました」

執事長のジェロームに娘を呼びに行かせ、自身もまた庭で破壊活動の……元い、魔法の練習に勤しむルイズを呼ぶべく立ち上がった。

その日の内にヴァリエール家が所有する馬車が邸より走り、家族が簡単な小旅行を行った。

一応、鷹を使って招きに応じる旨を手紙に認め、先触れとして送っている。

「お父様、何故この様な時期に旅行に？」



魔法を習い始めて、それが失敗ばかりのルイズとしては、少しでも練習（という名の破壊活動）をしたかったのに、旅行先では練習も儘ならない。

「なに、少しは息抜きをせねば上手くいくものもいなくなる」

「そうですねルイズ。根を詰めれば良いという訳では無いのです」

ヴァリエール公爵と夫人に言われ、頂垂れるルイズ。

煮詰まっているのは確かではあるし、魔法の練習（破壊活動）も余り上手くいっていない事実がある。

そんなルイズの頭に手を乗せ、撫でてやるカトレア。

「ちいねえ様」

「小さなルイズ、私も少し心配よ。最近の貴女、鬼気迫る感じだもの」

「は、はい……」

優しい姉に心配を掛けていた事を知り、頻りに反省をしてしまう。

とはいえ、実はカトレアは少しだけ浮かれていた。

自分を一瞬で魅了した宝石を造った男の子。

ルイズより一歳上でしかなく、自分より七歳も年下。

だけど、彼に会えると聞いてカトレアは一もなく二もなく喜んだ。

カトレアの胸元には、十二という年齢（未だ誕生日を迎えていない）としては、破格の双丘を飾る紫の輝きが光る。

その輝きを、カトレアは優しく見つめていた。

パカラン、パカラン……

馬の蹄の音が、軽快に木霊している。

その癖、馬車の車輪の音は大した事もなく、静かなものだった。

「余り揺れなくなりましたわね」

「そうだな」

カリィヌ夫人の言葉に応えるヴァリエール公爵も、不思議に思う。

ド・オルニエール領に入った途端、揺れや音が最小限にまで減ったのだ。

オマケに、蹄鉄の音は大きく響く。

まるで石の上でも走っているみたいだ。

暫く馬車を走らせていると屋敷が見える。

「あれがオガタ家の屋敷ですか？」

カトレアが外を眺め、父である公爵に訊ねた。

「うむ、昔からの屋敷を全面的に改築したらしいな。だから、基本的な構造は同じだと言っておったよ」

最近は公務もあり、来てはいなかったが昔は招待を受けて行く機会もあった。

その際に、サリュートから説明をうけていたのだ。

屋敷の庭に入ると、夜中だというのに随分と明るい。

庭には、オガタ家の当主であるサリュートを中心に、家族や住み込みの臣下一同で出迎えて来た。

「よくおいで下さいましたな、ヴァリエール公爵」

「うむ、此度はご招待痛み入る」

当主同士、挨拶を交わす。

「これはヴァリエール公爵夫人、いらっしやいませ」

「この度はお世話になりますね、オルニエール子爵夫人」

夫人同士も挨拶を交わしている。

当然ながら、ホスト側であり家格も下な子爵家の息子であるユートも、公爵家の子女たるカトレアとルイズを歓待する。

「いらつしゃいませ、カトレア嬢、ルイズ嬢」

「ユート君、お世話になるわね」

「お、お世話になるわ」

ニコニコと笑顔を浮かべたカトレアと、少し怖ず怖ずと挨拶をするルイズ。

未だ幼いからか、人見知りしているらしい。

「それとご紹介しますね。僕の義妹です」

後ろに控えていた銀髪少女を前に出す。

予め言われていた為、少女は直ぐに自己紹介をした。

「初めまして。ユーキ・ジョゼット・ド・オルニエールと云います」

「まあ、ユート君に妹が居たの？」

「はい。年齢は四歳なのでルイズ嬢の一つ年下になりますね」

「宜しく願います」

「ええ、宜しくね」

「よ、宜しく……」

深々と頭を下げたユーキを見て、カトレアは笑顔で挨拶するが、やはりルイズは何処か自信無さげだ。

ユートもユーキもその理由は思い当たる。

習い始めて間もないといっても、まるで成功しない魔法。

公爵家の娘として、自信を無くし掛けているのだ。

これでは、将来のルイズに残るのは無駄な公爵家令嬢としてのプライド（驕り）くらいだろう。

否、それしか残りようが無かったのだ。

貴族＝魔法至上主義封建世界であるハルケギニアで、魔法をまともに扱えないなど在ってはならないから。

少女はどれ程、社会構造に傷付けられて歪められたのだろうか？

前世では魔法が存在せず、今生では神まがはから与えられた能力故に、大きな苦勞をしなかったユートには、計り知れない感情に焼かれていたのだろう。

ユートに同情などする権利も資格も無いが、少しくらいの介入は許されて良いだろうと考えた。

「では、屋敷をご案内致しましょう」

いつの間にやら大人の話は終わったのか、屋敷に入る段階に来てい

たらしい。

ユートはカトレアとルイズを、客間へと案内した。

夕餉も終わり、明日の予定を話し合う。

「明日、件の温泉郷へ案内しましょう」

「うむ、楽しみにしているぞサリユート」

軽く酒を飲み、赤い顔をして話している辺り、そろそろ子供だけになっても良さそうだ。

「母上、僕達も部屋に戻りますね」

「ええ、お二方を宜しくねユート」

「はい。それではカーリーヌ様、今宵は御前を失礼致します」

「そうですね、娘の案内を頼みましたよ」

ユートは挨拶をして、二階へとカトレア達を案内する事にした。

「こちらがカトレア嬢達の泊まる客室です」

開けると、確りとベッドメイクされた大型のベッドが用意されている。

普段、ユートもユーキも使わないサイズだが、ルイズはカトレアと寝るのだから用意させたのだ。

今日はもう寝るだけ。

明日は温泉郷に行き、温泉に浸かったり魔法の練習をしたりと忙しくなる。

英気を養う意味で、キッチリと寝ておく心算だった。

「兄貴、明日はルイズの魔法を視るんだろ？」

「そうなるな」

「良かったのか？ 下手すると、原作からかけ離れてしまう」

ルイズの性格が丸くなればそれだけ、原作とは違った展開になる。

「多少は問題無いさ。世界の修正力は半端じゃないだろうし、因果率が神格化された宇宙意思からも警告なんか来てないしね」

「因果率が神格化？」

昔の神の中でも、地球独自の神とは基本的に自然現象を神格化した【顕象】と呼ばれる存在だ。

人間というノイズ無しで生まれ、故にこそ正しく神化した為、絶大な力（本能）と心（理性）を持っている。

その中でも、神界や魔界を治める最高指導者はやはり強大な力が有る。

それはハルケギニアも無縁ではない。

因果率が神格化された存在である宇宙意思是、世界の崩壊を防ぐ事はしない。

然し、余りに突出してしまうと修正力を以て行動制限をしてくる。

ある意味では公平だと言えるし、別の意味では不公平とも言える存在だ。

因みに、神格は【純白の天魔王】など及びも付かない程の高位に当たる。

「ふ〜ん、やり過ぎなら判るんだ？」

「水の精霊王の地上代行者に成ったからかな、少しだけど世の理「とわじつてヤツが視えるんだよ」

「成る程ね」

ユーキは納得したのか、部屋へと戻る。

「じゃ、兄貴。お休み」

「ああ、お休みユーキ」



ユートもまた、部屋へと戻っていった。

第17話：ヴァリエール家の来訪（後書き）

次回はルイズの魔法訓練。

そしてお約束？

第18話：特化型メイジ（前書き）

風の聖痕も少しだけですが関わってきます。

## 第18話：特化型メイジ

翌朝、ユートが目を覚ますとその隣には、寝る前には居なかった筈の盛り上がりがあった。

「……………」

大粒の汗を流し、茫然自失となってその盛り上がりを見つめると、掛け布団を剥ぎ取る。

其処にはメ、イド服を着た黒髪ボブカットの少女が、ユートの腕にしがみ付いて眠っていた。

「し、シエスタ……………」

“あの日”以来、シエスタは本当に添い寝をするようになり、ユートをドギマギさせている。

今は幼いから未だ良いが、相応に成長したら襲ってしまいそうで、自制心を働かせなければ危険だ。

勿論、普通の貴族なら厳罰どころの話ではないのだろうが、ユートだから許されていた。

シエスタとしては、いずれお手付きになるのならば、慣れておきたいのだろう。

この歳で既に其処まで考えているのは凄いが、世界情勢を鑑みれば

平民は当たり前前に知識が在った。

貴族は平民を塵芥と視ていながら、少し容姿が気に入れば平然と手籠めにする。

早い内から知識を与えるのは、寧ろ当然の事だ。

そんな訳で、割りと覚悟完了なシエスタは、ユートから何時お呼びが掛かっても良いように、ユートの蒲団に潜り込んでいた。

少なくとも、ユートは約束通りに16歳までは手を出さないが。

つまり、あと10年は時間が有ると云う事だ。

その頃には、覚悟完了を通り越して掟破りの逆夜這いくらいはして来そうで、今から戦々恐々としている。

「シエスタ、そろそろ起きようか？」

身体を揺すり、シエスタを起こすユート。

ハッキリ言って、アベコベである。

本来は、メイドのシエスタがご主人様を起こさねばならないのだ。

「うん……？」

朝日に目を焼かれ、心地好い揺れに目を覚ました瞬間に、ガバリと布団を跳ね避けて真っ赤になる。

「ゆ、ゆ、ユート様っ？ わ、私っては何て粗相を……っ！」

「良いから、落ち着け！」

「はっつ！？」

取り敢えずは、シエスタのド頭にチョップを喰らわせて黙らせた。

「着替えるから、シエスタは手伝ってな？」

「か、畏まりました！」

慌ててタンスから服を取り出して、ユートの着替えを手伝った。

これがシエスタの朝の日課だったりする。

着替えの手伝いがだが。

誰よりも早く起きたユートは、庭で木刀を振る。

早く身体を慣らして、本来なら使える剣技を再現するべく頑張っていた。

次に起きてくるユーキも、やはり運動を始める。

少しは鍛えておかないと、折角の拳銃アンブロックスが使えない。

言わば基礎体力作りでしかないが、やらないより幾分かはマシだろう。

「お兄様？」

「何かな？ ユーキ」

2人つきりでの“お兄様”発言ほど警戒するモノも無いユートは、若干引き攣りながら訊ねた。

「シエスタの温もりはどうだった？」

「っ！？ 真逆、ユーキの差し金か！」

今朝を思い出し、顔を朱に染めて怒鳴る。

変だとは思った。

何時もなら、シエスタが布団に潜り込んで来るのは、寝る前の事。

既に寝ている状態では流石に入って来ない筈が、今日は潜り込んでいて吃驚したのもだった。

ユーキの差し金（悪魔の囁き）なら成る程、確かに有り得るかも知れない。

「クスクス、お兄様の理性が早々と崩壊しないと良いね？」

「ユーキイツ！」

ユートは逃げるユーキを、木刀片手に追い回す。

ユーキはユーキで、キヤーキヤーと言いながら笑顔で逃げていた。

鬼ごっこも程々に、ユートは風呂で汗を流すと食卓に着く。

出された朝食を、ヴァリエール家と合同で摂り、紅茶を飲んで朝礼を開始した。

「今朝はヴァリエール家と一緒に朝礼を始めます」

議長のサリユートではなく副議長たるユートが司会をして、話を進めていく。

「先ず、昨夜はそここの紹介だった義妹、ユーキ・ジョゼット・ド・オルニエールを、ヴァリエール家の皆様に改めてご紹介致します」

言われて立ち上がる。

「改めて初めまして、只今ご紹介に与ったユーキ・ジョゼット・ド・オルニエール、四歳です。宜しくお願ひします」

一応、昨夜の内に粗方の事は説明しており、ピエールとカリーヌには本当の事も言っていた。

その為、特に疑問も無い仮に朝礼は進む。

本日の朝礼の最大の焦点、それはユーキの事では無いという事もあ



る。

「今日から五日間、温泉郷へと赴いて、カトレア嬢の湯治を行います。また平行して、ルイズ嬢の魔法訓練も行う予定となります」

「え？」

其処を聞いていなかったのか、ルイズが吃驚した表情でユートを見て、文句を言おうと立ち上がるが……

「尚、これはピエル様とカリーヌ様もご承知です」

「っ！？」

……こう言われては、従うより他に無かった。

朝礼も終わり、三台の馬車で温泉郷に向かうべく外へ出て、ヴァリエール公爵は改めて驚く。

それは道。

黒い道。

石の様な黒い道が、敷き詰められていた。

「サリユートよ、この道は一体何なのだ？」

「ユートによると、道路と云うらしい。アスファルトと呼ばれるモノを敷いて、強固で安定した道を造り出した様だ」

「真逆、これもユート君がやったのかね？」

「ああ」

自然破壊をしない為にも、アスファルトを敷いているのはメインストリートと、温泉郷への道だけだ。

これにより、馬車は安定した走りが可能となったし、雨でぬかるむ事も、凸凹になる事も無い。

石畳の様に、壊れて欠ける事もなかった。

勿論、経年劣化はあるだろうが……

こうして、ヴァリエール家とオガタ家は、然したるトラブルに見舞われる事も無く温泉郷に向かう。

因みに、従者として何人かのメイドも連れていく。

カトレアは早速、温泉へと向かった。

やはり心配なのか、一緒にカリーヌも付いていく。

案内を勤めるのはセシリアで、既に女将が板に就いている。

中居がまだまだ半端なモノらしく、大貴族を案内するには何かと不備があると云う事で、女将が自ら案内を買って出たのだ。

流石は元メイドだけあり、その接待能力は高い。

とはいえ、やはり心配な事もあった為聞いてみた。

バカ貴族の強姦で痛い目を見たのに、また貴族を相手に接待する事に隔意は無いのか……と。

それに関しては、仕事だと割り切っているらしい。

確かに、決して安くはない給金を払っているのだから、隔意で接されても困る。

だからと言って、お触りがアリの風俗では無い訳で、それ込みの給金では無いのだし、余り割り切り過ぎる必要性も無い。

嫌な事は嫌だと言っても良いし、杖の持ち込みは基本的に禁止してある。

当然、従業員の人権も守られた職場にする心算だ。

その為の言わば、用心棒も必要だと考えていた。

それは兎も角、セシリアの話では温泉に2人共、十分に満足しているらしい。

当然と言えば当然。

水の聖痕の力をわざわざ使って、温水に水の精霊王の祝福を附与してある。

流石にカトレアの病を完全に癒す事は不可能かも知れないが、それでも病で受けたダメージをある程度緩和出来る筈だ。

少なくとも、湯治の間は病の症状も出ないだろう。

ユートが個人的に嬉しかったのは、カトレアが掛けていたペンダント。

去年、彼女に贈った物だ。

プラチナの台座に、紫水晶を嵌め込んだあのペンダントを、カトレアは大事に着けてくれていた。

『カトレア嬢、ペンダントを着けてくれてるんだ？』

『だって、ユート君がくれた初めてのプレゼントだったから』

はにかみながら言ってくれた言葉に、自然と顔が熱くなる。

製作者冥利に尽きるのか、それとも別の感情なのかは判断出来なかったが、自分の顔が真っ赤になっている事は理解していた。

そう……感情の行方はどうあれ、嬉しかったのは紛れもない事実だったから。

問題が有ったとするなら、それはニヤニヤと口角を吊り上げていたユーキの事、それから何故か口を利いてくれないシエスタの事だろうか？

シエスタは思う。

思考の淵で。

私は所詮、平民の娘。

やっぱり貴族は貴族同士、平民の小娘なんて入り込む余地は無いよね。

ご主人様、カトレア様を見て顔を赤くしてた。

それに、カトレア様が掛けているペンダント、あれはご主人様が造って贈った物らしい。

ちょっと、ううん。

凄く羨ましい。

貴族に生まれたかったなんて、そんな贅沢は言う心算なんて無い。

だって、平民でタルブ村に生まれたからご主人様とも出逢えたんだから。

平民にも変わらず優しいご主人様、せめて好きでいさせて下さいね？

だから、少しだけ嫉妬しても良いですか？

16歳になったら、一度だけで良いので、ご主人様のお情けを下さい。

ちよつと暴走気味だった様だが、シエスタは胸の埋でそう思っていた。

ユートとルイズとユーキの3人は、ユートが温泉を造っていた頃、訓練に使っていた広場に居る。

ルイズの魔法を見る為だ。

「じゃあルイズ嬢、一度魔法を見せて貰えるかな？」

「待って！」

「？ 何かな？」

「その前に、ルイズ嬢っていうのをやめて欲しい」

ルイズは少し困った表情で言ってきた。

「曲がりなりにも教えを乞うんだもの、ルイズって呼んで……」

「でも、ルイズ嬢の家庭教師はミス・ルイズか、若しくはルイズ様って呼んでなかったかな？」

「呼んでたけど、その……う~~~~っ！」

何故か真っ赤な顔で、手足をジタバタさせる。

「！ それじゃ、ルイズ。ボクと魔法の練習をしようね？」

閃いた、と言わんばかりの表情でルイズの前に移動すると、ユーキがにこやかにそんな事を言い出して、手を差し出す。

「え……つと？」

ユーキの手と顔を交互に見て、ルイズは訝しげな表情になる。

「手を握れば良いんだよ」

ユーキは尚も笑顔でルイズに教えた。

「え、ええ！ 一緒に頑張りましょう！」

握手という文化が無かったのか、或いは戸惑い故なのかは判らないが、ルイズはユーキの意図に気が付いて手を握った。

ユートも漸く意味を理解したのか、右手を差し出してルイズに言う。

「宜しくルイズ」

「宜しくね、ユート」

完全にはスレていない為、少し素直なルイズだった。

相互理解も終わり、魔法の練習に入る。

「じゃあルイズ、早速なんだけど魔法を見せて貰えるかな？」

「判ったわ」

ユートの指示に従い、杖を翳すと詠唱を始めた。

目を閉じて、荘厳な雰囲気醸し出しながらルーンを唱えるルイズ。

「ウル・カーノ、発火！」

ドカーンッ！

初めて見たが、何と言おうか……凄まじい。

杖の先が突如、何の前触れも無しに爆発したのだ。

「（どういう原理だ？）」

普通に視ても判らない。

「ルイズ、今度は凝縮を使ってくれるか？」

「う、うん」

少し不安そうに答える。

ルーンを唱え、凝縮を使うもやはり爆発。



この際、ユートは少しだけ力を解放して目に蒼い光を宿していた。  
全開でなければある程度、力を使えると判ったのだ。

見えたのは、水の精霊へとルーンが干渉している情景だった。

ルーン自体は水の精霊へと干渉していたが、実際には水の精霊とは無関係な効果を及ぼす。

精霊よりも細かく細分化された何か、どうやらそれが反応していたらしい。

「（虚無の精霊？ いや、違うか……）」

錬金……ドカーンッ！

ウインド……ドカーンッ！

他の系統魔法も爆発する。

ルイズはユートを恐る恐る見た。

何だか凄い表情でブツブツ言っていて、果てしなく怖いのは決して気のせいではあるまい。

「ゆ、ユート？」

「……判った！」

「ひあっ？」

突然の大声に、ルイズは驚いてしまう。

「ルイズの魔法特性に関して、大体判ったよ」

「ほ、本当に!？」

ルイズの表情がパーツと、輝いていた。

「だ、だけど……家庭教師の先生は疎か、お父様も、お母様も、エレオノール姉様も、ちい姉様にも判らなかつたのに？」

『（そりゃ、答えを知っているからね）』

ユートもユーキも苦笑してしまう。

答えは既に判っている。

とはいえ、幾ら何でも行き成り看破は有り得ない。

だから少しだけ魔法を見せて貰ったのだ。

ルイズにはちゃんと解答を用意しており、それを教える心算だった。

「先ず、見た限りでは系統魔法に一切、適正が無いみたいだね」

ビクリと、ルイズが肩を震わせて表情を歪める。

「ルイズの適正は特化型にあるんだよ」

「特化型？」

「身近で言えばカリーヌ様かな？ 風系統特化メイジだね」

カリーヌ・デジレ・ド・マイヤールは、烈風の騎士姫と呼ばれるくらしい風系統の使い手。

風系統なら、ただのウインドが突風になる程強い。

然し、それ故に他の系統が使えない。

多少は使えるのかどうかは知らないが、恐らくは全く使えないのだろう。

その代わりに、風であれば天災級という訳だ。

10歳で、風系統の浮遊を容易く使ったカリーヌは、騎士になる為にトリスタニアに出て来て、ウインドで三バカを驚かせている。

「特化型は、とある一点にのみ秀でている為、その他の能力が使えないんだよ。所謂、メモリ不足ってヤツだね」

思い出されるのは、ユートが知るライトノベル。

### 【風の聖痕】

丁度、ユートもアレの主人公と同じ、精霊王との契約で聖痕を獲ている。

だから、亜空間ポケット内の小説を見直して、ルイズに説明する資

料とした。

このメモリ不足に関して、主人公が米国の炎術師のお嬢さんに言った台詞だ。

精霊獣に“特化”され過ぎていて、強力過ぎる精霊獣を出している間は、自分で炎術を使えない。

それを称して【メモリ不足】だと言ったのだ。

まあ、元ネタはまた別に有る訳だが……

「じゃあ、私はお母様みたいに何かに特化しているから、系統魔法を使えないって事なの？」

「そついう事」

成る程、物分かりが良い。

頭の方は決して悪くない、考える機会を与えてやれば答えに辿り着ける様だ。

ユートは少し感心した。

「ルイズの場合は恐らく、空間制御特化型だ」

「空間制御特化型？」

ルイズは鳩が豆鉄砲を喰らった様な表情で、ユートを眺める。

「そう、空間制御特化型」

「（また、凄い言い訳を）」

ニコニコと言うユートを見て、ユーキは思った。

「ルイズの爆発は、正しい詠唱とイメージが成されていないから、本来の力として発現していない木漏れ日みないなモノだよ」

「本来の力？ 木漏れ日……って？」

「あの爆発は、失敗でも何でも無い。ルイズの本来の魔法が木漏れ日の様に顕れているだけなんだ」

### 【空間制御特化型】

言い得て妙だ。

虚無の魔法は正に、空間と記憶を前面に押し出した様な魔法。

【爆発】エクスプロージョンですら、空間制御による魔法だ。

破壊するモノ、しないモノを設定するのは空間把握が必要だし、実際に爆発する場所を指定するのも制御が有ってこそ。

だから、ユートは少しだけではあるが、虚無を覚えておく。

正しく制御が出来る様に。

「ルイズ、空間制御の魔法のルーンを教えるからさ、後に続いて唱

「えってみて？」

「あ、うん」

問題は、ヴィットーリオやワールド辺りに目を付けられ易くなる事か？

ユートは水の力を辺りに充満させ、水のルビーの力を擬似的に造り出す。

「エオルー・スーヌ・フィル・ヤルンサクサ」

「エオルー・スーヌ・フィル・ヤルンサクサ」

言われた通り、ルイズは後に続いて詠唱していく。

仕種もユートを真似た。

ユートは予め定的として造ってあったゴーレムに、伸ばした手に向ける。

ルイズも同じくだ。

エクスプロージョン  
「爆発ッ！」

エクスプロージョン  
「爆発ッ！」

「チュドーンッ！」

ユートの方は何も起こらなかったのだが、ルイズの方は周囲の精霊力を押し退けてゴーレムを爆破した。

「あ、あれ？」

何かが違う。

結果は今まで通り爆発。

だけど違うのだ。

今までは周りが言う通り、失敗魔法だと言われて納得出来た。

これは失敗で間違いないのだと。

だが、先程の爆発は何故か成功した実感がある。

「それが、指定した空間を爆破する魔法、エクスプロージョンだよ」

「エクスプロージョン」

意味は【爆発】

ルーンを唱えて、力ある言葉を紡いだ時に感じたのは充足感。

足りなかった欠片ピースが充ちていた。

“これが私の魔法”なのだ、ハッキリ言える。

充ちていた。

満ちていた。

満ちて、溢れ出していた。

ルイズの朱鷺色の瞳から、涙が溢れていた。

それはきつと、カラカラに渴いていた心が満たされていたから。

それを見ていて、ユート達は一息吐く。

結局、爆発させた事には違いないから、満足してくれるか不安もあったのだ。

途中までのエクスポージョンの詠唱を教え、力在于る言葉で正しく小振りに発動させるのが、今回ルイズに教えた魔法。

フルで詠唱させる訳にもいかない為、本当に一部のみを詠唱させたのだ。

当然、ユートが詠唱しても何も起きない。

「後、もう一つ教えよう」

「え？」

「また同じ様に、後から続いて唱えて」

「わ、判ったわ」

確りと頷くルイズ。



「ウリユ・ハガラーズ」

「ウリユ・ハガラーズ」

「ボクの後ろを視て、其処へ行きたいと思って唱えるんだ、テレポ  
ート！」

「テレポート！」

言霊を紡いだ瞬間、ルイズはユートの目の前から消えて、後ろに移  
動していた。

「視認した位置に瞬間的に移動する“古代魔法”だ」

本来なら、完璧な発動をすれば記憶に在る場所を思い描いて、何処  
までも跳べるのだろう。

だけど中半端な詠唱では、そんなモノだ。

そして、ユートはこれらを【古代魔法】と、ある意味嘘とは言えな  
い言い訳を使った。

## 第18話：特化型メイジ（後書き）

ルイズの魔法は、本人には古代魔法として暫くの間、誤魔化すユートでした。

第19話：遺失魔法と虚無（前書き）

最近、少し遅れ気味……

## 第19話：遺失魔法と虚無

魔法の訓練を終了後、温泉に入るルイズ達。

勿論、男女別に入った。

ユーキに危うく女湯へ引つ張り込まれ掛けたが、流石にルイズが阻止してくれたのだ。

これにはホッと、胸を撫で下ろしたものだっただ。

先に入っていたカトレアを思い出す。

正確には、温泉から出たばかりの艶姿だが。

この旅籠には、お客が歩き回る為の服として、浴衣を用意してある。

日本情緒の浴衣だったが、カトレアにも十分似合っていた。

湯上がりで、普段は白い肌が薄っすらと桃色に染まって、頬に朱が差している。

ホコホコと湯気を上げて、笑顔を浮かべるカトレアの艶姿は、ユーコの幼い煩惱に直撃した。

そのお陰で、話し掛けられた時に目のやり場に困ってしまう。

未だ13歳とは思えない。

チラリと見える胸は、既に結構な脹らみを魅せていたし、本人の柔らかな雰囲気も相俟って、とても子供には見えなかった。

岩を背に、凭れ掛かりながら空を見上げてポケーツとするユート。

夜空に浮かぶ双月が、何故かシエスタとカトレアの姿になる。

「うえ!？」

思わず、自分の妄想に吃驚してしまった。

「お、俺ってこんな女好きだったっけか？」

我知らず、前世の口調が突いて出るくらいの驚愕。

ブンブンと頭かぶりを振り、顔にお湯を掛ける。

先程、双月に見た幻視を振り切る様に。

ユート・オガタ・ド・オルニエール6歳、頭の中身は既に26歳であり、精神年齢は大体14歳くらい。

そろそろ煩惱に悩むお年頃だった。

全員が食堂に揃った処で、夕餉の時間となる。

セシリアが雇った料理人達が、腕によりを掛けた料理を食べて皆がご機嫌だ。

特にルイズは、やっと満足のいく魔法が使えて本当に嬉しそうにしている。

ユートとしても、少し胸を撫で下ろしていた。

これで必要以上にルイズが歪む事も無い。

歪んだルイズを矯正するよりも、歪む前に方向修正をした方が楽だ。

食後の団欒も和やかに行われて、全員が笑顔を浮かべていた。

魔法の成功を喜ぶルイズを見て、目尻をだらしなく下げるヴァリエール公爵。

カリーヌ夫人も、そんな姿を優しい瞳で見守る。

普段のキツさが嘘みたいな穏やかさで、ユートも多少困惑していた。

「（カリーヌ様、あんな顔も出来るんだな）」

「ユート君、何か思いましたか？」

「いえ、何も！」

聡い感性で、不穏当な事を考えたユートを流し目によって牽制して来る。

カトレアがそんなユートを見て、クスクスと手で口元を隠しながら笑っていた。

「（カトレア嬢には確実に気付かれてるな）」

原作でも、エスパーも斯くやと云わんばかりに才人の考えを読んでいたくらいだし、ユートの考えを察しているのだろう。

下手にカトレアの前でエロエロな想像をすれば、確実にバレると思っていた方が良さそうだ。

ユートはゾツとしない考えに、背筋を震わせる。

食事も終わり、カトレア、ルイズ、ユーキを部屋に戻して残った人間で話し合いを始めた。

「ではユート君、ルイズの魔法に関する報告をして貰えるかね？」

ヴァリエール公爵がユートに報告を促す。

「判りましたピエール様。先ず、ルイズ嬢の魔法資質は多少異質です」

「異質？」

「はい。その為、ルイズ嬢はどれだけ系統魔法を使おうとしても、ただの爆発しか起きなかった」

異質。

その意味を考える公爵だったが、いまいち実感を掴めない。

「本人には古代に失伝し、喪われた空間制御魔法だと話しておきました」

「空間制御魔法？」

「それ自体に嘘はありませんが、完全に真実という訳でもありません」

「では、真実とは？」

ヴァリエール公爵は核心に触れてくる。

「……………虚無です」

「っ！？」

少し間を空けると、ユートは“真実”を暈す事も無く答えた。

それは余りに重たい、然し逃げる事も、目を反らす事も出来ない真実。

「虚無……………ですって？」

やはり信じ難い話なのか、掠れる様な声でワナワナと呟くカリーヌ夫人。



「ユート、始祖ブリミルが行使したという虚無だと言うからには、ちゃんとした確信が有っての事なのだろうな？　これは流石に冗談では済まされんぞ」

厳しい声で、サリユートが口を挟む。

そう、冗談では済まない。

真実ならそれはそれで大変だが、冗談で口にして良い単語ではないのだ。

【虚無】とはそれだけ重たい単語。

「勿論、冗談ではありませんし、確証（原作知識）が有っての事ですよ」

ユートは【虚無】に関し、黙っている心算は無い。

何より、ルイズの親であるヴァリエール公爵と夫人は知っておくべきだ。

識らなければいざという時に何も出来ず、後手後手に廻ってしまうが、識っていれば対策も考えられる。

始祖ブリミルが使ったという【虚無】は、伝承されているだけでも強力なのは解るし、別の意味でも隠しておきたい理由が有った。

【虚無】は、基本的に四つの血筋にのみ顕れる。

四つの血筋とは即ち、旧き三つの王家と初代ロマリア教皇家。

トリステイン王家。

アルビオン王家。

ガリア王家。

ロマリア教皇家。

尤も、教皇は王とは違って世襲制では無い為、現在は何処の誰が初代教皇の血筋なのか判らなくなっている（ユートは当然、知っている）のだが。

「さて、これから僕が独自に書物から識つた知識を開帳します。それに当たって、もし父上と母上に知られたくないと言ふなら、部屋を出て行って貰いますが？」

これには実は二重の意味が有った。

サリユート達を巻き込まない為、そしてヴァリエール公爵が選ぶ為。

仮に、サリユートが巻き込まれる事を良しとしても、ヴァリエール公爵は巻き込む事を良しとしないかも知れない。

秘密を知る知らないは今更な訳だが……。

「サリユート、どうする？ お前さえ良ければ知って欲しいが、下手に知ってしまえば危険かも知れん」

「“サンドリオン”よ、騒ぎに巻き込まれるのは今更だよ」

昔の渾名で呼ぶサリュートの表情は、ユリアナと共に決意に満ちていた。

どうやら4人共、話を聞く事にしたらしい。

「判りました、話します。先ず、認識して頂きたいのがヴァリエール公爵家は、ずっと昔に王家から分家した庶子です。故に、公爵を名乗っているのです」

「うむ、その通りだ」

ヴァリエール公爵がユートの話しに首肯する。

公爵とは、基本的に王家の血を引く分家筋に与えられる爵位の事で、大公は更に近い血筋だ。

クルデンホルフ大公家は、ゲルマニアを出自としているが、トリステインの王家の血を入れた事によって、トリステイン大公の地位を獲得している。

そういう意味では、クルデンホルフから虚無が顕れてもおかしくはなかった。

「虚無とは姉祖ブリミルの血を引く三王家、それから初代ロマリア教皇聖フォルサテの血筋から顕れます。故に、トリステイン王家の血を引くヴァリエール公爵家のルイズが虚無でも決しておかしくないのです」

「……確かにな」

理路整然と説明されれば、理解は出来る。

然し、納得出来るかと言われれば、それは否だろう。

「そして、虚無というのは真の王家に顕れると考えられている事もあって、これが周囲の雀連中にバレてしまつと、ルイズを擁立して甘い汁を吸おうって莫迦が出て来るでしょうね」

「……」

その情景が余りにもリアルに思い浮かび、眉根を顰めるカリィヌ。

権力に意地汚い宮廷雀共ならば、それは十二分に有り得る話だ。

「僕がルイズに真実を伝えずに、欺瞞に近い事を言ったのもそれが理由の一つ」

「一つ……だと？」

「ロマリアですよ」

「ロマリア……、聖戦か」

ヴァリエール公爵は苦々しく感じ、洪面を作る。

ハッキリと言ってしまったえば冗談ではない。

大切な娘を、よりによって宮廷雀の好きにはさせられないし、況してやロマリアが聖地に向かう道具になど許容出来る訳がなかった。

聖地奪還の名の許に、聖戦が発動すると云う事は即ちルイズがエルフとの戦争に於いて、尖兵と成ると言うに等しいのだ。

親として許せる訳もない。

「僕としても、それを許容出来ませんから。だからと言って、魔法が出来ない俣にしてしまえば、ルイズの人格が歪みます」

「確かに……」

カリーヌが頷く。

流石は、歪んだ青春時代を送った張本人である。

「だから、虚無魔法を失伝した古代空間制御魔法として教えたんだ」

「待て、ユート！」

「父上、何ですか？」

「お前は虚無を何処で知ったんだ？ 何故？ ルーンまで識っているとは！？」

「ライトノベル  
書物で」

口では“しょもつ”と言いながら、心の内では“ライトノベル”と言っていた。

ユートは決して嘘は言っていない。

書物で知ったのは間違いないのだから。

「それに真つ赤な嘘つて訳でもないです。虚無魔法は調べた限り、記憶と空間を制御する魔法が多いから」

エクスプロージョン  
爆発の魔法は、ルイズに教えた分だけでも指定した空間を爆裂させる。

最大の威力で使えば、指定した空間は言うに及ばず、自分自身の思い（記憶）一つで破壊の対象を選ぶ事すら可能だ。

テレポート  
瞬間移動等、言わずもがな。

「どうやら、ルイズの魔法に関しては君に任せた方が良さそうだな。何処で虚無を知り得たかは聞かない。宮廷雀共やロマリアに渡すなど、業腹だからな」

「宮廷の方は僕に出来る事は無いですね。ただの新興の子爵家の息子じゃ、権力とは無縁ですし」

ユートは所詮、爵位も未だ継いでいない子供。

そっち（権力）には太刀打ち出来ない。

「うむ、此方はワシの仕事だな」

ヴァリエール公爵は自らが担当すべき仕事に、決意を新たにした。

それは愛娘を護る為に。

「ロマリア皇国に關してですが、そちらには僕に考えがあります。可成り危険ですが……」

「うむ？ 然し、ユート君を危険に晒す訳にはゆくまいよ」

「大丈夫ですよ、ピエール様。策が有りますから」

そう言つて、ユートはニヤリと口角を吊り上げる。

其処には十分な自信の程が見えている。

「いったい、どうする心算なんだ？ 下手にロマリアに逆らえば、異端審問に掛けられるぞ」

「クスッ、それは僕としては“望む処”ですよ」

「……はっ？」「」「」

ニコリと笑顔を浮かべて、ユートはとんでもない事を平然と宣つた。

まるで気負う事無く、言つてのけたのだ。

だが瞳には力が籠り、信じたくなる言葉。

ヴァリエール公爵も、夫人も、サリユートも、ユリアナも、皆が子供の台詞を真剣に聞いて、対策を考えようと思える何かがあった。

瞳が言っている。

其処には説得力があった。

故に……

「ならば対策を聞かせて貰おうか？」

「はい！」

ユートはその場の全員に、ロマリア対策を話した。

【翌朝】

ユートは何時もの場所で、魔法の練習をしている。

『炎に燃ゆる精霊達よ、我に従い力となれ。爆煙舞バーストランドッ！』

【爆煙舞】

窮めて簡単な火の魔法で、複数の光球を生み出し目標の傍で炸裂させ、炎を撒き散らす。見た目は派手だが殺傷力は全く無い。

火のドットスペル。

毎日毎日、魔法をギリギリまで使っていた事で、全てがドットを越えている。

水と土がトライアングル、風と火がラインにランクを上げていた。



やはり練習量が違うからだろうか、風と火は土と水に比べて一段落ちる。

だから、ユートはこんな事も出来る様になっていた。

『全ての力の源よ、輝き燃ゆる赤き炎よ、我が手に集い収束し、敵を薙げ……！ 炎熱鞭！』  
バムロッド

【炎熱鞭】

掌から伸びる炎の鞭を生成して、目標を攻撃する。

威力は炎の槍フレア・ランスに等しいが、鞭を自分の意志で制御出来る為、目標への命中率が高い。  
多少の持続性がある。

ユートは生み出した炎の鞭で、予め用意していたゴーレムを薙ぎ払った。

火火のライセンスペル。

因みに、もう少しランクを上げたら黒魔法を系統魔法で再現しようと、画策していたりする。

ガサリ……

「誰だ!？」

「キヤツ？」

フワリとしたピンクブロードの髪の毛、柔らかい表情に浴衣を羽織った少女。

「カトレア嬢……?」

カトレアが居た。

嚇かしたみたいで何となく気まずく、ユートが黙ってしまつとカトレアの方から話し掛けて来る。

「熱心なのね?」

「うん……と、まあ……。 (ヤバいな、見られたか? 火系統のラインスペルを使っていたのを)」

口に出している詠唱自体はルーンだから、カトレアも判らなかつただろう。

然し、土と水系統であると謳っていたのに、火系統を如何無く使用しているのは余りにも不自然。

普通、水系統を得意とする場合は火系統が苦手なものだからだ。

「カトレア嬢は何で此処へ……?」

「あら、何を焦っているのかしら?」

ギクリ……

フンワリとした笑顔を浮かべてはいるが、相変わらず人の内心を知

るという意味合いでは鋭い。

端からはきつとあーぱー姫みたく、お花畑な頭に思える雰囲気なのだろう。

然し、雰囲気に騙されてはいけない最たる例、それがカトレアだ。

「フフ、ユート君がこっそりと出ていったから捜していたのよ」

言葉に窮してしまい、応えられないユートを見て、先にカトレアの方が質問の答えを言う。

尤も、意外性の欠片も無い答えだったが。

「僕は普段、朝に魔法や剣の練習をしていますから」

飽く迄も軽くやるだけだ。

朝っぱらから精神力が尽きては困るし……

「ユート君、土と水系統って前に言っていたけれど、火系統も使えたのねえ？　もしかして、風系統も使えたりするの？」

「（ノーツ！　やっぱり勘付かれてるよおおお！）」

土と水系統を得意としているメイジが、火系統をアツサリ使っていれば、気付かれても仕方がない。

本来なら、絶対ではないとはいえ中々有り得ない事。

簡単なモノなら使えるかも知れないが、やはり精度の問題が在るのだ。

例えば、土系統に特化しているギーシュも、風系統の浮遊レヒテーションや、飛翔フライ程度なら精度を見なければ使える。

どちらも風のドットだし、浮遊はコモン・マジックと思われていた（【烈風の騎士姫】で風系統と判明しているが、アニメではルイズ以外の生徒全員が使っていた）くらいだ。

「え……っと」

場違いにも可愛いな〜とか思ってしまい、答えが思い浮かばない。

タラリと汗が頬を伝うが、暑いからではなかった。

猫に追い詰められた鼠か、蛇に睨まれた蛙の気分だ。

「別に採って食べようなんて思わないわよ？」

「（内心はバレバレですか？　そうですか！）」

ガツクリと項垂れる。

「ね、もっと見せて？」

「は？」

「ルーンの組み合わせや、魔法の名前は聞いた事が無いモノだったわ。ユート君のオリジナルスペルよね？　他にも見せて欲しいわ」

可愛らしくお強請りされてしまつて、流石にユートも陥落した。

「判つたよ。但し、誰にも言わない事！ 知ってるのはウチの家族だけなんだ。余り今の内に流布したくはないしね」

特にヴァリエール公爵夫人には知られたくない。

「うん、判つたわ」

カトレアは、魔法を使うと息切れを起こしてしまつた。

その為、魔法は滅多に使わないのだ。

だから珍しい魔法をユートが使つと知り、もう少し見てみたくなつた。

ユートはそんなカトレアの心を知りはしないが、彼女の為に魔法を使う。

『空と大地を渡りし者よ、永久を吹き行き過ぎ往く風よ、盟約の言葉によりて我に従い力となれ……』

風風のラインスペル。

勿論、口ではルーンを唱えているが、頭の中で術式はスレイヤーズ系の詠唱から成っている。

「ボム・ディ・ウィン風魔咆裂弾！」

【風魔咆裂弾】

風の力を高め、一気に解放する術。高圧力の強風が、術者の前方に向かつて吹き荒れ、敵味方問わずに吹き飛ばす。殺傷性は無い。

力在る言葉と共に、右中指に填めた【アダマス】を通じて精神力が増幅されて、術式が精霊に干渉する。

風の精霊が術式に応じて、大気を動かすとイメージの通りに暴風が吹き荒れた。

カトレアは浴衣の裾が風に煽られた為、風で乱れる髪の毛と一緒に押さえる。

「凄い……けど、Hな風」

綺麗な脚線が一瞬、露になり頬に朱が差していた。

対象を吹き飛ばすだけで、鎌鼬が発生する訳でもないこの魔法は、殺傷性が極端に低い。

だからこそ選択した訳だ。

風を吹かせるので一つと、圧縮で一つ。

効果はストームを圧縮解放した感じか。

尤も、彼の烈風が未熟な頃でも精神力を絞り出して、200mの風力を引き出したらしいから、籠める精神力や精霊との親和性次第で

更に力も上がるだろう。

ユートは風魔咆哮裂弾を放った後、考察をして考える。

「（風の精霊王と契約すれば、もっと威力が上げられそうだな。アルビオンにでも行って、風の精霊王を捜して契約するか？）」

どの道、全ての精霊涙エレメンタル・ティアを獲るなら、避けては通れないのだから。

「（10歳までに契約して烈風対策をするかな？）」

ロマリア対策、内政、精霊涙の獲得、虚無、エルフ。

やる事が目白押しだった。

それに、聖地奪還の聖戦発動の根拠も早めに潰しておかないと、本来の最終目的の足を引っ張る。

いつの間にやら大変な話になっていた。

「あれ、ちい姉様？」

「あら？ ルイズも魔法の練習かしら？」

「はい！」

「頑張りなさい、私の小さなルイズ」

ニコニコと笑顔で言われ、ルイズは上機嫌となる。

“何故”の部分がどうでもよくなったのか、ユートに練習の内容を聞きに行く。

カトリアはその傍、みんなの練習を見学した。

ユーキも銃の練習に来て、何時もの朝練が始まる。

「ルイズ、昨日は空間制御魔法を教えた訳だけどな、あれは古代遺失魔法だから現在は余り数も無い。判り次第教えるけどな」

「うん」

「だから今日は、コモン・マジックを練習しようか」

「へ!？」

訳が判らないといった風情で、間の抜けた声を上げたルイズに説明をする。

内容は簡単。

コモン・マジックはどちらかと言えば、系統魔法より空間制御（虚無）魔法寄りの魔法で、自分の特性を把握した今なら練習次第で普通に使える筈だ。

そう言われ、ルイズは真面目に練習を始めた。

ルイズは本当に優秀だ。



記憶力、理解力、判断力が並外れている。

ただの的当てから、実践形式に移行してみると、最初こそ数体のゴーレムに苦戦を強いられていたが、次第にコツを覚えて勝利した。

やはり爆発は、エクスプロージョン戦闘向けのだ。

何の前触れもなく、ルイズがイメージで指定した空間を爆破出来る訳で、図に嵌まれば楽勝でゴーレムを全滅してくれる。

お陰でつつい、朝練の範囲を越えてしまったのは、ちょっとしたご愛嬌か。

ルイズは確りと、コモン・マジックの灯り（ライト）、フォース念力を修得

依頼者のヴァリエール公爵を、大いに喜ばせた。

第19話：遺失魔法と虚無（後書き）

スレイヤーズの魔法の詠唱は、公式なものが判らない場合それっぽくでっちあげています。

第20話・マジックアイテム(前書き)

今回、少しタイトル負けをしたかも……

## 第20話：マジックアイテム

温泉郷でのヴァリエール家の接待は、事の上手く行って一安心なユート。

自分の目的の一端を伝える事も出来たし、目論見の方は上々だと云える。

ルイズもコモン・マジックと虚無の一片を使える様になり、必要以上に歪む事も無いだろう。

「ね、兄貴？」

「何？」

「将来さ、ルイズが才人を喚んだとして、原作の通りにいけばガンダールヴになるよね」

「そうだな」

原典に於ける虚無の使い魔の内分けは……

ルイズ ガンダールヴ 才人

ティファニア リーヴスラシル 才人

ヴィットーリオ ジュリオ（ヴィンダールヴ）

ジョゼフ シェフィールド（ミヨズニトニルン）

ジョゼット ジュリオ（ミヨズニトニルン）

何にしる、愛が重要な要素だとかで最終的には才人とジュリオがW  
ルーンだ。

然し、原典通りにはもう成らないだろう。

ジョゼットが此処に居る上に、ジュリオに愛情なんて全く抱いてい  
ない。

ユートは以前、気になって聞いた事がある。

ユーキが言っていた好きな相手とは誰か？

明確には答えてはくれなかったが、少なくともあの透かした神官<sup>ジュリオ</sup>  
では無いらしい。

原典沿いに進んだとして、ジョゼフが死んでユーキが代わりに……  
とはならない訳だし、ジュリオがミヨズニトニルンには成らないと  
思われる。

ユーキが誰を召喚するにしても、ジュリオだけは有り得ない。

ルイズはイレギュラーさえ無ければ、才人を召喚する事だろう。

イレギュラーとは……

「転生者とか、神の介入が無ければ問題無く平賀才人を召喚するだ

ろくな」

「だね。ボクは誰を召喚するのかな？」

「少なくともジュリオは無いとして、どうなるんだろくな？」

「共、少し不安らしい。」

「まあ、誰になるにしても女の子が良いかな」

「は？ 百合か？」

「そうじゃなくて、前にも言ったよね？ 好きな相手が居るってさ」

「言ったな」

「その人以外にキスなんてしたくないよ」

成る程、至極最もな話し。

元は少年とはいえ、現在が女の子であるなら余りやりたくはあるまい。

それを考えれば、ルイズもよくやれたものだ。

ユートはそう思ったが、好きな相手が居るか居ないかの差もあるか……と、納得した。

「話しはそっちじゃなくてさ、才人の相棒に関してはどうする？」

「デルフリンガーか」

インテリジェンスソードの【デルフリンガー】。

6000年前には存在し、エルフ族でガンダールヴとなった【サーシャ】が使っていたという剣。

その能力は、魔法の吸収と吸収した量に応じ、使い手を動かすというモノ。

「先に手に入れて、才人に直接渡すか、或いは原作の通りにするのか……」

「そういう事か。先に手に入れて……改造するか？」

クスリと笑いながら、改造案を頭に思い浮かべた。

その頃、トリスタニアに在る武器屋では……

『ブルルツ！』

「どうした、デル公？」

『な、何だか悪寒が！』

「ハア？」

某・喋る剣と店主がそんな会話をしていたとか？

「それじゃあ、今度お父様がトリスタニアに行く時、また連れてって貰う?」

「ああ、そうしようか」

デルフリンガーにとって、良いのか悪いのか判断が付かない決定が、本人の与り知らない所で決められてしまった一瞬だった。

「そつだ、兄貴。欲しい物が有るんだけど」

「欲しい物?」

「マジックアイテムの作り方に関して云えば、科学者気質なボクより上だろ?」

「欲しい物つて、マジックアイテムか」

ユートは去年、カトレアに造った紫水晶のペンダントを癒しのマジックアイテムとした事から、宝石の類いを使う事を主とした魔導具を研究している。

あの時、目を覚ましてペンダントを見たユートは小躍りしたものだ。マジックアイテム生成という得難い、そして便利な能力を偶々とはいえ手に入れたのだから。

とはいっても、半年で造るには時間的に短い為、未だ種類は少ない。



一度造れば量産も利くし、意外と金にもなるから研究はしている。

最初に研究したのが宝石に術式を刷り込んで、精神力を媒介にした  
マインド・トリガーシステム。

既に術式が張り付けられているが故に、それは平民でも使用可能。

尤も、平民の精神力は魔法に慣れていない分、ドットメイジよりも  
結構低い為、余り回数は使えない。

身近に例外も居るが……

このマジックアイテムを造るのに、知恵を貸してくれたのが【アダ  
マス】だ。

ユートはアダマスを二度程起こして、ジュエルズ・タリスマンやア  
ミュレットを製作したり、ユーキに渡した改造銃【アンブロシウス】  
の様な物を造っていた。

最近、造ったのはアストラル・ヴァイン魔皇靈斬を白系の宝石に籠め、刀に埋め込んだ魔  
法剣。

能力はアストラル系への斬撃を可能とし、マテリアル系でも強度を  
上げて切れ味を増すというモノだ。

マインド・トリガーにより魔皇靈斬が発動して、初めて効力を発生  
させる。

また、斬撃を飛ばす事も出来るが、やるとまた発動し直さないと効力が切れてしまっているが。

一度発動させれば飛ばしたり一定時間が経過したり、或いは自発的に切らない限りは持続する。

持続時間は5分。

魔皇霊斬や、基となっているブレイドと違って発動中常に消耗はない。

護符や呪符と云えば、去年カトレアに贈った紫水晶のペンダントは、アミュレット護符の一種で、自身がマントの留め金として身に付けているモノが、タリスマン呪符に該当する。

「ユーキが欲しいのって、どんな物？」

本来なら割りと高額で売っているが、流石に義妹から取る気にはならない。

モノにも由るが。

「うん、魔法から身を護れるモノと物理的防御が上がりそうなモノが良いな」

「また、面倒な事を……」

ユートは少し考えてみる。

アイディアは在るが造るのは難しい。

そんな感じた。

チラリと魔王様の顔を思い出した。

「時間が掛かるぞ?」

「今すぐ必要じゃないし、ボクも少しは手伝うよ」

「どつという意味だ?」

「忘れてないよね? ボクも虚無の担い手だよ。自分の身を護れな  
いと拐われたらどつすんのさ?」

「あつ!」

未だユーキは直接的に魔法の練習をしていない。

だから周りも知らないが、ユーキは【ジヨゼット】であり、本来は  
ジヨゼフが死んだ場合の予備だ。

神が与えた能力により、既に虚無に目醒めている。

本当なら有り得ない5人目の虚無足り得る存在。

虚無の担い手が居るなど、知られば面倒な事になるのは目に見え  
ている。

一応、血筋的に別に不思議では無いとはいえ、場合によればジヨゼ  
ットの正体がガリア王家の血筋とバレてしまう。

そう、系譜を遡れば不思議では無いと判る。

ユーキがサリユートの実の娘だと思われれば、オガタ家はヴァリエール（トリステイン王の庶子）の血が混じっているからだ。

ただ、一定以上の権力（高等法院など）を持っていれば恐らくは気が付かれる。

だから、出来得る限り虚無の担い手だとはバレたくはなかった。

必要なのは武器と防具。

武器は既に在るから、後は防具だ。

「判った。造ってみよう」

「ん　期待してるよ」

ユーキはとびきりの笑顔で  
そう言った。

意外な程、トリスタニアへ簡単に行く事が出来た。

理由は簡単、サリユートは毎月の収支報告を王宮へと提出し、自領

の政策と成果を報告しているからだ。

月に一度、必ず王宮に赴くサリユートに付いていけばトリスタニアで暇潰しという名目で、街を歩く事も出来る。

勿論、王家のお膝元とはいっても治安が良いとは言えない街を歩くのだし、武装はちゃんと持ってきた。

2人共マントを羽織って、ユートは留め金に水霊石の呪符<sup>タリスマン</sup>、左腰にはマインド・トリガーシステムを付けた刀を佩いており、右中指に【アダマス】を身に付けている。

ユーキも腰に佩いたホルスターに【アンブロシウス】を納め、魔法をユートに入れてもらったカートリッジもぶら下げて、簡易護符<sup>アミュレット</sup>をベルトのバックルに装備していた。

ユーキは対外的に魔法を習っていない為、杖は持っていない。

勿論、本当は杖契約をしているし、虚無も使える。

取り敢えず、大っぴらに杖を持ち歩けるのは来年以降となる予定だ。

ユートとユーキはトリステインの王都、トリスタニアの最大の街であるブルドンネ街を歩いていた。

目的地は【デルフリンガー】を置いている武器屋。

因みに、その武器屋では当のデルフリンガーがブツブツと呟いている。

《悪魔、悪魔が来る……》

まあ、虚無の担い手というのはエルフから、悪魔のレットルを貼シヤイターンら  
れているから、強あながち間違いではない。

然し、真の（デルフリンガーにとっての）悪魔はその隣のユートだ  
という罫。

「うわ、汚な……」

裏側に来た途端、顔を顰めるユートとユーキ。

「兄貴、ウチ（オルニエール）での成果は王宮に上がってるんじや  
ないの？」

「その筈だけだな」

「んじゃ、全く反映されてないってどういふ事さ？」

ド・オルニエール領では、汚物の処理を現代知識を得ているサリュ  
ートが、正しく行っている。

その為、ド・オルニエール領内に限れば清潔感溢れる土地だ。

その成果は、サリュートが可成り昔に報告している。

なのに、王都トリスタニアですら全くの手付かず。

これでは何の為に報告しているのか判らない。

「ま、仕方がないよ」

「どうして？」

「父上は領地を賜った貴族としては、未だ初代の新興に過ぎない。陛下はともかくとして周りの莫迦共には侮られている。そんな父上が有効な情報を献策して、莫迦共が面白い訳がない。だから足を引っ張ってくれているのさ、多分な……」

これはユートの想像でしかないが、見事に大当たりだったりする。

王宮勤めの法衣貴族達は、サリユートに強い嫉妬心を懐いていた。

高が元シユヴァリエ風情が土地と爵位を与えられて、国王陛下の覚えもめでたい上に、ヴァリエール公爵との個人的な繋がりを持つ。

しかも領地からの上がりも年々、増えていて懐事情も暖かいときは、面白いと思う訳もない。

故に、折角の献策も資金繰りを理由に待ったを掛け、嫌がらせをしていた。

政治は国王の鶴の一声で決められない以上、それが罷り通る事も屡々ある。

フィリップ三世の御世でのエスターシユ大公の例もあるし、中々に上手くはいかないものだった。

そんな話をしながら、武器屋の看板を見付けるまでの間、会話で臭気を誤魔化して歩く。

馬車を使うには、路が狭い上に要り組過ぎる。

大通りの路幅が五マイルしか無いのは、どんな嫌がらせかと思う。

お陰で歩いて行く以外に、進む方法が無い。

セント・マルガリタ修道院に有った自転車、あれは確かに乗ろうと思えば乗れるのだが、実際には大人用で普通に走るには背丈がどうしても足りない。

まあ、最低でも魔法学園に行く年齢くらいまでお預けだろう。

「ユーキ、大丈夫か？」

「まあね」

体力作りを始めて間もないユーキは、余り長時間歩くのは辛いらしく、疲労が見えていた。

「まったく、無意味に要り組んでるから歩き回らされたな」

ド・オルニエール領は路幅が広く、大きくても大体が拓けている。

だから徒歩でも割りと快適に歩けるが、トリスタニアはサリュートの献策から、全く進歩していなかった。

整地もなっておらず、石畳は壊れていたり、捲れていたりにして足を引っ掛けると危険だ。



狭いが故にスリもやり易いと思われる。

これで王都だというのだから、もう笑うしかない。

「あ、あの看板かな？」

ユーキが指差している看板には、確かにRPGっぽい剣の絵柄が描かれていた。

「みたいだな」

やれやれと、ユートはトラブルに巻き込まれなかった事に安堵の溜息を吐く。

羽扉を開くと店主が気が付いたのか顔を上げて、その瞬間嫌そうに舌打ちをして愛想笑いを浮かべた。

露骨だな～とは思ったが、ユートも顔には出さないで店内に入る。

薄暗い店内には、ランプの灯りが点っていた。

「これはこれは、貴族の坊っちゃん。ウチはお上に目を付けられる様な商いはしていませんぜ？」

「客だよ」

「ほっ？ 貴族様が剣ですかい？」

「珍しいか？」

「ええ、まあ。界隈じゃあ坊主は聖具を振る、兵隊は剣を振る、貴族は杖を振る……そして陛下はバルコニーからお手をお振りになると、相場は決まっておりますんで、へい」

「兄貴、原作でもあれって同じ事を言っただけだし、明らかに舐められてるね」

「だな」

貴族とはいえ、所詮は世間知らずの餓鬼くらいにしか思っていないのが、ありありと視て取れた。

まあ、わざわざ相手にする必要も無い。

ユートはさっさと用事を済ませる事にした。

「オヤジ、此処にインテリジェンスソードが有るな？ それを貰おう！」

「へ？ デル公ですか？」

余りにも意外だったのか、鳩が豆鉄砲を喰らった様な表情で聞いてくる。

「そうだ」

首を傾げ、デルフリンガーを置いてある雑多な剣置場にカウンターを出て向かうと、拾い上げた。

「こいつが、インテリジェンスソードのデル公でさ」

「デル公？」

「名前はデルフリンガー、何処の誰が思い付いたんだか、剣に意思が宿っているマジックアイテムでさ」

ユートはデルフリンガーを店主から受け取り、鞘から引き抜く。

錆び錆びの刃。

「？ 寝てんのか？」

喧しいくらいだと思っていたが、全然デルフリンガーは喋らない。

「おい、デルフリンガー！ 何とか言ったらどうだ」

《ヒイツ！ あ、悪魔》

「悪魔あ？」

「少し前からこうなんでさあな。悪魔が来るとか言って震えて？  
るんでさ」

剣だから震えるという表現もどうかと思うが、悪魔とはユートの事  
だろう。

来たのはユートとユーキの2人だが、手に入れようとしているのは  
ユートだ。

「悪魔ね。悪魔でも良いよ……悪魔らしいやり方で、O H A N A S H Iをさせて貰うだけだから」

《ごめんなさい、もう言わないから赦して下さい！》

目が笑っていない笑顔で、ユートが見つめる（睨む）と透かさず謝るデルFRINGERだった。

「まあ、良いけどな」

デルFRINGERにとって、確かに悪魔だろうし。

心の中で呟いて、ユートは店主に向き合う話す。

「オヤジ、幾らだ？」

「本当に買うんですかい？ まあ、厄介払いが出来るんであたしや構いませんがね？ 後で返品とかは止して下さいよ」

「判ってるよ」

「それじゃ、100エキューと言いたい処ですがね、80エキューで良いです」

何しろ店主にとって、本当に厄介払いだ。

「返品無しの保証金代わりです」

「ん、それじゃあ80ね」

革袋から、エキユー金貨を80枚取り出すとカウンターに置く。

店主はそれを数えて、確かめると鞘を出してユートに渡す。

「もしも煩ければ、鞘に納めてやれば静かになりますよ」

「ありがとうございます」

「っ!?!?」

何故か驚いた表情のオヤジを残し、ユートはユーキと連れ立って出て行く。

「何を驚いてたんだ?」

「貴族がお礼を言うと思わなかったんだろ?」

「ああ!」

ユートは合点がいった。

「あれ? 兄貴、持って来た剣は売らないの?」

「これはマジックアイテム専門店に行つて、買い取つて貰うんだよ」

刀と一緒に佩いた剣をポンポンと軽く叩き、次の店へと向かった。

買われて以降、デルフリンガーは歯の値が合わずカタカタと震わせている。

永い年月を生きてきた勘、故に改造される事に何と無く気が付いているらしい。

「さて、父上に合流するかな？」

「だね」

ユートとユーキは待ち合わせ場所へと向かう。

あの後、2人はマジックアイテム専門店に行き、剣を2000エキユーで売却していた。

ユートの刀以外では、あの一振りしかない稀少性と、それなりに強力な魔法が付与されている事が評価されての値段設定だ。

「しっかし、2000エキユーか。彼のスーパー卿の彫金した装飾剣より安値なんてな」

「仕入値を考えれば同じくらいじゃない？」

ガクリ……

沈み込んでしまった。

「あれ？」

ユーキとしては、励ました心算だったのだが、逆効果だったらしい。

まあ、苦勞して造った魔法の剣が、宝石を散りばめただけのナマクラと同じ扱いじゃ泣けるかも知れない。

「兄貴、行くよ〜!」

「あ、ああ」

落ち込んでいてもしょうがないと、ユートはユーキを追い掛けた。

合流までは少し時間もある為、宝石店にも寄る。

「兄貴、何を買うのさ?」

「取り敢えず、原石を幾つかと完成品を何か……」

宝石に魔術式を焼き付け、魔宝石に換えてからマインド・トリガーシステムを付けたアイテムと匣着する。

それにより、ただの道具に魔力を付与出来るのだ。

その為の触媒となる宝石を購入したい訳だ。

術式の焼き付けには時間が掛かるし、失敗してしまうと宝石は喪われる。

当然、数が欲しいが宝石は高価であり、そんなに買う事は出来ない。

カッティングも焼き付けも研磨もしてない原石なら、幾分かは安い。

「余り良い物がないな」

純度の低い宝石が多い。

ハルケギニアの技術では、そんなものなのだろう。

「あ、これは悪くないな」

「あら、中々の目利きじゃない？」

「え？」

振り返ると、まるで新緑の様な髪の毛を靡かせた金瞳の少女が立っていた。

若葉色のドレスがよく似合っている。

「悪いんだけど、それ譲って貰えない？」

「何に使うんだ？」

「女が宝石を求めるなら、それは自分を飾る時よ」

そうとは限るまいが、少女は年齢に似合わない妖艶な流し目でユートに語った。

「（彼女……）」

マントを着けているなら、商人ではなく貴族。

それに紋章は……

「（サウスゴータ家か）」



アルビオンはサウスゴータ地方を治める貴族。

将来、歴史通りに往くなら魔法学園で逢う事になるだろう少女、マチルダ・オブ・サウスゴータ。

「レディファーストと云う事で、どうぞ御持ち下さいレディ」

「クス、中々の紳士じゃない？ 他のバカ貴族もその程度には礼儀正しいと良いのにね……」

ニコリと柔らかい微笑みを浮かべ、少女……というかマチルダがユートの頭を撫でた。

確か、カトレアと対して変わらない年齢の筈だが……

店主に件の宝石を包んで貰いながら、ユートに向かい合つと話し掛けてくる。

「処で、貴方は宝石をどうするの？ 見たところ貴方自身も妹さん？ も宝石を着けてないみたいだけど、装飾目的じゃないの？」

昔は姐御口調ではなかったようだ。

「僕はマジックアイテムの製作に、色々な宝石を使っているからね」

「へえ？ マジックアイテムか」

少し興味が湧いたのか、目を輝かせている。

その後、暫くは取り留めのない話をして店を出た処で別れた。

アルビオンに行ったら必ず立ち寄ると約束して。

ちよつと時間的に遅くなつた為、早足でサリユートとの合流地点へと急ぐ。

「にしてもさ、マチルダ・オブ・サウスゴータに此処で逢うとはねえ」

「そうだな」

「これは兄貴にティファニアを、ハーレム入りさせろつて天の啓示じゃね？」

「んな訳……つて、待て！ 激しく待て！ 何なんだハーレムつてのは？」

「ハーレム。イスラム教国の王室や上流家庭の婦人部屋。近親者以外の男子は出入りが禁制だった。または1人の男性が沢山の女性を侍らせる所。語源はアラビア語で【禁じられたもの】から来ている」

「誰も意味や語源なんて聞いてない！」

ユートは、国語辞典よろしく蘊蓄うんちくを垂れるユーキに突っ込んだ。

「冗談だよ。けど、兄貴は胸に脂肪がタツプリのつた娘が好みなんだろ？」

「厭な言い方すんなよな。というか、誰がそんな事を言ったんだよ」

「だって、カトレア嬢にしろシエスタにしろ、将来は揉み甲斐のある大きさに育つじゃん」

何か唇を尖らせている。

確かにカトレアもシエスタも、将来を（胸の大きさに）約束されているが……

正に約束された勝利の胸。

だからと言って、ユートはティファニアの胸を見て、バストレポリューションとか言って喜ぶ心算は無い……と思う。

「ボクは15歳になっても平坦だって、それが判っているからね」

「……あのな」

まあ、実際に一卵性双生児であるタバサがアレだし、挿絵を見る限りジヨゼットの胸には将来性が無いのは判るが。

「そもそも、そんな話しじゃなくて、何で僕がハーレムを作る前提なんだよ？」

「既に、カトレア嬢とシエスタを困う気の癖に」

グサリッ！

何かが胸に突き刺さる。

「ま、別に良いんじゃないかな？　彼女を放っておく気も無いんだ  
る？」

「……まあね」

放っておけば、下手をするとヴィットーリオ辺りに、ジョゼットの  
代わりとして利用される可能性がある。

二重の意味で放ってはおけない人物だ。

「あ、お父様……」

「もう来てたか」

手を振っているサリユートと合流する。

「2人共、楽しめたか？」

「はい、父上」

「結構、有意義だったよ」

「そうか、そうか。此方は余り芳しくないな。ブルドンネ街の裏街  
道を見たなら解るだろうが、高等法院を始めとして私を嫌う連中に  
献策を邪魔ばかりされているよ」

然も在りなんでしょう。

ああいう手合いは自身を高める努力を一切しないで、他人を貶めて  
相対的優位に立つか、他人の足を引っ張って自分は高尚だと悦に浸

るか、何れにしても最低な人種ばかりが揃っている。

「それと、アンリエッタ姫が会いたがっていたぞ？」

「は？」

「随分と気に入られているみたいじゃないか」

「（兄貴、何をした？）」

「（前に会った時に未来のニート王妃も含めて、お茶を飲みながら話したくらいだよ！）」

アイコンタクトで話す。

器用な事だ。

「（とにかく、なるべく会わないように……）」

「来月、連れていく約束をしたからな？」

「って、父上ええええ！？」

いつの間にか、あーぱー姫に売られたユートだった。

第20話：マジックアイテム（後書き）

次回、あーぱー姫再び？

かも知れない……

第21話：デルフの性質とあーぱー姫対策（前書き）

あーぱー姫を押し付けるか取り込むか……

権力というメリット、地雷女というデメリット。

他にも政争とか、動き難いというデメリットもあるから、ハイリス  
ク・ローリターンだったり。

## 第21話：デルフの性質とあーぱー姫対策

父、サリユートに売られたユートは、ムスツとした顔で邸に帰る。

まあ、サリユートの立場も解るのだが、機嫌が悪くなるのは仕方ない。

あの、あーぱー姫は原作で『わたしのおともだち、せんそうしてるあるびおんにいってちょうだいね』と言って、ルイズを裏切者と一緒に戦時中のアルビオンに向かわせたのだ。

まあ、ワルドが裏切者なのは知らなかったから置いておくとして、そもそも公爵家令嬢たるルイズを戦地に向かわせるなど仮令、王女とはいえ軽々しくやつても良い事では無い。

それでルイズ達に何か有れば、洒落で済む問題ではなくなるからだ。

原作では無事に戻って来たから、公爵に報せなくても済んだ。

然し、万が一の事が有れば公爵はどう動くだろうか？

莫迦な娘だと捨て置く？

あり得ない。

軍人でもなく、爵位を継いでいるでもないただの学生であるルイズを、戦時中のアルビオンへ個人的な理由で送り込んだのだ。



お友達だから……と。

保護者である公爵に、何のお伺いも立てずに。

確かに手紙の存在が知れたら、不利な交渉を強いられるだろうし、ゲルマニアはタルブ戦役でトリスティンを見捨てている。

場合によれば結婚も同盟も白紙となっただろう。

だが、アンリエッタは通すべき筋を通さなかった。

当然、全ての責任を負うべきなのは、アンリエッタ。

そもそも、戦争はごっこ遊びでは無いのだから、軽々しく使者を送るべきではないし、況してや摂政にすら内緒にして送るなど言語道断だし、元はと言えば自身の立場を弁えず、恋文など送る事からして間違っているのだから。

権力者とは、権利を有する代わりに義務が生じる。

それを弁えないなら、彼女が信じなかつたバカ貴族達と何も変わらない。

己の権利ばかりを主張し、義務から目を背けているのだから。

綺麗なドレスを着て、美味しいご飯を食べていられる代わりに、婚姻の自由が得られない。

ただそれだけの事だ。

第一、アンリエッタは権利を主張出来るだけの何をしていただろうか？

殆んど何もしていない。

マザリーニに言われる俛、ゲルマニアには行っていただろうが、それだけだ。

王の決裁が必要な書類一つ取ってみても、マザリーニが判を捺していた筈。

ニート王妃が引き籠って、仕事をしなかったのだから仕方がないが、本来の彼の役割からは外れている。

彼の、マザリーニ枢機卿の役割は飽く迄も王の相談役であり、政治そのものを司る者ではない。

原作で王の死後、政治を司るかの如く動いていたのは偏に、王妃が引き籠っていた上にアンリエッタが幼くて、王の冠を頂くに足りなかったからだ。

本来、トリステイン王国はマザリーニ枢機卿に対し、最大限の謝意を表すべきだろう。

本当ならロマリア本国に帰って、教皇にすらなれた筈の人物を縛り付け、亡国となるのを防いでくれたのだから。

だからこそ、ユートは一つの計画を練っている。

問題は、マザリーニ枢機卿をどう説得するか。

そして、如何にあのお花畑をウェールズに押し付けてしまうかだ。

「兄貴ってさ、アンリエッタ王女が嫌いな訳？」

「何でだ？」

「だって、黙ってれば凄い美少女じゃん？ 顔もそうだし、スタイルだってさ。いっその事、ハーレム要因にしたら？」

「だ〜から〜、僕は別にハーレムなんて目指している訳じゃ無いって！」

邸へと戻った後、ユートとユーキはユートの部屋で、雑談に興じていた。

言っている事は立派なのだが、既に2人の少女に目を向けている辺り、説得力が皆無だったりする。

コンコン……

「シエスタです。飲み物をお持ちしました」

「どござ」

ノックの音が響き、その後にシエスタの声。

ユートは入室を許可する。

「失礼致します」

扉を開き、トレイを片手に入れて来るシエスタ。

トレイを置くと、グラスにワインを注いだ。

「先日、故郷から送られてきたワインですよ。どうぞ御賞味下さい」  
注がれた赤い液体が、ゆらゆらと揺らめく。

とはいえ、前世の記憶がある2人としては、少し抵抗があるのか苦笑していた。

ワインは確かに美味しい。

オルニエールのワインより出来が良さそうだ。

「さて、取り敢えずデルフを研究しないと」

「研究ですか？」

「ああ、研究が進んで上手くアイテムが完成したら、シエスタにも造って上げるよ」

「え？」

予想外な話しに、シエスタは頬を朱に染めた。

詳しくは知らないのだが、ユートの造るマジックアイテムは可成りの高額で取り引きされるらしいと、曾祖父から聞いている。

そんな代物をくれるというのだ、少しくらい自惚れても良いのかな？ と、そう思った。

「という訳でえ、デルフの構造を全て洗いざらい調べてしまおうか？」

《ヒイヒイヒイッ！ お〜か〜さ〜れ〜る〜！》

余りに人聞きの悪い事を言ってくれるデルフリンガーだが、剣の身では逃げる事も叶わず柄を掴まれてしまいその俣、研究室として使っている部屋へと連れ込まれてしまった。

「…………ご主人様は随分と愉しそうでした」

「ま、ボクもそうだけど、一度目覚めてしまうとこうなるんだよね。所謂処の、マッドサイエンティストってヤツにさ」

シエスタの呟きに応えるかの様に、ユーキは嘆息しながら言う。

強度、材質、何故魔法を吸収出来るのか、何故魔法を吸収すると使い手を操れるのか、デルフリンガーの持つ意思はどう固定されているのか……

知りたい事は幾らでも有るし、其処から技術を取得して流用出来るかどうか調べたい。

正に、デルフリンガーとはマジックアイテムの叡智の結晶だ。

何しろ、本人の意思で見た目を錆びた様に見せる事も可能な訳だし。

「あ、そうそう。シエスタはお兄様をご主人様と呼んでるよね？」

「はい」

そもそも、シエスタを初めとしてユートが傍に囲っている同い年くらいのメイド達は、ユート自身が稼いだお金で雇っている。

つまりサリユートでなく、ユートこそが主なのだ。

シエスタがユートをご主人様と呼ぶのは、そういった意味合いもあった。

「お兄様は、名前で呼んで欲しいと思ってるんじゃないかな？」

「え、でも……」

突然の言葉に、シエスタは驚いてしまう。

「お兄様は否定しているけどさ、お兄様にはハーレムを作る素質があると思っただよね」

「は、ハーレムですか？」

背中からソツと抱きしめられて、シエスタはドキマギしながら訊ねる。

「うん、ハーレム。それにシエスタの身分じゃあさ、妻には成れな

いよね？」

「っ！ は…………い…………」

肩をビクリと震わせ、途切れ途切れに答えた。

互いの気持ちはどうあれ、貴族と平民には違いがない。

平民を妻にしては、ユートの弱味となるのは必定。

精々、一時の情を交わすだけの関係にしかねまい。

それにユートの正妻の思い次第では、そんな関係すら許されない可能性もある。

例えば、公爵家を継いでいるヴァリエール公爵なら、普通はそんな娘がいてもおかしくはないが、カリーヌ夫人がそれを許すまい。

それは原作のルイズを見れば、想像に難くないのではなからうか？

「ただどね、ハーレムを作ってその中に紛れ込ませるのは可能だと思わない？」

「っ！？ それは…………」

「ボクはね、お兄様が女の子を複数囲うのを推奨しているんだよ。シエスタの事はボクも気に入ってるし、幸せになって欲しいから」

「ユーキ様？」

「だからね、その肢体に磨きを掛けてえ……お兄様を名前で呼んで上げなよ」

「名前で？」

「そう、ご主人様とかじゃなくてね、ちゃんと名前で呼ぶの。それからだよ？ 全てはそれから……」

何だかそれだと“お友達”になってしまいそうだが、彼女達の後の関係を鑑みれば、寧ろ異性だから上手くいきそうだ。

ユーキは思う。

自分は最低だなと。

自分が好きな娘を幸せに出来なかったからと、ユートとシエスタを結び付けようなんて、代償行為にも程がある。

「（兄貴はカトレア嬢にもシエスタと同じ気持ちを抱いている。そして兄貴なら或いは気付く。彼女の病を治す方法を……）」

ならきつと、カトレアを娶る事も出来るだろう。

つまり、カトレアが正妻としてオガタ家に入る可能性が高い。

身分は少し離れているが、元々は結婚を絶望視されていたカトレアを治療するのだから今更、政略に使いはしないだろう。

それに、彼女は原作通りなら分家してラ・フォンティーヌ地方を一



代限りで与えられて、ラ・フォンティーヌ子爵となる。

子爵位をユートが継げば、対外的な身分は同等。

カトレアがラ・フォンティーヌ領を、公爵に返還して嫁げば良い。

そしてカトレアなら、初めから“そう”だと判っていれば、ハーレムも受け容れる可能性が高かった。

「(クスクス、最低なら最低なりに徹頭徹尾、貫かせて貰うさ)」

ユーキはそう考えながら、黒い笑みを浮かべる。

因みに、いつの間にかセクハラのレベルで触っていた所為か、真っ赤な顔で頭がショートしてしまい、気絶するシエスタが居た。

それに気が付いて、慌てて放してやる。

その頃、工房ではユートがデルFRINGERに解析を描けたり、サンプルを採ったりしていた。

デルFRINGER本人？ は気絶していたりする。

それでも可成りの組成や、システムは視る事が出来たものだった。

アニメで観た限り、魔法の吸収は刃から行っている。

然し、魔法を吸収する金属など存在しない。

「だとすれば、精霊魔法の一種って事か？」

ハルケギニアで精霊魔法というのは、人間が先住魔法と呼んでいる魔法だ。

系統魔法も先住魔法も実は同じ精霊の力を使い、魔法の効果に換えている。

違いがあるとすれば、系統魔法は術式によって精霊を動かしているのに対して、先住魔法はその地の精霊と契約する事で力を借りている魔法。

簡単な魔法なら契約無しでも使えるが、大魔法となると入念な契約が必要だ。

それ故に、先住魔法の使い手は護りには向いているのだが、攻めには全く向いていない。

「護り……か」

成る程確かに、云われてみればアレは護りの力。

「刀身その物を契約対象として、吸収の先住魔法を掛けてあるか？  
更にそれをエネルギー源として鐔辺りに貯蓄、貯蓄した魔法を魔力という動力源とし、組み込まれた術式回路で柄を通して動かす……」

完全に判明した訳ではないが、仮説自体は立った。

全てが先住魔法で造られてはいない筈なら、系統魔法………というか術式なども流用されていると思われる。

「いや待てよ、デルフリンガーの意思が魔法の役割を果たしているなら？」

原作に於いて、デルフリンガー自身が言っていた。

あの指環、アンドバリとは同じ理屈だと。

『あいつらと俺は根っこは同じ魔法で動いてんのさ。とにかくお前らの四大系統とは根本から違う、【先住】の魔法さ。ブリミルもあれにゃあ苦労したもんだ』

デルフリンガーの意思とは何か？

恐らくはGS美神に登場している様な、人工精霊みたいな存在。

渋鯖人工幽霊番号やマリアやテレサ。

詰まり、色々な仮説を考えてみたが、一番シツクリとくるのがデルフリンガーが人工精霊で、魔力吸収とは彼の魔法の一種。

金属が吸収しているのではなく、飽く迄もデルフリンガー本体が魔力を吸収しているのだろう。

そして、その魔力を用いる事で使い手が及ばない動きで、緊急避難をする。

デルフリンガーの使い手を動かす能力は、その為に造られたモノ。

「だとすれば、剣その物はただの器……か？」

人間などの生命体と同じ、靈魂の宿る器。

「なら【アダマス】みたいな存在なら？」

成る程、アダマスは自然発生型で一種の九十九神。

「或いは、エルフに教わるくらいかな？」

亜空間ポケットから文庫本を取り出す。

背表紙が緑色で、表紙には両膝を着いて右手で杖を揮うルイズが描かれており、【ゼロの使い魔19】>始祖の円鏡くとタイトルが書かれていた。

222ページ〜223ページには、確かにエルフが造ったとある。

剣やモノに意思を付与するのは、エルフの十八番おはこであると、ルクシヤナが言っているのだ。

「ふむ、やっぱり一度は行くしかないかな？ エルフに会いに砂漠サハラに。エルフの国の首都、ネフテスに……」

話し合いより、向こうの態度次第ではO H A N A S H Iになるだろうが。

デルフリンガーの能力解明の目処は立った。

剣自体は単なる器ならば、専用の銃を用意して魔力を触媒に物質化し、服へ変換する。

「形状はデモンベインに出てくる【クトウグア】用の銃、既に使っている銃の形が【イタクア】の銃だし、丁度良いかもな」

そう言いながら、亜空間ポケットを探るとデモンベイン関係の本を捜す。

序でだから、意思を持たない武器を収納出来る様な、そんな機巧としてみようかと考えた。

「フッフッフ、人間デモンベイン計画……」

研究者にありがちなマッド方面に傾いたが、ユーキも人の事は言えない為、問題も無い……等。

それから約一ヶ月が経ち、いよいよ王宮へと向かう日がきてしまう。

「あーぱー姫とあんまり会ってたら、ギャルゲーよろしく好感度が上がりかねないし、どうするかな？」

「何だったら、喰っちゃえば？」

「あのお花畑を？」

「容姿は悪くないってか、寧ろ上物だしさ。将来的なスタイルだつて約束されてるじゃん。お花畑つても、友達のルイズを戦地に向かわせたり、立場も弁えずに亡命を望むし、似非ウェールズにノコノコ付いていった挙げ句に友達も家臣も攻撃したり、ウェールズの復讐に取り憑かれて戦争を率先したり、その所為で才人が死に掛けたのに『王になんかなるんじゃない』とか平然と職務放棄な事を言うし、国宝を売り払おうとするし、友達の想い人を寝取るうとするし、教皇にコロツと騙されるし、狂人と話し合おうとするくらいだろ？」

「お前、あーぱー姫の事が嫌いだよ……」

これだけ挙げれば充分だ。

アンリエッタがどれくらいあーぱーか、ハッキリ証明されてしまった。

まあ、敢えて弁護するなら風のルビーなどを売ろうとしたのは、その価値を全く教えられていなかったのが原因だろう。

才人への誘惑や似非ウェールズに従ったのは、弁護のしようも無いが……

「兎も角だ、確かに育てばトリスティンがハルケギニアに誇る可憐な一輪の話とか、誰かが言ってたけど……今、ユーキが並べ立てた悪行を考えるとな」

手を出す気にはやはりなれない。

どう考えても痛々しい人が決定だろう。

「例えば、光源氏作戦」

「今から鍛えろと?」

ユーキは鷹揚に頷いた。

「改善されない可能性もあるから、リスクが高いな。だいたい、何であーぱー姫との付き合いが前提なんだよ? ボクはさっさと色男にくっついて貰いたいね」

「でも、原作でアンリエッタ姫がウェールズ王太子と恋に落ちるのは、原作開始の2年くらい前だよ?」

詰まり、8年は彼氏無しのアンリエッタと会う機会が有るという事だ。

遠くのイケメンより、近くの親愛。

殆んど逢えないウェールズより、近くに居るユートに転ぶ可能性が非常に高い。

実際、ユート自身がどう思っているかは知らないが、少なくともユーキは好きな相手が予め居なければ、惚れていたと考えている。

それ程の優良物件だった。

実際、顔はウェールズ程では無いにしろ、十分に整っている。

マジックアイテムを造り出す頭がある上に、内政にもそこそこ明るい。

現代日本での知識を、此方風アレンジして販売。

魔法も神なのはから与えられた親和性が有るとはいえ、可成りの腕前。

武術、戦術、戦略も充分で軍人としても優秀。

うらぶれた後なら、モンモランシーを簡単に落とせるのではなからうか？

容姿が優で稼げて強い。

ユーキの、ユートに対する評価だ。

しかも、無自覚にそういう雰囲気醸し出している。

故に、カトレアやシエスタもユートが好きなのだろうし、アンリエツタに気に入られつつあるのだろう。

魔法学院に入学したなら、顔だけのギーシュより余程持てると思われる。

ユーキだって、好きな相手が居ながら『ちょっと勿体ないかな』と考えているくらいなのだから。

「それで、結局はどうするのさ？」



「さつきも言ったが、さつさとウェールズ王子に押し付けるよ」

「どうやって?」

「少し後になるけど、僕はアルビオンに行く心算だ。その時にあーぱー姫を連れて行って、ウェールズ王子にフライングで逢わせるんだ!」

「な!?!」

余りにも莫迦げた作戦に、ユーキは開いた口が塞がらない。

「どうやってさ?」

「アルビオンにはウチから商品を輸出している」

「え?」

知らなかったユーキは首を傾げる。

「内政の一環で、馬鈴薯と呼ばれる食物を風石と引き換えに輸出していた」

「馬鈴薯?」

風系のマジックアイテムを造る為、トリステイン王国を通じて打診をした結果、アルビオン王国はそれを快諾したのだ。

未だ始めたばかりだったが結構な好感触で、栽培法を教えて欲しい

て言っ<sub>て</sub>きて<sub>い</sub>る。

馬鈴薯は、痩せた土壌でも栽培し易くて、ビタミンや澱粉が豊富に含まれている上に、茹でる等の簡単な調理で食べられ、加熱してもビタミンが壊れ難い。

その為、江戸時代に幾度となく発生した飢饉の際に、薩摩芋と同じく主食である米等の穀物の代用品として食べられ、馬鈴薯によって飢餓から救われたという記録が残っている。

馬鈴薯は、アルビオンでも充分に栽培が見込める食物だった。

「だから、ウエールズ王太子の誕生会に今年は招かれているんだ。

トリステインの代表としてピエール様が行くけど、当然ながら発起人の僕も呼ばれている。

でも、王族も行かないと失礼だよね？」

「それで押し通すと？」

「イグザクトリー」

ユーキは未だ来て一年。

オルニエールの政など、<sup>（たいてい）</sup>識らない事も多々有るとい<sub>う</sub>事だ。

馬鈴薯を栽培し、アルビオンに輸出していたなんて、そんな情報はユーキも識らなかつた事実。

ユートが識っていたのは、発案者であるが故だったのだが、少し悔しいと思っ<sub>て</sub>しまっ<sub>て</sub>も仕方ない。

「ま、まあ……押し付ける準備は万端な訳か」

少し引き吊りながら、そう答えるユーキだった。

第21話：デルフの性質とあーぱー姫対策（後書き）

馬鈴薯のアイディアは、某・小説から拝借しました。

アルビオンへの輸出なら、食料支援かなと思って……

第22話：アルピオン王国へ（前書き）

一連のストーリーは出来てるけど、細かい部分で困ってしまっ……

## 第22話：アルピオン王国へ

馬車の中、ガタガタと揺られながら王都を目指す。

「やっぱりアスファルトで舗装された道路と違って、普通の路は揺れるな〜」

ルートが錬成により、アスファルトを造って道路を舗装した結果、馬車の揺れは殆んど無くなった。

お陰で街に出るのがとても楽になったし、領民達にしても荷が揺れで傷まない事で受けが良い。

それに比べ、ド・オルニエールを一步外へ出してしまうと砂利道や土砂道で凸凹な状態。

街も石畳の路は、経年劣化が激しくてやはりガタガタな状態だ。

せめてよく通る路くらい、整備して欲しいと嘆願書が王宮に寄せられるらしい。

マザリーニ枢機卿や国王は兎も角、少しでも予算を使わずにいて裏金を作って、着服したい法衣貴族の連中は、頑なに反対し続けているのだろう。

議会でも可成り揉めている様だ。

また、ド・オルニエールが独自ルートを使い、アルピオン王国と賢

易をしている事にも難色を示している。

元より、30年前から徐々に税収を増やしている事にやっかんでいたが、最近になって更なる収入アップをした事で、憎しみにも近い視線をサリユートは感じていた。

そこへ来て、今度は国王の許可を得ているとはいえ、王宮を通さない独自ルートからのアルビオン王国との貿易だ。

自分達が裏金という汚い金を獲ている中、新興の子爵が国王を誑して、分不相応な稼ぎを堂々と獲ていると感じているのだろう。

下らない宮廷雀達は、故にこそ自分達の活動する領域で、サリユートの出す意見を容れようとは、決してしなかった。

だからこそ、ユートは王宮の膿を出す為に策略を練っているのだ。

失敗は破滅を意味するが、成功すれば危機察知能力の高い厄介な奴以外、殆どどの宮廷雀を処分出来る。

そうなれば、風通しも良くなるというものだ。

分の悪い賭けではあるが。

そんな企みも、実はユーキヤシエスタは知らない。

この事を知っているのは、サリユートと国王とヴァリエール夫妻と勿論、発案者のユートもだ。

僅か数人だけが知る作戦。

その名も【プロジェクト・ニューウェーブ】

発動には後、2〜3年くらい掛かるが……

王宮に着いて、サリユートはユートとユーキを連れ、謁見の間へと向かう。

謁見の間に居るのは、国王と王妃とアンリエッタ姫。

それに、相談役のマザリーニ枢機卿。

サリユートは膝を着いて、頭カブを垂れる。

それに追従して、ユートとユーキも頭を垂れた。

「サリユート・シユヴァリエ・ド・オガタ・ド・オルニエール、参上しました」

「うむ、よく来たな」

いつもの挨拶。

この謁見で、同席出来るのは王妃とアンリエッタ王女以外では、マザリーニ枢機卿しか許されない。



だから、形だけの挨拶でしかなかった。

行うのは、他の貴族が決してやらない毎月の収支報告と、領内の活動とその結果の報告。

今回の報告は、温泉郷でのヴァリエール公爵家が泊まった際の感想などと、いつもの出版関係。

更に、アルビオン王国との貿易に関してだ。

アルビオン王国は浮遊大陸であり、それが故の限界がどうしても出てくる。

浮遊大陸である為、土の持つ栄養分が不足しており、飢餓者を出す程では無いにしても、対策を打ち立てなければ近い未来、拙い事になると識者は予想した。

今でさえ食糧の半分を輸入に頼っている現在、収穫量が年々減っていれば不安にもなる。

抜本的な対策が必要だと、ジェームズ一世は考えた。

それを取引先のトリステイン王国に相談してみたら、トリステイン王はその話をド・オルニエールへと持っていく。

その頃、食糧事情が大きく改善されたド・オルニエールなら、何らかの解決策も在るだろうと考えていたからだ。

サリユートは早速、新しい食物である馬鈴薯を輸出。

これの栽培に成功すれば、ある程度の食糧難を緩和出来ると説明した。

ジェームズ一世はそれを喜び、ド・オルニエル家を息子であるウエルズ・テューダーの誕生会に招く。

その話しは、当のド・オルニエル家だけではなく、トリステイン王家にも来ていた。

「という訳でして、ウチからは私と嫡男のユートが、それと新興の子爵家だけでは何ですので、ヴァリエール公爵にもご同道願っております」

「うむ、なればド・オルニエルを紹介した王家からも出すべきよな？」

「然り……」

サリユートは、我が意を得たりとばかりに頷く。

「とはいえ、余が行く事は叶うまい。なれば……ウエルズ王太子の従妹であるアンリエッタに行つて貰おうか」

「わ、わたくしですか？」

「そうだ。未だ幼いとはいっても、お前も王族。立派に務めを果たして来い」

「はい、お父様」

戸惑いこそあったが、少しだけ嬉しいのか将来は一輪の花と形容される少女は、大輪の笑顔を浮かべた。

「（上手くいったな）」

ユートは内心ほくそ笑む。

ある程度の計画は国王にも話してある。

国王はそれに賛同し、計画遂行がし易いように話しを進めてくれた。  
いた。

婉曲なやり方だが、宮廷雀達に文句を付けられない様に立ち回るなら、必要不可欠な儀式。

ユートはこれでアルビオンへ、大手を振って行く事が出来る上に、アンリエッタとウェールズを早めに出逢わせる事が出来た訳だ。

その後は、前に来た時と同じで軽くお茶会となった。

具合の良い事に、ユーキにアンリエッタの興味が向いている。

「まあ、貴女はユートさんの妹なのね」

「は、はい。姫様」

「でも妹が居たなんて知らなかったわ。ジョゼットは幾つなのかしら？」

「四歳にすぎません」

「わたくしやユートさんの二歳下なのね」

ユーキは引き吊りながら、質問に答えている。

軽くユートを睨みながら。

ユートは何処吹く風と言わんばかりに、明後日の方向を向いて紅茶を飲む。

正に我関せずと……

アルビオンに行ったなら、約束通り一度はサウスゴータに行くべきだろう。

それから、まずは風の精霊の居そうな場所へ行く。

その為にも、パーティーより早くアルビオンに向かわなければなるまい。

風の精霊主に会って、何とか風霊石を手に入れなければと、想いを固める。

水の精霊主ラクスの言葉が本当なら、ユートは四精霊の王と契約可能な筈。

既にユートは、次の一手に考えを巡らせていた。

初めてかも知れない。

父親であるサリユートが居ない状態での旅行は。

サリユートは数日後、王宮へと立ち寄ってアンリエッタ王女をエスコートする予定となっている。

ユートはそれに先駆けて、ヴァリエール公爵と白の国へと飛んできた。

ラ・ロシエールにある港から船に乗り、アルビオンへ向かうヴァリエール公爵とユート。

今は客席にて、ゆっくりと休んでいた。

「ユート君、君には礼を言わねばならんな」

「はい？ 何ですか、藪から棒に……」

「ルイズの事だよ」

「ルイズ嬢……ああ、例の件ですか！」

ポン！ と左掌を右拳で打つと、思い出した様に顔を上げる。

例の件とは、虚無の担い手であるルイズにそれとなく虚無魔法を教え、魔法が使えないというコンプレックスが肥大化してしまって、

取り返しが付かなくなる前に矯正した事についてだ。

本来、原典に於いてルイズは周囲の諦観や蔑みや憐憫を受け、コンプレックスの塊になってしまった。

悪く云えば魔法偏重傾向が強い莫迦貴族の上塗りで、もつと悪く云えば魔法を使えない事を罪悪に思う愚者でしかない。

そんな歪みが、魔法を使えない才人を召喚した時の、才人への態度として出た。

尤も、ハルケギニアの貴族として生まれたからには、大なり小なりそういう考えがあるから、普通の貴族だったとしても大して変わらなかつた可能性もあるが。

其処はそれとして、ルイズが魔法を使えない【ゼロ】だった事が、彼女を歪めていたのは間違いない。

ユートがそれに対し、事前に干渉した結果だろうが、ヴァリエール公爵から見ても大分明るいらしい。

一ヶ月以上、碌に魔法を使えず爆発しか顕せなかつたルイズは、日に日に表情がキツくなっていた。

母に叱られ、長姉に叱られて、教師に匙を投げられ、拳げ句の果てに使用人までその噂で持ちきりになる。

全てから隔絶された気分になっていたのか、優しくしてくれるもう1人の姉であるカトリアにだけ、心を開くようになっていった。

そんな折、ヴァリエール公爵が思い出したのが、僅か五歳でラインにまでなったユートの事。

藁にも縋る気持ちで文を認めたのだ。

そして、ユートは公爵の悩みを見事に解決しただけでなく、ルイズの持つ魔法の危険性まで考えて動いてくれた。

虚無……

確かに始祖ブリミルを崇めるなら、行き着かない考えだろう。

ルイズにしてみれば自分自身が、ヴァリエール公爵からすれば我が娘が、始祖の使った虚無を継承する担い手などと考えるのは、不敬としか言えないからだ。

そして知ってしまったえば今度は、逆に困った事もある。

始祖の力の継承者。

それは普通の考えで云うならば、正当なる王家であるという事と同義。

他の貴族が知れば、ユートが以前に指摘した通りに、ルイズを次期トリステインの王として担ぎ上げる連中が出て来る可能性が高い。

そうになったら、現体制派とヴァリエール王朝派とで、トリステイン王国は真っ二つに割れてしまう。

果ては、ガリアやゲルマニアに併呑されての滅亡しか有り得まい。

確実に起きそうで怖い。

後は、戦争に利用されるといふ可能性。

それこそ兵器として、使い捨てられるだろう。

ヴァリエール公爵は知らないが、ユートはそんな未来をライトノベルで既に現実になる事を知っている。

虚無に目覚めて浮かれているルイズが、アンリエッタの復讐の為にレコンキスタ戦で、虚無と呼ばれ軍上層部の出世の道具扱いをされる原典の未来を。

更には、ロマリアの聖地奪還作戦に於いて、ティファニアと共に巫女として奉られ、戦争の旗印にされてしまった。

ユートとしては、原典ではそれも已むを得ない事だと考えている。

原典では助言者が居らず、全てをひっくり返してしまえる【切り札的な存在】  
【ジョーカー】が居ないのだから。

然し、この平行世界は原典とは違い、【ジョーカー】が存在している。

自分自身を【ジョーカー】等と思うのは、厨二病<sup>まじしぐらい</sup>地な考え方ではあるが、強<sup>あなが</sup>ち間違いでは無い。

兎に角、ヴァリエール公爵の想いとユートの考えは、利害的に見て一致した。



ルイズの事はその結果でしかないだけに、手放して誉められるのは心苦しい。

「（まあ折角な訳だしな、アフターケアも確りやりたいし、ピエール様にも例の構想を話しておくか）」

どう隠蔽しようと、ルイズの虚無は何れバレる。

そうならば、ユーキの事もティファニアの事も芋蔓式にバレる可能性があった。

だからこそ、ロマリア対策は今からでも必要なのだ。

「ピエール様、ルイズの事もですが、実は内密なお話があります」

「む？ 判った」

ヴァリエール公爵はサイレントを使い、空気の振動が外に漏れるのを防ぐ。

原作でも、タバサが使って煩いキュルケの言葉を空気の層で隔絶していた。

これにより、扉の外に誰かが居ても中の声は聞こえる事が無い。

その逆もまた然りだが……

「さあ聞こうではないか。君の懸念を」

サイレントで聞く準備が出来たヴァリエール公爵は、ユートに話す様に促す。

ユートが何かしらの秘密を抱えている事は、公爵も気が付いている。

五歳の子供が持つには、余りに大き過ぎる知識。

虚無の知識など、普通は簡単に得られはしない。

それを呪文付きで識っていたとは、幾ら何でも出来すぎなのだ。

恐らくは自分は疎か、両親にすら話していないだろう“何か”を抱え、ルイズの為にその一端を解放してくれた。

だから敢えて何も聞かないと、妻と共に決める。

ユートがその“何か”を、自分達の不利益になる事には決して使わないという、そんな確信めいた予感があったし、寧ろ追及する事は金の卵を産む鶏を、絞める行為だと感じていたから。

「はい……」

促されて首肯しながら返事をする。

ユートは既に、サリユートや国王に話している計画について話した。

その内容に、ヴァリエール公爵は驚愕すると同時に、その危険性に気が付く。

だが、上手くいけばそれでロマリア皇国の権威は失墜……しなくと

も、可成り落ちてしまっただろう。

代償として、ユートは未だ幼い身の上で死の危険に晒されるし、その手を血で汚す事になる。

ロマリアにはヴァリエール公爵も辟易しており、どうにかしたいとは常々思ってはいた。

だが、教会の権威が余りに大きい為、どうする事も叶わなかったのだ。

ロマリアの腐れ坊主共は、ヴァリエール公爵から見てもただのニート集団。

積極的にしている事と云えば、精々が献金という名の賄賂の要求。

断れば、異端審問を盾にした脅迫をしてくるだけ。

貴族も平民から同じ事をしているのだから、ロマリアにだけ文句を言うのも筋違い甚だしいが……

然し、ユートはルイズの為に泥を被ると言っているに等しい。

「本気かね？」

「はい、その為にピエール様にもご協力を仰ぎたいのです！」

「……………判った」

暫しの沈黙、表情を歪めて自身の無力に怒りを感じながらも、了承

した。

そうこうしている内にも、船がアルビオン側の港に到着する。

漸く着いた港。

取り敢えず、シティ・オブ・サウスゴータに行つて、マチルダに会う事にした。

勿論、行き成り他国の貴族が押し掛けて良い道理など有りはしない。

港街で一泊して、先触れを送つておいた。

名義は【ユート・オガタ・ド・オルニエル】だが、入国の目的がウェールズ王太子の誕生会への出席で、その中継地としシティ・オブ・サウスゴータに入り、宿泊したいという内容。

しかも、ヴァリエール公爵を伴っている旨も、同時に認めておく。

テューダー王家に招待された貴賓の手紙に、当然ながらサウスゴータ家は受け入れ準備に大童だろう。

他国の貴族を相手に、自国アルビオン王国の恥は晒せないのだ。

一日待つと、サウスゴータ家から返事と共に、迎えの馬車を寄越してくれた。

馬車を走らせる事、数時間……

サウスゴータ家に着く。

サウスゴータ太守が、妻と娘であるマチルダを伴い、ユートとヴァリエール公爵を歓待してくれた。

ユートは子爵家の嫡男に過ぎないとはいえ、アルビオン王国の食糧難を解決してくれたド・オルニエールの人間。

家格が下である事など関係無いとばかりに、公爵共々上位歓待を受ける。

歓待から抜け出し、宛がわれた部屋に入ってゆっくりしていると、扉をノックする音が響いた。

「どつぞ?」

入室の許可を出すと、扉を開いてマチルダが部屋に入ってくる。

「お邪魔するわ」

相変わらず、深緑の様な髪の毛が綺麗な少女だ。

ユートはそう思った。

11年後の原作では見られない、貴族令嬢なマチルダは存外と清楚だ。

原作時はフラッパーな感じな姐御肌なイメージだっただけに、貴重だと思った。

本人には、とても言えないのだが……

「何のご用件でしょうか？ ミズ・マチルダ」

「いえ、ミスタ・オルニエール。少しご一緒にいかがかと思いましたが」

「どうやら、ユートと飲もうと思ってワインを持って来たらしい。」

「ああ、良いですね」

現代日本の感覚では、子供にワインを薦めるのはどうかと思つが、この世界では割りと普通の様だ。

だからユートも応じた。

グラスを満たす赤ワイン。

「じゃあ、乾杯」

「何に？」

「男なら気の利いた台詞を言ってみなさいな」

「いや、年齢一桁の子供に何を期待してるかな？」

大粒の汗を流し、ユートは苦笑する。

「クスクス、それもそうよね。何となく年下に思えなくてさ」

コロコロと笑い、ワインを軽く煽って喉を湿らせた。

アルコールの所為か、赤い頬が未だ幼い顔立ちを艶っぽく魅せる。

「あの時の子よね、貴方」

「はい、トリステインの宝石店で貴女とは一度お会いしました」

「アルビオンに来たら寄りなさいと言ったけど真逆、ヴァリエール公爵を伴って来るのは想定外よ」

「丁度、一緒にこっちに来る用事が出来まして」

「確か、馬鈴薯……だったかしら？ “貴方が” 齎したあの食物は」

「ええ、そうです。東方から入ってきた食物でして、栽培し大きな成果を挙げてくれたモノで、アルビオンの食糧事情を改善出来るかと思ひまたから」

「へえ？」

楽しそうにユートのする説明を聞くと、マチルダは更にワインを煽った。

暫く飲んでいると、眠ってしまうユート。

アルコールの回りが早かつたらしい。

そんなユートを、マチルダは抱き上げるとベッドに寝かせて部屋を後にする。

「それじゃ、良い夢を視なさい」

子供を酔い潰してしまい、少し罪悪感があつたのだろうか？ 眠るユートにそう声を掛けた。

マチルダが部屋を出て少し経つと、ユートはガバリと起き上がる。

実はユートはまったく酔ってはいない。

1人で考えたい事が出来た為、酔い潰れた振りをしたのだ。

そもそも、水の精霊王との契約をした契約者たるユートは、自分自身コントラクターの水の流れを操作して、あらゆる毒を浄化してしまえる。

アルコールもまた、毒素であると定義すれば当然ながら、弾いてしまえた。

酔いたければ、弾かなければ良いだけなので便利と言えば便利な力だろう。

考えたのは少し未来の事。

国王ジェームズ一世の弟である、モード大公が現在困っているだろうシャジャルと、その娘のティファニアの事をどうしたものか……

正直、どうにも出来ない。

現時点で、モード大公とは知り合いでも何でも無い上に、マチルダ



とも知り合ったばかり。

それでエルフの妾について知っているのは、あからさまに不自然。寧ろ、変に警戒されてしまっただけだ。

「やっぱり手出しは無理だろうな」

訳知り顔で、ティファニアの事を口走ればどうなるかなど、判り切っている。

トリスティンの貴族である以上、ユートがアルビオンの御家騒動に関わる訳にもいかない。

そんな事を今やれば、一緒に来ているヴァリエール公爵の顔を潰してしまうし、どう転んでも良い事にならない予感がした。

「軟禁状態に等しいのに、他国の貴族の俺が知っているなんて、向こうからしたら不気味でしかないしな。仕方がないか……」

心苦しくはあるが、全てを救う道は無い。

況してや、モード大公とは直接的に話をする機会など無いだろう。

一番、拙いのはマチルダが今現在、ティファニアの事を知らなかった場合だ。

藪をつついて蛇を出すのは得策ではない。

妹の様に可愛がっているならば、幼い頃から知っている可能性が高

いが、それが何時かは判らないのだ。

「他国の事は、やっぱ対処療法つてところか」

そもそも、自分の国の事だって今は自領の事だけでも精一杯なのに、更に手を伸ばすのは危険でしかない。

取り敢えず、マチルダには困った事があつたら相談に乗ると言っておくに留めるのだった。

第22話：アルピオン王国へ（後書き）

ユートの手は、腕を拡げた分しか救えません。

マチルダやティファニアに関しては、やはり魔法学院に行ってからになります。

第23話：風の精霊王（前書き）

色々と独自設定あり。

### 第23話：風の精霊王

ユートは王宮へと向かい、主賓たるウェールズ・テューダーに会っておく。

「初めまして、殿下」

臣下の礼こそ採らないが、最大限の敬意を以て挨拶をする。

他国の王子である為、臣下の礼など採る必要は無いだろうが、身分が上であるからには相応の儀礼は必要。

「初めまして、ユート殿」

対して、当のウェールズは割りとフランクに、笑顔で話し掛けてきた。

王子としての態度としては些か軽いが、どうやら人間としての度量はそれなりに有るらしいと判断する。

これで無駄に頑固でなければ、レコンキスタに占領された後の旗印としては最適なのだが……

ガリアへの梃子入れが出来ない以上、レコンキスタの台頭は間違いない。

そうなれば、彼は原作通りにその生命を散らす事になってしまう。

「（あーぱー姫を押し付ける為にも、死んで貰う訳にはいかないけどな）」

もし将来ウエルズが死んだなら、その皺寄せは本来の主人公である平賀才人が自分に来る筈だ。

だったら梃子入れしてでも死なない様に、今から色々とやるべきでは？

普通ならそう思う処だが、恐らくは余り意味が無い。

仮に、レコンキスタが台頭しない様に策を巡らせるとするなら、どうするか？

案1：オリバー・クロムウエルの早期暗殺。

別の頭が据えられ、誰になるか判らなくなってしまうリスクがある。

案2：ラクスに言って、似非虚無に使われるマジックアイテム、アンドバリの指輪を隠してしまう。

向こうはマジックアイテムの専門家、隠しても無駄かも知れないし、別のアイテムが使われたら目も当てられない。

案3：今すぐにもモード大公に、妾のシャジャルと娘のティファニアに関して対処して貰う。

他国の貴族であり、知らない筈の知識から案を出した処で黙殺されるか、最悪で秘密を知ったとして暗殺者を送られかねない。

案4：いつそ、ガリアに行つて真実をぶちまける。

確かにシャルルの真実を知れば、ジョゼフの暴発は無いかも知れないが、此処で忘れてはならない存在が、彼の混沌の名を冠する者。

どの道、アレが動けば全ては意味を為さない。

正に敵側のジョーカー。

「（やっぱり自分の手の届く範囲でしか救えないか。なら、アルビオンは戦争が始まってからだな）」

ティファニアは、その前に移住させれば良い。

というより、よく考えてみれば今からティファニアを救えば、戦争が起きた場合に孤児達は救われない。

幾ら何でも、現時点で誰が孤児になるかなど判る筈も無いのだから。どんなに妨害をしたとしても、恐らくは何らかの形で争いが引き起こされる。

“奴ら”はそれを望んでいるのだから。

それに世界の修正力も莫迦には出来ない。

世界は在るべき姿である事を望む。

本来の歴史から外れたら、別の何かで埋めようとするだろう。

なら、原作知識が使える内は使った方が良い。

対処療法ではあるが、少しずつ原作から切り離すのが得策だし、制御出来るリスクの方がやり易いのも確かなのだ。

差し当たり、ユートがするべきは風の精霊主と逢い、風の精霊王の存在する異界へと扉を開いて貰う事。

そして、上手く契約を交わして聖痕ステイグマを刻んで貰い、風霊石を下賜される。

砂漠サハラに行くなら、少なくとも風の精霊を味方に付けておきたい。

何故なら、砂漠で最も強い精霊力は風と火。

場合によっては、エルフとの戦闘も視野に入れなければならない以上、砂漠で使える精霊との契約は必須だろう。

実際、砂漠で水の精霊力は極端に低い為、水の力で挑んでも勝ち目はない。

別に喧嘩しに行く訳ではないが、エルフ側は喧嘩腰で来るのは目に見えている。

何しろ、連中から見たなら此方は蛮人だ。

原作でも、アリの態度が全てを示しているし、評議会の才人やティファニアに対する態度は、喧嘩を売っているとは思えない。



ルクシヤナのように、観察動物扱いもどうかと思うが、それでもマシではある。

ウェールズは、食糧事情の改善を行ってくれたユートに、感謝しているらしい。

実際、馬鈴薯は毒性を持つ部分にさえ気を付ければ、結構美味しい。それに、小麦などに比べて同じ耕地面積で、約3倍の収穫量が見込める。

勿論、問題もあるのだが。

問題は麦より地の力が衰え易くなるという事。

年に三度の収穫が出来るのが強みだがその分、栄養素も奪われてしまふ。

ド・オルニエールでは糞尿や生ゴミの類い、動物の死骸などを肥料に換えて、畑を維持している。

然し、どうも他の貴族や国では本当にそういう措置を採っていないらしく、場合によっては不作になる事も屢々あったと聞く。

馬鈴薯を作物として作るなら、正しい農法を伝えておく必要があるだろう。

ウェールズとの話しも終わって、次はジェームズ一世へと挨拶をし、農法を伝えてしまう。

ジェームズ一世にも挨拶を終えると、ユートは風の精霊主が居るかも知れない地である、アルビオン山脈を目指す。

山脈の頂上は、ハルケギニアでも稀で風の力が強い。

そんな所であれば、きっと風の精霊主も居る筈。

ユートは登山の装備を整えて、アルビオン山脈を踏破するべく登り始めた。

獣や鳥も居るが、オーク鬼などの凶暴な亜人も居る。

『永久を生まれし行き交う風よ、優しき流れ揺蕩う水……全てのモノに白い息吹を！ 氷窟ヴァン・レイル蔦ッ！』

### 【氷窟蔦】

押し付けた手を起点とし、無数の氷の糸を這わせる。この糸に触れた対象は、足から全身へと氷の糸に覆われて、たちまち氷の彫像と化してしまふ術。

ルーンを口にして、頭の中でスレイヤーズの詠唱を唱え、術式を構築する。

使うのは水水風のトライアングル・スペル。

ヴァン・レイル  
氷窟鳶はユートのイメージ通りに、大地を這いながら氷の糸がオーク鬼に絡み付く。

その傍、オーク鬼は完全に氷の彫像となった。

腰に佩いた刀を抜き、それで凍ったオーク鬼の首を刎ねてしまう。

多少、生命力が強いオーク鬼は氷が溶けた時、復活してしまうかも知れない。

然し、首を刎ねてしまえば復活はあり得ない。

こうやって、ユートは襲ってくるオーク鬼を倒しながら頂上を目指し、アルビオン山脈を登る。

「お久し振りでございますな、ジームズ一世陛下」

「うむ、久しいな。ヴァリエール公爵。弟の結婚式以来かな？」

「は……」

王家に最も近い家柄であるヴァリエール公爵家は、王族の結婚式に呼ばれる事も屢々ある。

現在のトリステインの国王は、アルビオン王のジェームズ一世の弟に当たった。

つまり、ユートがくっ付けようとしているウェールズとアンリエツタは従兄妹と云う事だ。

「この度は、我がアルビオンの要請を受けてくれた事を感謝する」

「いえ、全てはユート・オガタ・ド・オルニエールの手柄にございます」

「ふむ、馬鈴薯と言ったか……塩を付けて食べてみたが、中々に美味であった」

蒸かした馬鈴薯に、塩を調味料として食べたらしい。

「彼が言うには、馬鈴薯一つに様々な食べ方があるとか。城に戻って来たなら、色々和讯いてみるのも宜しいかと」

「そうしよう。栽培法の方も確りと訊かねばならん。然し、アルビオン山脈への立ち入りを認めて欲しいとはな。あそこは永きに渡り人の手が入っておらんし、亜人の住処となっておる。本当に大事ないのか？」

「あの子なら恐らくやるでしょうな」

自信満々に答える公爵の目には、信頼の色がハッキリと籠っていた。

「あの年齢でそれ程か」

驚くジェームズ一世。

何を驚くって、ヴァリエール公爵をして未だに小さな子供のユートを、完全に信じているという事実だ。

「あの子が嫡男でさえなければ、我が後継者に欲しかったものですよ」

それが、ヴァリエール公爵のユートに対する評価。

あの親バカをして、娘の誰かを嫁にやっても繋がりを保ちたいと思う位に。

二日後には、トリステインの大使としてアンリエッタとマザリーニが来る。

ユートはそれ迄に頂上へと到り、風の精霊主と会わなければならぬ。

登山に一日、下山に一日。

ギリギリの日程だ。

『全ての力の源よ、輝き燃える熱き炎よ。我が手に集いて一条の矢となれ……』

火火のラインスペル。

ルーンを口ずさみ、頭の中でイメージを術式化。

イメージの内で唱えた呪文は、そこそこ強力な火炎系のスレイヤーズ魔法。

ヴァール・フレア  
「爆炎矢ッ！」

### 【爆炎矢】

火の矢が目標へと命中した途端、炸裂し凶悪な殺傷力を発揮する呪文。火炎球よりも威力が高い。

オーク鬼に命中した火炎の矢が、一気に炸裂して焼き尽くしてしまふ。

「頂上まで、あと少し」

段々と風の力が強くなっているのが、ユートにも判ってきた。

契約している訳でもない筈の精霊力を感じるならば、それは固有精霊力が上昇していると云う事。

それだけ濃厚な気配。

「間違いない。在るな……この先に」

木々を掻き分け、ユートは先を急ぐ。

「こ、これは……」

アルビオン山脈の頂上に着いて、その圧倒的な台風の如き風に驚愕した。

然し、圧倒されてばかりも居られない。

「風の精霊主っ！ 在るのだろうか？ 姿を顕してくれないかっ？」

風は偏く全てに在る。

何故なら惑星全土を覆い尽くしているモノこそが大气であり、それが流動している流れそのものを“風”と呼ぶのだから。

即ち、風の精霊とは惑星を覆う空気そのものへの干渉力の具現、具象体なのだ。

だから、何もこんな所まで来ずとも呼び掛ければ風の精霊には聴こえる。

然し、契約も何もしていない人間の呼び掛けに、風の精霊が応える義務は無い。

だからこそ、最も風の力が強いだろうこの地までやって来た。

後は風の精霊主へと呼び掛けて、応えて貰うだけ。

「風の精霊主よ！ 頼む、応えて欲しい！」

さて、ユートが言う精霊主とは何か？

元より、精霊には呼び分けなど意味を為さない。

ユートは人間に解り易く、それを分けた。

ハルケギニアに於いての、人間社会に見立てたのだ。

自意識を持たず、単純意思を持つだけの小精霊。

小精霊を平民。

自意識を持った、精霊王の地上代行者たる精霊主。

精霊主を貴族。

そして、自然界の在り方を司る概念体を精霊王と呼んでいる。

精霊王が国王や皇帝。

属性、系統を各国と見立てていた。

詰まり、風の精霊主というのは【風の国の貴族】という意味合いになる。

ユートがやろうとしている事は、それだけ見ても大概無茶苦茶だと判るだろう。

何故なら、全ての国（系統）の貴族（地上代行者）に成るべく、各



国の王（精霊王）に謁見しようとしているのだから。

現実的に見て、人間の世界でも出来ない事を、非現実的な精霊の世界で果たして叶うかどうか？

普通なら不可能だ。

だが、ユートの場合はその為に必要となる“資格”を有している。

ユート的には、とても嫌な喻えになるのだが……

各国の王（精霊王）を越える権威が、その資格となっていた。

概念体の中でも最上位の、金色の巫女姫の祝福。

ハルケギニア風に言えば、ロマリア皇国の教皇の委任状を持つてる様なモノだ。

「うわ、何かスッゲー嫌な想像しちゃったぜ！」

思わず前世での口調になるくらい嫌だったらしい。

「やっぱりラクスの時と同じで、肉声で幾ら叫んでも意味は無いかな」

水の精霊主ラクスに呼び掛けた時、ユートは自らの内に流れる水（血）を触媒に、精神力を通して思念でそれを行った。

「今にして思えば、血じゃなくても良かったのか？ 確か、烈風の姫騎士の方でダルシニが、血の代わりに汗で腹を満たしてたよな」

汗の成分にプラスして、血の成分の様な事を言っていたという事は……

「小でも良かった？」

汗の成分とアレは、然して変わらないモノの筈。

コートは目を閉じ、頭を振った。

精霊を相手に、不届き過ぎる想像だったからだ。

第一、小に導かれてやって来る水の精霊……

「凄く嫌だな、それは」

本当に嫌な想像に、自己嫌悪に陥ってしまう。

「気を取り直して、と」

コートは、先程のアホな想像を黒歴史に認定すると、真面目に【風の精霊主】を呼び出す為の方法を模索し始めた。

人間に限らず、生命体とは概念的に見た場合、全ての系統で創られていた。

精霊が、各々の属する系統一極で形作られているのに対して、肉の身体を持った存在は縛られていない。

人間の身体を構成しているのは物質系の元素で、主に蛋白質や鉄分、

カルシウムといったモノだ。

それを土系統とする。

また人間の成人体は、大体60〜70%は水分で出来ていると云われ、赤ちゃんは約80%を占めており、水分の割合が多い。

これを水系統。

人間は血中に酸素を持ち、空気を吸って二酸化炭素を吐き出ししている。

非物質系の元素も不可欠という事だ。

これが風系統。

そして、人間は熱を持たないと生きていけない。

少なくとも、地上の哺乳類に関しては間違いない。

通常で平均36、風邪の時は菌を殺す為に40にも及ぶ熱を出す。

これを火系統としよう。

少々、無理矢理な感も有るだろうが、四系統の全てが人間の構成要素だ。

ならば、器の大きさにも依るのだろうが、人間全員にその素養は有るのだろう。

そう、問題は器。

普通の人間の器では土台、精霊との契約によって与えられる力に耐えられない。

【風の聖痕】という嘶でも風に特化した契約者<sup>コントラクター</sup>、八神和麻ですら聖痕の発現に数分間しか保たなかった。

それ以上、発現を続けていれば完全に処理能力を越えてしまい、脳が焼き切れて廃人になっていただろう。

人間という種の、それは謂わば限界。

ユートは転生という形で、一度は八識に至っているという事もある上に、金色の巫女姫の祝福も手伝って、四精霊の王達全てとの契約が可能な器が既に出来上がっている。

許容量<sup>キャパシティ</sup>が、単純計算でも普通の契約者の数倍あるのだ。

後は、それを扱う知識。

ユートは本能のレベルで、その知識を持っていた。

それに、ライトノベルなどや雑学書の知識も有る。

器と知識が有るなら、残るは器を充たす力のみ。

ユートは精霊王から、力を与えて貰う為に現在は精力的に動いてい

る。

「本格的に始めるか」

そう言っつて、行き成り服を脱ぎ始めた。

誰かが見ていたら、明らかに変態行為だ。

だが、ユートは思う。

精霊王との交感には、肉体以外の物質を纏ってはいけないと。

絶対では無いが、最も交感をし易いのは裸だと、そう考えている。

人間が持つ風の要素と言えば息吹。

裸となったユートは、呼吸法を使いながら息吹に精神力を乗せる。

そして思念で呼び掛けた。

『風の精霊よ、僕の呼び掛けが聴こえるなら応えて欲しいんだ……  
っ！』

目を閉じて、風の精霊主が呼び掛けに応じる迄、何時間だろうが動かない覚悟でそれを続ける。

『ふむ、漸く届いたか？』

突然、頭に響く声。

『風の精霊主なのか？』

『精霊主？ ああ、成る程な。そういう意味ならその通りだと答えよ』

目の前には何者をも映してはいないが、確かに感じる存在感。

『ラクスは不定形の水が形を採っていた。なら、風の精霊主は目に映らない風が形を採っているのか？』

『その通りだ、大いなる金色に守護されし単なる者』

『やっぱりラクスと同じ事を言うんだな』

『ふむ、ラクスか。それは貴様達、単なる者がラグドリアン湖と呼んでいる地に在る水の同胞の事だな？』

アッサリと看破してしまう風の精霊主。

ユートは吃驚した表情で、風の精霊主を見つめる。

『何を驚く、大いなる金色に守護されし単なる者よ。我は偏く全てに在る存在。それ故に、貴様が水の同胞に名を与えた事も当然ながら識っておるよ』

『な、成る程……ね』

言われてみれば至極当然。

大気の在る所、全てが風の精霊の領域なのだから。

『故に、貴様の目的も我は知っている』

『っー』

『我らが王の試練を受けるのだな？』

『はい！』

『我が声を聴く貴様には、既に資格を有する。では扉を開こう』

『待って！』

『どうした？ 試練を受けるのを止めるのか？』

『その前に聞きたいんだ。何故、直ぐに僕の呼び掛けに応えてくれなかった？』

気になっていた事を訊いてみると、風の精霊主は何処か呆れを含んだ気配を漂わせる。

『我はずっと応えていた。然れど、貴様には水の気配が強過ぎて我が声が届かなかったのだ』

『そうか、思念で話し掛けていたから……』

ユートは自分の失敗に気が付く。

つまりは、呼び掛ける事にはかり注視してしまって、相手の声を聴こうとしていなかった。

なんて愚か。

なんたる身勝手。

耳を塞ぎ、ただ大声を張り上げて叫ぶだけだった。

対話とは、相手の言葉に耳を傾ける事を前提としているのに。

恥ずべき事だ。

『……済まなかった』

『謝る必要は無い。その時は資質は有れど資格無しというだけの事よ』

裸になって呼び掛け始め、時間が経つにつれてユートの水の気配が薄れた。

風と一体化したかの如く、ユートの心は風に溶け込んでいき、一種のトランスファーへと至る。

それがクリア・マインドを導いたのだろう。

『ありがとう。何と無くだけど解った気がするよ』

『ふむ、ならば帰ってきたなら水の同胞と同様に名を付けて貰うか？ 無事に帰って来れば貴様は我が同胞故にな』

『判ったよ。考えておく』



どうしてだろうか？

見えない筈の風の精霊主が何故か、微笑んだ気がしたユート。

扉が開いたのか、竜巻に浚われてしまう。

水の精霊王の概念空間は、水の色を示していた。

そして、今回は風の精霊王の概念空間。

それは晴れた大空の様な色を示す。

この概念空間こそが、風の精霊王の意志そのもの。

水の精霊王の時は溺れる様な感覚だったが、今回はやはり違ってまるで過呼吸の様な状態だ。

何でも過ぎれば毒となる。

水は必要不可欠だが、摂り過ぎれば体調を崩す。

トリカブトという植物は、強い毒性を持っている物だが、一定量なら逆に薬に成る様なものだ。

空気も同様。

「はっ、はっ、はっ……」

この俛、過呼吸が続いたらユートは何れ死に到る。

「（思い出せ、さっき風の精霊主と交感した感覚を。拒むな、受け止めて、受け容れるんだ……）」

精神をより高みに至らせ、精霊の力を、意志を自らの内に受け容れる事こそが、契約のたった一つの条件。

「かはっ！」

まるで肺の中の空気を全て吐き出したかの様に、一声嘶き動かなくなった。

「……………」

クリアになる思考。

受け容れる、それは意識的に行う事では無い。

自然体であって初めて可能な事。

それに気が付いた時、瞳には深い空の如く蒼い輝きを湛えていた。

地上に戻ったユートの右手には、白い石が……風霊石が握られている。

『戻ったか。我が新たなる同胞、ユートよ』

『ん、無事に戻って来たよリーベルタース』

『リーベルタース？ それが我が名か？』

『ああ、風を概念的に見たら相應しいかなと思って』

【L i b e r t a s】

ラテン語で自由の意。

『僕達の世界の言葉でね、自由って意味だよ』

『成る程、我には相應しい名だな』

どうやら満足してくれたいらしい風の精霊主。

否、リーベルタース。

『行くのか？』

『うん』

『ならば忘れるな。風は、我は偏く全てに在る事を』

『忘れないよ、リーベルタース。君は常に共に在る』

コートは服を着ると、空を飛翔する。

風の聖痕を刻まれ、ユートは風の精霊王の地上代行者となった。

だからこそ、風の精霊達はユートを運んでくれる。

ユートは登る時と比べて、僅かな時間で降りていく。

「大いなる意志に守護された者……」

未だ成り立てであるが故、木陰に隠れていた人影に気が付かない仮に。

### 第23話：風の精霊王（後書き）

スレイヤーズの魔法で、詠唱が判らないか公式設定が無い場合は、オリジナルでそれっぽく書いています。

第24話・白の国の王子（前書き）

今回、ご都合主義万歳のな嘸が多々あります。

今更かな？

## 第24話：白の国の王子

「では姫様。不肖ですが、このサリユート・シュヴァリエ・ド・オガタ・ド・オルニエールが、アルビオン王国までエスコートさせて頂きます」

臣下の礼を採り、サリユートはアンリエッタを含んだ家臣団の先頭に立つべく、挨拶をする。

「この度はよろしくお願いしますね、ド・オルニエール子爵」

「は、見に余る光栄です」

トリステイン国王とは個人的に親しくはしているが、公私は弁えて行動する必要がある。

今は公人として動く以上、サリユートは丁寧な物腰でアンリエッタ王女に接していた。

アンリエッタ王女自身は、普段がフランクな態度であるサリユートの公人としての顔を、今回の事で初めて見て少し戸惑う。

サリユートは、アンリエッタ王女にとっては、父親の友人の気さくなおっちゃんだったからだ。

それでも、一応は一國を預かるトリステイン王の娘。

この場合の対応の仕方くらいは、日々の勉強できちんと習っている。

スツと右手を差し出す。

サリユートは、右手の甲に軽く口付けると立ち上がって、全員を先導した。

サリユートとアンリエッタは馬車へと乗り込み、家臣団となる王国騎士達は馬に騎乗すると、アルビオンに向けて出発する。

馬車に乗り込んでいるのはアンリエッタとサリユートの他、マザリ―二枢機卿も一緒だった。

「(さて、漸く出発出来たな。ユートは彼方で上手くやっているか?)」

心配はしているが、信頼もしているサリユート。

胸中は少し複雑だ。

「サリユート殿、ユートさんは既にアルビオンに居るのですよね？」

「はい、姫様。そもそも、ユートがウエールズ様の誕生会に名指しにて招かれた理由が、陛下の要請を請けてユートが栽培法を確立して栽培していた馬鈴薯を、彼の国へ輸出した事にあります。ユートは誕生会に先んじて、栽培法を伝えたりと仕事が有りましたから」

「馬鈴薯……、確かに美味しかったです」

「(ご賞味頂きましたか)」



蒸かして熱々の馬鈴薯に切れ目を入れ、バターを乗せた蒸かし馬鈴薯のバター乗せを、アンリエッタは一種のオヤツで食べている。

他国へ輸出する以上、自分達が食べた事もない物など送れないからだ。

「ユートが言うには馬鈴薯を使った料理は、可成りの多岐に渡るとか。うちでもジョゼットが研究しておりますて、ユートの専属メイドが調理をしております」

「まあ、わたくしも是非に食してみたいです」

「それでしたら、レシピが出来上がればお城にお持ち致しますよう」

「はい！」

アンリエッタ王女は朗らかな笑顔で、喜んだ。

因みに、マザリーニ枢機卿は一切会話に加わっていないが、目は閉じていても確りと聴いている。

一応は、アンリエッタ王女に政治的な事を教える為の教育係を、トリスティン王から仰せつかった身。

間違った知識や思想を植え付けられたり、変な言質を取られたりしては困るという事だ。

まあ、サリユートがそんな事をしないとは思う程度には信頼しているが……

その頃の、置いてきぼり組であるユーキとシエスタ。

サリュートの言う通りで、シエスタは厨房の一角を借りて、馬鈴薯の料理を作っている処だ。

ただ、ユーキが研究しているというのは間違い。

研究ではなく、レシピを書いているのはシエスタに渡して、シエスタがそのレシピ通りに作っているだけだ。

「ユーキ様、やっぱりこのお料理には調味料が足りないみたいです」

「あゝ、この辺（世界）には無かったか」

その料理に必要な調味料とは、味酛だった。

米は有るから、自作すればいいのだろうが今すぐには無理だろう。

「しょうがないな。味酛を造るまでは一先ず置いておくか。お兄様なら原料さえ用意すれば、錬成で造れるだろうし」

酒の様に、微妙な違いがあるモノは再現が難しいが、単純な量産品を造るならば割りと簡単に出来る。

「（日本酒の方は武雄さんが造ってたけど、種類も量も少ないしな）」

日本では当たり前前に食べれた味を、このハルケギニアで再現しているには足りない物が少な過ぎた。

武雄が造っていた日本酒を料理酒にするには、量的な意味でも難しい。

「これ、薄くスライスした馬鈴薯を、植物性油で揚げてお塩を塗したチップスですか」

シエスタは、紙に書かれたレシピ表を見て次の料理に思いを馳せる。

結構、愉しくなってきたのかも知れない。

「これ、作ってみますね」

ユートが帰って来た時に、美味しい料理を食べて貰う為に、シエスタは研鑽を続けていた。

「えっと、用意するモノは馬鈴薯とお塩と油……」

馬鈴薯の皮を剥き、1mm厚さに薄切りにする。

切った馬鈴薯は、空気に触れると酵素のは働きで変色するので、薄い塩水に浸け30分くらい置く。

仕上がりが濃くなってしまわないように、たっぷりの湯でさつと茹でる。

水で馬鈴薯の澱粉を二回に分けて洗い流す。

洗い流した澱粉は、後で濾してフードスターチにする為に残しておく。

大した量にはならないだろうが、家庭料理用ならいけるだろう。

水を切って、残っている水分をタオルでふき取る

150 ～ 160 の低温の油で5分ほど加熱して、水分を飛ばす。

その際、水分が無くなってくると泡がだんだん小さくなっていく為、それを目安にする。

180 ～ 190 の高温の油でカラッと揚げる

揚げた馬鈴薯が未だ温かい内に、塩を振り掛ける。

これが馬鈴薯のチップス揚げのレシピだ。

シエスタは表にあるレシピの通り、馬鈴薯をスライスして洗うと油で揚げ、塩を振り掛けていく。

因みに、塩はユートが海で海水から造った塩。

料理の調味料用に、錬成で造り上げたらしい。

「出〜来たっ  
」

完成したチップスの一部を厨房の人達用に残し、他は曾祖父やメイド達にお裾分けしてしまう。

自分とユーキとユリアナ用にワインのツマミとして、庭先のテーブルに置く。

グラスにタルブワインを注ぐと、3人が席に揃って座ってワインを飲み、チップスを食べてみた。

「うん、上手く出来てる。美味しいよ、シエスタ」

「本当、美味しいのね」

「ありがとうございます」

ユーキとユリアナに褒められて、シエスタは嬉しそうに微笑んだ。

頬の赤みは、アルコールの所為か、それとも気恥ずかしさによるものか……

何れにせよ、その日のオルニエル家が平和そのものだったのは、間違いない。

下山したユーキは王宮へと戻り、与えられていた客室に入るとベッドに腰掛け、疲れ果てた身体を直ぐにでも横たえた。

「しんどいな」

右腕で目を隠し、一切合切の視覚情報を遮断する。

肉体的には大した事もないのだが、精霊王の試練というのは精神的に疲労した。

然し、充実感が確かにあるのも事実だ。

昔、前世では無かった。

余りに中途半端な緒方優斗には、到底感じる事が出来なかった心地  
好い疲労感。

水の精霊王と風の精霊王から刻まれた聖痕は、恐らく同時には使え  
まい。  
ステイグマ

否、それは不可能では無いだろうが、脳に掛かる負担は半端では無  
い筈。

実際、優斗が獲た力は個人が所有するには過ぎた力。

謂わば、今まで刀や銃器を使っていたのが、核兵器を持たされた様  
なものだ。

一発逆転なんて、生易しい話ではない。

下手をすれば護るべき存在すらをも、呆気なく滅ぼし兼ねない危険  
な力。

ユートはそれを自覚して、成る可く（なるべく）情報をオープンに  
しないよう心掛けている。

とはいえ、王家に隠し続けるのはバレた時のリスクを考えるならば、  
却って危険かも知れないと考えた。

特に、トリステイン王国は水の精霊主ラクスと盟約を結んで、交渉役なんて役職を置いている。

その交渉役を差し置いて、自分が契約をしているのだから、場合によっては叛意有りと思なされるだろう。

より正確には、ラクスではなく、その上の存在である水の精霊王との契約だが。

「一度、ピエール様に相談をしてみるべきか？」

相手はトリステイン王国の重鎮だし、ルイズの事も考えれば下手は打ちたくないと思うだろうし……

「あと、問題は火の精霊王と土の精霊王の居場所か。まあ、火の精霊王は恐らく火竜山脈だろうけど」

ハルケギニアでに於いて、最も火の精霊力が強い場所があるとすれば、最大の火山だとされる火竜山脈だと予想される。

「土の精霊王か……」

厄介なのは土の精霊王。

ライトノベルでも、それっぽい場所が特定出来ない。

「一番、可能性が高いのは土のルビーが継承されてるガリアか？」

火のルビーはロマリアだから兎も角、水のルビーが継承されているトリステインにラクスが、風のルビーが継承されているアルビオン

にリーベルターズが在<sup>い</sup>たが、そもそもトリステインやアルビオンの様な象徴される場所、それがいまいち思い付かないのだ。

「ルビーの継承と精霊の場所は、偶然<sup>あ</sup>つて処か？」

第一、火のルビーと火竜山脈では場所も違い過ぎる。

「土の精霊力が一番強いのは……やっぱり土の中？」

土中なら土の精霊力が強いのは当然だ。

が、それでイコール土の精霊が在<sup>い</sup>るとするのは、如何にも短慮<sup>たんろ</sup>が過ぎる。

「ハア……」

大きな溜息を吐き、徐々にだが微睡みに誘われた。

そして、ユートは完全に寝入<sup>い</sup>ってしまう。

夢現<sup>ゆめげん</sup>、ユートは暗闇と白濁とした空間を歩いていた。

「何だか、今までもあつたシチュエーションだな」

荒涼とした広大な空間を歩きながら、キョロキョロと辺りを見回す。



「居るんだろ？　なのはさん！」

『はい、正解です』

其処に顕れたのは白を基調としたジャケットを身に纏う、栗色のサイドポニーに紫水晶を思わせる瞳を持つ女性。

純白の天魔王・高町なのはだった。

「なのはさん……」

『ちよ〜っとお久し振りだね、ユート君』

「そうですね」

確かに久し振りだ。

「それで、何のご用でしょうか？」

『ムム、ユート君が冷たいよ？』

少しムツとなるなのは。

『まあ、良いけどね。土の精霊王の場所を教えに来たんだよ』

「偉大なるなのは様、僕は貴女の下僕です！」

『変わり身はやつ！？』

流石のなのはさんも吃驚の変わり身の早さは、ユートの煮詰まり具

合を如実に示していた。

「そういえば、なのはさんは【はるな】って名前に覚えはありますか？」

はるなの名前を出した途端に嫌な顔になる。

『会ったの？』

「義妹のユーキが……」

『ユーキ……君？　もしかしてジヨゼット・エレヌ・ユーキ？』

「は？」

『昔、私の旦那様がハルケギニアに行った時、トリスティン魔法学院で出逢った元・男の子だよ』

ユートは思い出す。

ユーキがはるな（神）から聞いた話では、確かにそんな内容だった気がする。

その時の名前までは聞かなかっただらしいが……

此方では、ユーキ・ジヨゼット・ド・オルニエルと名乗っているが、オガタ家が存在しなかった世界では恐らく、ジヨゼット・エレヌ・ユーキと名乗っていたのだろう。

「然し、何故にエレヌなんて？」

エレーヌはタバサの名前。

何故、わざわざ姉の名前を名乗ったのか、ユートは首を傾げた。

『なんでも、シャルロットを挑発して気付かせる為だったとか』

「は？　なのはさんは何故それを？」

『旦那様が連れ帰って来たシャルロットから、直接聴いたからね』

「……………もしや、同僚の神だったりしますか？」

『そつだよ？』

従属神契約で、殆どどの娘が下級神として傍に居る。

そんな状態らしい。

『ま、それは兎も角として…………旦那様が知っていたのはネフテスって所にある筈の洞窟の奥だよ』

「ネフテス？　エルフの首都じゃん？」

『そうなんだ？　私は行ってないから知らないけど。ハルケギニア側にも在るかもだけど、旦那様は知らなかったから』

「いえ、ありがとうございます。お陰で光明が射してきましたよ」

『うん、アフターケアも万全だからね。それじゃあ、また何れ会お』

うね  
『

辺りが光に満たされ、眩しさに目を押さえる。

それが、ユートの夢からの目覚めの予兆だった。

「ネフテス……か」

目を覚ましたユートはボソリと呟いて、なのはが教えてくれた土の精霊王の居場所について思いを馳せる。

これでどの道、エルフの国に行く必要が出来た。

此方にも接触が可能な場所も有りそうな事を言っていたが、流石に知らないのではどうしようも無い。

然し、タイミングが良すぎるといつか、どこ都合主義が過ぎるといつか……

「真逆、覗かれてる？」

ブルリと、背筋を震わせてしまうユートだった。

ユートは一休みをすると、ヴァリエール公爵の部屋を訪れる。

ユートの来訪を、公爵は歓迎して招き入れてくれた。

「明日の夜は、ウェールズ殿下の誕生会の本番だな。ウチよりも盛大で、格式も高いパーティーだ。今夜は英気を養っておきなさい」

「はい、ピエール様」

「して、用事とは何かね？ 改まって部屋まで来たのだし、大事な用だとは思っただが……」

ユートと向かい合い、話すヴァリエール公爵の表情は真面目そのもの。

だからこそ、ユートも居住まいを正して話す。

「折り入ってご相談したい事があります」

「ふむ、それは例の計画絡みかね？」

「直接は関係ありません。ただ、トリスティンにとっては結構な大事かと」

「……話してみなさい」

ヴァリエール公爵は顎髭を撫で、僅かな沈黙の後に先を促す。

「僕は最近になって、魔法とは違う力を獲ました」

「魔法とは違う?」

「はい。それは魔法と密接に関わりませんが、力の質は別物です」

「魔法とは違う……よもや先住魔法か?」

「違います。先住魔法とはまた別物です。それは精霊の力」

「どう違うのだ?」

先住魔法 エルフや翼人など、亜人と呼ばれる者達の中でも言語を操る者が、精霊と契約を交わして操る魔法が先住魔法。

後から来た人間より先に、この世界に生きる先住民が操るから【先住魔法】と、人間は呼んでいる様だ。

場の精霊と契約して使っているアレは殊更、護りに向けた魔法。

そして、杖という発動媒体を必要とする人間と違い、素手でも使う事が出来た。

詠唱も口語で、基本的には人間の使う系統魔法よりも強力だとされている。

それ故か、人類は彼らの扱う【先住魔法】に嫌悪感を持っていた。

吸血鬼、韻竜、エルフ、翼人、他にはコボルトの司祭が使っているのを、ユートは知っている。

ハルケギニアでは、基本的に系統魔法以外の魔法は、ブリミル教が

異端だとして取り締まっていた。

余り下手な説明をすれば、ヴァリエール公爵といえどユートを庇えない。

ロマリア皇国の力は、貴族どころか王家にすら権威をちらつかせる事が可能な程に強いからだ。

「ラグドリアン湖に住まう水の精霊と、僕は契約を結びました。その結果、精霊の力を僕は行使出来ます。先住魔法より強力であるが故に、吹聴なんて出来ない力となっています」

「むう……」

「まあ、普段は封印をしていますからね、通常は系統魔法を使いますよ。でも、今の僕は水の精霊と同等の権威で、水の精霊に干渉する事が出来ます」

「っ!？」

驚愕する公爵。

「勿論、純粹な精霊とは違う人間では、上限も小さいので水の精霊より使える力は弱いですが」

「確かに、強力な力だな。それで、ユート君はそれをワシに伝えてどうしたいのだね？」

「王家に伝えて欲しいと思います。何しろ、王家どころか盟約を交わした交渉役の家にも未だ、何も言ってませんから、場合によって

は王家に隔意や叛意を疑われますしね？」

「そういう事か、判った。陛下にはワシから伝えておこう。時に、水の精霊の力でカトレアの治療などは出来ぬか？」

「カトレア嬢の治療……」

聞かれるとは思っていた。

然し、恐らくは不可能。

病によっては可能かも知れないが、予想の通りであれば出来ないだろう。

「診てはみませんが、期待はしないで下さい」

「診てくれるか」

「はい」

頼み事をした手前、断るのはどうかとも思った。

だが、水の精霊の力では治せない病だとすれば、早く例の計画を完遂したい。

ユートはそれを切に願う。



翌日になり、朝食を摂った後でユートは朝の訓練として木刀を振っていた。

そこへ、ウェールズ王子がやって来る。

「やあ、精が出るね」

「……殿下？」

ウェールズ王子は爽やかな笑顔を向け、ユートに声を掛けてきた。

「歩いていたら君を見掛けたのでね、話し掛けてしまったんだよ。訓練の邪魔をしたみたいだね？」

「いえ、別に……」

「でも、何故剣を？ 貴族なら剣より杖を振る練習をするものではないかい？」

嫌味などではなく王侯貴族として、メイジとして当然の疑問を投げ掛けているのだろう。

ウェールズ王子は首を傾げていた。

「そうですね、我がオガタ家はそもそもシュヴァリエを戴いて、それで貴族を名乗ってきた一族でした。故に、戦功を立てていかねばならず、戦いの中で魔法を撃てない状況も多々あったらしいです」

「成る程、それはあるだろうね」

敵が人間が相手だとは限らず、オーク鬼などの接近戦を得意とする亜人と戦い、近付かれて危機に陥る事は珍しくもない。

「だから、武器は貴族が持つ物では無いとか云われてますが、本物の戦場だったら通用しない事を、きっちり教えられるんですよ」

尤も、嘘ではないが実際に剣を扱う事を決めたのは、ユート自身だったりする。

「そうか、ユート殿は私より小さいのに確りとしてるんだな。どうだろうか、私と友人になつて貰えないかな？」

「唐突ですね……」

「君の考えは面白い。私の周囲には貴族社会の常識というモノを語る人間は当たり前前に居るが、惰性の因習という感覚しななかつたんだ。だけど君は違った。確りとした意見を持って、王族にさえ説いて見せた。私はそんな君と友人になりたいんだよ」

ウェールズの瞳にあつたのは本気。

本気で年下の子供の言葉に感銘を受け、本気で友達になりたいと思つている。

「難しいですよ？ 王族と貴族では明らかな隔たりが在るし、こんな嘯があります。とあるお姫様が、貴族の“お友達”に頼み事をします。『戦地へお使いに言つて欲しい』と。戦争の為に兵役を命じるのではなくて、お友達にお使いをお願いする。お姫様のお願いじ

や断れる訳もない」

「確かに、公私の線引きが難しいね」

ウェールズは理解出来たらしく、腕組みをして考え込んでしまう。

「それでも、僕と友人になりたいと思うなら、この手を取って下さい。その瞬間から“友達として”接しますから」

少しだけ俊巡したが、その手を確りと握る。

「宜しく頼むよ、ユート」

「ああ、ウェールズ」

友達の意味を理解し、手を取ったウェールズ。

この日より2人は、公的な場以外では遠慮をかなぐり捨てた間となるのだった。

第24話：白の国の王子（後書き）

ちょっと強引な引きだったかも……

なのはさん再び。

因みに覗いているのではなくて、担当している転生者が本気で悩んだりした時に判る様な仕掛けが有って、その都度アドバイスをしています。

第25話：カトレアの病（前書き）

今回、台詞が多いかも。

## 第25話：カトレアの病

パーティーは、結論からすれば大成功だと言えた。

ウェールズ王子がアンリエッタ姫をエスコート。

成る程、<sup>イケメン</sup>美男と美少女で絵になる。

なるのだが……

「（イケメンなんてみんな消えればいいのに！）」

などと、魂からの慟哭を心の埋で吐き出すユート。

タイプこそ違え、ユートもそこら辺の男と比べれば、充分過ぎるくらい整っているのだが、余り自覚は無いらしい。

「（ま、取り敢えずは当初の目的は果たせたな）」

まだまだ、恋に恋するお年頃にも早い年齢であるが、アンリエッタ姫も満更ではない表情でウェールズ王子を見つめていた。

初雪の如く白い肌の少女の顔が、ウェールズ王子に見つめられて見る見る朱に染まっていく。

「（やっぱりな。ウェールズは充分な天然誑しの才能があるわ）」

他人事の様言うが、実は自分も大して変わらないというのに、ユ

「トは余りにも身の程知らずな感想を抱いたものだった。

何しろ、シエスタに始まってカトレアに、完全では無いにしてもマチルダにすらも興味を懐かせている。

この先も増えるとしたら、ウェールズの事は決して言えない。

「いつか増えるだろう……それはもう、間違いなく。

寧ろ増やすだろう、ユーキが確実に。」

「ハーレムを作ろうなんて、冗談で言ってると思っているが、ユーキは可成り本気だったりする。」

「其処に早く気が付かないと外堀が埋まる。」

「確実に……だ。」

「アンリエッタ姫、こちらなどがですか？」

「は、はい。ウェールズ様……」

「真つ赤な表情なアンリエッタ姫を、離れた場所で観ているヴァリエール公爵は、ウェールズ王子に感心していた。」

「ほう、我が国の姫を墮とすか？ 中々にウェールズ殿下もやるものだな」

「そうですねえ」

とつてもいい笑顔で応えるユート。

「何故に笑顔なのだ？」

やり切った男の子の笑顔、それはとても爽やかだったという。

「ヴァリエール公爵様と、それにユート君」

「？ あ、ミズ・サウスゴータ」

「おお、サウスゴータ家のご令嬢か」

声を掛けられて、ユートとヴァリエール公爵が振り返ると、其処に居たのは新緑の様な長髪を靡かせている令嬢、マチルダ・オブ・サウスゴータだった。

「ミス・サウスゴータ、いつぞやの晚餐は楽しかったと、お父上に言っておいて頂けるかな？」

「いえ、父も公爵様とは愉しく飲めたと、喜んでおられましたよ」

「そうか。うむ、また飲みたいものだな」

お互いに社交辞令ではあるだろうが、其処には本音も多分に混じっている。

「やあ、ユート殿」

「これはウェールズ殿下」



「楽しんで貰えてるかな」

「はい、それはもう」

私的には兎も角、公的には礼節を弁えて話す。

立場というものは、斯くも面倒臭いモノだ。

朗らかに王太子と話をするアルビオンの恩人、対外的にはその様に見える。

それは、政治的にも充分に意味が有った。

パーティーも終了し、もう一泊してからヴァリエール公爵とユートは、トリステインへと帰る。

アルビオンに齎された新しい農法と馬鈴薯、それに加えて馬鈴薯のレシピ。

トリステインとド・オルニエールも、大きな利益を獲た双方に意味のある貿易となった。

更に、ヴァリエール公爵家も噛んでいた為、公爵本人がアルビオンに出向いただけの小さな労力で、少なからず利益を獲たのは余談でしかない。

後日、ユートはラ・ヴァリエール公爵領へと出向き、カトレアの診察を行った。

## 【ヴァリエール邸】

公爵との約束を果たす為、ユートはカトレアの診察に屋敷まで出向く。

歓待を受けたユートだが、一応は念押ししておいた。

「ピエール様、アルビオンでも言いましたが余り期待はしないで下さい。確かに僕は水の精霊の加護を受けていますが、使うのは魔法に過ぎません。水の治療も通常より強力なだけです。つまり、僕で治療出来ない病なら水の治療魔法に効果は見込めないと云う事」

ヴァリエール公爵は驚愕に目を見開く。

それは即ち、ユートで駄目ならカトレアが治る事は、未来永劫無いと言われたに等しいのだ。

ユート自身は、そんな絶望的な意味合いで言った訳では無かったのだが、受け取り側が其処まで理解してくれない事を失念していた。

なので、ヴァリエール公爵が青褪めている理由が解らない。

ユートは、魔法が駄目なら別の手段に訴えるだけの事だったから。

魔法とは想像力である。イマジネーション

ならば、コモン・マジックディテクトマジックの探知に現代医療機器を想像して使用し

たら？

そう考えて、初めての魔法訓練で探知を使い、成果を修めて既に久しい。

原作に於いては“カトレアが病気である”という情報しか開示されていない為、そもそも何の病気なのかが判らなかつた。

即ちそれは派生世界では、完全に“箱の中の猫”状態であると云う事。

故に、あらゆる平行世界でカトレアが“水の魔法では癒せない病気”に掛かっている共通項はあるが、病は各々の世界で違う形で発現していた。

極端ではあるし、誤解覚悟で言えば十の平行世界が在れば、十の病状が在る。

そんな状態だ。

これは、原典世界の因果の流入に関わっていた。

要するに、カトレアの病が重たい因果情報として齎されていても、病の内容が明かされないという、因果の軽さの為に【生まれつきの病である】という以外は、流入していない事が理由。

端的に云えば、病であるという結果は在れど、原因は不明の状態であるが故に、全ての平行世界でカトレアは病であるという共通項はあっても、病自体はバラバラというちぐはぐな結果となっていた。

その為に、世界によっては簡単に治療されるなんて事もある。

問題は、ユートの関わったこの世界のカトレアの病、それが簡単に治る類いのモノであるか否か……

ユートはカトレアの眼前に立った。

MRIやCT検査をイメージすれば探知も、より診断に特化された魔法として使えるのではないか？

そう考えて、領民が明らかに風邪などとは違う病状を表した際に試してみた。

その結果、水の系統とコモン・マジックを足した新しい魔法を開発出来たのだ。

攻撃魔法で、水のドット魔法の凝縮とコモン・マジックの念力を足し、水月輪アクア・デイベイターを使った事から、この方法を思い付いたのだが、以外と上手くいった。

因みに、水月輪アクア・デイベイターは凝縮で出した水を、念力で高速回転させた魔法で、最初こそは大した威力も無かったが、慣れてくると秒間回転数を上げて、切れ味がいや増したのだから面白い。

大きさこそ掌の二回り大のものだったが、ちょっとした気円斬の気分だ。

念力で繋がっているから、ある程度は操れるし。

勿論、某・寒々しい名前の宇宙最強（笑）種族みたいな間抜けはし

ない。

その経験からか、ユートは系統魔法と汎用魔法を普通に足したオリジナル魔法を構築していた。

その一つが水月輪であり、ディテクトマジック診断用の探知がまんまな名前メディカル・マジックで【診断】だ。

この魔法のイメージ元となるCT検査とは、即ち【Computer Tomography】コンピュータ断層診断装置の事。

X線を使って身体の断面を撮影する検査で、体内の様々な病巣を発見する事が可能であり、特に心臓、大動脈、気管支・肺などの胸部や肝臓、腎臓などの腹部の病変に関して優れている。

よって、体内の診断をするには丁度良い魔法だ。

「それじゃあ、始めるので脱いで下さい」

「え?」

カトレアが真っ赤になる。

その瞬間、凄い衝撃が頭に奔った。

「痛っっ!」

ふと見ると、ヴァリエール公爵が右拳をプルプルと震わせている。

「ユート君、何故に脱がねばならぬのだね?」

「？ 魔法を掛けるのに、服が邪魔だからですか？」

何を当たり前な事とも思ったが、説明無しで脱げでは納得もいかないと考え、魔法の説明を始めた。

「これから行うのは、僕のオリジナル・スペルです。その魔法は全身に水を掛けて、掛かった部分から内部をイメージとして読み込むモノですから、服を着ていると体内を読み込み難くなるんですよ」

一応、服を着た状態で試してみたのだが、フィルターを掛けたみたいでいまいち解り辛かったのだ。

コートとて、男のシンボルなんぞ見たくも無いし、女性の裸を視るのは恥ずかしいのだが、診察をするには必要だとして行ってきた。

「ぜ、全部……脱ぐの？」

「全身を診察するなら全裸にならないと、ちゃんとした診察は出来ないんだ」

「そ、そう……」

益々、赤くなるカトレア。

年下の少年とはいえ、裸身を視られるなは恥ずかしいものなのだろう。

「それほど心配しなくても良いよ。僕は椅子に座って目を閉じておくから、服を脱いだらベッドに寝て合図をしてくれれば、診察を始

めるから。頭に直接、イメージとして体内の様子が浮かぶから、目を開けておく必要も無いからね」

「は、はい。判りました」

言った通り、ユートは椅子に座って目を閉じる。

その間に、カトレアは服を脱ぎ始めた。

衣擦れの音が妙に艶かしく感じて、顔が赤くなっているが気にしない。

股間がムズムズするが気に止めない。

カトレアの気配が、目の前のベッドに移ったのに気が付いて、居住まいを直す。

「そ、その……どつぞ」

合図だ。

ヴァリエール公爵は、夫人に取り抑えられていた。

「(さっさと終わらせてしまおう)」

精神衛生上、良くないし。

ユートは魔法を詠唱する。

最初は凝縮の詠唱。

次はオリジナルの口語。

「我が水は、内なる水すら見透す……【メデイカル・マジック診断】」

本当のCT検査みたいに、X線や陽電子ポジトロンは使わない。

使うのは、凝縮で出した水に魔力を与えたモノ。

カトレアの体内が、ユートの頭にイメージとして送られてくる。

「ひゃっ？」

水を掛けられて冷たかったのか、カトレアが艶っぽい悲鳴を上げた。

それに比例して、ユートの身体が熱くなる。

全身を診る以上、頭、腕、顔、胸、腹、腰、脚、足の全てに水を掛けていく。

それが終われば、今度は仰向けから俯せになって貰って、背中から尻へ、更には脹ら脛へと水を掛ける。

目を閉じている関係上、珠に手が肌に触れてしまう。

その度に『きゃん！』だの『あん！？』だの艶やかな悲鳴が上がった。

そしてその度、ヴァリエール公爵の怒気を感じるが、診察している最中の不可抗力くらいは勘弁して欲しいところだ。



診察も終わり、それを告げるとカトレアは起き上がって服を着る。衣擦れの音がやはり艶かしかった。

「それで、どうなのだ？」

今までの怒気を払い、直ぐにも診察結果を聞いてくる公爵に、ユートは真面目な表情となる。

「3人共、落ち着いて聞いて下さい」

ヴァリエール公爵もそれを聞き、神妙な顔でユートの次の言葉を待った。

「結論から言えば、水魔法による治療は不可能です」

それを伝えた途端、絶望の表情となる。

カトレアも、覚悟は決めていたのだろうが、やっぱり青褪めていた。

当然と言えば当然か。

魔法至上主義のハルケギニアに於いて、魔法で治せない病とは即ち、不治の病に他ならないのだから。

「水系統の治療魔法とは、常態から見て異常となった部分を治すというモノで、生まれつきの病というのはそもそも、病の身体こそが常態です。故に、気分が悪くなったなどの異常は治せても、常態となっっている病までは治らない。水系統の魔法はダメージという異常

を、常態にまで治す事は出来ませんが、それ以上のコンディションには出来ないという訳です」

カトレアの病が生まれつきという事は、病に掛かっているコンディションこそが常態なのだ。

水系統の魔法とは後天的な異常を、常態にまで治療は出来ても、先天的な病まで治療する事は性質上の問題で不可能だった。

「では、カトレア……?」

「魔法での治療は諦めた方がいいでしょう。精霊の力も水系統の魔法の延長線上のモノ。力は強くても異常を常態にする事しか出来ません」

それは正に、絶望だった。

「な、何という事だ」

「どうして私達の娘がこんな目に……」

どうにも出来ない自分達の無力と、こんな酷い運命をカトレアに背負わせた神を恨む公爵とカリーヌ夫人。

「それでも恵まれていると思えますけどね」

「どづい意味だね?」

「同じ病を平民が患えば、カトレア嬢の年齢に到る事すらなく死んでいますよ」

「む、それは……」

ユートは辛辣な事を言う。

「平民なら、ほんの風邪の一つも引けば死ぬなんて事もザラです。それに比べればどれ程の事ありませんよ。それとも、平民の生命など塵芥ですか？」

「そうは言わんが……」

「まあ、我が子とは比べるべくもないでしょうが」

痛烈な皮肉を言われて、渋い表情になるヴァリエール公爵とカリィ又夫人。

ユートが平民を……領民を大切にしている事を知っているだけに、よもや平民などどうでも良いとは言えないし、最近では貴族としては珍しく平民に心を砕いていたりする。

彼の……ユートの在り方を眩しく感じていたからだ。

ユートを後継者に出来ればと、そう思ったのが切っ掛けだった。

ヴァリエール公爵はユートを気に入っているが故に、ユートのやり方を参考にして領地経営をしているが、それでも未だ足りないのと、そういう事なのだろう。

「ユート君、本当に無いのかね？ カトレアを救う術は……」

「魔法では無理ですね」

「待ちなさい」

ヴァリエール公爵の再確認を否定すると、カリーヌ夫人が待ったを掛ける。

「何ですか？」

「貴方は先程から“魔法では無理”だと言い続けていますが、それだと魔法以外なら手段が在る様に聞こえますよ？」

「流石カリーヌ様ですね、その通りですよ」

「貴方も人が悪いですね」

カリーヌ夫人が少し怒った様な顔で言ってくる。

「但し、それでも蜘蛛の糸程のか細い希望ですが」

「構いません、私達はどんな小さな希望であれ、継りたいのですから」

絶望の中で見出だされた、ほんの僅かな希望。

正に溺れる者が藁にも縋る心境という訳だ。

「取り敢えず、僕に考え付く方法は二つ。一つは四系統精霊の力を結集し、肉体を健康体に作り替える事。二つ目は、ハルケギニアとは違う世界の医療技術を以て治療する方法です」

「精霊？」

「違う世界？」

カリーヌ夫人もヴァリエール公爵も、ユートの言葉に首を傾げてしまふ。

それは余りにも突拍子も無くて、子供の妄言にしか聞こえない提案だ。

しかもそれは……

「この二つの案は、実際には実行力がありません」

「どついう事だね？」

ヴァリエール公爵には解らなかったが、カリーヌ夫人には理解出来たらしい。

瞳をキラリと輝かせた。

「どちらも異端……という訳ですね？」

「はい」

【異端】

ブリミルの教えに背く……或いは教えに無い事を行うと、ロマリア皇国によって【異端】だと認定されてしまって、異端審問に掛けられてしまふ。

尤も、これはブリミル教にとって都合の悪い事を全て【異端】であるとするだけで、要は皇国の権威を嵩に着了宗教的弱者の弾圧に過ぎないのだ。

先住魔法とて、ロマリアから見れば【異端】でしかないのだ。

【ダングルテールの虐殺】すら、邪魔な新教徒達を殲滅する為にロマリアが関与していた。

あれには、トリスティンの貴族とアカデミーも関わっていた訳だが……

始祖ブリミルが齎した魔法の地位を脅かすもの全て、彼らにとっては【異端】でしかない。

故に、ユートの提示している【希望】も、ロマリアに知れば【異端】として、審問に掛けられる事。

唯でさえか細い希望だと云うのに、ロマリア皇国から見て【異端】とされてしまう手段。

成る程、これでは実行のしようも無かった。

「くっ、希望が【異端】だとは……」

悔しそつに唸る公爵。

「まあ、何れの方法にしても割りと危険を伴います。それならいつその事、悪くなったら魔法で治療をする対処療法で、身体が限界に

いくまで生きるのも、一つの手ですね。【異端】にも引つ掛かりませんし」

「危険が有るのか？」

「はい」

ヴァリエール公爵は驚いているが、ユートは当然だと言わんばかりに頷く。

「四系統精霊の力を借り、肉体を作り替える方法を採用した場合は、術者が保たないでしょうし、途中で止めてしまうと被術者も死んでしまいます」

術者も被術者も死ぬ、双方に危険な手法。

「後者を採用した場合、第一の問題が異世界への扉を開く方法ゲートの模索。向こうで治療をして貰う為の方法の模索。これは別の世界で治療出来る人を捜して、治療をして貰う事を考えています。然し、これはカトレア嬢の身体を切る事になります……」

「切る？」

「はい。手術という方法です。身体を切り開き、悪い部位の治療を行ってから、再び閉じる。この方法だと僕には難しいですが、それを主流とする世界が存在していますから」

「別の世界と言うが、そんな所にどうやって行く？」

ヴァリエール公爵が問う。

「虚無魔法の【世界扉】」  
ワールド・ドア

「な……に……？」

「虚無の中に、異世界へのゲートを開く世界扉という魔法が存在しています」  
ワールド・ドア

「ま、待て。何故そこまで知っているのだ？ 書物から識ったというが、虚無の知識など簡単に判るモノではあるまい？」

「……それは言えません。確かな筋の情報です」

流石に転生だの、ライトノベルだの言えはしない。

不審に思われても仕方がないが、言える事と言えない事がある。

「なら聞くまい。それで、虚無ならルイズなら使えるのか？ その魔法を」

「使えません」

「……は？」

アッサリ否定され、肩透かしを喰う公爵。

「次元を越える魔法です。幾ら空間制御が主な虚無といえど、別の世界への扉を開くのは至難の業です。今のルイズ嬢では精神力が保たないでしょうね。僕なら恐らく精神力が保つでしょうが、虚無の資質は残念ながら有りません」



「ぬっ……」

「まあ、将来的に世界扉ワールド・ドアを使えそうな虚無の担い手は知っていますが、少なくとも直ぐにという訳には……」

既に目覚めているユーキは世界扉ワールド・ドアの存在、詠唱も知っている。

だが、現在は子供の肉体の為に精神力不足。

もう1人はティファニア。

時期的に生まれているが、やっぱり精神力不足の上に未だに自分を虚無の担い手だという自覚すら無い。

成長すればエルフの精神力は高いから、ハーフエルフのティファニアワールド・ドアも世界扉を使うに足るだろう。

「四系統精霊については、僕が将来的に何とか出来ます。虚無については、将来的に2人の虚無の担い手に一回ずつ、世界扉ワールド・ドアを使って貰い、地球という名前の世界へへ行けば手術が可能です」

共通しているのは……

「どちらも直ぐには実行が不可能で、どちらも【異端】という訳か」  
ヴァリエール公爵は溜息を吐きながら、表情を暗くしてしまふ。

「その事もあって、例のプロジェクトを推進したいのですよ」

「プロジェクト・ニューウェーブ。ロマリア皇国の権威失墜計画……か」

ロマリアの権威を失墜させてしまい、新しい波を呼び寄せる計画をユートは打ち立てていた。

## 第25話：カトレアの病（後書き）

色々と独自設定を詰め込んでいます。

系統魔法とコモン・マジックを組み合わせ、一つの魔法にする……

一応、アストラル・ヴァイン魔皇霊斬もそうなんだけど。

第26話・翼を下さい（前書き）

新しいマジックアイテムを造り始めました。

## 第26話：翼を下さい

### 【ユートの部屋】

ヴァリエール公爵家から帰って来たユートは、ユーキと部屋で話をしている。

「そっか、診てきたんだ」

フリッツを食べながら報告を聞くユーキ。

最近、馬鈴薯尽くしな来はするが、様々なレシピから再現した料理のお陰で飽きがこない。

「で？ “この世界”でのカトレア嬢の病は何だったの？」

「カトレア嬢の病は心臓病の一種だった」

「先天性心臓疾患か」

厄介な病だ。

即死性こそは無いものの、ほんの僅かな体調の変化で苦しむ事になる。

しかも場合によってはその俛、お亡くなりコースすら有り得るのだ。

「心臓腫瘍みだいだった。転移してもそれは水の魔法で治せるんだ

けど、腫瘍が在るのが常態になってるから、腫瘍そのものはどうにも出来ない」

「じゃあ、兄貴の見解の通りに？」

「精霊の力で健康な心臓を作り直すか、ワールド・トア世界扉を開いて病院に連れていくか……だな」

ユーキの問いに、ユートは首肯して答えた。

ファンタジック 幻想的に精霊の力を使うか、医学的に治療をするか。

「何れにしても【異端】な訳だし、ロマリア皇国にはなるべく早く権威を失墜して貰わないとな。でないと【聖戦】だの【聖地奪還】だの、ボクも休まらない」

ユーキは嘆息した。

虚無の担い手たるユーキとしては、ロマリア皇国とは癌でしかない。早めに消えて欲しいと考えても、仕方ないだろう。

完全に消せないのが残念ではあるが、少なくとも権威を失墜させれば発言力が低くなり、【聖戦】なんて言えなくなる筈。

ユーキが自身の目指す未来あしたの為に、ユートの計画は必要不可欠だった。

「ね、実は造って欲しい物があるんだけど」

突然、ユーキはユートを背後から抱きしめて、耳元で囁く。

「またか？ 前に頼まれた物も未だ出来てないのに」

「ダ・メ？ お兄様……」

ゾクリ……

その俛、耳元に息を吹き掛けつつ囁きながらおねだりしてきた。

相手は4歳、自分は6歳なのだと理解はしていても、お互いに精神年齢は高校生くらい。

その為、どうしても赤くなるのを抑えられずにいた。

それに、ユートは前世では妹の緒方白亜を大切にしていた事もあり、義妹の願いにはちよつと弱い。

「わ、判ったよ。判ったから離れて……」

「ホント？」

「ああ、それで？ どんな物が欲しいんだ？」

「あのね……」

ユーキは離れない俛、耳元でソツと囁いて伝える。

「な！？ あれか？」

「うん。“例のモノ”を造る為の練習になるし、便利だと思うんだ。丁度良く、レプシロ機も有るしね」

確かに“例のモノ”とは、コンセプトが似ていた。

練習の為にも造ってみるのも一つの手だろう。

それに、風の系統魔法である浮遊レヒテーションフライや飛翔をユーキは使えないから、こつという補助アイテムが必要。

「虚無の担い手は仕方ないけど、これが流行ったりしたら魔法の習熟度が軒並み低くなりそうだな」

虚無の担い手を隠すなら、造ったマジックアイテムを量産して流行らせた方が良いが、便利な道具を使うのは両刃の剣。

「ま、全ては造ってからの話だけだね」

精神力さえ有れば誰でも扱える気安さ、造型はユーキの科学分野に手伝って貰って、風の精霊王の地上代行者としての権威で、風石を造り上げる。

量産を見越すなら、大陸を浮かび上がらせるくらいに有る風石を精霊の力で集めたいが、試作機を造るだけなら自分の力だけで充分。

マインド・トリガーシステムを搭載し、平民でも使える作りだからシエスタにも造る心算だ。

アニメの映像を知っている影響か、男が使う処なんて視たくもない。



「女の子にしか使えない様にリミッターを掛けるか？ あれ？ それだと最早、これISだよ……」

とはいえ、余りにあからさまな“兵器”を造りだし、発表する気は無い。

そんな事しようものなら、後方で命令するしか能の無い宮廷勤めのアホな貴族共が、戦争をしたがるのは火を見るより明らかだろう。

「非武装とはいってもな、フライを使わず飛べる訳だから、戦争に使えば有利になるって気が付く奴も出てきそうだしな」

実際、元ネタのアニメではそれを使って戦争をしていた訳だし、よっぽどの莫迦でもなければ気が付く。

造るのは良いが、造った後こそ大変だ。

「……ISで篠ノ之 東が各国や組織に狙われたのも納得だな」

造っているのはISではなくて、別の飛行ユニット。

然しそれが戦争をするのに有効だと判れば、ISの様に戦争に使いたがるだろうと考えている。

寧ろ、非武装のこれに武装を付けると命じる恥知らずが出てくる事が、容易に想像出来た。

「ルイズに贈って、いざという時はピエル様に防波堤になって貰うか……」

権力者になりたくないが、権力が無ければ権力を持つ者に踏み躪られる。

どうにも儘ならない。

「所詮、一人で出来る事には限界が有るし、頼れる処は誰かに頼ろう」

それがユートの出した結論だった。

造ったユニットは、亜空間ポケットの要領で別の空間に仕舞い込み、アクセサリーを基点に招喚する。

「これじゃ益々、ISだ」

招喚と量子変換はまったく違うが、傍目には違いなど判らない。

似た形で造り、ISの世界に行って招喚したら絶対にISだと思われる。

「でもこれ、ISじゃないんだよな。本当に飛ぶ事に特化された機体だし」

完成した試作機を見ながら呟く。

三機有るのは、普通のメイジと虚無の担い手と平民が使った場合、何処まで違いが出るかの実験をする為。

夜中に完成し、早朝を試験に選んだのは人通りが少なくて、明るい時間に試験をしたかったからだ。

「そろそろ、シエスタが起こしている筈だけど……」

唯の飛行試験は既に済んでいるから、後は使う人間の相違点を視るだけ。

「お兄様！」

「ユーキ」

ユーキが庭にやって来る。

傍にはシエスタも居た。

試験の事は伝えてある為、何時ものメイド服に武雄翁が使っていたゴーグルを頭に着けている。

「それじゃあ、始めるよ。メイジ、平民、ユーキの様なタイプ、三種類の人間による【ストライカー・ユニット】の飛行試験を」

「完成したんだね。【ストライカーユニット】が」

【ストライクウィッチーズ】というアニメが、ユート達の前世の世界に在る。

【受容世界】にアニメとして存在すると云う事はだ、実際に平行世界に扶桑やらローマーニヤやらが在る地球に極めて近い、だがちよつと違う世界が有って、あの【ストライカーユニット】も存在しているのだろう。

だからこそ、同じでは無いにしても似た形の物は造れると確信していた。

そして、約一ヶ月。

漸く試作機が完成を見る。

元の形の俣だと立つ事も出来ない為、足の部分は普通の形にしてあり、飛ぶ時に変形する仕組みだ。

「じゃあ、これを」

「？ ご主人s……ユート様、これは？」

ユーキに言われて、少しずつ呼び方を直しているが、やっぱり恥ずかしいのだろうか、頬に朱が差す。

ユートはユートで、名前を呼ばれて赤くなっていた。

「（ただ、名前で呼ぶだけで何だろうねえ。この恋人になったばかりの中学生な初々しい反応は？）」

その様子を眺めて、ユーキはそう思ったものだったが真逆、自分自身が11年後に同じ事をするとは、流石にこの時は判らなかつた。

「お兄様、ボクの分を早くくれないかな？」

「へ？ あ、ああ……」

呼ばれて我に返ったユートは、もう一つをユーキへと渡してやる。

「これは待機状態の【ストライカーユニット】だよ。マインド・トリガーシステムを積んでるから、来いって念じて喚べば招喚出来る筈だから。キーワードは、【ストライク・ブルーム、招喚】だよ」

「そうなのですか？」

試しにシエスタが腕輪を填めて腕を前に挙げ、心の中で喚んでみた。

「（ストライク・ブルーム……招喚！）」

マインド・トリガーシステムは、特定のキーワードを唱える事で発動する。

シエスタの招喚に応えて、【ストライカーユニット】が招喚されると、シエスタの両脚へと装着された。

フィッティング・システムによって、年齢経過による成長をしても装着は可能となっている為、成長の度に造り直す必要もない。

「装着は出来たな」

「へえ、プロトタイプより良いね。じゃ、ボクも」

ユーキも腕輪を填めると、【ストライカーユニット】を招喚する。

両脚に装着されたユニットを見て、楽しそうに跳ね回った。

「それじゃ、僕も。イメージ的に男が装着するのは、違和感があるけどね」

そう言って招喚する。

「ユート様、結構似合ってると思いますけど?」

「フォローの心算なんだろうけど、流石に嬉しくないよシエスタ…」

「すみません」

アニメでは明らかに下半身をパンツか、スクール水着（本人達はズボンと言っているが）の少女達が着けて飛び回る道具を、似合っているなんて言われても、男としては全く嬉しくないものだ。

「精神力を籠めれば、魔導炉が稼働して風石に魔力を送り込んで、足首の辺りにレブシロ機としての小さなプロペラが魔力で形成される。後は飛びたいと思うだけで浮揚して飛べる筈」

「判ったよ」

「判りました、ユート様」

ユートの指示に従い、2人は精神力を籠めてみる。

足首にプロペラが顕れて、回り始めるとゆっくり浮かび上がっていく。

完全に地から足が離れると足の部位が、飛ぶ為に軽く変形した。

因みに、耳や尻尾は生えていません。

あの世界では、何故か魔力を発現させると動物の耳と尻尾が生えるのだ。

「どうだ、2人共。何処がおかしな所は無いか？」

「うん、無いよ」

「有りません」

虚無の担い手で、フライの魔法が使えないユーキ。

メイドであっても、メイジではないシエスタ。

そして、普通にフライの使えるユート自身。

この3人で運用試験をする事で、誰でも使えるモノか否かを確認める目論見だったが、どうやら浮かぶまでは大丈夫だったらしい。

「んじゃ、上昇してみようか？ 何処まで上昇出来るかの試験をするから」

「了解！」

「はい、ユート様！」

3人は少しずつ、空へ上昇を始めた。

「違和感や力の喪失なんかを感じたら、直ぐに言ってくれ。墜ちたら洒落にならないから」

プロトタイプはユートだけで試験をしていた為、他の人間が使った場合の臨床試験は初めてとなる。

理論上は大丈夫だが、机上での空論を重視出来ない。

「（確か、アニメでは一万メートルが限界だっって言っていたよな）」  
そんなに高く上昇する必要もないが、限界高度は知っておきたい。

「未だ往けるか？」

「あの、ユート様。限界みたいです」

確かに、シエスタのユニットのプロペラが消えかけている。

「三千メートルって処かな。判った、シエスタは一番降りてくれ」

「はい」

恐らくは精神力の差、若しくはメイジでは無いが故、魔力の制御的な限界か……

何れにせよ、他の非メイジのメイドにも試して貰って検証した方が  
良いだろう。

「ユーキの方は？」

「ボクは未だ大丈夫」



「よし、もう少し上昇を試してみようか？」

「オッケー！」

結果、2人はユーキが大体五千メートル、ユートが八千メートル程の上昇で限界を迎えた。

ユートが限界を迎えた時点で全員が下に降り、限界高度の差がどうしてついたのかを検証してみる。

「やっぱり制御の問題か」

「機体が同一規格だから、その差は無いよね」

ユートとユーキがああでも無い、こうでも無いと議論している中で、門外漢であるシエスタは黙って見ているしかない。

「一定の精神力を籠めて、それでは機体の方で制御出来る様にしたら？」

「それがさ、いまいち上手いかなかつたんだよ」

だからこそ、常に使用者が制御している訳だが……

「循環器には何を使ってるのかな？」

「宝石を魔法で溶かし込んだ溶液だけ……」

その議論を聞いていたら、ふと昔……曾祖父にしか読めない字で書かれた書物を読んで貰った記憶を、思い出したシエスタ。

「水銀……」

「え？」

「あの、曾お祖父ちゃんに昔読んで貰った本に、水の様な銀……水銀は魔力の通りが良いと書かれてたらしいのですが……」

「「それだっ！」」

「ふえ？」

ユートとユーキがハモリながら叫び、シエスタは吃驚してしまった。

シエスタのアドバイスに従って早速、ユートは改良に勤しむ。

そして何故か、シエスタはとってもご機嫌だった。

宝石の溶液から錬成で造り上げた水銀に変え、魔導炉にも改造して手を入れる。

土もトライアングルとなっている為、錬成で水銀を造る事も可能となっていた。

それを三機、既に造形と科学分野の枠を越えている為に、ユーキに手伝える事ももう無い。

だからユーキは、見ている事しか出来ずにいた。

「シエスタ、何だか判らないけどご機嫌だね？」

「はい」

「どして〜?」

「私の一言でユート様が改良案を出せたと思うと、嬉しくてえ」

「いやん、いやんとクネクネしているシエスタ。」

ユーキはそれを見つめて、ジト目になってしまふ。

「（ホントに兄貴の事が好きなんだな。魔法さえ使えれば、せめてシュヴァリエ勲爵位になれるのに。平民で、しかも女の子じゃトリスティンだと立身出世も儘ならないし……）」

魔法の使い手、メイジであれば勲功を挙げれば所謂、シュヴァリエに任じられる事も有り得る。

男であれば……だが。

ハルケギニアは絵に描いた様な男尊女卑の世界。

故に仮令、メイジ……否、貴族であっても女だというだけで、シュヴァリエになるチャンスが減る。

決してチャンスがゼロではないが、やはり良い顔はされないものなのだ。

況してや、魔法の使えない平民ではチャンスなどゼロだと言える。

原典に於いて、平賀才人がシュヴァリエに任じられ、ド・オルニエ

ールに領地を与えられたのは、偏に戦功とアンリエッタ女王というコネクションのお陰だ。

才人が女であったならば、それを理由に突っぱねられていたのは間違いがない。

「(ん)、何とかならないもんかね」

平民でさえなければ、というよりもせめて魔法が使えるれば、幾らでもやり様はあるのだが……

「(トリスティンじゃ難しいかな。ゲルマニアなら、お金次第なんだけど)」

驕り(プライド)に凝り固まった人間ばかりのこの国、トリスティン王国では土台無理な話だ。

ユーキはシエスタを気に入っているし、ユートとの幸せを願っている。

元より、前世では科学オタクのアニメ好きでしかない一般人。

科学オタクの部分が有益であったから、随分と優遇されていたし彼女も居た。

それでも、華族が廃止されていた国の一般人であった事に変わりない。

しかも、ガリア王族に生まれながらもセント・マルガリタ修道院に棄てられてしまい、権力になど縁の無い生活をしていたのだ。

平民に対して隔意など持ち様がなかった。

退屈な生活から、早々と解放してくれたユートに感謝している。

一応は貴族として、ユートの義妹に収まった自分と、まるで友人の様に接してくれた最初の1人のシエスタにも、好意を抱いている。

「（ボクの望みは……）」

ユーキの望みは……

「（大切な人達と笑っていられる、せめて周囲だけにでも優しい世界を）」

ユーキには解っている。

自分に出来る事など大してなく、護れるものは両手を広げた程度でしかない。

嘗て、彼女の心すら護れなかったちっぽけな自分。

「ユーキ様、どうしましたか？」

「何でもないよシエスタ」

笑顔を浮かべると、ギョツとシエスタの手を握って、引っ張る。

「さ、お兄様は未だ作業をしてるし、みんなと一緒にお茶でも飲もうか？」

「あ、はい！」

【数日後】

早朝、再びユートは2人を呼んでいた。

「と、言う訳で。【ストライカーユニット】の改良が終了しました  
！」

「「おお！」」

パチパチと拍手するユーキとシエスタ。

「風石への魔力供給率の向上に伴い、制御系の改良も同時に行った結果、メイジと平民の別無く理論上は、八千メートルまで上昇が可能になった筈。特殊な風の結界で護られるから、空気の供給も前回と同様に為されるから、高山病に陥る事も無いだろうし、凍える事も無い」

「あ、道理で前回あれだけの高度まで上昇していて、体調がおかしくならなかった訳だ……」

富士山の高さは3776mだとされているが、そんな高度でも登れば高山病に陥ってしまう。

それを越える五千マイルを昇れば、どうなるかなんて火を見るより明らかだ。

然し、ユートはユニットを装着して、精神力を供給したら特殊な風の結界を展開出来る様に造っている。

この結界は、酸素の供給をしてくれるし、温度変化による身体の変調から護ってくれるのだ。

ユーキ用に建造しようとしている“例のもの”の為にも、宇宙にも上げられる様にしなければならない。

それを考えれば、まだまだだったりする。

「さて、始めようか」

「りょくか〜い!」

「はい!」

3人は【ストライカーユニット】を招喚して、両脚に装着する。

「うあ、やっぱり男の僕が着けても死ぬほどそぐわないな」

【ストライクウィッチーズ】はウィッチ（魔女）と云われるだけあって、主人公から仲間に来るまで少女。

どごそのISの様に、男が【ストライカーユニット】を使うなんて事は無い。

原典から派生した平行世界の何処かなら、或いは在るのかも知れないが……

シエスタも、流石に一度は失敗しているフォローは入れれず、大粒の汗を流して苦笑いしている。

さて、ユートの理論通りに約八千マイルまでの上昇は可能だった。

「ふむ、次は速度か」

零戦の最高速度は約533.4 m/h。

残念ながら600 m/hは出ない。

このユニットも、現状では300 m/h程度だった。

「速度に関しては要改良って処かな？」

時間が経ち、技術力が向上すれば何れは解決する事だろう。

取り敢えずは成功だと言えるのかも知れない。

外装も丈夫な物を使っているから、強度的にも大丈夫だった。

とはいえ、“例のもの”を造るにはまるで足りない。

「オリハルコンが欲しいかな」

鋼より軽いし硬い、それに魔力を遮断出来る。



有れば本当に便利なのだろうが、造るにはどれだけの時が掛かるか

……

否、造れないかも。

「本当にどうするかな」

ユートの呟きは、未だに完成を見ない“例のもの”を思っているもの。

「ま、取り敢えずは【ストライカーユニット】が完成した事を喜ぶかな」

【ストライカーユニット】で庭を飛び回って、愉しそうにしているユーキ達の元へ、自分も似合いもしない【ストライカーユニット】を動かして、飛んで行くユートだった。

第26話：翼を下さい（後書き）

今回の【ストライカーユニット】は、ユーキにとってガンダムマーカー  
クエイクみたいな扱いです。

つまり、何れはZガンダムの如く機体が登場するという事ですね。

別にガンダムが出てくる訳ではありませんが……

第27話：永劫の銘を持つ偽神（前書き）

少しだけ時間が進みます。

## 第27話：永劫の銘を持つ偽神

【ストライカーユニット】を開発して、スピードの方も零戦と同じくらい出せる様になる。

ユートとシエスタは七歳、ユーキも五歳となった。

原作開始まで、後10年。

魔法学院への入学までなら9年だ。

取り敢えず、3人で【ストライカーユニット】を持っておく事にする。

プロトタイプも、試作機と機能を合わせて保管しておく事にした。

ユーキの五歳の誕生日 正確にはオガタ家にユーキが引き取られた日に、頼まれていた物を渡す。

即ち、既に渡してある銀色の六連式リボルバー【アンプロシウス】の相棒。

【機神咆哮デモンベイン】に於いて、炎神【クトウグア】の術式を撃ち出していた拳銃と同型のモノ。

劇中では、銃の名前自体を【クトウグア】と呼んでいたが、完成した銃には別の銘を付けた。

【イタクア】を【アンブロシウス】とした様に、【クトウグア】は【アイオーン】と名付けたのだ。

「遂に完成したんだ」

「ストライカーユニットのノウハウを上手く転用出来たのが大きいよ」

「で？ オーダーの通りに護りも出来るの？」

ユーキのオーダー、それは自分の身を護れるマジックアイテム。

今の俛では、攻撃力は兎も角としても防御力の方には難があった。

「そつちも解決済みだよ。精神力を媒介に、魔力そのものを服へと変換する事が可能だね、バリアジャケットとして使えるから」

「ああ、なのはさんがどうの……とか言ってたのは、そういう事ね」

幸い、ユートとユーキにはリンカーコアが活性化状態で備わっている。

神が最初<sup>なのは</sup>に言っていた通り、転生に際して与えてくれていたモノ。

今までは、魔力タンクとしての役割くらいしか無かったのだが、明確に魔力自体を形にするのに役立った。

原理的にはリリカルなのはバリアジャケットと同じモノで、この技術を確立するのにストレージレベルのAIに代わるモノを捜す事を余儀なくされる。

其処で、人工幽霊を造って憑依させる事を思い付く。

この技術確立に、デルFRINGERと【アダマス】の力を借りた。

元より、デルFRINGERにはエルフの技術で人工霊を使っている事が判明していたし、自然発生の九十九神とも言える宝石に宿る精霊【アダマス】も、管制人格を造る上で善きアドバイザーとなってくれたのだ。

【アイオン】には簡易人工霊を憑依定着させている為、複雑な術式を動かすのは全てやってくれる。

インテリジェンスと呼ぶ程では無いものの、充分過ぎるくらい役割を果たしてくれる筈だ。

「登録してあるジャケットだけど、形は霸道瑠璃が着ていたマギウス・スタイルだから」

「そ、それはまた……」

マギウス・スタイルは黒が基調で、ユーキの趣味から外れているのだが……

「で、例のものもプロトタイプと呼べるだけの代物が完成したから、その拳銃を基点に招喚出来るように仕組んである」

「マジ？」

“例のもの”が完成するとは思っていなかった。

プロトタイプという事は、未だ改善の余地が多いのだろうが、取り敢えず形には成ったと云う事だ。

【ストライカーユニット】は飽く迄も、例のものを造る雛型プロトタイプで、今回完成したモノですらも本当に造るべきモノの雛型プロトタイプに過ぎないかったりする。

「マインド・トリガーシステムで、喚ぶ際には機神招喚の呪文をキーワードに設定してある。それと、招喚の時はマギウス・スタイルになっておくように」

「判ったよ！」

ユーキは早速、ペンダントを首に掛ける。

このペンダントが【アイオーン】の待機形態。

「アイオーン、起動！」

《セットアップ》

音声と共に、ユーキの右手に【アイオーン】が姿を顕して握られた。

それと同時に、ユーキの幼い肢体がほんの刹那の刻、裸体となってマギウス・スタイルへと変換される。

「……お・に・い・さ・ま〜？　今のは何なのかご説明願えますか？」

額に青筋を浮かべ、笑顔でユートに詰め寄った。

その目は全然、笑ってはいなかったが。

「いや、だってさ。ごてごてした服にマギウス・スタイルの様なピッチリ感のある服を着たら、格好が悪くなるだろ？」

「だからって、こんなあからさまに裸になるなんて、凄く恥ずかしいよー！」

「瞬き程の一瞬だけだし、誰も気付かないよ……多分ね」

「デリカシーを学べええええええええええつ！」

「ユア、ショーック!?」

変な叫びと共に、ユートはアッパーを喰らってブツ飛ばされてしまった。

その後、折衷案として変換の時に魔力を少し漏らす事によって、裸体を隠す事で合意する。

「んじゃ、次は機神招喚を試してくれ。具合が悪ければ改修するか」

「判った。機神招喚！」



ユーキは【アイオーン】を掲げると、呪文を詠唱し始めた。

それは当然、あの詠唱。

“例のもの”のプロトタイプ故に、それは……

「<sup>アイオーン</sup>永劫！ 時の歯車、断罪の刃。久遠の果てより来たる虚無……<sup>アイ</sup>永劫！ 汝より逃れ得るものは無く、汝が触れしものは死すらも死せん！」

ユーキを基点に上空と地面に魔方陣が浮かび、魔力の奔流が包み込む。

「来よ、永劫の銘を持った<sup>デウス・マキナ</sup>鬼械神、アイオーンッ！」

ルーンが瞬時に浮かび上がり、ユーキの手脚、身体に纏っていく。

闇色の炎に包まれて、次の瞬間にはユーキの姿は人の形をした鬼械の神を象っていた。

漆黒の<sup>デウス・マキナ</sup>鬼械神アイオーン。

全長は約10メートル。

本物の<sup>デウス・マキナ</sup>鬼械神アイオーンと比べて五分の一スケール。

それでもその威容は凄まじいものがある。

「これが、アイオーン」

「ユーキ、鬼械神モードは物凄い勢いで精神力を消耗する。今のエネルギー変換効率だと、ユーキの精神力の量から換算して、恐らく五分が限界だ」

「光の巨人よりはマシ……なのかな？」

アルハザード・ランプなんて動力は、流石に造れなかった。

つまり、ユーキは鬼械神デウス・マキナアイオンの意思にして、動力機関と云う訳だ。

「武装は今の処、拳銃の方の【アイオン】と【アンブロシウス】だけで、空を翔ぶ術も無い。完全に地上での活動しか出来ない」

スケールもアイオンに合わせて、巨大化している。

正確に云うなら、本来の大きさの銃をコアにそれぞれの銃を形成しているのだ。

小さい俣では使えないし。

「飛行術式シャンタクとかは無いの？」

「今は”無い”」

「今は……ね」

ユーキはアイオンを解除すると、精神的にバテたのかフラリと倒れる。

ユートは、そんなユーキを優しく抱き止めた。

アイオンの開発に成功を収めたものの、本物に比べればハッキリ言ってお粗末にも程がある造りだ。

ユートはそれを自覚して、本当にユーキに与える為の鬼械神デウス・マキナを造るべく様々な文献を読み漁っている。

部屋に戻り、アイオンについて訊ねるユーキ。

「それで、本物との相違点は？」

「全てに於いて劣っているかな。装甲は本物がオリハルコン、此方はミスリル。駆動炉は本物がアルハザード・ランプ、此方はユーキ自身。大きさも五分の一がやっとだったし、本物が持っている術式も再現出来ていない。一応、シエスタのお陰で魔力伝達率の高い、水銀アソルトを使っているのが辛うじて本物っぽいけど、粗悪品の鬼械神って処だな」

実際、鬼械神デウス・マキナは水銀アソルトを伝達系に使用している。

「まあ、本物は魔導書の記述その物が術式になって、招喚されてる訳だしね」

とはいえ、ユートが目指している“例のもの”とて、人間が造り上げた唯一つの【人間の為の鬼械神】と云われているのだ。

ユートがスレイヤーズ系の魔法習得、ユーキが機神咆哮系の力を獲る。

それを以て【魔を滅する者】デモンズレイヤーと【魔を断つ剣】デモンズベイン成る事が2人の将来的な目標だった。

「取り敢えず、今後は雛型プロトタイプのアイオンを改良する方向性でやるしかないだろうな」

「頑張つてね、兄貴」

「何を言ってる？ ユーキにも頑張つて貰うぞ」

「う………」

「それで、早速だけどな。今度は火竜山脈かサハラを目指す。ユーキのアイオンのテストも兼ねて、連れて行く予定だから」

「り、了解」

どうやら、今後はユートに丸投げとはいかないらしい事に、苦笑いをしながらも了承するユーキ。

然し、その内心では悦んでいたりする。

やっと兄貴ユートの役に立てるのだから。

尤も、数分間しか動けないアイオンでは、やれる事など大して無いのだが……

「どつちを先にするかな。そういえば、ユーキも魔法を習い始めたんだよなあ。バインド系のアレも教えたし、うん？」

五歳になり、ユーキも杖を与えられて魔法の練習を始めていた。

だが、虚無の担い手であるユーキでは系統魔法の上達など絶対に望めはしない。

それが解っているからこそユートは、将来必要となるだろう魔法を教えていた。

基本的な汎用魔法コモン・マジックは既に修めている為、その応用編としてユートのオリジナルスペルを習っているのだ。

その一つが、念力フォースの変形応用魔法。

「アイオーンの実戦試験を兼ねて、火竜山脈にでも行こうか？」

「少なくとも、ピクニック気分で行く場所じゃ無いと思うよ？ 兄貴……」

ユーキは、唐突なユートの言葉に突っ込んだ。

火の精霊主に会いに行くという名目で火竜山脈に出掛けるのだが、トリステイン国内に存在している場所ではない。

ガリアの国境を越える必要がある。

つまり、ゾロゾロと手勢を連れては行けない。

「父上に相談するか」

ユートはサリユートの執務室へと向かった。

ノックをして執務室に入ると、相も変わらず書類の山に埋もれたサリユートの姿が在る。

基本的にサリユートの午前の時間は、書類仕事に終始して消えてしまふ。

「父上、ちよつと火竜山脈に行きたいのですが……」

「うくん？　そうかあ……………つて、なにいいいっ？」

何気無く言ったからか？　反応がタップリと十秒くらい遅れてしまふ。

ガリアとロマリアの国境に位置し、東西に伸びている山脈であり付近にアクイレイアなどの都市がある。

どちらから入るにしても、トリステイン国境を越境しないと行く事が出来ない。

未だ七歳の子供でしかないユートでは、簡単に行ける場所ではなかった。

とはいえ、越境は兎も角として行き先が火竜の住まう火竜山脈では、サリユートも『はい、そうですね』と言う訳にもいかない。

「火竜と戦闘になったらどうする？　そもそも、何の為に火竜山脈に行くんだ？　危険を犯してまで行く必要があるのか？」

サリユートには理解が出来なかった。

息子が何処か普通ではないとは思っていたが、幾ら何でも突飛に過ぎる。

例えば、ユートが何か欲しいと望むなら、買い与えるくらいするが、何時も斜め上を強請ねだった。

ガリア王との会談も然り、ジヨゼット達を連れ帰って来た時も然り。

息子ユートは何処を向いて、何処へ行こうとしているのかが、どうしても理解出来ないのだ。

「父上、僕は火竜山脈に行って火の精霊に会いたい」

「火の精霊……だと？」

「はい」

ユートが水の精霊と会う為に、ラグドリアン湖に行ったのは五歳の時。

去年は風の精霊と会う為、アルビオンに合法的に行っている。

何の為に会っているのか、それは知らない。

「ユートよ、それはお前がしなければならぬ事か？」

「そうです。四系統精霊を受け容れる器足り得るのがこのハルケギニアに僕だけなら、僕が行かねばなりません！」

無事に、生きて会いに行くのも精霊の試練の内。

なればこそ、ユート自身が行かなければ意味を為さないのだ。

「父上には許可だけを戴ければ、後はピエール様に頼みます」

「ヴァリエール公爵に？」

反対はしないだろう。

ユートは既に楔を打っているのだから。

カトレアの治療法は二つ。

その一つが四系統精霊の力を使う事だ。

ユートが四系統精霊と契約しなければ、必然的にもう一つの方法し  
か残らない。

カトレア快癒の可能性は、少しでも上げたい処だ。

勿論、ユートが死んでしまつては意味が無いが……

「今回からはユーキも連れて行きます」



「何？」

「ユーキに与えた力を試す為にも」

「莫迦を言え！ ジョゼットは未だ五歳だぞ？」

「僕も五歳で動いていましたよ？」

「それは……、そうだが。力とはマジックアイテムの事か？ 空を飛ぶだけでは戦えんぞ」

サリユートが言っているのは【ストライカーユニット】の事だろうが、その情報は古い。

「ユーキに与えた力、それは鬼械神デウス・マキナです」

神の贗作の、そのまた贗作という無様な代物だが。

それでも実戦を試してみなければ、改良も儘ならない。

「鬼械神？ 何だそれは」

「ガーゴイルとゴレムの技術を用い、身を護る鎧として組み上げた巨神兵器。それが鬼械神デウス・マキナです」

起動して数分間しか動けないのでは、決戦兵器というより欠陥兵器。

それでも、将来の安全を買う為に今の危険を選ぶ。

ユートとユーキの真の敵は火竜如き、話にもならないくらい強大な

のだから。

「それに、今回の護衛としてカリーヌ様に付いて来て戴きますからサリユートは、平然と言う我が子の言葉に開いた口が塞がらなかったという。」

火竜山脈に訪れた一行。

当然、越境に際しての許可を貰っている。

ただ、何がどう間違っただのだろうか？

「此処が火竜山脈……」

鶯色の瞳の桃色ブロンドの少女……ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールが同行していた。

「ルイズ嬢、ピクニックじゃないんだけどな？」

「判ってるわよ」

何処と無く嬉しそうに、弾んだ声で応えてくる。

明らかにピクニック気分。

「（本当に、どうしてこんな事に？）」

思い出されるのは、数日前にヴァリエール邸を訪れた日の晩餐の事。

その中で、ユートは訪れた理由を話した。

勿論、カトレアの病の事もあるからヴァリエール公爵は頷いてくれたし、傍らで聴いていたカリーヌ夫人も同行すると約束をしてくれたのだ。

其処までは順調だった。

『わたしも行くわ!』

桃髪幼女がそんな事を言い出さなければ。

当然ながら公爵は反対したし、夫人も許さなかった。

カトレアなど、思わず意識が遠退いたくらいだ。

ユートも説得したのだが、年齢や性別を理由には出来ない為、説得は難航。

五歳のユーキが同行しているのに、自分が同行出来ないのはおかしいとまで言われてしまう。

ユートはユーキに関して、心配はしても信頼していた事もあるし、いつかは戦わねばならぬ身なら、早い内に実戦を経験させたい事もあり、アイオンの試験もしたかったから連れてきたのだ。

初めからルイズとは全てに於いて違う。

それに、いざとなれば完全な虚無を使えるユーキは、寧ろ味方として頼もしい。

公爵からの報告でコモン・マジックは普通に使える様になったと聞いたが、それと不完全な虚無を二つでは話にもならないのだ。

結局説得し切れずに、実戦の怖さを教える為に後方で身を護っている事を条件にして、已むを得ず連れて来ていた。

ユートはせめて火竜の攻撃から護れる様に、自分用に造ってあったマジックアイテム 【火精の護符】を渡しておく。

売られていた火竜の鱗に、術式を転写した紅玉を埋め込み、加工した護符だ。アミュレット

万が一にもルイズに死なれては、ユートも困る。

自分自身の防御が疎かになってしまいが、精霊の加護もあるから何とかなると、自らに言い聞かせていた。

「ハアー」

盛大な溜息を吐く。

「ごめんなさいね、あの子がとんだ我が侂を言って」

流石に悪いと思ったのか、カリーヌも謝ってきた。

本来ならカリーヌが強くなるべきだったが、よもや理路整然と言いかしに来るとは、ユートですらも予想外。

結局、折れた。

「仕方がありません。こうなればルイズ嬢は死ぬ気で護りますよ」

「ええ、お願いしますね。私もあの子を護りますから余り前には出れません」

「はい」

こうなればやるしか無い。

因みに……結局カトレアは意識を取り戻さなかった。

戦うのが目的ではない。

だから、徹底的に交戦を避ける方向性で動いた。

ルイズも暑い中、静かに付いて来ている。

然し、もうすぐ頂上という所で火竜に襲われた。

「チイツ！ あと少しの処でえ！」

ユートは舌打ちしながら、腰に佩いた刀を抜く。

「カリーヌ様はルイズ嬢の護りを固めて、後方からの援護をお願いします！」

「任せなさい！」

「ユーキはいざという時にはアレを、通常は【アンブロシウス】で援護！」

「了解、お兄様！」

「僕は直接攻撃をする！」

作戦とシフトが決まって、戦闘を開始する。

「光よっ！」

ユートの刀が、マインド・トリガーシステムのキーワードにより、光を放つ。

流石に、彼の烈光の剣とは比べるべくも無いが、威力は可成り上がる。  
「ゴルンソア」

本物と同様、光を飛ばして攻撃も可能だ。

「ユビキタス・デル・ウインデー！」

カリーヌ夫人が分身する。

「風の偏在！？」

ユーキは驚く。

そう言えば、この技が有ったかと納得した。

本体はルイズを監視＋守護を似ない、偏在が攻撃するという事だろ  
う。

ただ、偏在を一体だけしか出さなかったのは、ユートの实力を見た  
いが故に援護に徹する心算か。

ユートが斬り付ける中で、ユーキは【アンブロシウス】にカートリ  
ッジを入れ、火竜に狙いを定めて撃つ。

予めユートが火竜用に造ってあった弾丸で、氷系トライアングル・  
スペルが入っている。

援護の為、余り強いモノでは無いが威力はそれなり。

ユートはライン相当の術で先制する。

『全ての力の源よ、優しき流れ揺蕩う水よ、我が手に集いて力とな  
れ……』

口ではルーンを唱えつつ、頭で術式となる詠唱をイメージして、力  
在る言葉を紡いだ。

「フリーズ・ブリッド  
氷結弾ッ!!」

### 【氷結弾】

火炎球の氷バージョンで、撃ち出した蒼く輝く光球が着弾した所を

中心として、周囲を凍結させる術。

「この程度じゃ駄目か」

凍結はしたが、熱で直ぐに溶けてしまう。

刀を使って斬るが、やはり鱗が硬い。

竜の瞳はマジックアイテムの材料になるから、出来れば傷付けたく無いユート。

援護のエアハンマーが火竜の頭を打ち抜く。

その隙を突き、鱗と鱗の間を狙って突いた。

『ギアアアアアアッ！』

痛みがあつたのか、火竜が叫ぶ。

鎌首をもたげ、ユートに向けて息を吸う。

「ブレス？」

咄嗟に後ろに下がった瞬間に、莫大な炎がその場を焼いた。

『永久を生まれし行き交う風よ、優しき流れ揺蕩う水よ、全てのものに白い息吹を……』

手を地面に付いて、力有る言葉を唱える。



「ヴァン・レイル  
氷窟蔦ッ！」

氷の糸が地面を這い、火竜へと絡み付いて凍結する。

一応はトライアングルスペルではあるが、効くかどうか……

氷は湯気を上げて溶けてしまった。

「アトラック・ナチャ！」

動き出す前に、ユーキの声が響いて光が火竜を拘束してしまう。

これが念力を応用した魔法で、可視光線にまで念力で収束した光を編み上げて、高い拘束力を持つ網を作り出す魔法。

「ユーキ、生身でアトラック・ナチャは危険だ！」

標的が小さかったり非力なら兎も角、火竜が相手では力負けしてしまっ。

ブチィッ！

案の定、拘束網は火竜の力に負けて破れた。

火竜は怒りと共に、強力な火竜の吐息ファイヤ・ブレスを吐き出す。

「拙っ！？」

射線上にはルイズとカリーヌが居る。

アイオンの招喚は間に合わない。

火竜のプレスは、無慈悲にユーキ達へと襲い掛かるのだった。

第27話：永劫の銘を持つ偽神（後書き）

ルイズの同行が少し強引過ぎたかも……

火竜との戦闘、油断し過ぎてピンチに？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0487v/>

---

ゼロの使い魔【魔を滅する転生者】

2011年10月18日00時52分発行